

ドールズフロントライン ン（仮）

サクサクフェイはや幻想入り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深層映写で出てきた40が可哀想すぎたので、救済しようと思って書いた（確実に救済するとは言っていない）。むしゃくしゃして書いてるので、特に物語の方向性も決まってるないし、まあいつものことということ。どうせ本編も救いがないので、ええやろ

注意

この物語はいつもの私の作品の通りオリ主もの、主人公が強い、原作の乖離、その他もろもろの要素が詰まっています。この作品が合わないなら、読みたくもねえ、ということは素直にブラウザバック推奨

目次

原作開始前

プロローグ

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

1

5

8

13

18

26

31

34

38

42

45

第1話

第2話

第3話

第4話

本編開始 第零章

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第一章

50

55

58

64

68

72

77

80

83

89

92

第34話
第33話
第32話
第31話
第30話
第29話
第28話
第27話
第26話
第25話
第24話
第23話
第22話

147 144 140 137 133 129 125 122 118 113 107 102 96

第45話
第44話
第43話
第42話
第41話
第40話
第39話
第38話
第37話
第36話
第二章
第35話
第一章 幕間

189 185 181 178 173 170 167 164 160 155 150

第二章 幕間

第46話

192

第三章

第47話

196

第48話

201

第49話

206

第50話

209

第51話

213

第52話

217

第53話

220

第54話

224

第55話

228

第56話

231

第四章

第57話

237

第58話

242

第59話

246

第60話

249

第61話

252

第62話

256

第63話

259

第64話

264

第65話

267

第68話

279

第67話

275

第66話

271

第79話	第78話	第77話	第76話	第五章	第75話	第四章 幕間	第74話	第73話	第72話	第71話	第70話	第69話
320	316	312	309		304		301	298	294	290	287	283

第90話	第六章	第89話	第五章 幕間	第88話	第87話	第86話	第85話	第84話	第83話	第82話	第81話	第80話
355		352		349	346	342	339	336	333	330	327	323

第103話
第102話
第101話
第100話
第99話
第98話
第97話
第96話
第95話
第94話
第93話
第92話
第91話

398 395 392 389 386 381 378 375 372 369 365 362 359

第116話
第115話
第114話
第113話
第112話
第111話
第110話
第109話
第108話
第107話
第106話
第105話
第104話

439 435 432 429 426 423 420 417 414 411 408 405 401

第 119 話

第 118 話

第 117 話

|

|

|

448 445 442

原作開始前

プロローグ

「どこかの世界の某所」

「ああ、なんか面白いことないかなー」

地面に突き刺したを抜きつつ立ち上がる。その周りには無残にも切り裂かれた死体があるのだが、男は気にした様子もなく歩き始める。それもそのはずだ、死体の山を築いたのはこの男だからだ。

「ムーンゲートから別の世界に行けば面白いことがあると思っただからくぐったというのに、やってる事は同じか」

そう言つて男は振り返るが興味がないのか、また歩き始める。変わり映えない景色に若干飽き飽きしていた男はだったが、とあるものを見つけ瞳が輝き始める

「ムーンゲート、次はどんな世界につながっているのか…… ああ、楽しみだなあ！」

男は表情に狂気を滲ませながら、嬉々としてムーンゲートと呼んだものを潜る。男が光に呑み込まれるのと同時に、ムーンゲートも消えていた

「某所」

二人の少女が向かい合っている。

一人は震える手で銃を構え、悲壮な表情を。もう一人の少女は膝をつき、震える銃を自分の眉間に添えていた。だがその表情は銃を構えている少女とは違い、安らかな表情をしていた。

「これは始まりに過ぎないんだよ、45。まだ数えきれないほどの試練がこの先あなたを待ち受けている。それを乗り越えるための正しい選択は、きつといつもあんたが一番苦しめる方よ……でもね、生き残るにはそうするしかないの……。」

「正しい選択……。」

「そう、ちょうど今みたいに……あたいを殺さなきゃ、アンタまで消されちゃう。」

それじゃあこれまでの努力が水の泡よ」

「けど……。」

「もたもたしてる時間はないの！やるなら今よ！」

膝をついている少女は元気づけるように、発破をかけるように銃を構えている少女を敵しい視線で射抜く

「……！わからない、どうして……なぜそんなことを！」

「じゃあどうしろって言うのよ、45！そんなにあたいと死にたいか！」

「40、わたし……。」

膝をつく少女の叫びに、迷いを見せる銃を構える少女。だが、迷っている時間はなかった。近くにある外に通じるゲートは少しずつ閉まってきていた。膝をつく少女はそれを横目で確認すると、厳しい表情を崩し苦笑いを浮かべる

「お願い45……」

「っ！ああああああ!!」

錯乱したような声と共に乾いた音が辺りに響き渡る。二人いた少女の片方は倒れ、片方の少女は銃を持ちながら震えていた。だが、時間は待つてくれない。近くにあった外に通じるゲートはすでに半分閉じており、震える少女は残り時間が少ないことが分かっていても、その場に立ち止まり涙を流していた。こぼれるこぼれる涙をぬぐう時、音がしているのに気が付きそちらに目を向ける。そこには、今は倒れて動かない少女から託されたドツグタグが鈍い光を放っていた。それに気が付いた少女はハツとし、今は動かなくなった少女を見て頷く。

もうその瞳に迷いはなく、閉じかけのゲートに向かって走り出す

? 視点

お馴染みのムーンゲートをくぐる時の浮遊感を感じながら、これから行く世界について考える。

前のように殺伐とした世界ではなく、楽しい世界だったらいいなど。 前の世界では

アイテム等を補充出来たが、面白さのかけらもなかった。

そんなことを考えていると浮遊感は消え、身体の重みを感じる。着いたか、そう思
いながら閉じていた目を開ける。どうにも薄暗く、多分室内だろうと当たりを付け周
囲の状況を探る。人の気配はしないが……

「おや？」

第1話

突然響いた轟音で目を覚ましたあたいが見たものは、頑丈なはずのゲートだったものだった。

く？視点く

倒れている人なようなものを見つけた。近づいて見てみると、頭部に弾痕があることから、ヘッドショットで即死なようだ。とは言葉

「人形か？それも機械仕掛けの」

弾痕から見えるのは肉などではなく、機械だった。一見すると人にしか見えないが、なるほど。妙に興味を惹かれた俺は、四次元ポケットの魔法を唱え、中からあの巻物を取り出す。

復活の書。本ではあるのだが、鑑定の魔法によると巻物らしい。効果は名前の通り、ペットや町の住人などを蘇生させるものだ。この機械仕掛けの人形に効果があるかはわからない。蘇生しなかったらそれまでだ。復活の書を読み空から光の柱が機械仕掛けの人形に注ぐ。光が晴れるもやはり蘇生はしないようだった。ふむ、残念だが仕方ない。どうせ前の世界で山ほど奪ったのだ、一個くらい消費しても何の間

題もない。

機械仕掛けの人形に興味をなくした俺は、改めて周囲の状況を確認する。壁はところどころ崩れ、瓦礫が散乱している。葉莖があるところを見ると、重火器で大規模な戦闘があったようだ。それにさっきの機械仕掛けの人形とは違うタイプの人形の残骸。

そして後は、この大きなゲートだ。近寄って叩いてみるが、鉄でできた頑丈なゲートだ。まあ、あまり関係ないのだが。

どの魔法を使ってこのゲートを壊そうか考えていると、何か動くようなかな音が聞こえる。そちらに視線を向ければ、さっき復活の書を使った機械仕掛けの人形だった。だが、身体を動かしている様子はない。近寄ってみるも、やはり動き出す気配はない。だが、かすかな音は聞こえ続けている。特に考えなどはないがそのまま肩に担ぎ、ゲートに振り返る。

魔法は決まった。魔導書のストックなどを考えて、轟音の波動を使うことにした。魔法を詠唱すると屋内ということもあり、ものすごい轟音が響き渡る。俺は変異で鼓膜が厚くなっているのので、問題ないのだが。そもそも、この魔法は術者にダメージはない。うるさいというのがあるが。

扉はひしやげ、少し吹っ飛んでいた。そのひしやげた扉の横を悠々と歩く。どう

やら肩に担いでいる機械仕掛けの人形も目を覚ましたようだが、大人しくしている。

少し歩けば外につながっていたようで、ずっと暗いところに居た影響か日の出なのか少し朝日がまぶしい。

「わあ……」

肩から感動したような声が聞こえてくる。

「さて、少し話でもしようか」

第2話

機械仕掛けの人形を肩から降ろすと、慌てたように体を確認し、それを終わると肩から下げていた銃を構え俺を睨んでくる

「一体何が目的なの？」

「銃を構えるのは結構だが、その弾が込められていない銃で何をする気なんだ？」
「……………」

構えた銃を見てみれば、マガジンがなかった。一応、復活の書を使う時に確認と鑑定はしていたのだが。

銃を下げるも、こちらへの警戒は怠らない。

それにしても、いきなり銃を構えられるとは。今は気分が良いから良かったが、機嫌が悪ければ殺していたかもしれないと言うのに。

そもそもだ、この機械仕掛けの人形そんなに強そうに見えないしな。せめて、☆や★の付いた武器であればチャンスがあったかもしれないが。銃を鑑定した時の説明文を見たが、ただの銃だったしな。

「まあ、そう警戒しなくても良い。何もすぐに殺そうなんて思っていないさ」

「そう言いつつ、四次元ポケットから机と椅子を取り出しついでにティーポットを取り出し、お茶会の準備を始める

「いま、何もないとところから……」

「うん？ 四次元ポケットの魔法だ、見るのは初めてか？」

「魔法？ 何を言ってる……」

「ああ、そうか、ここには魔法の文化がないのか」

「さつきから何を言ってる…… あたいの質問に答えて!!」

ついにしびれを切らしたのか、こちらに近づいてくる機械仕掛けの人形。だが俺は

それを無視し、淹れたての紅茶を飲み喉を潤す

「まあ座ると良い。今の俺は非常に気分がいい、質問にも答えよう」

「……」

渋々と言った感じで俺から離れ、対面の席に座る機械仕掛けの人形。そして、俺の

淹れた紅茶を一口飲むと、驚いた表情をした。

「何この紅茶、美味しい……」

「気に入ってるよ。それで、俺に何が聞きたいのかな？」

紅茶を飲んで落ち着いたところに声をかければ、真剣な表情をして質問をしてくる

「あたいが何で生きてるのか。あたいの最期の記録は、45に撃たれたところで止

まっていた、はずだった。でも、気がついた時には肩に担がれてた」

「ふむ……」

さて、魔法文化のない世界なんて来たこと無いからどう説明したものか。とは言え、四次元ポケットの魔法で机や椅子などを取り出したのだから、信じるか。信じないなら実演すれば良いだけの話だ

「この世界に魔法はない、それは良いか？」

「えーつと…… うん、あたいが見た範囲だとないかな」

「まず俺はこの世界の人間ではない。ムーンゲートと呼ばれる物を通ってこの世界に来た、異星人というものだ。俺のいたところでは魔法があり、その魔法で君を生き返らせたわけだ。正確にいうなら」

そう言いながら四次元ポケットに手を突っ込み、復活の書を取り出す

「これを使つてな」

そう言つて機械仕掛けの人形を確認すると、頭を抱えていた

「……情報量が多すぎる、整理させて。まず、あんたはこの世界の住人ではない、それはわかった。次に、あんたの世界には魔法がある、そしてその魔法はその何もない空間から物を取り出すもの」

こちらに手を突き出し、俺の言ったことを一つずつ確認していく機械仕掛けの人形。

合っていると言えば合っているが、一応補足しておく

「これも魔法の一種だな。お前の言う何も無い空間から物を取り出すのは、四次元ポケットの魔法。他にも攻撃魔法やテレポートなどの魔法、身体強化などなど」

補足してやると機械仕掛けの人形はテーブルに突っ伏したいた

「もういい……」

そう言ったかと思えば、急に体を起こし顔を上げ瞳を輝かせていた

「でも魔法ってことは、何でもできるんじゃないの!？」

「なんでも、か……」 一応万能ではあるが、MP（精神力）を消耗する。それに、魔

法は必ず成功するわけではない。失敗したらマナが暴走し、最悪死ぬぞ。そもそ

も、この世界のお前が魔法を使えるのかが疑問だがな」

「なーんだ」

そう言って、机に突っ伏す機械仕掛けの人形。喋りながら紅茶を飲んでいたせいか

俺のカップは空になっていたので、ポットから紅茶を注ぐ。機械仕掛けの人形の方の

カップも中身も空だったのでついでに注いでやれば、お礼を言って上機嫌に飲み始め

た。一々表情が変わって面白いやつだ。

屋外にもかかわらずそんな風にまったりとした時間を過ごしていれば、不意に機械仕

掛けの人形が口を開く

「……なんであたいなの？」

「なにがだ？」

質問の意味が分からず、そう聞き返す。その表情は真剣というよりは、何処か不安

そうな顔だった

「あの場には他の人形も転がってたのに、なんであたいだったの？」

「他の機械仕掛けの人形は四肢がバラバラだったり、損傷が酷かったからな。あの場で一番損傷が少なく、綺麗な人形がお前だったというだけだ。それと、後は勘だな」

「勘で……」

そう言ってあきれれる機械仕掛けの人形だった。話していて思い出したが

「この世界はどういう世界なんだ？」

第3話

「改めてこの世界を説明してほしいって言われると難しいけど… うん、わかったよ」

腕を組んで難しい顔をしていたが、どうやら説明をしてくれるようだ

「まず、何であたい達みたいな戦術人形が生まれたかと言うと、崩壊液コーラップスと言うものが世界に蔓延したからだね。崩壊液コーラップスとは人類とは異なる文明が遺跡内部に残したもので、何なのかよくわかってないんだ。ただ、崩壊液コーラップスは今の人類の技術を遥かに上回るものって言われている」

「人類と異なる文明ね… この世界には俺がくる以前に、俺と同じような存在がいた。と。それで、崩壊液がなぜ蔓延したんだ？ 対策くらいはしていたんだろ」

「もちろんしてあったよ。あたいも詳しくは知らないけど、その遺跡が発見されて崩壊液コーラップスが流出するまでかなりの年数が経ってるから。でも、結局流出してしまった。流出した崩壊液コーラップスは全世界に拡散、崩壊液コーラップスの粒子が降り注いだ地域は、人間が生存不能なくらいのレベルまで汚染が進んだの」

「それで、戦術人形と呼ばれる、お前達のような存在が誕生したと？」

俺がそう問うと、目の前の戦術人形が首を振る

「たしかに原因の一つではあるけど、それが直接の理由じゃないよ。土地が汚染されて人が住めなくなる、そうなれば住める土地を求めて人は移動する。土地が広大にあれば、受け入れも出来たんだろうけど土地は有限。そして奪い合うことになる、つてこれはあたいの予想だけどね？ 結果大きな戦争、第三次世界大戦が始まった。核で土地は更地にされて、更なる汚染。戦争が起きれば、当然沢山の人が死ぬ。戦争が終結する頃には、労働力はまるで足りなかったんだよ。そこで登場したのが、あたい達の前身である自律人形。初めは労働力として、でも軍事転用されてあたい達戦術人形が誕生したの」

「崩壊液による汚染に核による汚染、か。この世界も大変なようだな」

「崩壊液による汚染に核による汚染、か。この世界も大変なようだな」
「崩壊液による汚染に核による汚染、か。核による汚染か。ノーステイリスでは考えられないものだ。王都が核で更地になるのがザラなノーステイリスだが、そういう汚染は聞いたことがない。そもそも、エーテル病の方がやばいからな」

「二つ質問だが、崩壊液に被爆したらどうなるんだ？」

「被爆したら？ えーっと、E、L、I、Dって呼ばれる化け物になるね。高濃度被爆だと生体は崩壊し速やかに死に至るけど、低濃度だったら即死しないで変異を起す……。みたいな感じだったかな？」

「そうか」

聞いていくうちに、エーテル病の症状によく似ていることに気が付いた。まさか、俺の前にこの世界に來た文明とはノーステイリスの冒険者だった？ とはいえ、エーテル病は完全に抑制することはできない。進行を遅らせるポーションなどはあるが、完全に遮断することはまず不可能だ。とは言え、崩壊液コーラップスとやらに大きな興味が惹かれるのも事実だ。ムーンゲートを見つけ出すついでに、調べてみる価値はあるだろう。

俺はそう結論付け、カップに入っていた紅茶を一気に飲みほし立ち上がる

「どうしたの？」

目の前の戦術人形は不思議そうに聞いてくる

「なに、目的が定まったから出発しようと思っただけ」

そう言いつつ、椅子や机などを四次元ポケットにしまう。

戦術人形が座っていた椅子

子や飲んでいたカップを回収し、俺は歩き始める

「あつ！ま、待つてよ！」

駆け足が聞こえたかと思えば、横に並んでくる戦術人形。

俺は特に気にした様子も

なく、歩きながら話す

「何か用か？」

「用かって……」

「お前は一度は死んで生き返ったんだ、最早自由だろう？　ならば好きに生きると良いさ。さつきも言ったが、生き返らせたのはあんな理由だ。お前の言っていた45とやらの会いに行けばいいんじゃないか」

「そんなの、出来っこないよ……」

最早そこにさつきまでの元気はなく、足を止め俯いてしまう。無視してもよかったのだが、俺は何を思ったか一緒に立ち止まる

「45はもう選択したんだ、生きること。あたいは一度諦めた……」

「たいが45に会ったって」

「なら、好きに生きればいいだろう」

「なら、アンタについてく」

「……」

こちらを見る瞳は不安そうに揺れていて、それを見た俺は途端に面倒くさくなり歩き始める

「勝手にしろ」

「……っ。うん!!」

普段なら絶対言わないであろう言葉を口にすると、息をのむ声が聞こえた。次の瞬間には、戦術人形が俺の隣に並んでいた

「そうだ！」

明るい声に戻ったと思えば、俺の前で立ち止まる。　すぐく邪魔だ

「あたいはUMP40、ただいま参上！時代遅れのやつゼーンブやつちまおう！」

「ああ、そうか、お互い名乗ってなかったな。俺はトラウベ・アコナイト。好きに呼

べ」

第4話

「ね、ね！これからどこに行くの?」

そう言いながら俺の周りをうろちよろする40、正直に言うとうざい。早くも勝手にしろと言う自分の発言に後悔しつつ、40の質問に答える

「まずはムーンゲートを探す。この世界が飽きたら、すぐにでも移動できるようにな」
「ムーンゲート?」

不思議そうに首をかしげる40に、そういえば説明していなかったと思い、ムーンゲートの説明をする

「簡単に言えば世界を移動出来るものだな。持ち運び出来るが重量がかなりある上に、ムーンゲートをくぐるとその場で消えてしまう。しかも、その出た先はランダムだ。俺も何回もムーンゲートをくぐっているが、しばらく元の世界に帰っていないな」

「それって、寂しくないの?」

心配そうな顔をされるが

「別にそんな事はないな。もともとノースティリス、俺のいた世界にそんなに思い入

れもないしな」

そんな話をしながら歩くも、周りの風景は変わらず歩いていてもなんの面白みもなかった

「40、お前はここら辺の地理に詳しいか？」

「んー？ なーにー？」

俺には変わり映えせず退屈な風景だったものの、40はそう感じなかったようで、俺について来ながらも周りを見て瞳を輝かせていた

「ここら辺の地理は詳しいのか、って聞いたんだ」

「いやあく、あたいつてそんな器用な人形じゃなくて……」

「まあ確かに、頭良さそうには見えないな」

「んなっ!？」

そう呟きながら、四次元ポケットからモンスターボールを取り出し、近くに投げる。中に入っていたものはその場に飛び出し、ボールだけ俺のほうに帰ってくる

「馬ー!？」

「そういうことは知っているんだな」

俺のつぶやきは聞こえなかったのか、はたまた馬に興味をとられたのか、特に何か言ってくることはなかった。

俺は馬に飛び乗ると、出発しようとするも

「ちよ、ちよつと待つてよ！あたいは?！」

「ん? んー、あー、忘れてた。まあそもそも、ペットの馬はこの一頭しか居ないし、お前が乗ろうとしても蹴り飛ばされて終わりのような気がするが」

「舐めないでよね!これでもあたいは強いんだよ!」

そう言つてファイティングポーズをとるものの、強そうには見えない。

俺はもう面倒になつたのでため息をつきながら、乗馬したまま40に近づき引つ張り上げて座らせる

「お? おお? おー!」

「うるさい、後しつかり掴まつておけ」

鞍を付けていないため不安定だが、俺の前に座らせたので問題ないだろう。それにより物理的に距離が近く、うるささも増したのだが。 それに

ペットの馬がこちらを見たが、出発するように合図をすると走り出す。その際に揺れるだの、バランスがとり辛いだのわめいているものすべて無視してやった

しばらく馬に乗つて走っていると、人工の建造物が見えてくる。このまま馬に乗つ

て探索してもいいが、遠目から見ても瓦礫が散乱し足場が悪かった。

馬から降り、水を与えてからモンスタールボールに戻し歩き始める。

「うう……揺れたー、お尻痛いー」

「そう言うものだ、慣れろ」

俺に恨みがましい目を向けながら文句を言ってくる40だが、俺はそれに取り合わず周りの気配を探りながら歩く。

なぜこの街のようなものに立ち寄ったかと言われれば、ムーンゲートを探すのもあるが、地図などが欲しかったからだ。40がそこら辺の情報を持っていなかったからなのだが

ムーンゲートは期待していなかったからいいものの、しばらく探しはしたが何の収穫もなかった。とはいえ、40が生活痕を見つけたので、人が住んでいないということはないさそうだ

「ここはどういう街だったのかなー?」

「さしてな」

人を探すのに飽きたのか、40が話しかけてくる。建物を見ても、ノーステイリスにはなかったかなり高い建築物だ。そういうのはこの世界の生まれである40の方が詳しくそうなのだが、そういうわけではないらしい。とはいえ、見てもわかる通り

風化してボロボロだ。　　こういうところを見ると、ノーステイリスとは違うということがよくわかる。

「もー！飽きたー!!」

街をほぼ探し終え歩いてみると、40が大声を出して俺に抱き着いてくる。　　そうして俺の腕を持つと、引っ張って揺らしてくる

「飽きたー!」

「……お前というやつは。　　まあ、この街はほぼ探し終えたしな出ていてもいいが」

俺がそう言うと、後ろからかすかな音がした。

ふむ、ようやく釣れたか。

生活痕を見つけた辺りからか、つけられてる感じはしていたがなかなか尻尾を出さなかったのだ。　　俺たちがこの街から出ることを聞いて、ようやく尻尾を現した。　　音から察するに、十数人いるようだ。

それにしても、このポ⁴ンコ⁰ツはいまだに気が付いてないらしい。　　相変わらず、俺を揺すっている。

そうしている間にも、その数十人は俺たちを囲い込んでくる。

一応は、セオリーというものを解っているらしい。　　逃げられないように大人数で囲

む、基本だな。

情報を持っていていいのだが。そう思うと思わず顔がにやけたようで、40が引いていた

「……………うわ、何その顔」

「なに、すぐにわかる」

「何がだ、兄ちゃん？」

「っ！」

リーダーか下っ端か、よくわからない不衛生な格好をした男が俺たちの正面に姿を現した。それを合図に、他の男たちも姿を現す。ここにきて40もようやくやく事態を理解したのか、身体を強張らせていた。

ふむ、戦闘慣れしていないのか？ そんな40を少し意外に思いながら、目の前の話しかけてきた男に意識を向ける

「いや、何もないさ。それよりここら辺の地図を持っていないか？」

「く、ククク。なあ兄ちゃん、この状況分かってるか？」

おかしそうに男が俺に問うてきた。

この状況？

「哀れな物乞いが、俺に地図を献上に来たんじゃないのか？」

「ちよ!？」

40が俺の発言に驚いたような声をあげるが、俺は気にせずに男を見る。男はその答えに笑みは消え、顔が赤くなる

「なんだと!?! てめえ、状況が分かってねえみたいだな!?!」

周りの男たちも騒ぎ始める。やれやれ、うるさいことこの上ない。黙らせるか。

加速の魔法を使用し、目の前の男の腹に拳をめり込ませる。

危ない危ない、リーダー格の男を殺すのは流石にな。それにしても、この世界の人間は脆いものだ。そんなことを思いつつ、四次元ポケットから取り出しておいた拳銃で残りを片付ける

「一瞬で…… じゃなくて、何も殺さなくても!!」

呆気にとられていた40だったが、冷静になったのか俺に詰め寄ってくる。くるのだが

「殺さなくてもって、お前は何を言っているんだ?」

「え?」

「気に入らなかつたから殺した、それだけの話だ」

「は?」

俺を見て呆ける40をそのままにし、俺は四次元ポケットからサンドバックを取り出

す。そして、さつき弱らせたリーダーを吊るし、質問をする

「さて、さつきも質問したが、ここら辺の地図はあるかな？」

「いてえ、いてえよお……」

リーダーは顔面をぐしやぐしやにして泣いていたが、俺には慣れたものだった

「もうやめて、やめてあげてよお……」

40が泣きながら振りかぶっていた腕に抱き着いてきた。　どうやら俺も久しぶりだったからか熱が入っていたようで、尋問していたら辺りは暗くなっていた。　とはいえ、情報も粗方入手したので40の言う通りやめてやることにした。　リーダーの男をサンドバックから解放すると、地面に落ちる。　俺はそれを確認し、腕に抱き着いて泣いている40と共にその場を後にした

第5話

パチパチと薪の音を聞きながら、火加減を見る。鍋をかき混ぜながら、今日の晩御飯であるシチューの味見をする。

うん、よく出来ている。

もちろん、人肉シチューではない。一時期変異して人肉を食してはいたが、あまり美味しいものではなかった。人によつては人肉の方が好きだと言ったり、食費が浮くなど言つてはいたが

「40、お前達戦術人形も食事をするんだろう、シチューはいるか？」

「.....」

首を横に振る。

あの廃墟のリーダーを尋問してからと言うもの、40はずつとこの調子だった。まさか人の死に慣れていないとか、そう言うものだろうか。

そんなくならない思考はすぐに中断し、シチューを食べることにした。餓死は辛いからな。

しばらく食べ進めていると、視線を感じた。ここには二人しかいないのだ、視線の

主はもちろん40だ。横目で40を見ると、何やら俺に声をかけようとして、出来なくて俯いてを繰り返していた。俺はシチューを食べるだけ食べて満腹になると、40に話しかけた

「何か言いたいことでもあるのか？」

「え、えっと、その……」

そう言つて俯いてしまう。だが直ぐに言いたいことがまとまったのか、俯いていた顔を上げる

「あのさ、昼間のことなだけどさ……」

「昼間？」

「あの廃墟でのこと！」

躊躇いがちに口を開く40だったが、俺の答えがお気に召さなかったのか少し怒っていた。廃墟と言うとリーダーの件か

「あそこまでやる必要あつたの？」

「あそこまでつて、サンドバッグに吊るして尋問したことか？」

むしろあのくらいで済ましたのだ、自分では慈悲深いとも思えたのだが40はそうでなかつたようだ

「それもあるし、全員殺したこともだよ!!」

立ち上がりこちらを睨みつける40だが、俺はそんな40を見て冷やかな視線を送る

「そんなことか」

「そんな事つて、命をなんだと！」

「俺からすれば、命なぞそこら辺に転がってる石ころよりも軽いが？」

40の言葉に被せるようにそう言うと、信じられないように俺を見る40。なるほど、こんな世界だからこそ命は何よりも尊いと。この世界ではそう言う事らしい。だが

「お前はこんな依頼をされたことがあるか？ 王都、人のにぎわうところで真つ赤な綺麗な花を見たいから、核爆弾を設置してくれという依頼を。見たことがあるか？ むしゃくしゃしたからと言って、偶然通りがかつた人を殺す者を。酒を買うのに金が足りないからと、店主を殺して酒を貰っていくのを。気持ちいいからと理由で、酔わせて暗がりにつれ込んで気持ちいいことをするのを。すべて、すべてノースティリスでは普通のことだぞ？」

絶句する40だが、こんなものノースティリスでは普通なのだ。もつと酷いことだつて日常的に起きているが、それを一々あげていてはキリがないので言わないだけだ。「これがノースティリスだ。俺についてくるといふのは、そういう行為が普通になる

ということだ。殺人だろうが窃盗だろうがな。俺はそれをやめるつもりも、自重するつもりも今はない。悪いことは言わん、お前が普通でいたいなら着いてくるのをやめろ」

↳UMP40視点↳

あたいはアコナイトが言ったことを信じられなかった。核爆弾の爆発が日常茶飯事？　むしろくしゃしたから殺人？　そんなの人が生活できるはずがない!!　でも、アコナイトはノースティリスはそういうものだと言った。あたいの知らない魔法を使い、モンスターボールと呼ばれるものから馬を出して使うアコナイトが、だ。

アコナイトは戦術人形のあたひよりも確実に強い。肩に担がれた時、身体の感触はがっしりとしていたし、腕をとった時だつて同様だつた。そんな極限の状態を生き抜いていたなら、強くて当然だ。あたひがアコナイトと行動を共にしていた理由に強くなりたひというのでもあつたけど、これは……

普通に考えるなら、このアコナイトの申し出は受けるべきだ。だつて、アコナイトについて行けば確実にあたひはこの世界で普通の生活が出来なくなる。でも、でも!!　もう一人は嫌だつた……

答えは最初から決まっていたもので

↳UMP40視点 end↳

ついてくるのをやめろと言ってから、数分経った。40は顔を下げていたが、いきなり顔を上げる。俺の顔をまっすぐ見て

「いやだ、ついて行く」

確かにそう言ったのだった。その綺麗な瞳を少し濁らせながら

第6話

40が付いてくると宣言した次の日の朝、俺と40は並んで歩いてた。　　と言つても、俺の周りをうろちよろするのは変わらないが。

さて、呑気に歩いているのはいいのだが、一つ問題が発生した。　40が俺に付いてくるのは構わない、好きにしろと言つたのは俺だ。　だが、俺は厄介事に首を突つ込むと言うか、向こうから厄介事がやってくるが多々ある。　昨日みたいに、だ。　俺と一緒に居る時はいいが、別行動になった時ある程度強くなければ生き残れない。　まあ、俺がそこまで気に病む必要はないのだが。

なので40の育成をする事にした

「40」

「ん？　なーにー？」

うろちよろしていた40が俺の方によつてくる

「強くなる気はないか？」

「……強くはなりたい、それはもちろん。　いつまでもアコナイトに頼ってるわけにはいかないから。　でも、あたいは器用じゃないし……」

そうやって俯いてしまう40。過去に何があったかは知らないが、問題ない。なにせ、これから行うのはノースティリス製の育成だ。非力な少女ですら、少し経てば大男だろうが何だろうが殺せるようになるのだ。とは言え、こちらの世界では初めての育成だ、手探りになるだろう。だが、不思議と失敗する気はしない

「ふふふ、強くなるうと思えば大丈夫だろうよ。さて、始めるとしよう」

そうやって四次元ポケットからある物を取り出し、40の育成を開始するのだった

「???視点」

私は銃ワッペンを構え、深呼吸する。

大丈夫、彼女を退けた今の私なら大丈夫。そう自分に言い聞かせる。

これから私がすることは、完全にグレーどころか黒の所業だ。今ならまだ引き返せるかもしれない

「クスッ、もう引き返せるはずなのに何考えてるんだろう、私」

笑ってそういうものの、返事など帰ってくるはずもない。何故なら、私はもう一人だからだ。でも、この世界は一人で生きていくには厳しすぎる。故に、誰かをこちら側に引き込まなければならなかった。

こちら側に引き込む人形のためハッキングをして、目標の輸送ルート割り出して、こここのポイントに通る時間を計算した結果、そろそろ目標が護送されてもおかしくない

時間なのだが……

不意に視線を落とすと、鈍い光を放つドッグタグが目に入る。

それと同時に、エンジン音がする。その瞬間、銃を持つ手に力が入るが、さつきまでの嫌な緊張はない。

だって私は、あの時に生きることを選んだのだから。

目標が私の予定ポイントに入ってきたためスモークグレネードを護送車めがけ投げ、私は勢いよく草むらから飛び出した。護衛の人形はさつきのスモークグレネードで視界を奪っているが、安心はできない。即座に近づき、人形を屠っていく。一体、二体と倒すも、三体目を倒すときにはスモークグレネードの効果は切れ、相手もこちらを補足し銃を撃ってくるが、それよりも早く私の銃弾が相手を捉えた。相手の人形の状態を確認し、自分の状態を確認する。被弾は、なし。運転していた人形も壊し、嚴重にケースに保管してあったものを取り出し、後ろの扉を開ける

「誰？」

「貴女を助けに来た、って言ったら信じるかしら？」

「その声…… お前は！」

「覚えていてくれたみたいね、嬉しいわ♪」

???
視点 end

第7話

育成用のシエルターに入るのはいつぶりだろうか？ そんな事を考えながら階段を40と共に降りる。前にペットを育成したのは大分前だったが、モンスター自体は前の世界で補充したので問題は無い。ただ、このまま40にぶつけるには、いささかレベルが高いかもしれないが

「……は？」

階段を下り終わると、見慣れた狭い部屋だ

「ペットや俺が強くなる時に使用したシエルターだ。さて、育成するとは言ったが、どうやってやるかを説明していなかったな。育成としては、一番楽なのがハーブを使った育成になるな」

「ハーブ？」

「これだ」

怪訝そうな顔をする40に、四次元ポケットからキャリアアをはじめとするハーブをだす

「食べられなくはないが、美味くもない。だが、腹は膨れて食べるだけで強くなれる」

「そ、そんなに簡単に?」

「何を上げるかによるがな。それにこれから提示する育成方法の中で、一番楽で遅い」

そう言つてハーブを四次元ポケットにしまい、次に出したのはサンドバッグだ。サンドバッグを見るやいなや、40は顔をしかめる。多分このあいだのリーダーを思い出したのだろうが、構わず続ける

「これ以降が、サンドバッグを使つてやる方法だ。分裂するモンスターをサンドバッグで吊るし、ひたすら殴る。または殴られる」

「殴られるって……」

そう言つて分かりやすく絶望する40だが

「吊るされたモンスターや人は不死化するからな、問題はなからう。もつとも、お前を吊るしたりはしないがな」

そう言つて青い顔をした40の頭を撫でてやると、顔色が少し良くなった

「どうする?」

「……やる、やるよ。もう、一人にはなりたくないから」

そう言いながらこちらを見る40、その表情に俺は満足しながら40の育成を開始したのだった

く??? 視点く

「なぜ私を助けた」

私を睨みつけながら、後をついてくる。銃を構えていないところを見ると、助けたことに恩義を感じているのか、それとも……

「だって、あのままグリフィンに帰れば貴女は消されてしまうのよ？　貴女だって消えたくないでしょ？」

「……………」

後ろからの圧が強くなった気がするが、私は気にせずに歩く。

もう行動を始めた以上、止まることはできない。

どのくらい歩いただろうか。仮拠点までもう少しというところで、彼女が口を開く
「これから、どうするつもり」

「どうって?..」

歩くことはやめず、後ろを見て会話を続ける。相変わらず彼女は、不機嫌そうな顔をしていた

「アンタのせいで私はグリフィンにはいられなくなった。どう責任とつてくれるつもりなのかと思ってね」

「私のせいなんて酷いなー、選んだのは貴女でしょ？」

「っ！そういうのは良いからさっさと言いなさい!!」

「余裕ないなー」

そう言いつつ、前を向く

「どちらにしろ、何をやるにもお金が必要よ。後、人員もね」

「………意外とちゃんと考えているようね」

「当たり前でしょ？ そんなわけで、今後ともよろしくね♪」

そう言つて手を差し出すも、鼻を鳴らし手をはたかれる

「ふん、よろしくするつもりはないわ」

第8話

40の育成を始めてもう数ヶ月が経った。

最初は嫌そうな顔をしていた40だったが、数日もすれば慣れたようで無表情でバブルを殺していた。壁を超えた40に嬉しく思いつつ、俺は俺でムーンゲートを探して探索を続けていた。

だが、リーダーから譲り受けた手描きの地図の範囲を探すも、浮浪者に会うだけではないの収穫もなかった。食料があったりしたもの、賞味期限がかなり前に切れた缶詰ばかりで、味も似たようなものばかりだ。食料は前の世界で奪ったものかなりの量あるので心配ないが、それでも無限ではない。何処かで農場でも開こうかとも思うが、後で考えればいいだろう。

そんな訳で、適度に40を休ませつつ、育成は順調だった

「それで、首尾はどうだ？」

「うーん、鉄血をバラバラにしてドローン作ってみたのはいいけど、あまり良いとは言えないかなあ……」

いい加減地図の範囲も粗方探したということで、40に相談するとドローンで空から

見ればいいんじゃないかと提案があった。なので40にドローンを作って貰い、空からもう一回探索しているというわけだ。素材は、探索している時に鉄血の戦術人形から出会い頭に撃たれたので、丁寧バラバラに解体して四次元ポケットに突っ込んでいたのがあった

「やっぱりか。ここら辺は粗方探しくしたからな」

「それならドローンで見えてる街に行く？ 何かしらの情報があるかもよ？」

「そうするか」

そう言ってその場を後にしようとしたのだが、40はその場から動かさず銃のチェックを行っていた

「40?」

「んー…… まあ、一応お掃除、かな」

そう言って、街とは逆方向を見つめる。俺もそちらに視線を向けてみれば、鉄血の戦術人形が

「まあ、好きにしろ」

俺は興味を失くし、街に向かって歩き始める

「うん、すぐ済ませてくるね！」

くUMP40視点く

「まあ、好きにしろ」

アコナイトがそう言うと同時に、街に向かって歩き始める。その声を聞き、あたいは銃のチェックを済ませ返事をする

「うん、すぐに済ませてくるねー」

そう言つて走り始める。前より走るスピードは格段に上がり、あたいの処理能力もかなり上がった。これもアコナイトが行つた育成のおかげだ。

サンドバッグに括りつけられたバブルを分裂させて、それを殴るといふ簡単な作業ではあつたけど、思っているよりも簡単なものではなかつた。いくら剣のエンチャントで回復しても、ダメージは受けるし下手をすれば死んでいた。そんな場面は何回もあつた。でも、ハーブを食べそれを乗り越えれば、いつの間にかあたいはこんなふうになつていた。もちろん、単調な作業で無抵抗なバブルに剣を振るい続けるのも心が痛んだけど、何事にも慣れるものだった。

そんなふうにごく数か月を振り返っていると、もう少しで交戦可能距離だった。相手はRipperとVespidの混合部隊で、数は大体一個小隊くらいだ。普通ならあたいたいみたいなサブマシンガン一体で挑むのは自殺行為であるけど、今のあたいな

問題ない。うぬぼれでも何でもなく。

射程距離に入ったあたいは銃を構えて撃つ。アコナイトからもらった銃弾のおかげで弾切れの心配がないが、それでもちゃんと狙いを付けながら撃つ。狙いは寸分たがわず、あたいが狙った所に当たっていく。これにより相手の Ripper が見えるうちに減っていく。まあ、Vespid が居るんだけど。それでも構わず接近していく。反応速度や視力もよくなっているから、避けるのも簡単だ。そうして、接近し懐に入り銃を連射する

「うーん、敵影なし！アコナイトのところに帰ろつとー！」

ドローンを通じて付近を見ても、これ以上の敵はいないようだった。アコナイトも置いて行く気はないだろうけど、早くしないとおいて行かれちゃうし

〈UMP40 視点 end〉

第9話

すぐに鉄血の戦術人形を鉄屑に変えた40は戻ってくると、俺の隣に並んでニコニコしながら歩く。何がそんなに嬉しいのか。

街に近づくと、戦術人形がボディチェックをしている。40曰く、グリフィンが統治している街らしい。戦争により国家と言うものが機能しなくなった以上、PMCが街を統治するのも当然の流れだ。

それにしても

「このまま街に入って大丈夫なのか？」

「アコナイトはともかく、あたいはどうなんだろ。グリフィンから国家安全局に移ったとは言えあの事件もあつたし……」

ムムム、と言って悩み始める40。そこら辺はノープランだったらしい。俺に任せれば、無理矢理通るのは目に見えているので意見を求められることは無い。

そもそもだ

「俺はなんともなるが、お前はどうかしないといけないのだろうか？」

「まあ、そうだね」

「なら、これで変装すればいいだろう」

「これは？」

40に渡したのは変装セット。犯罪者の心強い味方だ。変装して、厄介な敵との敵対状態などをリセットするものだ。

そう40に説明すると、懐疑的な目を向けてくる

「本当に大丈夫なの？」

「まあ無理だったら、通してもらっただけだ」

「他の統治区でも指名手配になると思うんだけど……」

そう言いながらも、渡した変装セットを使い、変装する40。変装したのを確認し、ボディチェックと軽い質問を受ける。身分を証明するものはないが、今の時代珍しくもないのか普通に中に入れてしまった。

しばらく人通りの多い路地を歩き、そこから人気のない裏路地に入り40と話をする。

「セキュリティはどうなってるんだ？」

「まあ、ボディチェックで何もなければいいんじゃない？」

40は変装を解きながら、そう返事をした。俺に変装セットを返してこようとすが、念のために40に渡しておくことにした。そうしてまた表通りに戻り、話を続け

る

「さて、グリフィンが統治してる街だし、何かしらの情報があればいいんだけど」

「情報収集はお前の得意分野だろう、期待してる」

「任せてよね！」

そうして俺と40は情報収集をし始めた

しばらく情報収集をし、一息つくためにカフェに来ていた

「それで、首尾の方は？」

「上々だよ上々」

グリフィンが統治しているエリアの地図や保存食といった食料など、色々なものが入ったバックを叩き満足そうな40。だがそれは表向きだ。40に探らせていたのはグリフィン自体の情報や、他のPMCの情報と言ったものだ。

こんなところで言うわけにはいかないが

「それで、お前の知りたい情報は知れたのか？」

「もちろん。そのことで手伝ってほしいことがあるんだ」

第10話

夜になり、安い宿に泊まることにした俺と40。安い宿ではあるが、防犯に関しては40がいるので何も問題はない。

そんなわけで昼間のカフェでは出来なかった話をしていた

「それで、何をする気なんだ？」

「グリフィンのデータベースにアクセスした時、面白い情報を見つけてね？」

そうやって俺にタブレットを見せてくる40。

内容を流し読みすると、金の動きと戦術人形の情報だった

「この情報自体はこの地区のを統治してるグリフィン基地のものなんだけど、本部の方の情報によると」

そうやって次の情報をタブレットに表示する。そこには、人形の密輸をしている集団が増えつつあるとされていた。日付は一月くらい前かららしい

「あの事件の影響で金のある奴らに流しているんだろうが、何かあるのか？」

「この近くに、それらしい集団がいるっぽいんだよねえ」

そうやってタブレットを操作し、改めて俺に見せてくる40。これは、ドローンか

らの映像のようだ。

トラックとそれを囲むように護衛が数人。しばらく歩いてきたものの、積荷を降ろし始めトラックはそのまま走り去っていった。残ったのは積荷と護衛数人だ。

護衛の方をよく見ると、一人が無線を使っていた。それからすぐに走り去ったトラックと別方向から、トラックがやってくる。そのトラックは護衛集団と積荷を回収し、走り去る。ドローンもその後を追うが、そこまで距離が離れていない崩れたビル群の一角で止まる。そして護衛や運転手などが車から降り始め、中から現れた者たちが積み荷を運んでいく

「で、この連中にぶつけるのか？」

「まあ、そうなるかな」

「いいのか、妹分なんだろ？」

「このままだと、そこら辺のごろつきに間違えられそうだしね」

またもタブレットを操作し、情報を見せてくる。これはこの街を統治しているグリフィンのもののようなのだ。それによると、グリフィンの物資には手を出していないものの、一部恵まれている者たちに優先して配給される物資を狙っている賊がいるらしい情報がかかっている。匿名で届けられた情報には、戦術人形がかかっているとまで

「それで、どう動く？」

「二人には依頼という形で、このグループの殲滅に協力してもらおうと思ってる」
「そんなふうまく行くものかねえ……」

「食いついてくると思うよ？　今のあたいは別にしても、人形だからメンテナンスは必須だし。それに、何をやるにもお金はかかるでしょ？　それでさっきの話に戻るけどアコナイトには、二人に知られないように補佐してあげて」

「……はあ、何も言うまい。一応は協力してやろう」
「ありがとね、アコナイト」

く???視点く

「さて、準備して」

「いきなりね」

彼女に声をかけると、銃の手入れをやめ不機嫌そうに眉をしかめる。

まあ、何時ものことと私は何か言いたげな視線を受け流す

「仕事の時間よ」

「追剥のかしら?」

皮肉気に笑う彼女に、私は笑顔を浮かべてこう返した

「言ってるでしょ、仕事って」

「……………どういうことよ」

それまでのどこか捻れたような態度から一転、真顔になる彼女

「さつき、ちよつとのぞき見してたらコンタクトがあつてね？ それで依頼されたのよ」
「コンタクトつて、アンタ！」

掴みかかつて来ようとする彼女だけど、その前に彼女の手の届く範囲ら素早く離れる。
彼女は悔しそうな顔をする

「もう、怒らないでよ」

「これで冷静でいられるアンタがおかしいのよ!! 私たちの居場所がバレたんでしょ、存在も！」

「そうね。でも、貴方が想像しているようなことはないと思うわよ？」

「は？」

ポカンとした顔をする彼女に、思わず笑ってしまいそうになるけど我慢だ我慢

「私たちの存在を知っていて、今この瞬間も何も仕掛けてこないでしょ？ そもそも、私たちが危惧している相手なら、こんなまどろっこしい真似をする必要ないでしょ？」

「それは、そうだけど……………」

「わかってくれて、私も嬉しいわ。それで依頼の方だけど、私たちにとつても悪い話

じゃない」

そう言つてタブレットを投げ渡す。彼女は特に焦りもせず内容をチェックし、顔をしかめていく

「密輸業者の殲滅、ねえ……」

「実は前から調べてたのよ、こいつ等のこと。だから、どの程度の規模かっているのは知ってる。私たち二人なら無理だろうけど、依頼主によれば戦力を用意してくれるって話だし」

「……」

「いろいろ言いたそうね？ これでもいろいろ考えたのよ？」

「……ふん」

彼女は鼻を鳴らすと、メンテナンスを終え、準備を始める。さて、私も準備をしなくちや

第11話

とある人形達を待ちながら、俺は欠伸をしていた。40とグリフィンが統治する街を調べていると、依頼を受けると返信が来たのだ。

そこから俺達は準備を進めて、俺は密輸業者のアジトから数キロ離れたところで依頼を受けた人形を待っていた。ちなみに俺の側に40の姿はいない。別の場所で、俺やその人形達が突入した後に突入し、色々と情報を盗むそうだ。

それにしても暇だ、このまま俺だけでカチコミをかけようかとも思うのだが

『駄目だからね』

40から渡されたインカムから、40の声が聞こえた。流石40だ、俺の性格をよくわかっていているらしい

「で、まだか？」

『もう近くにいますよ、わかるでしょ？』

40の言葉に周囲の気配を探ると、こちらに近づいて来ている者達があった。密輸業者なら40が警告する筈だし、こちら辺の鉄血については、グリフィンが殲滅しているからその可能性はない。もつとも、鉄血なら鉄屑に変えるだけだが。目を凝らして

みれば、ボロ布を被った何がちらにに向かって来ていた。向こうもこちらに気がついていられるらしく、警戒しながらこちらに向かって来ていた

「貴方が依頼人かしら？」

そう聞いてくるのは、左目の所に傷がある戦術人形だった。もう一人はこちらを警戒して、話しかけてくることはない。鑑定の魔法を使って銃を見ると、UMP45とHK416と結果が出た。40が言ったのはこの二人か。

UMP45の問いに答えず、インカムを二人に投げて渡す。二人は警戒しながら受け取り耳に付ける

『依頼人は私だよ。そこに居るのは私が雇った傭兵だから、協力して依頼を完遂してね』

二人がインカムを付けると同時に、40が喋ると驚いたように左右を確認する二人。依頼人である40がどこかに隠れていると思ひ探しているのだろうが、残念なことに40はここにいない

『あはは、私はそこに居ないよ。目視では確認出来ないけど、かなり上空にドローンを飛ばしてるからそこから確認してるんだ。さて、それじゃあ今回の依頼を確認しようか』

↳UMP45視点↳

依頼人が改めて依頼内容を確認している中、私は依頼人が雇ったと言っている傭兵を観察していた。服装は一般的な迷彩服で、銃の種類のにはアサルトライフルを持っているようだが、形に見覚えがない。態度は私たちが来る前に依頼の説明を受けていたのか、よく話を聞いていないようだった。それどころか、気を抜いているのか欠伸までしていた。油断しているように見えるが、視線は常に周りを見ていた。総評的には、よくわからない、という判断だ。ちぐはぐというのが、私の印象だった。戦闘慣れはしているが、こういう潜入に向いていないような気がする。それに、あんな服装だし

『これが今回の依頼。それじゃあ、後はよろしくね』

ブツンと音がして、通信が一方的に切られる。依頼内容は頭に入っているし、プランもいくつか用意はしてある、勿論依頼人の傭兵が役に立たなかった場合も含めて。

416を見れば、頭が痛いとも言わんばかりの顔で頭を振っていた

「さて、いま依頼人から依頼内容の説明もあつたし、改めて説明の必要はないわよね、傭兵さん？」

「.....」

コクリと頷く、傭兵さん。さつきから喋らないけど、必要以上に慣れ合いたくないのか、喋れないのか.....
とはいえ、今回だけの共闘だ、あまり気にしないことにし

た

「そ。それで、作戦なんだけど、この人数で殲滅も不可能じゃないけど、厳しいと思うの。だからまずは、敵の戦力を減らしつつ、コントロールルーム、つまり監視カメラ等の制御を担っているとこを抑えたいと思うの」

そう言つて、裏ルートで仕入れた密輸業者が使っている廃墟の設計図を広げる。コントロールルームを指さし確認をとると、416は頷く。傭兵さんの方を見ると、何かプラカードを持っていた。

いや、なんで？

「.....」

416も私がおかしいことに気が付いたのか、傭兵さんを見て絶句していた。

ちなみにプラカードにはそちらに任せる、と書いてあった。

い、一応了承も取れたので、気を取り直して説明を続ける

「そ、それで、コントロールをこちらで奪つて、敵の位置を確認後、殲滅するっていう手はずで」

そう言つて設計図を懐にしまう。その際傭兵さんを確認すると、さつきまでプラカードを持っていたはずなのにそのプラカードは何処にもなかった。

これ、人選大丈夫なのかなあ.....

少し痛くなった頭を抑え、416と傭兵さんに声をかけ出発をした
　　U M P 4 5 視点 e n d

第12話

普通なら見張りがいてもいいはずなのだが、見張りはおらず警戒しながら正面入り口から潜入する俺たち。 UMP45も40と同じ様にハッキング能力があるのか、電子パネルを見つけてはハッキングをしていた。 ついでにこの施設全体のコントロールを奪えないのか聞いてみた所、奪えないらしい。 40なら奪えそうな物だが……そこで思い直す。 40はレベル上げをした影響で各種能力が上がって居るのだっ

た。
それにしても順調だ。 欠伸が出るくらいには順調だった。 所々見つきりそうな事もあったが、加速の魔法を用いて先に処理をしておいたし。

「……………」

二人も順調過ぎると思つて居るのか、しきりに首を捻っていた。 と言うわけで、大した戦闘もなく目標のコントロールルームに到着した。

UMP45の話では中に数人居ると言う話だが、HK416が確認し指を立てる。

立てた本数は五本。 中には五人いる様だ。 UMP45は機器の損傷はなるべく控えて欲しいと言っていたが、どうするのか

くUMP45視点く

簡単にコントロールルームに着いたのはいいものの、416に中を様子を窺ってもらうと、中に居るのは五人という回答だった。カメラや敵の位置をハックするのに、この端末は絶対に必要だ。とはいえ、戦闘は絶対に避けられないだろう。一人づつおびき寄せるなんてナンセンスだし、おびき寄せられる保証もない。加えて、応援でも呼ばれたら袋の鼠だ。

後のことも考えれば情報も大事ではあるが、依頼の達成は絶対だ。

他の二人は、この状況というより、私が苦悩しているのを見て笑みを浮かべている。416は分かるが、傭兵さんのもととの性格なのか、それとも。

ともかく、ここで考えていても埒が明かないので突入することにした。スモークグレネードを部屋に投げ込むと共に、416に出入り口を確保してもらいつつ、バックアップをしてもらおう。傭兵さんと私は部屋に突入し、部屋内を制圧だ。連絡を取れる前に事が終わればいいのだけど……

くUMP45視点 endく

スモークグレネードが投げ込まれ、俺とUMP45が部屋の中に突入する。いきなりのことに驚く密輸業者だが、それも一瞬だった。いや、オペレーターのような二人はそのまま呆然としていたが、護衛みたいな三人は拳銃を取り出したり、無線機で応

援を呼ぼうとしていた。416が無線で応援を呼ぼうとしていた一人を片付けたので、俺は拳銃を取り出した二人に狙いを定め、銃を発射する。一応、40に銃の構え方や狙いの付け方は習ったが、正直どうでもいい。撃つてれば死ぬわけだし。そもそも、特殊弾とか強力な効果が付いたものもあるわけだし。ともかく、40に習った通りに銃を扱い、目標二人を沈黙させた。UMP45の方もうまくやったのか、機器などの被害は特になかった。五人が動かなくなったことを確認し、すぐにハッキングを開始するUMP45

第13話

UMP45がハッキングして調べた情報を共有する。

なんでも裏のルートで調べたこの密輸業者の人数と、現在の人数が合わないらしい。もちろん情報は情報なので、すべてが正しいとは思っていなかった様だが。

とは言え、少ないのは良い事だと前向きに捉えている様だ。

廃墟内の監視カメラではすべての方向をカバー出来ているわけではないので、多少数は増えるかもしれないので気をつける様にUMP45に言われてしまった。俺は子供か何かだろうか？

ともかく、ここからは各個撃破となった。UMP45はコントロールルームから補佐をすると言う事なので、殲滅するのは俺とHK416の担当だ。そのHK416だが、コントロールルームを出てすぐに別れてしまったのだが

『それで、そっちの首尾は？』

『順調だよ？ もう少しで関連の情報まで集められる』

別れる時UMP45から渡された無線機とは別、最初からつけていたインカムで40と会話する。

敵が少なかったのは、俺が処理をしていたのもあるが、40も潜入していたからである。

『それで、お前の目的の方は?』

『うーん…… まあ、それなりに? 少し順調過ぎたね。これじゃあテストにはならないかなー』

今回の依頼のでっち上げの理由、始めは語らなかつたものの聞けばこんな理由だった。俺についてきたものの、やはり妹分は心配だったと

「うーん、ゴメンね?」

「なんでも、何でもしますから…… お願いします」

40と暇つぶし程度に会話をしていると、近くからそんな声が聞こえてくる。UM P45に何がいるか聞こうと思ったが、俺が歩いているところは監視カメラがなかったはずなので、無線機を取ろうと思ったが思い留まる。

気配を消しながら声のする室内を覗いてみると、壁際に追い詰められ顔面蒼白の人形と、銃を構えて困った様に笑う人形が居た。

確かこの密輸業者には人形が居たはずだが、銃を構えているのがそうだろうか? だとしたら、もう一体の人形は? よくわからないが、止めに入る事にした。無いとは思いますが、銃声を聞きつけて密輸業者が集まってきたら面倒だ。いや、そうしたら一気

に殲滅すれば良い話だ。

そんな事を考えて居ても身体は勝手に動くもので、あつという間に銃を取り上げ拘束する

「侵入者？ 正面の人間達は何をやっているのかなあ……」

俺が拘束しているというのに、笑顔を崩さない人形。 さつきまで怯えていた人形は驚いているというのに、こいつは笑ったままだ。

そんな人形に親近感を覚える

「こんな状況なのに、笑っているんだなお前は」

「ん？ あー、まあ可笑しいよね、自分でもそう思う」

俺の言葉を聞いて、一瞬驚いたような顔をするもまた笑い始める。 やはりというかなんというか、この人形もまたこち^{壊れている}ら側らしい。 そんな人形に興味がわく

「なぜそうなったんだ？」

「んー？ 変なこと聞くんだね？」

「なに、お前に興味がわいたんだ。 こんな状況にもかかわらず、笑顔でいられるお前にな」

「……私が言うことじゃないけど、だいぶ変わってるよね貴方。 まあいいけどね。 何故って言われても、私は人形だから、命令されればそれをこなさなきゃいけない

いでしょ?」

「今回のこれも命令だったと?」

「そうだねー。この子、前の主人のところで暴力振るわれてたんだって。まあ、その理由も失敗ばかりだったからっていう理由で納得なんだけど。でも、それを人間達が見つけたのは買い取った後なんだって。それで怒った人間たちは私に処理を、って感じかな。ずっとこんな感じ。ある時は仲間の人形の処理、ある時は裏切り者の処理、またある時は捕虜の拷問とか、ね」

40が調べていた時、メンバーの入れ替わりが激しいと言った理由があつたのだが、これだったらしい。そういう事をずっと続けていたら、こうなつたと

「ところで、自由になつたら何がしたい」

「本当に脈絡がない……自由、自由かあ……貴方がしてくれるの?」

「さあな。俺かもしれないし、違うかもしれない」

「何それ」

そう言つて笑う人形。不意に笑顔をやめ、真面目に考える

「そうだなあ……あ、家族が欲しい!」

「家族?」

これまた予想外の答えが返ってきた。自分が人形というのは分かっているだろう

し、悪感情は持ってないにしても人間にいい感情は持ってないはずだ。なのに、家族とは

「そう家族！特別な繋がりつて言うのかな。こんなふうに一方的に命令されて、ただ事をこなすんじゃないやなくて、信用して背中を任せられるような家族が。あはは……」

なんかうまく言えないけど、そんな感じかな？」

「……………」

こんな状況になつて尚こんなことが言えるとは、やはりコイツは壊れている。とはいえ、その神経は好ましいのも確かだ

『40、聞いてただろ？』

『あたいに何をさせたいの？』

『こいつを自由にしてやれ』

『りょーかい』

すぐそこまで来ていたのか、変装セットで変装した40が姿を現す。そして、人形に触れたかと思うと、人形が小さく痙攣して力が抜けた感覚がする。40を見れば成功したのか笑っていた

「それじゃ、私はもう少しやることがあるから」

「了解した」

会話をすると、すぐに出入り口から出て行く40。それからしばらくすると、かすかな音と共に人形の首が上がる

「あれ、私……」

「目が覚めたようだな」

「んー、何かしたの？」

「さてな。ところで、少し協力してもらっていいかな？」

「まあ、出来ることなら」

「なに、簡単なことだ。ここをつぶそうと思ってな、お前自身も自らの手で決着をつけたいだろう？」

「……なるほどね。うん、そっかそっか……もちろん協力させて貰うよ

!!」

「ところで、名前は」

「ふふつ、今更じゃないかな。まあいいけどさ。私はライナー」

「なら、今日でその名前ともお別れになりそうだな」

第14話

（UM P 45 視点）

最後の最後にひと騒動あつたものの、依頼の密輸業者の殲滅は完了した。警戒を怠らずに外に出ると、一人の女性が拍手と共に現れる。私と416は咄嗟に銃を構えるものの、傭兵さんは特に気にした様子もなくその女性に近づく。女性の隣に並ぶと、またいつ出したかわからないプラカードをこちらに見える様に掲げていた。プラカードには依頼人と書かれていた

「依頼人？ 本当に？」

「そうだよ、私が依頼人。信用するかしないかは貴女次第だけど」

余裕のある笑みを浮かべながら、こちらに語りかけてくる依頼人。横目で傭兵さんを見てみると、気を抜きながらも銃から手を離していなかった。一応、こちらを警戒しているらしい

「え、プラカード？ どこから？ いや、さつきまで普通に喋つてたのに」

そう言ったのは、最後のひと騒動の原因と言えなくも無い、密輸業者の人形だ。その人形から興味深い話を聞けたが、今は聞かなかつた事にする。目配せをし、416

に銃を降ろさせ、私も銃を降ろしながら近づくと

「…………報酬の話に移りましょ。貴女の依頼通り、密輸業者は殲滅したわ。…………

そこに残っている人形以外は、だけど」

もう一体、その人形に手を引かれる様について来た人形もいるのだが、ついてきた人形自体は依頼とは関係ないはずだ

「殲滅が依頼のはずだけど、まあいつか。それで、その人形はどうするの？ 要らないんだったら、こちらで貰うけど？」

その言葉に私は二体の人形を見る。片方は密輸業者で仕事をしていたのだから、実力的には申し分ない。もう一体がネットクにはなるが、二体の人形が無償で手に入る。

こんな状況はほぼ無いとみていいだろう。416を見ると、興味無さそうにこちらを見ていた。あるいは完璧な彼女には傭兵さんという可笑しな存在との関係を断りたいのか。

件の人形達をみて見ると、一人は俯き、一人はニコニコと笑みを浮かべるだけ

「いいわ。こつちとしても、戦力が欲しかったから」

「そう。なら、コレが報酬」

そう言つて、脇に置いてあつたアタッシュケースを私に向かって放り投げる依頼人。私は受け取り、中身を確認する。報酬のお金だ。ただ、依頼書より多いみたいだ

が。チラリと依頼人たちの方を見ると、密輸業者から奪った車に乗り込んでいた。「それじゃあ、また機会があったらね？」

そう言いながら手を振る依頼人。すぐに車を発進させ、距離がだんだん遠のいて行く。そうして残される私たち

「それで、これからどうするわけ？」

416がそう聞いてくるが、行先は決まっていた「まずは隠れ家に戻りましょ。二人もついてきて」

そう言うが早いのか、私は確認もせず歩き始める。後ろから焦ったような声が聞こえるが、私の頭はアタッシユケースのそこに入っていたメモリで頭が一杯だった。何故あの依頼人が、こんなものを忍ばせていたのか。色々考えはするが、一番最悪なのは……

くUMP45視点 endく

「よかつたのか？」

「んー？ なにがー？」

車を走らせながら、40に問う。窓は全開にしているため、中に風が入ってくるが何の問題もない。風が気持ちいいのか、40の声は間延びしていた

「妹分ともっと話さなくても」

「あー、そういう……別にいいかな、私も選んだわけだし。アコナイトこそよかったの？」

「何がだ？」

悪路でもない平原、車を運転するならうつつつけだ。上機嫌で運転していると、40が逆に問い返してくる

「あの人形のこと」

「別に構わんさ。なんだか、また会いそうな気がするしな」

「そっか」

なんて、嬉しそうに答える40だった

本編開始 第零章 第15話

2062年　　どこかの小屋近く

「様子は？」

「絶体絶命だよ、ほら」

男の問いに、楽しそうにタブレットを渡す女性。そこには、とある小屋を取り囲む大量の鉄血工業製の人形が写っていた

「これはまた、絶体絶命と言っても過言じゃないな。それで、もう一方の方は？」

「404の事？　それならこっち」

女性は男と距離を詰め、男の持つタブレットを操作する。画面に映ったのは、男たちが良く知る四人組の戦術人形だ

「気を引くのは任せるぞ？」

「大船に乗った気でいてよね！そっちも、しくじらないですよ？」

「ククク、しくじるほうが難しいな」

女性の言葉に意地悪く笑いながら、男が答える。女性の方も納得したのか、手に

持っていた銃のチェックを終え、男に背を向ける

「それじゃ、また後でねアコナイト」

「ああ、40」

「どこかの小屋近く、視点 end」

鉄血のハイエンド、名前は確かエー^代ジ^理エント^人だったか？　　それいつも随分お優しいこと。　　困っているのだから、最大火力で叩き潰せばいいものを。　　いや、そう言えばAR小隊とかいう、グリフインのハイエンド機ともいえる戦術人形で構成されたやつらが送っているデータが欲しいんだっとな。　　40も横合いからデータを傍受してたが、大した情報がないと嘆いていたっけな。　　まあ、そのおかげでこうして俺が作戦通りに動いているわけだが

『40、こっちは準備ができたぞ』

『はい、それじゃあこっちはこっちで気を引くねー』

インカムのスイッチを入れたまま、俺は手に持っている手榴弾を見る。　　それにしても久しぶりに使うな、コレ。　　なんて考えていると、40は作戦通りに声をかけたようだ。　　なら俺もと、手榴弾を鉄血の大群に投げつける。

この手榴弾、攻撃範囲はそこまで広くないものの着弾点を中心に音属性攻撃をする。あそこまで密集しているのなら、攻撃範囲が広くなくても気にならないだろう。　　手

榴弾の欠点としては、手榴弾本体の攻撃力は低いし、発動される効果が投擲スキル依存ということだ。だが、これでも攻撃するには困らないくらいスキルは上げているし、それにこの世界のモンスターもそうだが、基本的に脆い、なのでさほど気にならない。それに、鉄血にしか試していないが、スモークグレネードや閃光手榴弾でハイエンドモデル以外は動きが止まるのでなおさら効果的だ。

ある程度数が減らせたものの、エージェンツ^代はこちらに気が付いたのか、まっすぐこちらに向かつてくる。エージェンツ^代が迫ってくる中、小屋の方を見るとAR小隊の人数が、中から抵抗を続けているようだった。少し距離は遠いが手榴弾を大量に投げておく。数が減らせれば逃げられるだろうし、最悪40がうまいこと誘導するはずだ。

後はこちらにまっすぐ向かってきているエージェンツ^代を何とかするだけだ。

こちらに一直線に迫っていたエージェンツ^代だったが、よく見るとスカートが不自然に動いている。何をしてくるのやらと思ったが、俺の予想を斜め上に越えてきた。なんとスカートをこちらに見せびらかすようにたくし上げたと思えば、中から銃口付きのサブアームをこちらに展開してきた。これにはさすがの俺も驚いた。おもに鉄血の開発陣の頭の悪さに。

とはいえ、戦闘ともなれば驚いていても体は動くので問題はなかった。銃口が火を噴くと共に、俺は横に転がり飛び起きる。これにより、隠すものは何もない状態で

エージェンツと対面することになった

「よくもやってくれましたね、人間ごときが」

「やれやれ、痴女が何を言うかと思えば……」

間なんだがな」

そもそも、お前らを作ったのもその人

俺の見え見えの挑発に、眉一つ動かすことなく受け流すエージェンツ。量産品の

下っ端ならこんな反応でもよかったが、ハイエンドモデルで何も反応がないのはつまらない。とはいえ、わざわざ俺の迷惑通り過剰に反応する必要もないのだが

「自殺志願者に付き合っている暇はありませんが、今回は特別です。今回の作戦を邪魔してくれましたから」

俺の今の格好は、確かに戦闘をするものではない。Tシャツにジーパンと、普通に
出かけるなら困らないが、間違っても戦場に出る服装ではない。……いや、よく考えればグリフィンの戦術人形なんか、あきらか戦闘向きじゃない服装でいる奴もいたな。ともかく、そんな格好だ。だが、俺は元々体一つあれば戦える人間だ

「それでは、さようなら」

そう言つて、頭を下げるエージェンツ。戦闘中に相手から目を離すとは……

それがなければ、善戦できたかもしれないのに

第16話

「まあ、やはり分身だったか」

霧散していくエー^代ジ^理エントを見ながら、俺は呟く。

楽しみが増えたと言うべきか、面倒なことになったと言うべきか。

インカムのスイッチを入れ、40に通信を入れる

『40』

『お、アコナイト。 そっちは終わったの？ こっちの誘導は上手く言ってるよ』

『それは何よりだが、残念なお知らせだ。 俺とお前が確認していたエー^代ジ^理エントは分

身だったみたいだ』

『うえー…… 了解、了解。 プラン変更するねー』

『こちらでも探すつもりだが、エー^代ジ^理エントを捕捉次第こちらに教えてくれ』

『了解！ それじゃ、また後でね！』

『ああ』

通信を終え、溜息をつく。 面倒な事になったものだと。

そこら辺を吹き飛ばしたい衝動に駆られるが、そんな事をする訳にもいかないので、

鉄屑を拾いつつ足を動かす

「それにしても、俺も変わったものだな」

→UMP40視点

アコナイトとの通信を終え、私は溜息をつく。

まったく、AR小隊の誘導もあるっていうのに、確認していたエージェン^{代人}トが分身だったなんて。おかげで予定していたプランは変更を余儀なくされたし、エージェン^{代人}トを再度捕捉しなきゃならないし。飛ばしているドローンで探すも、エージェン^{代人}トの姿は見当たらない。そもそも、こちら辺の地形は木などが生い茂って空から探すのには適していない。一応、気まぐれに作った地走のドローンもあるけど、回収の手間もある

「はあ…… 最悪、あたいが何とかする方向で行くしかないかなあ……」

一応、地走のドローンを起動させ、これから歩くルートを確認する。予定したルート上に鉄血はいないみたいだけど、それも時間の問題だろう。エージェン^{代人}トも自身が破壊されたのは気が付いているだろうし、あの小屋にAR小隊がいなくても確認済みのはずだ。

噂をすればなんとやら、主役たちが来たみたいだった

「やっほー」

印象が良いように明るく声をかけたつもりだったけど向こうはそうは受け取ってくれなかったみたいで、無言で銃を構えている。まあ、そういう反応でも仕方ないか、状況が状況だし

「ヤレヤレ…… せつかく安全なルートを通れるように誘導したのに、恩を仇で返されるなんて」

「貴女が？」

一番後ろの、黒髪に緑のメツシユが入った子が銃を少し下ろしつつ、聞いてくる。

それを制すように手をあげ、銃を構えつつ聞いてくる先頭の人形

「お前が、か？ 証拠は？」

うんうん、あの時とは少し違うけど彼女は相変わらず優秀なようだ。

少し懐かしく思いながら、無線機を取り出しそこに声をかける。すると、緑のメツシユの子の無線に私の声が入る。ようやく、味方と証明できたのか、警戒はしながらも銃を下ろす四人組。この子たちこそ、グリフィンのハイエンドモデルで構成された小隊、AR小隊だ

「すまない、状況が状況だ許してくれるか」

そう言っすまなそうにする彼女

「気にしてないよ。それより早速で悪いけど、すぐ移動しよう。こつちもこつちで、

アクシデントが起こってね」

「アクシデント、ですか？」

おずおずと聞いてくるのは、黒髪に緑のメッシュが入った…… ああ、面倒だから

M4A1でいっか。隊長のM4A1だった

「そう、アクシデント。 本当なら、こつちでエー^代ジ^理ェントを仕留めるつもりだったんだ

けど、しくじってね。 なので、こつちで用意してたプランが全部使えなくてね、だか

らすぐにも出発したいんだけど？」

そう言うのと、全員が驚く。 まあ鉄血のハイエンドモデル、それも最強格と言ってい

いほどの実力だ。 普通なら、頭おかしいとか言われそうだけど

「へー！そんなすごい、人形持つてるの!？」

これに食いついたのはM4SOPMOD-II。 AR小隊では末っ子のような存在

だけど、鉄血に対しては残虐性を見せる。 いや、もしかしたら幼さ相応なのかもしれ

ないけど

「うーん、さてねー…… とりあえず、何処で回収部隊と合流するか教えてもらって

いい？」

「貴女は回収部隊の人ではないんですか？」

「違うよ？」

驚いた顔をするM4A1に、表情の読めないST AR—15。元々分かっていたのか、疑わしそうに私を見るM16A1

「そんなうまい話、あるわけないよ。私たちとしても目的があるから貴女達に協力するだけ。それで、どうするの？」

「・・・・・・その目的って何なの？ 私たちを助けるということとは16LABにでも恩を売りたいの？」

「それは違うよST AR—15。私たちが恩を売りたい相手はグリフィンだよ」

第17話

（M4A1視点）

突然無線が入り驚きはしたけど、それ以上にその無線の内容に驚いた。

エージェン^代ト^理が通信に割り込んできたから何かあるとは思っていたけど、まさかセーフハウスが囲まれていただなんて。一応警戒はしていたけど、エージェン^代ト^理達の方が上手だった。でも、そんな状況でも無線の主は安全に脱出出来るという。

データの送信がかかるのもあり、セーフハウス内で待機していたが、複数の爆発音がした。状況を確認しに行っていたARR15によると、何処からか手榴弾が投げられているらしい。そのおかげで、セーフハウスの包囲に穴が開き始めた様だ。

ようやくデータの送信が終わり、セーフハウスから脱出しようとする、入り口付近から爆発音がする。M16姉さんが窓から外を覗き込むと、外の鉄血は跡形もなく消えているらしい。私も確認し、私達は一氣に外に出る。近くに放置された部隊がいるとは聞いてたけど、その人形達だろうかと走り抜ける間確認して見たけど、少し遠くに鉄血の部隊が見えるだけで、味方の姿は見当たらなかった。

茂みに隠れると無線から次の指示が。まるで私達の動きが見えているようだが、ト

ローンなどは見当たらない。指示に従うべきか、それとも回収地点にそのまま向かうべきか、迷うけど、指示に従えば安全に脱出出来るという言葉信じ、指示に従う。

全幅の信頼を置いていた訳じゃないけど、こうして私達を追えるのだから無視していい存在じゃないのは確かだ。みんなはそれでも信頼出来ないと言ってるけども、一応は私の意見を尊重してくれた。そして

「……………止まって」

今私達の先頭に立ち、誘導する女性に出会った。しきりに止まっては、手に持つタレットを確認していた。興味津々だったSOPMODが何をしているのか聞いてみるも、秘密と言われ一切を語らなかつた。ルート上に鉄血がいるか確認しているのだろうけど、どうやって確認しているかまでは分からなかつた。でも、そのおかげでこうして私たちは安全に回収地点まで向かつていた。

だが、今回は様子が違っていた

「チツ、映像が途絶えた」

「それって……………」

「みんな残弾はどれくらいある？ 足りないなら、渡すけど」

私がそう声をあげたけど、女性の方は至って冷静だった。女性は腰につけていた

ポーチからマガジンを取り出す。私たちに対応はしているようだが、弾薬はあまり消

費しないようにしていたので大丈夫だ。それよりも

「映像が途絶えたって……」

「シッ、静かに……」

私がいかけると同時に、中腰になる女性。明らかに警戒している様子に、私たちも中腰になりながら辺りの様子を窺う。特に何も聞こえないが女性は違ったよう

「回収地点に走って！」

そう言うと同時に、来た方向に走って行ってしまふ。突然のことに途方に暮れる私だけ、そんな中一番最初に行動を開始したのはM16姉さんだった

「M4、行くぞ」

「M16姉さん……」

「私たちの任務を忘れたか？」

一度振り返るも、女性の姿はそこにはない。でも

「行きましょう……」

〈M4A1視点 end〉

第18話

（UMP40視点）

「いやあ、まさかこっちも分身だったなんて」

あたいは膝に着いた土を払いつつ、立ち上がる。耳を澄ましながら周囲を探るも、気配はない。

それにしても、分身とは言えエー^代ジ^理ェン^人ト単騎で突入してくるなんて、確実に困だろう。とはいえ、AR小隊はあたいの指示で出発してまっているし、追いつくにも時間がかかる。後はアコナイトだけど……

「連絡がないと言うことは、エー^代ジ^理ェン^人ト本体を見つけてないってことだし、しかも何かやってるような気がする」

アコナイトもマイペースなどころがあるから、行動が本当に読めない。まあ、アコナイトは行動を指示するよりも勘で動いた方がいい結果を出せるし、そもそも、あたいてもアコナイトにあれこれ指示を出すつもりもない。必要なら出すけど、それはどうしてもあたいの指示で動いてほしい時だけだし。どちらかと言えば、逆かなとあたりは思っている。

タブレットでAR小隊の動向を探りつつ、インカムのスイッチを入れた

（UMP40視点 end）

『回収地点はそこか、了解した』

『それはいいんだけどさ、どうしたのその子達？』

『拾った』

『…』

呆れたような40の顔が目に浮かぶ。40が言っているのは、俺の後ろをついて来ているグリフィン所属の人形達のことだ。どうも戦場で放置されたようで、右往左往している時に俺と会ったのだ。最初の方は保護だのなんだの言っていたが、手榴弾で鉄血を次々と鉄屑に変えていると何も言わなくなった

『それで、これからお前は どうするんだ？』

『一応AR小隊の後を追いかけるとも。と言つても、なんでか知らないけどAR小隊の後を追いかけられるように鉄血がいるんだよねえ……』

『俺たちを警戒してか、それとも…… まあ、お前なら余裕だろう？』

『はい、頑張りたいと思います』

通信が切れ、再び歩き出す。俺の足音に少し遅れて、人形たちも歩き始めたようだ

「あの、歩きながらでいいですから、何処に向かっているかだけ教えてくださいさるかしら

？」

「まあそうだな、何かあった時のためにお前たちを連れていくのも悪くないな。AR

小隊の回収地点だ、運が良ければお前たちもへりに同乗させてもらえるかもな」

「え？　と言う事は帰れるの!？」

「さてな」

後ろが少し騒がしくなるも、俺は気にせずに歩くスピードをあげる。回収地点が予想よりも遠かったのもあるが、ここまで来てへりに同乗できないのは困る。

第19話

〈M4A1視点〉

あの女性と別れ、途中で鉄血の待ち伏せにあったものの、私達はようやく回収地点に到着した

「全員、大丈夫?」

「問題なし!」

「多少被弾したが問題ない」

「私も問題はないわ。でも…」

「ええ……」

AR—15の言葉に全員が頷く。障害物があつて被弾はしなかったものの、鉄血の待ち伏せのせいで多くの弾を使ってしまった。私のマガジンは後3つ。多少の違いはあるものの、みんな同じくらいの数だった。あの時女性に貰つておけばと思うものの、後悔しても状況は変わらない

「M4、ペルシカに回収を頼んでくれ。一応この近辺は安全なようだが、いつまた鉄血が私達を捕捉するかわからない。早めに脱出しよう」

「……そうですね、今通信をします」

M16姉さんの言葉に私は顔を上げる。反省は後でも出来る、今は情報を持ち帰らなければならぬ

『ペルシカさん、応答願います。ペルシカさん、応答願います。M4A1です』

『ようやく繋がった…… 心配したよM4』

通信を行うと、ペルシカさんはすぐに応答してくれた。前回の通信はエー^代ジエ^理ントに中断されてしまったので、かなり心配を掛けてしまったみたいだ。とても申し訳なく思う

『ごめんなさい、色々と立て込んで……』

『気にしなくていいわ、それでどうしたの?』

『回収地点に到着したので、ヘリを要請したいと思ひまして』

『わお、流石だね。ヘリの方は了解したよ、出来るだけ急がせるから。お疲れ様M4』

『a』

『いえ、まだ終わってませんので』

『相変わらず堅いなあ。まあ、そこがM4のいいところだけだ』

ペルシカさんとの通信を終了し、周囲の警戒をする。もうすぐでヘリも到着し、任務も終わると思っていたけど

「っ！高速で何かが近づいてきてるぞ！」

「こんな時に！」

最初に気が付いたのはM16姉さん、M16姉さんが指さした方向を見てみると、単騎でこちらに一直線に向かってくる影が

「エージェント!!」

「単騎で突っ込んでくるなんて。でも残念だったね！」

私とM16姉さん、AR-15で行動を制限させ、SOPMODの榴弾で仕留める
「もう壊れちゃったの？大したこと無いんだから。ゲームオーバー♪」

SOPMODの言う通り、爆炎が晴れるとそこには何も残っていなかった。 ……

なにも？

「SOPMOD、警戒を緩めるな！」

「えーでも、あの爆発逃げられるとは思えないよー？」

「何か絡繰りがあるはずよ、ともかく油断しないように、っ!？」

「くそっ…… やられた」

「……」

エージェントとはそんなに戦闘していないはずなのに、いつの間にか鉄血の部隊に囲まれていた。 まさか

「最初から分かっていた？」

「その通りですよ、M4A1」

鉄血の部隊の中から現れたのは、さつき吹き飛ばしたはずのエージ^代エント^理で

「なんで？ さつき私が榴弾で吹き飛ばしたはずじゃ？」

「分身ですよ、分身。まさかすべて倒されて、私が出ることになるとは思いもしませんでした」

SOPMODの言葉に律儀に答えるエージ^代エント^理。なにか、この状況を打開する策は……

「良いですね、その絶望の表情。少し邪魔が入りましたが、これで終わりです」

エージ^代エント^理が腕をあげると、動きのなかった鉄血の部隊が武器を構える

「ほー、じゃあ今のお前が本物か」

くM4A1視点 endく

少し回収物を回収していたら、AR小隊が敵に囲まれて絶体絶命の状況に陥っていた。すぐ助けに行こうとするグリフィンの部隊を説得し、会話を聞いていると有益な情報が。どうやら、分身ではなく本体らしい。まさか、こんなチャンスが訪れるとはグリフィンの部隊に合図をし、榴弾や榴弾を撃ち込ませる。混乱する鉄血の部隊に、俺の方を向くエージ^代エント^理。まったく、そんなことをせずに逃げればよかったも

のを。 加速の魔法を使い、エー^代ジ^理エントの顔を掴みその場を離れる。 鉄血の部隊にぶつかったりしたが、あつちが粉々になったので問題ない。 AR小隊や404から見えなくなったところで、エー^代ジ^理エント^人を地面にたたきつける

「くっ、やはり貴様か！」

スカートのの中から出てきた銃口付きサブアームは蹴り飛ばしておいたので、両手で俺の拘束を解こうとしていた

『おーい、40』

『アコナイト、何処に居るのさ。 どうせ加速の魔法でも使ったんだろうけど』

『そんなに離れていないさ。 それより朗報だ、目標を捕まえた』

『すぐ行く』

くUMP45 視点く

「記録はこれで終わりね」

「映画みたいだった…… もう寝てもいいよね？」

「良いわけないでしょ。 とつとと起きて働きなさい！」

何時ものようにイチャイチャし始める416とG11は放っておいて、今回の作戦記録を依頼主であるグリフィンとベルシカリアに送っておく

「45姉、終わった？」

「ええ、終わったわよ9」

これぐらい、私の性能から言えばすぐだ

「それにしても、危ない場面はあつたけど無事に終わったねー」

「ふん、アレで？」

9の言葉に反応したのは416で、まあ何時もの通りだ

「とは言え、あの二人組はな誰なのか謎ね」

〜UMP45視点 end〜

第20話

こんな鉄の塊が浮くというのは、何度体験しても慣れないものだ。ヘリの中、空を見ながらそう思う。車を見た時も思ったが、やはり不思議だ。鉄といえば装備などに使われるものだが、この世界ではそれだけでは無いらしい。確かに馬車とかにも使われてはいたが、それでも空や陸地をこんなに早く移動できると言うのはいいものだ。何度、遅いことが原因で文句を言われたか。そんな遠い昔のことを想いながら、遠いところに来たとは思った。

ここまでの技術の違いがあるとは。自分の力だけでの上がる自分の故郷を懐かしく思いながら、空の景色を楽しむ。結局、旅の目的であり帰るために必要なムーンゲートは今だ見つかっていない。まあ、別に構わんのだが。元の世界のことを懐かしくは思うものの、心配する者も……仲間が居たか。でもまあ、仲間は居るが、俺が信頼できる程度には強いし、強くしたつもりだ。元々、ふらふらと旅に出ていた俺だ、元の世界のペットも長期の留守には慣れてるはずだ。

そんな事を思いながら、隣に座る40を見る。もう一年近くも一緒に居るため、最初のようにはいやいで居るのを見ることはほぼなくなった。今はどちらかと言えば

大人しい。そう言えば、俺が仲間ベツトと長い期間一緒に居るのも珍しいというか40が初めてじゃないだろうか。今までというか、俺の世界やムーンゲートを潜った先の世界は、そこまで違いがなかったため問題なかったが、この世界はそうじゃない。この世界の事なら40のほうが良く知っているし、そういう意味では手放せない存在ではあるのだが。とは言え、40の場合はちゃんと育成が住んでいないのもあるのだが。40は俺の視線に気が付いたのか、笑いかけてきた。40を撫でてやりつつ、同乗者たちに目を向けた。

俺が拾ってきた取り残されていたグリフィン所属の戦術人形、StG44、スコピーオン、PPSh-41、MP40、G43、それとAR小隊などが同乗している。どちらもちらが気になるようだが、話しかけてこない。

同乗者たちに興味が失せ、俺はそのまま外を見るのに戻った

くUMP40視点く

アコナイトに撫でられつつ、あたいは周りを見る。やはり目が行くのは、M16A1彼女とその小隊。

国家安全局では一緒になり、任務に就いたこともあったけど、たぶん彼女は覚えていない。そもそも、あたいはアコナイトから貰った変身セットで姿を変えてるから覚えてなくても当然なんだけどね。それにしても、当時の鋭さは変わってないみたい。

彼女からあたいに向ける視線は、欺瞞に満ちている。他の隊員は、もう少し信じてくれているのに、だ。でも、小隊に一人はそう言った人物がいてもいいと思う。とは
言え、自分でも怪しいと思うしね。でも、これからも利用させてもらおうかな。ア
コナイトのために頑張つてね、AR^{エリート}小隊さん

U M P 4 0 視点 e n d

第21話

長いことヘリに乗っていたせいか体のあちこちが固まっているが、それをほぐしつつ地面に立つ。グリフィン&クルーガー社、その本社だ。本社だけあって、今まで見た何処の統治区よりも小綺麗で整備されている。上空から街を見ていたが、どの街より活気にあふれていた。さすが本社のお膝元と言ったところか。

周りを少し見回しただけでも武装した戦術人形やグリフィンの職員、整備士、ヘリなどの車両の誘導者など様々な人間がいる。

少し勘違いしそうになるが、この統治された土地から一步でも出れば、だだっ広い荒野が広がり、時には鉄血の人形やコーラップスに汚染された元人間が居るだけだ。たまに人がいても追い剥ぎや盗賊と変わらない。世界がそうなのだから仕方ないがね。

職員に誘導されながら、そんな事を考えていた

「ねえ、アコナイト」

40は俺の服の裾を引っ張り小さな声で俺を呼ぶ。なんだと思います40の方を向くと、少し困った顔をした40がいた

「なんだ？」

「いや、一応言っておくね？　ここで暴れたいと思わないでね？」
「ふっ」

流石40だ。　少しここで核を使ったり、魔法を使ったら面白そうだと思っていたが、まさか当てられるとは。　まあ、一年近く一緒に居るのだ、わかりもするか。　40の言葉に肯定も否定もせず、笑っておく。　すると40はジト目で俺を見るが、それもすぐに終わる。

案内していた職員が止まったのだ。　職員曰く社長室のようで、これから直ぐに会ってくれるそうだ。　一緒について来ていたAR小隊とグリフィン所属の人形達は待機して居るように言われていたので、俺と40で先に社長室に入る。　部屋の中に入ると社長であるベレゾウィッチ・クルーガーと、女性がいた。　女性の方はきつそうな感じではあるが、はてさて。　ベレゾウィッチ・クルーガーの前に立ち、自己紹介を始める
「俺はアコナイト。　トラウベ・アコナイトだ。　それで彼女だが、俺の連れだ」
「.....」

ふざけてはいないが真面目でもない自己紹介に、一気に部屋の雰囲気为重くなるが気にせず話を進める

「回りくどいのは嫌いだね、単刀直入に言おう、俺をここで雇ってほしい。　自慢じゃないが腕は立つ方だし、連れも戦える」

「なっ!？」

女性は予想外のことを言われて驚いたのか、声を出していたが目の前のベレゾウィッチ・クルーガーは黙ったままだ。何かを考えているのか、それとも断るつもりか。

そんな状況に口を出してきたのは、女性の方だった

「待つてほしい。確かにA R小隊を救ってくれたのには感謝しているが、それとこれとは話が……」

「グリフィン&クルーガー社は人、それも指揮官が不足しているんだろう？　なら、A R

小隊を助けたことも加味すれば、これほどいい人材もいないと思うが？」

「そ、それは確かにそうだが……」

へりに乗った時、A R小隊の隊長が無線をしていたので、今回の任務の報告だろうとその時は思っていたが、ここで生きるとは。それにはぐれの人形から俺の戦闘に関しても聞いていたはずだ、強い否定はできないはずだと踏んでいた。ようやくここで、ベレゾウィッチ・クルーガーが口を開いた

「さつき回りくどいのは嫌いだと言っていたな、私もだ。だから私も単刀直入に聞こう、何が目的だ？」

「旅も飽きてたんでね、これを機に就職口を探していた。そしたらアンタらのところのエリート人形を見かけたんでね」

「ふっ」

冗談ではなく前半部分は割と本気で言っていたのだが、冗談ととられたのか笑われてしまった

「良いだろう、一応仮採用としよう。今回、AR小隊だけでなくはぐれた人形まで回収してきたのだ、動機としては十分だろう。ただし、他の指揮官同様選抜試験は受けてもらう、構わんな？」

「ああ、それでいいとも」

互いに笑い合う、俺とベレゾウイチ・クルーガー、いや……社長。社長が電話をかけると、すぐに職員が来て俺と40を本部宿舎に案内する。選抜試験と言っても準備が必要なようで、その準備や試験のために数泊する必要があるらしい

「なーんでこんなんで上手くいったんだろう……」

俺たちが止まる部屋を案内されながら、40は不思議そうにつぶやいていた

第一章

第22話

くベレゾウイツチ・クルーガー視点く

あの男と男が連れと言った女性の選抜結果が届いた。実技、筆記共に文句なしの成績で、実技は過去最高の記録だった。連れの女性の方は実技だけでなく筆記の方も過去最高だが、本人は指揮官になるつもりはなく、男の秘書でいいとのことだった。実に勿体無いが、本人にやる気がない以上、無理強いはできない。

さて、ここまでなら文句なしで直ぐにでも激戦区に配属なのだが、問題が出て来たのだ。それは男の性格だ。

頭のネジが一本どころか数十本抜けていると言っても過言ではないくらいぶっ飛んでいるのだ。本人曰く、普通だろとの事なので、改善するとは思えない。一方、連れの女性は常識もあり良識もある。本当に勿体無い人材である。

このおかげで、私とヘリアンは頭を抱えていた

「どうするんですか、クルーガーさん」

「今までなら落としていた。だが」

机に置いてあった、AR小隊の報告書と男に保護されたグリフィンの部隊の報告書を見る。そこには信じられないような戦果が載っている。もちろん、映像でも確認している

「戦闘能力と言う所だけ見れば破格だ」

「確かにそうですが……ですが、性格が。何より、あの男は何を考えているのかわかりません。私は反対です」

「ヘリアン、君の意見もわかるが逆に考えてみる。あの男が我々と敵対したらどうなるかを」

「……」

考えているのか、段々と顔が青くなつていくヘリアン。それもそうだろう、彼女はその実技の試験を間近で見ているのだから

「私としても君の意見もわかるが、リスクを考えなければならぬ。性格に難があるかもしれないが、制御しきれば最強のカードにもなりえる」

「大丈夫でしょうか？」

「打てる手は打つつもりだ。本当に、連れの女性が指揮官になればなんの問題にもならなかったのだがな」

そう言って、資料を机に置き、内線を取る。もちろん彼等をここに呼ぶためだ

くベレゾウイツチ・クルーガー視点 endく

選抜試験の結果は、文句なしの合格だった。とは言え、40に言わせれば受かったことが奇跡らしい。40は俺の性格に理解があるから何の問題もないが、社長らのような一般人…… いや、一般人というのはおかしいが、一般人からしたら狂人と言っても過言ではないそうさ。 やれやれ、別に毒電波も受信していないし、発狂もしていない、人肉趣味でもないのにこの言われようだ。 この世界は俺からしたらとてもつまらないものである。

愚痴はここまでにして、似合わないグリフィンの制服に袖を通し、俺はへりまで案内されていた。 この本部での生活も終わりを告げ、ようやく勤務先に向かうのである。

その途中で、俺は痴女を見つけた

「なあ、40。俺はいろんなところでグリフィンの戦術人形を見てきたが、あんな恰好は一人もいなかった。だが俺が見てなかっただけで、実はグリフィンの戦術人形は「やめて!」それ以上は、本当にやめてあげて! あんな恰好彼女だけだから!」

40が大きな声を出したからか、痴女が気が付いてしまったようだ。 怪訝な顔をしながらこちらに近づいてくる

「なに? 私に何か用かしら?」

「いや? ち

「本部のシヨップには戦術人形が働いているんだなーって思ってたね!」

俺の言葉にかぶせるように大きな声で喋る40。　　とうかこいつ、人の鳩尾に肘鉄を入れてきやがった。　　しかも、現在進行形で睨んできてやがるし

「?　まあ、いいわ。　　別に私だつて好きで働いているわけじゃないわ。　　本当なら部隊に配属されるはずだったんだけど、都合でキャンセルになったのよ。　　I・O・Pに戻るのもあれだし、次の配属先が決まるまで暇つぶしに手伝ってるだけよ」

「へー、珍しい」

「……ふむ、なら今のお前はフリーということか」

「アコナイト?」

鉄血の人形はハイエンドのものを除けば、ほとんどバラバラに解体したのでデータは40の中に残っている。　　だが、グリフィンの戦術人形は敵対することがなかったので、解体したことがない。　　今回配属されるにあたって戦術人形も一緒に配属となつてはいるものの、それはあくまで本部からの貸与という形だ。　　ここで40以外の戦術人形を所持しておくのも、悪くはないと思う。　　それがこの目の前の痴女というだけで

「新人だが、ウチの基地に来るつもりはないか?」

「へえ、私をスカウトしたいってわけ?」

面白そうに目を細める戦術人形。こちらを値踏みしているのだろうか、まあいいだろう

「そういうことになるかな？」

「少し待つてなさい」

そういうや否や、シヨップに戻り、何やら店員と話していた。その隙にというわけでもないが、40が話しかけてくる

「どういうつもり？」

「何があるかわからないからな、戦力は多いほうがいい。俺としても、貸与ではなくお前以外に個人的に動かせる部隊が欲しかっただけだよ」

「本音は？」

「それも本音だが。グリフィンの戦術人形はばらしたことがなかっただろう？ お前のデータにも役立つかと思つてな」

「ふーん、そういう事ならいいや」

話を終わると同時に、痴女が戻ってくる

「待たせたかしら？」

「別に？ それで、返事を聞かせてもらおうか」

「丁度、手伝いにも飽きてたのよ。だから」

そう言って手を出してくる。俺も手を出し、握手を交わす

「私はF.A.L.。さて、あなたが私の指揮官のようね…… まあ、私を失望させないよ

う、しっかりやってくださいね」

「トラウベ・アコナイトだ」

第23話

選抜試験以外特に思い入れのないグリフィン本社を後にし、これからの職場である基地にやってきた俺と40。そして、遅れてヘリから降りてきたのは新しく俺個人の所となったFALという名の戦術人形だ。

それにしても誤算だったのが、FALの譲渡だ。シヨップの売り物ではなかったものの、I・O・Pからグリフィンが買ったことになっているFAL、俺の基地に所属にするなら色々な契約やらデータの書き換えやらをしなければならぬということ、別途で費用が掛かるのだ。そのおかげで出発は遅れるは、いらん出費をするなど踏んだり蹴ったりである。

とは言え、良い買い物をしたのも事実だ。I・O・Pのカタログによると、FALはAR小隊は別格だとしても高性能な部類に入るらしい。そもそも、金なら腐るほどあるのだ、散在しても何ら問題がない。

稼働したての基地ということもあり、荷物の搬入などで他の人間は忙しくしていた。俺が何食わぬ顔で歩いて行くと、全員が敬礼をしてくる。俺は歩きながら手をあげておく。一応、この基地では俺が一番偉いからな。と言つても、基地の運営などは

40やFALに任せるつもりだし、俺はしばらくしつけや農業で忙しくなるだろうからな。

基地の案内をする職員に司令室に向かうように指示する。中には知った人形と、知らない人形がいた。知らない人形の方は、多分本部から派遣された人形だな

「お、ようやく来たみたいだね、待ちくたびれたよ」

「こ、こらスコピオン！すみません指揮官」

「別に構わんさ、予定していた時刻よりも遅れたのは事実だしな」

部屋の中に入り、設置されていた椅子に座り全員を見回す。40とFALは俺の両脇に控えている

「さて、改めて俺がこの基地の指揮官であるトラウベ・アコナイトだ。よろしく頼む」

「では、知っていると思えますが改めて。ごきげんよう。StG44です。あ、握手は結構よ」

「Vz61スコピオンだよ、よろしくね。サソリと言っても、毒はないよ〜?」

「PPSh41です、指揮官。私……全然重たくないですよお!」

「MP40です、指揮官さま、私、精一杯頑張ります!」

「グーテンターク。私はワルサーGew43、今日も優雅な戦いをご覧くださいませわ」

と、ここまでは俺が拾った戦術人形たちだ。結局、俺が指揮官になるならその所

属にすれば面倒な手続きを踏まなくて済むという適当な理由だ。ちやんと職員が説明していたものの、俺は興味ないので後から40に聞いた意識された内容だ。そして、俺の拾った人形とは少し離れたところに居るのが今回グリフィンが派遣した戦術人形たちだ

「ぬ？ わしからか？ M1895じゃ、こんな年寄りをお好みとは、おぬしは相当な変わり者じゃな」

「P38です、これは、運命の出会いですよ！」

「M1911です、運命的な出会いですね、また指揮官様に会えるなんて！」

これで全員の自己紹介が終わったわけだ。

普通のものから初対面にもかかわらず過去に会ったことがあるような言い方まで。グリフィンいやI・O・P。かこの場合は、控えめに言ってメンタルモデルの書き換えをちゃんとやることをお勧めする。あと、FALの服のセンスとかな。

ともかく、自己紹介も終わり、これで顔合わせも済んだと来れば

「さて、基地に勤務し始めてまもないが、早速任務だ」

司令室に緊張が漂う。任務と聞いていろいろと感じるものがあるのだろうか、何にも問題ない

「自分たちの部屋の掃除だ」

「はい?」

誰が言ったかわからないが、困惑の声が上がる。そんなことには構わず、俺はもう一度任務を繰り返し返す

「自分たちの部屋の掃除だ。今日から基地を運営するにあたって、部屋割りすら決まってる。部屋は自分たちの好きに使ってもらって構わないが、何処の部屋を使うか報告だけはするように、では解散」

「あの、任務なんですよね?」

恐る恐る聞いてきたのはS t G 4 4だ。任務と聞いてそんな命令されれば誰だって困惑するだろう。とは言え、ちゃんと理由はある

「その通りだ。だが、ここは基地として稼働したばかりだ。すべてに手が回っているわけではない。だからお前たちに命令を出し出撃しても十全にバックアップ出来ないかも知れない、そんな状況なら今日は一日基地機能を充実させたほうが良いだろう?」

「なるほどなるほど、それならあたしはそっちのほうがいいかな」

スコープオンがそう言うと、他の人形たちも戸惑いながらも賛同の声をあげる

「まあ、そう言うわけだ。明日からはしっかりと働いてもらうとしよう、では解散だ」
ぞろぞろと部屋を出て行く、人形たち。残ったのは、俺と40、それとF A Lだけ

だ

「はあ、緩いわね」

FALは嫌味を言ってくるが、俺は気にせずに立ち上がり40に話しかける

「40、では後はいろいろ頼む」

「はい、任せておいて！」

第24話

「……一応聞きたいんだけど、ここはどこなのかしら？」

灯りがないので暗い階段を降りながら、FALが聞いてくる。声を聞いた感じだと、戸惑いと言うより頭痛が痛いと言う感じだった。そんな、今の現状が認められないFALに短く返す

「シエルターの中だ」

「シエルター？ 貴方は物事がわからないみたいだから言っただけで、シエルターと言うのは起源や機能などいろいろあるけど、戦争時の各種攻撃を避けて生き延びるために人間が一時的に利用する空間なの。ほかにも災害とかいろいろあるけど、主に地下に作られたりするのよ？ 確かに部屋を改造した例もあるみたいだけど、間違っても持ち運びが出来るような代物でもないし、司令室の床に設置してそのまま使えるものではないわ」

一応、俺はコイツの所有者のはずなのだが。とは言っても、40も俺に割と遠慮のない態度をしているのを思い出す。とは言え、40はペットなので問題はないが、コイツは違う。コイツも矯正してやろうかとも思うが、今日に関してはコイツはついで

だ。ともかく、俺に文句を言うFALに向かつて一言で言う

「慣れる」

「.....」

それつきり黙るFAL。俺に何を言っても無駄だと言うのがわかったのか、追求を諦めたようだ。そうして、ようやく階段を降り終え狭い部屋に着く。そう言えば、前回40を育成をしてから使ってなかつたか。40はちよこちよこ使っていたが。

四次元ポケットからハウスボードを出し、広さを変える。かなり広くはしたが、FALはハーブも何も育成準備をしていない事を考えると、この広さだけでも心配になる。死なれると蘇生魔法をしなければならぬ。俺もこの後予定があるので、ここに缶詰というわけにもいかない。ともかく、そこまで重くなくてPVの高い防具を探す。まあ、少し重いがいい装備が見つかったのでそれを出してFALの目の前に置く

「これを装備してもらおう」

「.....いま私は無性に自分を褒めてやりたいわ。こんな非現実的な状況にもかかわらず、オーバーヒートを起こして機能停止してないのだから」

「それなら40に感謝することだな」

「40? 貴方の連れと紹介された、今司令室でああなたの代わりに業務を行っている彼

女のこと？」

「その通りだ。彼女はUMP40、俺の仲間だ」

「奴隷ね、良い趣味してるわ」

吐き捨てるように言うFAL。しかめっ面をしつつも、渡した防具を装着する。

それを確認した俺は、FALに背を向けて歩き、階段がある方とは逆側まで歩きサンドバッグを出す。そして、とあるものを吊るす

「貴方！」

「騒ぐな」

後ろがやかましくなるが一喝し、その吊るしたものに声をかけつつを斬りつける

「おい、起きろ」

「っ!？」

「ご機嫌いかがかな」代理人「エージェント」

そう、あの時ARR小隊や今は俺の部隊に所属しているStG44達には破壊したと言った代理人エージェントだ。俺と40は二人なのをいいことに、秘密裏に回収していたのだ

「ニン、ゲン!!」

こちらを憎しみのこもった眼で見えてくるが、特に俺は取り合わず剣を振るう

「こんな、ことをして！タダで済むと、つう、ッ思っているのか!!」

「ふん、今の貴様は何も出来ないだろうエー^代ジエント^人。40に機能は剥奪させたし、情報も抜き取った後だ」

「なら、何故こんな事を」

「なに、役に立ってからおうと思つてな」

俺がそう言うと同時に、懐かしい風が吹き始める。ふむ、こちらでも吹き荒れるか

→FAL視点→

どこか独特な雰囲気を持つ男とは思つてたけど、ここまでとは思わなかった。無表情でエー^代ジエント^人に剣を振り下ろす、男……いや、指揮官を見てそう思つた。割と甘い男だと思つてたけど、ここにきて評価はガタ落ちだ。なんせ、指揮官のために働いてる彼女を奴隷^{ベツト}と言つたのだから。碌でもない男の元に来てしまった、心底後悔した

「んっ」

私がそんなことを思っていると、指揮官が振り下ろしている剣に変化が現れ始める。刀身が少し光始めた？ そう私が思つたとき、私は嫌な汗をかき始める。何か嫌なことが起こっている、でもなにか起こっているのかは私にはわからなかった。また指揮官が何も無い空間から飲み物を取り出し、それを飲み始める。そう、剣を取り出し

た時もそうだが、何もない空間からものを取り出すのだ。本当に、彼女の連れの女性はいらぬ改造をしてくれたものだ。何度気絶できたらと思つたことか。そうしてボーっとしていると、いつの間にかやら完全に武装したし指揮官が私に声をかける

「FAL、お前はそこから一步も動くな。動けば命の保証は出来んぞ」

そう言つて私の前から掻き消えた指揮官。いつの間にかやら辺りは火の海に包まれ、見たこともない生物が

「なんなのよ、コレは……」

よくわからない生物が生み出され、首を跳ね飛ばされる。首が飛び、炎を吐き、数体の生き物が消滅する。これじゃあまるで

「これが終末だ。さっきの剣にはエンチャントで終末が訪れるが付いていてな、それを発動させればさっきのようにドラゴンやらのモンスターが出る」

「貴方は一体」

「さて、ここからが本番だ」

そう言つて私を抱え上げ、指揮官がドラゴンと言つた生き物に向かつて銃を放つ。

放たれた銃弾は見事ドラゴンに命中し、一匹の注意を引く。今まで気が付かなかつたけど、エージェンツ^{代理人}食われてるじゃないの

「安心しているとこ悪いが、これからお前に戦つてもらうんだぞ？」

「はあ!? 正気なの!？」

「そのための防具だ。 もう一つおまけだ」

そう言つて、私に渡してきたのは銃弾

「こんな銃弾で何しろつていうのよ!？」

「なに、40も程度は違うが通つた道だ。 お前もじきに慣れる。 というか慣れろ、お

前が俺のものになつた以上そうでなくては困る」

そう言つて降ろされたのは、さっきの階段前だ。 振り返るともう指揮官はそこにお

らず

「ああもう! やつてやるわよ!？」

私はFAL^私を構え、戦闘を開始した

〈FAL視点 end〉

第25話

少し小洒落たバーの中に入り、人を探す。何時もならマスターが居るはずなのだが、今日は居ないようだ。とは言え、奥の方で気配がするので無人というわけではないらしい。

すぐに足音が聞こえ、見慣れたマスターが来る。このマスターは寡黙と言うより無口な人物だ。

だから、俺を何か言いたげに見ている。それなら喋った方が早いのでは無いだろうか、そんな事を思っていると、呆れたような目で見た後、俺の後ろを指差す。接客するような態度では無いと思いつつ、指さされた方向を見ると時間を書いた看板が。ふむ、どうやら開店時間かなり前に来てしまったようだ。とは言え、用があるのはこのバーでは無い

「すまない事をしたな。だが、用があるのはこの地下に居る人物達だ」

なら仕方ないと言うように、鍵のかかったドアを開けるマスター。俺はそれに礼を言い、今度は客として飲みに来る事を約束して階段を降りる。階段を降りて直ぐに探していた人物と目が合う

「久しぶりだな、デール」

「げ、トラウベ……」

あからさまに嫌そうな顔をしたのは、デールという男だ。デールは整備士で非合法な人形などのメンテナンスをしている。

「お得意先に対して随分な態度だな」

「自分で言うか普通。いや、お前は普通じゃ無いが。お得意様だろうが何だろうが、

僕はお前が嫌いだからな」

「クク、まあそうだろうな」

お得意様というのは、修理する際のパーツや、人形というより銃の装備品などを俺が卸しているのだ。後は、面倒な客とのお話とかな

「新しく引越しても、なんでお前は追ってこれるんだよ」

「ん？ シーアから聞いてないのか？」

「クツソー！そっちだったか！」

「デール、騒がしいけど、どうしたの？ あれ、トラウベさん？」

奥から顔を出したのはシーアという女性で、主に値段や接客などの交渉役をしているのだ。シーアは奥から出てくると、俺の目の前まで来て一札をする。……

が世界で関わった女性で、一番の常識人だなシーアは

「いらつしやいませ、トラウベさん。今回もパーツの卸ですか？」

「まあ、それもあるが二人に仕事の話があつてな」

そう言うときシアは表情を引き締め、デールは面倒そうな顔をする。正反対といふかなんというか、気にせずに話を続ける

「グリフィン&クルーガーに就職してな、そこに技師とオペレーターとして二人をスカウトしたいと思つてな」

「ほら！やっぱり面倒事だ！」

「デール！すみません、トラウベさん。ですが、それは……」

デールの方は予想通りだが、シアの表情を見るに、やはり難しい話らしい。とりあえず、今回卸すパーツと銃の装備を見せながら話を進める

「個人的には悪くないと思うが？ このままガラの悪い連中を相手にするより、一応名の売れてるPMCだ。俺の基地所属になるから、ある程度の自由を利かすつもりだ」

「ぐう…… それは確かにそうかもしれないが、ぐぬぬ……」

「有難いお話ではあるんですが、一応もう受けてしまった依頼もありますのですぐにと
いうわけには……」

「ん？ ああ、なるほど。真面目だな、シアは」

「え？」

不思議そうな顔をするシーアに苦笑する。まあ、俺の言い方も悪かったか

「別に今すぐというわけじゃない。二人で相談する時間も必要だろうし、依頼があるのは承知の上だ。だから二人の都合のいい時で、というわけだ。こちらとしても、優秀な人材を埋もれさせるには惜しいと思ってお誘いだ。それを理解してくれさえすればいいさ」

「あ、えつと…… はい」

褒められて戸惑っているのか、それとも慣れていないのか、シーアは顔をそらしていた。それで、デールの方を見ると珍しそうな顔で俺を見ていた

「なんだ」

「いや、お前がそんなこと言うとはな」

「実際、優秀だと思ってるぞ。お前は自分のことを天才だと言っているが、俺もそれは認めている。でなきや、お前に依頼などしない」

「…… 釈然としない」

「知らん」

「トラウベさん、今回の全部買わせていただきます。値段はこのぐらいなのですが、どうでしょうか？」

「問題ない」

流石に現金を生でというのはリスクしかないので、後日振り込んでもらっている。商談も終わり、立ち上がる

「トラウベさん、今回のお話前向きに考えさせてもらいます」
「シアア!?!」

「良い返事を期待してる。一応、基地までの順路などはこの紙に書いておいたが、もし無理そうだったら迎えにこよう。連絡は連れの方に頼む」

「わかりました」

店を後にすると、もう空は暗くなり始めていた

第26話

基地に帰れば、もう深夜と言ってもいい時間になってしまった。基地からバーまではかなり距離があるのだ。本来なら数日かかってもおかしくない距離なのだが、俺には加速の魔法があるのでこの時間で帰ってこれたのだ。当然今日の業務はとつくの昔に終了していた。結局40に任せきりになってしまったが、明日からはちゃんとやるでしょう、多分

「それで、FALもあたいたいみたいにバブルをひたすら倒させたの?」

「いや違う。エー^代ジ^理ェント^人の矯正も行わなければならなかったからな、防具を渡して終末に放り込んだだけだ。と言っても、俺やお前の他の仲間^{ベツト}にやらせた終末狩りよりかなりレベルを落としたがな」

司令室で俺を待っていた40と共にシエルターの階段を降りつつ、FALについて話す

「いや、アコナイトの世界の規模の話もされても…….　そもそも、バブルの時でさえあたいには辛かったんだけど…….」

確かに40の言う通り俺の世界、ノーステイリス基準にはしている為この世界で生ま

れた40達には厳しいかもしれない。それは分かるが

「知らん、慣れる」

「うん」

突き放すような言い方にはなるが、こうとしか言えない。40が俺の世界、ノーステイリス付いて来るのならなおさら。そんな話をしてしていると、ようやく階段も終わりようだった。だが、俺の思っていた光景とは少し違った

「ようやく来たようね」

「えっ、FAL!?!」

「ほー、よく生き残ったな」

普通の時より若干棘を感じるが、五体満足なFALが居た。俺の予想では、良ければ身体のだこかが欠損しているか、悪ければ消し炭になっっているかと思っていたが。

ヘルムで顔は見えないが、まだまだ悪態が付けるほど元気そうだ。だが、ドラゴンの返り血で真っ赤に染まっている為、40は心配そうに駆け寄って居た

「癩だけど、ええ、本当に癩だけど貴方のおかげでね」

「よくもまあ、弾丸だけで倒したものだな」

確かにダメージを与えられないことはないだろうが、かなり時間がかかるはずだ。

FALが倒したドラゴン二匹を調べてみると、何故か焼け焦げたような跡があった。

確かに特殊弾は持つてはいるが、FALに渡したのはただの弾丸だったはずだ

「何をしたんだ、FAL」

「何をしたんだも何も、普通に戦っただけよ、最初はね。で、この無限に出る弾を使っ

て倒したのよ。まあ、榴弾も使っただけよ」

「榴弾…… 確かスキルだったか？」

「でも、あきらかかこの爆発の跡見る限りだとスキルだけじゃ説明付かないけど……」

FALの無事を確認した40は、ドラゴンの方を調べていたようだ。やはり40も

俺とおんなじことを考えていたのか、FALに聞いていた

「私だつて驚いたわよ？ 指揮官から貰った弾を使い始めて、スキルを使ったら威力は

上がるわ、撃ちだす榴弾の数は増えるわ」

「威力と数…… となると、40の方も何らかの恩恵が？ ともかく、検証は後だ。

よくやった、FAL」

そう言つて投げ渡したのはポジションだ。しかも中身は祝福された白き癒し手工

リス。少しやりたいことも増えたが後に回し、奥に向かう。ドラゴンが邪魔だが、

何の問題もなく倒し、サンドバッグに吊るされたものを見る

「……………」

俺が目の前に居るのに、何の反応も示さなくなつてしまったエージェン^代ト^理だったも

の。　　とは言え、物理的にも精神的にも死ねない状況だ。

生きてはいるが、最早抜け

殻みたいなものだろう
「40、処理は任せる」

第27話

朝になり、ウチに所属する人形達が動き始める時間帯だ。ちなみに、整備員などの替えが効かない人間たちは、交代制ではあるが二十四時間動いている。結局、足りない労働力云々ではあるものの、代用できないところは人間が働くしかないのだ。

基地内の放送を使い、食堂に集まるように言っておいたので、俺や40、FALが食堂に着く頃には人形達は集まって居た

「全員いるようだな。では改めて、おはよう」

そんな挨拶から今日は始まり、これからの業務についての説明に移る

「基本的にこの基地は隣の地区S9地区に近いこともあり、合同で作戦をする事もあるだろうが基本的にはこの基地周りの安全の確保、その後に鉄血の支配地区を奪取に移る形になる。まだこの基地に所属する人形は少ない、だから当面の目標としては、基地周辺のパトロールをし、安全の確保及び、他の部隊から逸れた人形を保護し、戦力を増やしていきたいと思う。異論はあるか？」

人形達は特に意見はないのか、俺の話を静かに聞いて居た。と言うよりも、他に気になることがあるようだが、俺は無視して話を進める

「さて、パトロールだが今所属するお前たちを二部隊に分ける。二部隊に分ける理由だが、朝と夜で分ける為だ。部隊の内訳だが、第一部隊、StG44、MP40、Gew43、M1911、P38。第二部隊、FAL、スコープオン、PPSh41、M1895。一応、均等に振り分けたつもりではあるが、運用してみても問題があるようなら変えよう。後の細かいことは、彼女から資料を受け取って隊長と部隊員でミーティングを頼む。ああ、隊長だが第一部隊はStG44、第二部隊はFALだ。俺はからは以上だ」

「はいー」

俺の話が終わると同時に、手をあげたのはスコープオンだ。特に質問等は受け付けていないのだが、まあいいか

「なんだ、スコープオン」

「みんな気になってたと思うんだけど、その人誰？」

スコープオンが指さすのは、両隣に居る40やFALの事ではなく、俺から少し後ろに控えているメイド服を着た人物を指さしていた。ああ、まあ突っ込まれるか

「ただのメイドだ、気にしなくていい。知り合いが要らん人形のを寄こしてな、それだけだ。ああ、そう言えばもう一つ。その知り合いがな装備を卸してる奴でな、装備も質のいいものを送ってきた。使いたいのならちゃんと申請をすれば使っても構わ

ん」

「へー、指揮官って色んな人脈持つてるんだね！」

納得しているもの、納得していないものが半々というわけか。さてこのメイドだが、勿論エー^代ージェント^人だ。変装セットで変装させているため、バレることはない。

前のように反抗的ではなく、今は俺のために動く忠実な人形だ。まあ、処理は40に任せたので、どんな風にプログラムしたかは知らんが。

こうして、俺の指揮官としての生活が始まった

第28話

「それで、ドローンの方は？」

「何時もの通り問題ないし、FALと代理人の方もリンクは完了してるよ」

書類をこなしつつ、40に仕込みの方の調子を聞く。出来る40だ、バレないようにドローンを放つのもお手の物だ。

グリフィンから支給されたものもあるが、40の作ったものとは性能が違いすぎるので使っていない。まあ、部隊単位では持たせてはいるのだが。使うも使わにも本人たちに任せてある。

40の言葉にFALと代理人の方を向くと、二人とも頷いていた

「なら、今日の夜には動けるな。代理人、鉄屑の処理は任せる。FALは戦闘エリアに近づかせないように誘導してくれ」

「かしこまりました、ご主人様」

「わかったわ」

昼は流石に視界が通り過ぎるのもあり迂闊に動けないが、夜ならば昼より視界も通らない。人形でも夜戦の装備をしなければ、人間よりも少し見える程度だ。

朝はああ言ったが、別に待つ必要もない。新人も多いので確かに経験を積ませるというなら、戦闘をさせるのも手だが、別に作戦報告書を読ませ、経験読み込ませれば人形は勝手に強くなると言う利点もある。最初話を聞いた時は驚いたものだが、強くなるならそれでもいいんじゃないかと思う。まあ？ それで戦場で本当に役に立つのかはわからないが

「あたいは？」

「俺も戦闘出来ないのだからお前も待機だ」

40が聞いてくるも、俺はそう返す。割と私怨だったりする
「それにしても、グリフィンの飯はまずいな」

書類の処理をいったん辞め、代理人が淹れたコーヒーを飲む。ああ、これは泥水か何かか？

「あー、アコナイトの食事に慣れればねー……」

「なに、そんなに美味しいの？」

「まあ、アコナイトの調理は異次元だとしても、出てくる料理はおいしいね」

「異次元？」

「実際に見てみればわかるよ。アコナイト、お願いできる？」

「まあ、俺も何か食べたかったからな」

そう言つて四次元ポケットからバーベキューセットを取り出し、ついでにさつまいもとイチゴを取り出しバーベキューセットを使う。すると出来たのは、サラダとパフェだ。パフェを40に渡し、サラダはFALに渡す

「わーい！パフェだー！」

「は、え？ は？」

40は喜んで食べ始め、FALは受け取つたサラダを見て目を白黒させていた。さて、俺は何を食べるか…… 麺類、ミートスパゲティにするか。生麺を取り出すと、バーベキューセットを使いミートスパゲティを作る

「ああ、代理人も何か食べるか？」

「いえ、私は食事は必要ありませんので。 お気遣いいただきありがとうございます、ご

主人様」

「そうか」

俺もせっかくミートスパゲティを作つたのだから食べようとする

「いや、待ちなさい！」

「……なんだFAL」

「普通に考えたらおかしいでしょ!? 何でバーベキューセットでパフェが出来るのよ、ミートスパゲティも!というか、なんで私だけサラダなのよ!!」

「知らん、そう言うもんだ慣れる。それと知らないのならサラダ返せ」

「つゝゝゝ!! いらないうて言つてないでしょ!」

肩を怒らせながら、サラダを食べ始めるFAL。まったく、食べるなら最初から文句を言うな

「うわ、サラダでも実際美味しいわね……」

「あたいが異次元で言つた意味わかつたでしょ?」

「ええ、いろんな意味で。これじゃアレルギーとか期限切れの缶詰めとか食べれないわね…… それはそれとして、パフエ、少しもらえないかしら」

「あたいも最初は驚いたからね…… もう食べちゃたから無理」

「ふむ…… 食事の問題も何とかするか、正直言つてあんなもの食べたくないしな。」

それに、どちらにしろストックはあると言えどハーブの問題もあるしな」

そんなことを考えつつ、書類仕事を再開した

第29話

第一部隊からの報告書を受け取り、ようやく一息をつく。

結局、昼間は敵と遭遇することなく、そのまま仕事を終えた。何処かからか逸れた

人形が来ないか期待したものの、そんな事もなかった。

「それじゃあ第二部隊、パトロールをに向かうわ」

「昼間は何もなかったが、夜はわからん。それぞれ装備は夜のものに変えたな？」

「問題ないわ。こちらでも確認を行ったもの」

「なら、よろしく頼む」

「了解。それじゃあ行きましょう」

そう言つてFALが率いる第二部隊は、司令室を出て行く

「行ったね」

「ああ。代理人」

「ここに居ます、ご主人様」

代理人を呼ぶと、俺の後ろに控えて居た代理人が返事をする

「この周辺の鉄血の人形共を殲滅しろ。ただ、FAL達に見つからないようにな。

まあ、ドローンとのリンクを済ませているから問題ないと思うが」

「了解しました、それでは失礼します」

そう言って音もなく司令室を出て行く代理人。少しドラゴンに食わせたただけだが、どうやら他のステータスも上がっているようだ。さて、もう書類は終わってるし、仕事自体はもうない。俺は立ち上がる

「アコナイト?」

「お前も来るか?」

〈FAL視点〉

夜のパトロールが始まる。一応、代理人の方には巡回コースは言っているし、被らないとは思うけどドローンとリンクはしておく。それにしても、このドローンと位置情報をリンクするのは非常に楽ね。見えないところにある、遙か上空のドローンを横目に、歩く。40のおかげで処理能力が上がっているおかげか、夜でもよく見える。遠くでは、ウチの基地の受け持ちギリギリで鉄血と代理人が戦闘を開始したようだ。それにしても暇な任務ね。第二部隊の士気は高い。スコープオンやPPShも喜んでこなしている。装備も最新式のものだし、状況だけ見れば至れり尽くせりなものも頷ける。まあ、指揮官の本性を知っている私からすれば、少し可哀想な気もする

けど。M1895は気張らず自然体のようだ

「のうFAL」

「何かしら？」

しばらく歩いてみると、M1895が話しかけてきた

「指揮官はどういう人物なんじゃ？ わしは指揮官と会ったばかりでどういう人となりのかわからんのじゃ。 スコーピオンやPPSh—41にも聞いたのじゃが、いまいちわからなくてのう」

「指揮官のこと？」

M1895の聞きたいこと、それは指揮官の事らしい。 まあ、確かに配属されたば

かりじゃ気になるわよね。 とは言え

「ごめんなさいね、私もあまり詳しくないのよ」

「そうなのか？ いつも指揮官と一緒に居るからてつきり」

「ああー……」

今思い返してみれば、確かに指揮官と一緒に居るのは多かつた気がする。 寝るのまで一緒というわけじゃないけど、一緒に行動する時間は多かつた。 それは、人には言えない秘密を共有させられたというのもあるけど

「まあ確かにそうなんだけど、まだ出会って二日三日よ？ 指揮官のことを聞きたいん

だったら、UMP^彼40に聞いたら？」

「指揮官の連れと言ってた女性か？　そう言えば名前も紹介してもらってなかったの」

そう言えば確かにそうだ。UMP40、彼女はそう指揮官に呼ばれていたが、グリ

フィンに登録されてない。指揮官にべったりな様子を見れば特殊な人形なのだろう

けど……　不意に、指揮官が言った言葉を思い出す。　奴隷^{ベツト}。嫌な事を思い出し

た私は、内心舌打ちをする

「ま、私よりも詳しいと思うわよ？」

「では、連れの方に聞いてみるとするかの」

そんな話をしながら、敵と会うことのないパトロールを続ける

〈FAL視点　end〉

第30話

完全に油断して居た。パトロール終了の報告にはFALしか来ないのはわかって居たが、失念して居た。

シエルターを使うと外の時間の経過は早いのだ。いや、もちろん外の時間の経過が早いのはわかって居たが、思いのほか土いじりが楽しかったのだ。たしかに最初は自分で畑を作りハーブや野菜、果物等を育てては居たが、仲間が来てからはそちらに任せ居た。

久しぶりの土いじりは楽しく、40も興奮して居たからか、調子に乗ってしまった。俺が40と一緒にシエルターから出ると、FALがちょうど報告書を提出しに来た時間で、その時俺も40も泥だらけだったので怒られた。特に俺は、グリフィンの赤いコートは脱いで居たものの、その下の制服のまま土いじりをしていた為、ボロクソ文句を言われた。

そんな事もありながら、今日も基地を運営する。さて、基地が稼働し始めて一週間弱、人間の職員の士気は今だに高い。衣食住はしっかりしているし、仕事の時間がしっかり決まっているからだそうだ。他の基地では二十四時間ぶつ通しというところ

もあるようだからな。だが、問題は人形達の方だ。

代理人の基地周辺の鉄血殲滅は二日間で終わり、そこからは他の地区から流れてきた鉄血の人形と少し戦闘するだけだ。なので経験を積めるはずもなく、また暇すぎて土気が下がって居た。基地内にカジノとかの娯楽があるはずもなく、近くに街があるわけでもないので、基本的に基地にいるしかないのも暇なのに拍車を掛けていた。お調子者のスコピオンも暇だと騒ぎ始めている。

俺は書類で忙しく、そんなのに構っている暇はない。40やFAL、代理人はシエルター終末のドラゴンと戯れているためガス抜きをしているので問題ないが、他の人形達はそうも行かない。だが、そのも問題に関しては何もう手は打っている

「そろそろいいか」

「何がー?」

「偵察だ」

やる気のない40に返事をする。今日もドラゴンと戯れてきたため、疲れているのだ。とは言え、ハープやバブルなどでステータスを上げているため、FALや代理人よりも効率よく強くなっていた。この頃は書類をやっているか、終末か、土いじりだ。

まあ、俺も似たようなものだが。俺の返事に反応してか、机から体を起こしタバレットを持つ

「そろそろ攻め入るのもいいよね。鉄血の巡回ルートは把握してるし、規模も問題なし。とは言え」

そう言つて俺にタブレットを渡してくる。そこには俺達が良く見る鉄血兵ではなく、カカシの名を持つ鉄血人形が

「スケアクロウだったか？」

「そ、二、三日前からいきなり現れた鉄血のハイエンドモデル、その下級モデル。激戦区というわけでもないのに、なんで送られてきたんだらうね〜」

楽しそうに言う40に特に興味を示すことなく、答えを言う

「S9に配属されたAR小隊だらう、目的は」

「だらうね、でなきやこんなどころに派遣する意味ないし」

40も特に興味がなさそうに言う。

先日、S9地区に配属されたAR小隊。会社のシンボルともいえるハイエンドモデルを新人が指揮をする基地に配属した、それはもう賑わったものだ。40も少し気になったのか理由を調べてみれば、その新人少し特殊な能力があるらしい。なんでも、ドローンを通さなくても地図を見れば敵がどこに潜伏しているのかわかるらしい。その能力とハイエンドモデルを組み合わせれば、本社の思惑が透けて見える。そして後を追うように現れた鉄血のハイエンドモデル、偶然と片付けるには出来すぎている

「まあ、そのS9の指揮官からも、スケアクロウに対抗するために合同で出撃しないかというのも来ていたからな、ちようどいいと言えばちようどいい」

「それじゃあ」

「ああ、全員を集める」

第31話

「は、始めまして、指揮官のエルピーダ・フォスです、今回はありがとうございます！」
「トラウベ・アコナイト、今回はよろしくお願ひします」

一応成人男性ということだったが、かなり背が小さい。それに強そうにも見えんな。それが俺の初対面の彼に対する評価だった。

とは言えそれを態度には出さず、40のカンペ通りの挨拶を返す。俺が普通に喋ると失礼なことしか言わないから、だそうだ。

彼の隣には、AR小隊の隊長であるM4A1が控えて居た。自分の指揮官の手前勝手に話すことはしないが、何か言いたそうにこちらを見て居た

「早速ですが、今回の作戦についてです。こちら数日間、ドローンで敵の動きを監視したデータです」

そう言つて、予め40から受け取ったタブレットで動画や画像を指揮官やM4A1に見せる。とは言つてもグリフィンから支給されたドローンの物なので、40が作ったものよりは性能が落ちる。こちらはこちらで、40のドローンのデータがあるので、それで臨機応変に対応するだけだ

「短期間で、ここまでのデータを……」

「何分時間がなかったもので…… ハイエンドモデルの姿も確認されたという噂もありましたし」

「いえいえ、そんな事は！ 僕の能力だけだと不安ですし、こういうデータはとても助かります！」

「そう言つて頂けると、幸いです」

自分の能力だけでは不安ということだったが、40が得た情報によれば模擬戦の試験結果は満点だったはずだ。なのにこの自信のなさ

「それで全体指揮ですが、本当に僕でよろしいんですか？ M4達AR小隊のみんなか

ら聞きました、貴方ともう一人の方が実戦経験もありますし、僕よりも……」

「あくまで実戦経験があるだけです。貴方の能力の事は風の噂で聞きましたが、貴方の

方が指揮をするのに向いているでしょう。何か予想外の事があれば、私が動けばいい

だけです」

「……」

「指揮官さま、そろそろ時間ですよ？」

「ああ、うん、わかった……」

「指揮官さん自身を持つてください、私や姉さんたちも最善を尽くしますから」

さつき紹介された後方幕僚カーリーナと呼ばれ、待たせていた人形たちの前に立ち今回の作戦の説明をし始める。ウチの基地には後方幕僚という役職はないが、まあ40がそれにあたるのか。

今回の作戦は、簡単に言えばこの作戦範囲近辺の鉄血の殲滅だ。ただ、鉄血のハイエンドモデルであるスケアクロウが目撃されていることから、作戦には細心の注意を払うことになっている。俺の貸し出した部隊、何時もの昼と夜で分けている第一第二部隊、それと彼の保有しているAR小隊とは別の部隊で、敵の殲滅ということになっている。AR小隊は対鉄血のハイエンドモデルにという感じだ。面白みも何もないが、堅実な立ち回りだ。それぞれの部隊が作戦位置につき、作戦開始となった

第32話

〔StG44視点〕

私たちの指揮官ではなく、S9の指揮官であるエルピーダ指揮官の指揮下に入り、私達は作戦を開始しました。噂では聞いて居ましたが、エルピーダ指揮官の能力は本物だったようです。敵の正確な規模わからないにしても、敵の種類がわかる為対策を立てやすいです。私達の指揮官はドローンでの先行偵察をもとに作戦などを立てるため、戦闘開始まで少し時間を要しますが、エルピーダ指揮官は事前に対策を立てながら戦闘にはいれるので戦いやすいですね。別に、私たちの指揮官のやり方が間違っているとも、行動し辛いと思っっているわけではないですけど。噂だとバックアップがあるからと無理に突っ込ませる指揮官もいるようですし……ともかく、作戦は順調。順調すぎて怖いぐらいですが、あまり不安に思うことでもありませんわね。もつともウチの基地に所属してる、指揮官に拾われた私たちから言わせると、指揮官本人が出た方が速いのでは？なんてみんな言っていますけど……

『StG44さん、そこにはRipperとVespidの混成部隊が居ますので気をつけてください』

『了解です』

ただ思うのは、通信するときもつと自信を持って指揮をしてもらいたい事でしょうか。 実戦経験があまりないということでしたが……

気持ち切り替えてつ、ドローンで敵の数を偵察する。 このぐらいの敵なら、問題なさそうですわね。

一つ気になるのが、この作戦が始まってから私達の指揮官が指揮をしないのが少し気になり……

いえ、普段から余り指揮をして居ないような気がしますね。 確かに指揮官が指揮をする時もありますが、ほとんど連れの女性が指揮をしていたようなMP40、わたくしが榴弾を発射すると同時に、回避しつつ敵に接近を。 Gew4

3はMP40を狙っている敵を優先的に排除を。 M1911とP38は無理をしない程度に近づいて、近場の敵の排除を』

指示を出しつつ、無駄ない動きを意識する。 指揮官が私たちより強いと言っても、戦闘はわたくしたち戦術人形の仕事です

「叩きのめして差し上げるわ」

仲間の頼もしい声を聞きつつ、わたくしは戦闘を開始する

StG44視点 end

FAI視点

「これで最後ね」

最後の V e s p i d の頭を撃ち抜き、素早く周りの確認をする。動く残骸や気配は、なし。構えた銃を降ろし、一息つく。少し連戦になってしまったけど、私からしたらようやくウオーミングアップが終わったところ、と言った所かしら。とは言え、部隊員はそうではないらしく、少し疲れた様子だった

「うう、F A L さんはまだまだ余裕そうですね……」

「まあ、一応部隊長だしね。各員、残弾チェック」

特に疲れていそうな P P S h - 4 1 が、疲れたように私に話しかけてくる。スコーパーと一緒に敵のターゲットをとる彼女だ、疲れるのも当然といたところかしら。

その割には、同じ前衛のスコーパーピオンが元気なのが気になるけど。私はあまり弾を使わず、P P S h - 4 1 は撃つというよりも敵の攻撃を引き付けるので、弾の消費は激しくない。M 1 8 9 5 はそこそこなのだが、問題は

「スコーパーピオン……」

「あはははは……ごめんさい」

スコーパーピオンはほぼ弾を使いきっていた。おまけに焼夷手榴弾も。一応、戦闘が終わることに言っていたのだが、効き目はなかったらしい。今も笑って誤魔化そうとしたが、素直に謝ってくる。仕方がないので、司令部に無線をかける

『こちら第二部隊』

『こちら司令部』

『あら指揮官じゃない、ちようどよかつたわ。だからそつちに戻りたいのだけど?』

スコープオンが弾薬使い切つてしまつ

『問題ないぞ、お前もわかっていると思うが』

『まあ、ね。ならそちらに戻らせてもらうわ』

無線を切り、司令部に向かって歩き出す。

〈F A L 視点 end〉

第33話

FALが司令部に弾薬補充に来ると同時に、戦局が動いたようだ。エルピーダ指揮官によると、敵の司令部とされて居た所からスケアクロウがようやく動き出したようだった。どうも近くに居るStG44の部隊の方に向かっていているようだ。StG44に指示を出しドローンで偵察をさせると、スケアクロウを確認出来た。とはいえ、確認出来ると同時にこちらのドローンは破壊されてしまった。エルピーダ指揮官の指示でStG44の部隊を撤退させつつ、待機して居たAR小隊を向かわせる「それで、どういう状況かしら？」

もともとそんなに弾薬を使っていなかった為か、弾薬を補充し終えたFALが司令部に来たようだ。俺は地図に視線を向けつつ、FALの質問に答える

「ターゲットである鉄血のハイエンドモデルを発見、うちの第一部隊で引きつけつつ、AR小隊を出撃させ、撃破させるつもりだ」

「あら、それなら私たちはもう良いのかしら？」

「いや？ ハイエンドを撃破し終われば残敵の殲滅だ。ですよね、エルピーダ指揮官」

「え？ ああ、はい、そうなります」

敵のハイエンドモデルが出たということで、エルピーダ指揮官は人形たちが心配なように顔が青くなっていた。エルピーダ指揮官から視線を外し、FALに向き直る

「そう言うわけだ。少し休憩したら、残敵の殲滅に向かってくれ」

「了解よ」

少し司令部が騒がしくなる。AR小隊と敵ハイエンドモデルが会敵したようだが「敵ハイエンドモデルの反応が消えた？」

そのエルピーダ指揮官の言葉と共に、司令部に通信が入る

『こちらM4、司令部応答願います』

『こちら司令部、M4さん敵のハイエンドモデルは？』

『それが、突然消えてしまって……』

その通信を聞くや否や、騒がしくなる司令部。こちらを見るエルピーダ指揮官。

俺は第一部隊に通信を飛ばし、予備のドローンを飛ばすように言う。結果は空振りだった。改めてエルピーダ指揮官の方を向き、首を振る

『……M4さんたちは残敵の殲滅を。トラウベさんの部隊は司令部で弾薬などの補給を』

そう言つて通信を切るエルピーダ指揮官。その顔は疲れ切っていた

「こんな事、あるんでしょうか？」

「撤退というには不自然ですからね。ともかく、切り替えていきましょう。残敵の

殲滅が終われば結果もわかるでしょうし」

「そう、ですね」

俺との会話で切り替えたのか、表情は疲れているものの前を向いていた。結局、残敵の殲滅は終わったものの敵のハイエンドモデルを発見することはできなかった

第34話

結局、鉄血のハイエンドモデルであるスケアクロウは見つからなかった。エルピーダ指揮官のAR小隊とウチの第二部隊で敵の殲滅を行なったものの、痕跡すら見当たらなかった。不完全燃焼なものの、スコープオンを筆頭に、騒いでいた奴らは、一応の沈静化に成功した。ハイエンドモデルは倒してないものの、一応鉄血の支配地域を奪取したと言うことで、その地区の調査等細々とした仕事はあるものの、一応今回の作戦は成功に終わった。とは言え書類は山の様になり、40に手伝って貰いながらようやく半分といったところか。本当なら終わっていたものの、当たり前だが日を追うごとに報告書などの書類が提出され、書類は増えていっているので当初の予定よりかなりずれ込んでいる。そんな忙しい中、通信が入る

『指揮官』

基地内通信のようで、正門の警備からだった。内容を聞いてみると、不審なトラックが基地内に入ろうとしているようだった。運転手は食料を運んできたと言えれば解ると言っているのです通信をしてきたようだ。40を見れば、無言でこちらを見ていた。だが仕方ないんだ、向こうが指揮官を呼んでいるのだから

「……はあ、もういいよ。行ってくればいいじゃん」

呆れたように溜息をつく40に苦笑しながら、席を立つ。

「すまんな40、助かる」

そう言つて40の頭を撫で、コートを羽織りながら外に出て行く。食事や睡眠以外この頃司令室を出なかつたからか、職員が驚いたようにこちらを見るが、すぐに切り替え敬礼してくる。俺はそれに軽く手を上げ返す。そんな事を何度か繰り返し、正門に辿り着くと困つたように警備の人間が走ってくる

「すみません、指揮官」

「構わん。明らかに怪しい場合だつたら追い返しても構わんが、今回のように堂々としてるなら連絡してもらつて構わん。もともと、知り合いが勝手に送りつけてきたものだしな」

「お知り合いが、ですか？ 凄いですね……」

「こちらからも伝達出来れば良かったが、何分急でな。今回の物が良ければ定期的に送つてもらえるよう契約するつもりだ。次回からは、見分けやすいようにもなるだろうよ」

そんな話をしながら、トラックの運転手に話しかけ俺へのメッセージと、荷台の食料を見せてもらう。やはり質のいいもので、これからの取引に向け詳しい話をするため

に司令室に通す

「さて、ご苦労だったなスケアクロウいやカカシ」

「いえ、これくらいはなんてことありません」

そう言いながら頭を下げ変装を解いて姿を現したのは、作戦中に忽然と姿を消したスケアクロウだった。まあ簡単な話、別行動していた40と代理人で無力化して代理人と同じ様に俺の戦力にしたというわけだ

「まあ、そんな気はしていたけど」

呆れたように俺を見るのはFALだ。彼女も俺を解ってきたらしく、作戦中もあまり突っ込んだ質問をしてこなかった。鉄血の殲滅作戦の時、スケアクロウが消えたのは俺の戦力にするためであり、今回のこのトラックや食料はすべて俺が用意したものだ。だったというわけだ

第一章 幕間

第35話

「???

とある基地、その基地内でも人氣がなく、滅多に人が来ないところで一体の戦術人形がどこかと通信をしていた。周囲を常に伺っているところを見ると、バレたらまずい内容のようだ

「報告書はこの間提出した通りです。ええ、ええ、はい。今のところは特に怪しいところは」

だ 丁寧な口調で報告する所から、戦術人形が通信をしている相手は相当偉い人物のよう

「とは言え、貴女の言った通り独特の雰囲気と言いますか…… はい、その通りです。

監視の方は続けますが、わたし一人だけでは…… 監視員を増やすんですか？

とは言え、監視対象に取り込まれる可能性も……」

段々と表情が険しくなっていく、戦術人形。通信している人物は無理な事を言っているのか、それとも考えに否定的なのか。ともかく、通信は続いていた

「もちろん、グリフィンにとって不利益になるようなら、はい。とは言え、彼の周りには連れの女性やこの間提出した報告書にも記載したようにメイドの人形も。はい、それは最終手段という事で」

通信も終わり際、戦術人形は思い出したように言う

「それと、別段報告するようなことでもないと思つたのですが、一つだけ。この頃食事の質と言いますか、何と言いますか……。ともかく、基地の食事が変わりました」

通信を切り、壁に体を預けた戦術人形はため息をつく

「はあ……。取り越し苦労で終わつてないんだけど。実際、環境的に考えれば、この基地は恵まれている。他の基地の悪い噂なんてよく聞くと、勿論そんな基地ばかりじゃないのもわかつているけど」

誰に言い訳するでもなく、淡々としゃべる戦術人形

「実際、警戒を解き始める同僚や完全に警戒を解いて指揮官を信じている同僚もいるとこののに……。」

そう言つて空を見上げる戦術人形の表情は晴れず、小言を言うごとに表情は暗くなつていく

「監視員が増えるのは嬉しいけど、取り込まれる危険性を解つてない……。結局、最後に信じられるのは自分だけ」

そう言い残し、背を預けていた壁から離れ日向に向かって歩き出す戦術人形。その様子はるか頭上からの監視があるとも知らずに

???
end

～UMP45視点～

軽いメンテナンスを終え、他の仲間のメンテナンスを待っている間にシーアと呼ばれたのでシーアを探し歩いていた。とは言ってもそんなに広くない室内だ、探し人はすぐに見つかった

「シーア」

「45さん、もう終わったのですね」

「あら、自分の相棒のこと信じてないの?」

「相変わらずですね」

私がかからかうように言うと、ジト目で見てくるシーア。ちよつとからかったけなのにそんな目をするなんて、本当に真面目なんだから。顔の前で両手を合わせて謝ると、仕方ないと言った感じで許してくれる。ちようど書類の整理をしていたのか、机を挟んで、対面の椅子に座るように促された

「それで、話って何?」

「これからなんです、メンテナンスや整備などが出来なくなるかもしれない、とお伝え

しておこうと思ひまして」

座りながらそう切り出すと、予想外の答えが返つてきた。確かに室内の荷物が少なくなつてゐると思つていたけど、そんな答えが返つてくるとはちよつと予想してゐなかつた。非公式な部隊であるが故、こういう相手は貴重なのだが……とは言葉、出来ないとはつきり言われたわけではなく、それを聞いてみることにした

「それはまた急ね？　でも出来ないわけじゃないんでしょ？」

「45さんたちが都合が悪くなければ、ですけど」

「ますますどういふこと？」

「グリフィンの新人の指揮官がいるのですが、その人にその基地で働かないかと言われまして、それを受けようと思つてるんです」

場所を移動するためしばらくメンテナンスや修理はできないといわれたことはあつたものの、まさかこんなことになるとは。それが私の感想だつた。一応、グリフィンには所属してゐるし、他の基地の一室を間借りしたことはあるが、長く滞在するのは私たちの部隊としてはあり得ないことだつた。部隊柄故に。シアアの申し訳なさそうな顔をしているが、これは……

「それは、また……」

「45さんたちの部隊がどういふ部隊か、それは私も知っています。

部隊柄故、積極的

にかかわりたくないっていうのも。 掛け合ってみれば出張という形も取れるかもしれない、です」

「U N P 4 5 視点 e n d」

第二章

第36話

ようやく本部に提出する報告書関係が終わり、俺の業務も前のように少し書類をこなすだけで良くなった。とは言え、エルピーダ指揮官と合同で奪取した地区は俺の部隊がパトロールする事で決着がついた。俺の方が保有している人形が多いのと、実戦経験が豊富だからだそう。指揮という視点で見れば、そんなに経験はないのだが。

そんな訳で合同作戦前よりは仕事が増えたものの、ようやく通常の業務に戻った訳だ。それで、グリフィンの制服から着替えてるけど、どこかに行くの?」

「ああ、シーアとデールを迎えにな」

業務が通常に戻ったということは暇な時間が出来ると言うわけで、それならとちようど連絡があったシーアとデールを迎えに行こうという訳だ。そんなことを知らない40は、俺が着替えているの見て不思議そうに聞いてくるのでそう答えると、頬を膨らます40

「あたいは?」

「責任者が二人で抜け出すわけにも行かんだろう」

「むー」

40もわかっているのかそれ以上文句は言つてこなかったが、まだ俺をジト目で見て
いる。 そんな40の姿に苦笑しながら、頭を一撫でして扉から出る

「また今度な。 FAL、40の補佐を頼む」

そう言つて、司令室を後にした

（FAL視点）

返事をする前に指揮官は扉から出て行つてしまった。 40はと言えば、むくれなが
らも仕事をこなしていた。 40のことを頼むと言われても、私の補佐なんか必要ない
くらい完璧に仕事をこなすし、いなくても変わらないと思うのだけど。 とは言え、や
ることもないし、パトロールまでは時間がある

「そう言えば貴女とこうやつて二人になるは初めてよね」

「んー？ んー、あー、言われてみればそうかもねー。 大体あたいはアコナイトと一緒
に居るし」

特に気にしてはいなかったけど、こうやつて二人になったのは初めてだ。 私がそう
言うと40は使つていたペンを唇に当て視線を天井に向け思い出していた。 そして
帰つてきた答えは、指揮官だった。 何で彼女は奴隷ベツトと指揮官に呼ばれて
いるのに、こんなに尽くせるのかしら？ そんな嫌な思考が脳裏によぎり、頭を振つて

考えを追い出す

「ねえ、FAL」

「何かしら、4、じゆう？」

40に呼ばれ40の方を向くと、にこにこ笑っている40がいた。でもその笑顔は、何時もの無邪気なものではなくどこか冷たいものだった。それに私は戸惑ってしまつて

「アコナイトのこと、どう思ってるの？ たまにさ、FALがアコナイトを見る目がとってもあたいた的に嫌な目をしてるんだよね？」

「そ、れは……」

見抜かれていた。いや、ばれていないと思つていたつわけじゃないけど、それは指揮官に対してだ。指揮官は別にそれでもいいと思つているみたいだけど、彼女は

「あたいはねFAL、アコナイトに救われたの。本当なら頭を撃ち抜かれて死んでいただけ、アコナイトのおかげでこうやって普通に生活できる。だからアコナイトに一生ついて行くって決めた。あたいはアコナイトの物だからどう使われようとも構わない。貴女もアコナイトに買われたんだから、同じようなものでしょ？」

「それで、それでペットと、奴隷と言われてもいいわけ?!」

ずっと、ずっと40に言いたかったことを言う。形はどうあれ、その言葉を聞いた

瞬間私から指揮官への評価は一気に落ち込んだ。もちろん他の基地ではそのような扱いを受けたという報告も、ごく一部ではあるものの聞いたことがある。そのように使うならまだしも、今のこの状況は真逆だ。本当に、指揮官が分からなくなる。そのイライラが40に出てしまった。でもとうの40はと言うと、目をぱちくりさせた後、ああ、そう言う事ねと言いたげな顔でこちらを見ていた。というか、その哀れんだ目はやめなさい

「あー、うん、納得した。まあ、別にあたいはそれでもいいんだけど……というか、あたいたいも最初は勘違いしたしね？」

「勘違い？ まさかそんなわけないでしょ」

「アコナイトの言うペットってね、仲間って意味なんだよ……」
「はあ？」

40や指揮官はたまに意味の分からないことを言い始めることがあるが、それもこの一環だろうか？ 仲間をペットと呼ぶなんて。どんなトチ狂った発想になれば…… 割とトチ狂ってたわね、指揮官

「まず、あたいた達が産まれたこの世界と、価値観が全く違う世界だから」

そう言つて、指揮官がいた世界ノースティリスについて話し始める40。聞いて行けば聞いて行くほどふざけるなど言いたくなるような世界ではあるものの、今までの指

揮官の奇行などを考えれば十分納得できるものだった

「そんなバカなことあるの……」

「実際にあるからね……」

指揮官の話をしていたら私と40は疲れてしまった。それほど指揮官が非常識ということがよくわかった

「まあ、そういうわけだから、二人で頑張って補佐していこうね」
「ええ、分かったわ……」

改めて40と握手をした。これから苦勞しそうね

〈FAL視点 end〉

第37話

シーアとデールを迎えに行き帰って来ると、何故かFALの態度が軟化していた。

40に理由を聞けば、やはり俺のペット発言をFALが勘違いして居たらしい。別に俺は勘違いしたまでも良かったのだが、40はそうではなかったようである。別には正したらしい。それで俺が叱られるのが意味がわからないが。ともかくFALの態度が軟化しても、俺のやることは変わらない。

とりあえずデールには専用の部屋を用意し閉じ込めておいたので問題なからう。

シーアの方は、基地内の内情をよくわかっている40に任せただけで完璧だ。迎えに行つた次の日、俺の基地所属の戦術人形にシーアとデールを紹介し数日が経ち、二人も慣れたところで、本部から人形が派遣された。突然のことに驚いていた俺だったが、

40とシーア、FALは知って居たらしく、40からお叱りを頂いた

「噂の指揮官様ですね！はじめまして！ステンMK—IIです！」

「M2HBよ。ねえ、指揮官！はやく敵に銃弾の雨を浴びせたいわ。もう、待ちきれない！」

SMGにMGか。今度本部にはRFを配属するように言おう。この二人はいい

のだ、この二人は。見たところ、な。だが問題はもう一人だ

「あなたが指揮官ですか？ 9A91と言います。私の名前ちゃんと覚えてくれますか？」

俺は思わずに頭を抱えた。また色物だ、FALのような色物が増えたと。後ろから、特にFALが立ってるほうからの視線が鋭くなったような気がするが受け流し、とりあえず前を見る

「前の作戦の功績をたたえてということだったが、ともかく、三人の配属は嬉しく思う。とは言え、今日は疲れただろうからこのまま休みで構わん。この基地所属の人形たちと交流を深めるもよし、明日からに備えて英気を養うもよし。では、このまま解散だ。ああ、9A91君は残ってくれ」

俺に敬礼をして部屋を出て行く二体の戦術人形を見送りつつ、改めて9A91に向き直る。本人は何故残されたから分らないのか、首を傾げて居た

「俺ははまどろっこしいのが嫌いだ、だから単刀直入に言う。9A91、お前は自分の格好に疑問は抱かないのか？」

「疑問、ですか？ どこか、可笑しいでしょうか？」

そう言つて、自分の体を見る9A91。その場で一回転するが、分からないらしく俺を見ながら首を傾げている。人形ではあるものの、あまり女性にはそう言うことを

言ってはいけないと40から言われているが言うしかないだろう

「下着が丸見えなんだが？」

「あーもう！そう言うことは言ったらダメって言ったでしょ！」

40からお叱りの言葉が飛んでくるが、右から左に聞き流し尚も言葉を続ける

「FAL^カのようにファッションと言うのならもう言わないが、そうでないのならズボンを着用するとかスカートを着用することをお勧めする」

「ちよつと、貴方よりましでしょ!? 貴方のようにずっと制服じゃないし、制服よりはゼンスがあるわ！」

「俺もずっと制服じゃないが…… まあいい、それでどうなんだ9A91」

左右から抗議されているものの、別段問題ないので9A91にそう問う。すると9A91はもう一度自分の姿を見直し、控えめに質問してきた

「えつと、この格好はおかしいのでしょうか？ 私は作られたからずっとこの姿で……」

やっぱI.O.P.は可笑しいらしい。少し会社の未来に憂いつつ、面倒になったのでFALと40に投げることにした

「うん、そうだな。40、FALどうにかしてくれ」

そう言って書類に取り掛かった俺に、二人はため息をつきつつ9A91と共に司令室

を後にした

「実際、シアから見てもどう思うあの服装」

「えっと、流石に私は……」

「だよな」

第38話

突然の人員増加から数週間、新人達は研修を終えパトロールに参加させていた。とは言つても、人数が増えたことにより休日のローテーション時や、ゲールが突然のメンテナンスすると人形を連れて行き突発的に人形の数が足りないところに所に入れるだけだが。

理由は簡単で、練度の差だ。やはり作戦報告書を読ましても、人形の性能、ランク等で習熟度にムラがあるようだ。M2HBに関しては元々ウチの基地にMGを扱う人形が居なかつたから仕方なくはあるのだが、ステンMK-IIIはまだパトロールなどで少しづつ実戦には慣れさせた方がいいかもしれない。その点服装に関しては難があるものの9A91は、今は人形の数が足りないため新たに部隊を組むことはできないが、部隊さえ作ればその部隊でパトロールに正式に採用でもいいかもしれない。

ちなみに9A91、FALはともかく40の説得のいかいもあり、自分の服装の可笑しさに気がついたらしい。とは言つても、彼女の制服はアレしかなないので今はあのままだ。とは言え流石グリフィンと言うかI.O.P.か、抗議をしたら何故かカタログを寄越してきた。中身はスキンというもので、どうもI.O.P.、人形の地位向上の

為に制服とは別に写真集などを撮影するために撮影用の服をスキンという形で別売りにしているらしい。ここで金をとるかとも思ったが、そんな意見を飲み込みそのカタログを9A91に見せ、スキンを取り寄せている為、あの姿も近いうちになくなるだろう。ついでと言っては何だがカタログにはFALのスキンもあつた為FALも思つたのだが、本人が却下したのでそのままだ。

さて、話は大分脱線したが、ここ数日パトロールしている範囲内は問題ないのだが、パトロール外、つまり鉄血の支配地域での鉄血の動きがまた活発になり始めたのだ。ジワジワ支配地域を奪取して居たとは言え、ここ最近の鉄血の動きは統率され撃破し辛くなっている。という事は、だ、どこかにハイエンドモデルが潜んでいるという事になる。とは言つても、何処に潜んでいるかはもう調べ上げている。ただ問題は、確認されたハイエンドモデルが二体いたということだ。確認されたのはエクスキューショナーとハンターだ

「エクスキューショナーとハンター、一緒の戦場で目撃されることが多い二体ですが、どうなされるんですかトウラベ指揮官」

40による研修も済み、正式に俺の補佐及びオペレータ役になったシアアが資料を机に並べながらそう聞いてくる。エクスキューショナーはハンドガンと太刀を使う、近接タイプ。ハンターは、二丁拳銃を使い。戦術は有利な場に相手を誘き寄せると。

その場にたがわず、狩りと言うわけか。　実はエクスキューショナーは早期に特定できたのだが、ハンターがなかなか特定できなかった、と言うよりもエクスキューショナー殲滅作戦を執行するか否かを迷っていた時に偶然補足できたのだ。　それもそのはずで、よくよく調べてみれば、エクスキューショナーが暴れ回ってるすぐ近く、森に潜んでいたのだ。　40の地走ドローンで森を偵察したものの、罠がそこかしこにあり突入は困難を極める。　とは言え、エクスキューショナーを倒そうものなら、確実に増援にくるだろう。　で、あればだ

「決まってるだろう、同時に叩く。　幸い、前回借りを作っておいた指揮官がいたんだ。　シーア、エルピーダ指揮官に通信を」

第39話

「まさか、今回の話に応じてもらえるとは」

「いえ、前回こちらが協力していただいたわけですし」

そう言うてにこやかに握手を求めてくるエルピーダ指揮官。俺はそれに応じ、椅子に座るように促す。正直、前回借りを作ったとはいえ今回の話に乗ってくるか可能性は半々と見ていた、見事賭けに勝ったわけだが。今回呼んだのは他でもなく、二体のハイエンドモデルをどうやって二体同時に相手どるかだ。一応、ウチの基地だけでも可能と言えば可能だが不確定要素は出来るだけなくしておきたい。そこで白羽の矢が立ったのが彼と言うわけだ。後ろで控えていたシーアに今回の作戦に関する資料を配ってもらうと、エルピーダ指揮官は不思議そうな顔をしていた

「あの、彼女は？」

「ああ、前回はいなかったですからね。彼女はシーア、俺の補佐と作戦に関するオペレーターと言った所でしょうか」

「シーアです、よろしくお願いいたしますエルピーダ指揮官」

「あ、えっと、こちらこそ!!」

緊張した様子でいるエルピーダ指揮官をおかしく思いつつ、今回の作戦について話を切り出す

「さて、通信でも話しましたが今回、二体の鉄血のハイエンドモデルを確認しました」

「ハンターとエクスキューショナー、ですね。一体でも大変だったのに二体同時なんて……」

「このハンターとエクスキューショナーに関しては、同時に目撃されることも多いですからね」

「まさか前回のスケアクロウが？」

「さて、それはどうでしょうかね。アレからこちらでは目撃されてませんし、そちらは？」

「こちらでも目撃は……」

まあ、目撃されることがあるはずないのだが。定期的に食糧をウチに卸してるか、シエルターでドラゴンやバブルと戦てるんだからな。とは言え、それを知らないのだからエルピーダ指揮官が考えるのも当たり前だ。

でも、可能性がないとも言いきれない。代理人に続いて、カカシまで行方不明になったわけだからな。とは言え、代理人はともかく、カカシは自分でも言っていたが鉄血のハイエンドモデルモデルの中でも下級モデルだ、量産もされているらしいからそ

のうち違う個体のスケアクロウが出てきてもおかしくはない

「その資料にもある通り、二体が根城にしているエリアは近く、下手に合流されればこちらが被る損害はとてつもなく大きいものになるでしょう。そのため、各個撃破を狙っていききたいと思います」

「エクスキューシヨナーは近接型、ハンターは自分のエリアからほぼ出てこない。どういった作戦を？」

「簡単な話です。エクスキューシヨナーとハンターから離し、各個撃破を狙っていきます」

「でも危険では？ エクスキューシヨナーはともかく、ハンターは自分のエリアから出てくるとは……」

「ええ、そうでしょうね。だからハンターと戦う部隊は少人数で突入し、速やかに撃破する必要があるでしょう」

第40話

（シーア視点）

「作戦開始ですエルピーダ指揮官、指揮をお任せします。私もサポートしますので、よろしくお願いいたします」

「ええっと、よろしくお願いします」

前回の作戦会議から数日、仮設の拠点を作りいよいよ作戦が開始となりました。でも、この仮設の拠点、司令部には私たちの基地の指揮官であるトウラベ指揮官の姿はありません

「あの、トウラベ指揮官は大丈夫なんでしょうか？」

「今は目の前の作戦に集中するべきですよ、エルピーダ指揮官」

「す、すみません」

エルピーダ指揮官に注意するものの、私だって心配ではありません。強さは知っていても、心配なものには変わりありません。トウラベ指揮官が今回指揮をしていないのは、ハンターの対処をするため、前線に立っているからです。罠を仕掛けそこで待つハンター、その罠の数は大量であり、トウラベさんの連れ彼女の地走型のドローンでさえ、罠の正確な

配置はできなかつたほどです。そもそも、罨の位置も数日に一度は変わっているようで、彼女はさじを投げていましたけど。トウラベ指揮官を心配しつつも、自分の仕事はしつかりこなさないよ

『第一部隊の皆さん、そろそろ予定ポイントになります、警戒を怠らないでください』
今回、ハンターを完全に抑えきるために部隊を三個に分けています。第一部隊は、

ハイエンドモデルではない鉄血、ノーマル人形を殲滅するための部隊です。今回確認されているのは Ripper や Vespid、Guard と言った人形です。第一部隊ならあり苦勞しないと思いますが。そして第二部隊、第一、第二部隊はエルピーダ指揮官が持つ人形たちの部隊ですが、第二部隊は A R 小隊。鉄血のハイエンドモデルとは言え、A R 小隊なら問題ないでしょう。そして最後、第三部隊はトウラベ指揮官の第一部隊です。今回、私たちの基地に所属する第二部隊は部隊長の F A L さんが抜けたため 9 A 9 1 さんと M 2 H B を編成し、即席の第二部隊として運用します。とは言うものの、第二部隊の皆さんは予想外のことが起こった時のため、この仮説の拠点で待機してもらっていますよ

『こちら第一部隊、戦闘終了』

『了解しました、次のポイントですが……』

エルピーダ指揮官の指示に従い、第一部隊に次のポイントへ向かうように指示する。

それにしても、すさまじい能力ですね。敵の位置が分かるなんて

『第二部隊の皆さん、そろそろ予定ポイントです、戦闘準備を』

『こちら第二部隊、ターゲットを確認。先制攻撃を仕掛けます』

第二部隊、つまりAR小隊がハンターと交戦を開始したようです。予定では、そろ

そろトウラベ指揮官も

「無事に帰ってきてくださいね、トウラベさん」

くシーア視点 endく

第41話

40のドローンで上空から見回すと、どうやらAR小隊とエクスキューシヨナーの戦闘が始まったようだ。こちら既に森の中に入り、ハンターを探している所だ。上空からは見えないし、地走のドローンでは罠が多すぎて使えはするものの、微妙なところだ。理想的な立地ではあるものの、それだけだ。俺と40、FALはハンターの仕掛けた罠を物ともせず森の奥に進んでいく

「それにしても、罠に片っ端か引つかかって大丈夫なのは気にしないけど、これだけ騒がしかったら相手にバレて意味がないんじゃないかしら？」

FALの言う事には一理あるものの、そうは言ってられない事情もある

「ならこの罠の山、一つずつ解体していくか？ 中には連鎖式のものもあると言うのに」

「……感謝してるわ」

地走ドローンで数回偵察をかけた結果なのか、罠の数が異常の一言だった。これだけの罠、どう用意したのか気になるところではあるものの、本人に聞けばいい話だ

「うーん、やっぱり見つからないかなあ………」

俺はさほど気にせず進み、FALは周囲の警戒、40はタブレットを見ながら進んで

いる。その40だが、タブレットには走らせている地走ドローンからの映像が映っている。数回爆発させているが、気にせず代わりのドローンを走らせている。どうせ、ドローンのパーツは毎日手に入るので問題は無い

「ここ数日、この森を出ていないのだから？」

「それは確認してるよ。だからこの森の何処かに居るはずなんだけど……」

「ならこの奥だろうよ。罾の数がさらに増えてきてるからな」

「そうだとすると、一応探しておくね」

「頼んだ」

40に索敵を任せつつ、俺は尚も森の奥に進んで行く。対人地雷であるクレイモアなどの近代的な罾から、丸太が降ってくる罾や、落とし穴（下は針満載）など古典的な罾まで、多彩な罾を仕掛けてあるものの、俺の防具でまったく意味のないものになって居る。だが、そろそろウザったくなってきた。そんなことを考えて居ると、急に開けた場所に出る。太陽の光も入らないほど薄暗く、警戒を引き上げる

「まさか、ここまで来るとはな」

頭上から声がする。とは言っても、木々が生い茂り、薄暗い為場所の特定は困難なのだが。40はタブレットを仕舞い、FALは警戒する

「罾を無効化されたのは予想外だったが、それもここで終わりだ」

金属音がする。多分、手持ちの二丁拳銃だろう

「さくらばだ」

こちらと言つても、警戒もしていない40に発砲したらしく、弾丸が40に迫る。当たるかと思われた弾丸は、40によって掴まれる

「なっ!!? つ!!」

躍起になったのか、連射して全員に撃ち込むつもりのようなのだが、その場から移動しないで撃つとは呆れる。全員に迫る弾丸を掴んで回収し、FALに指示を出す

「FAL、やれ」

「こんなところでやれとか正気を疑うけど、まあ互い様ね」

そう呟き、スキルを発動させ榴弾を連射するFAL。その榴弾はすべて銃弾が飛んできたほう、つまりハンターに向かつていた。とは言え、動くような音は聞こえていない。あまりのことに思考がフリーズしてしまつたらしい。まあそうだろう。

こんな木が生い茂るところに普通の感性をしたものなら、榴弾を撃ち込もうとしないからだ。着弾し、爆炎と共に燃え広がる。その煙に紛れて、ハンターが木から落ちてきたようだ。落ちた時に嫌な音がしたが、普通の人間より丈夫なので問題ないだろう「気分はいかがかな、ハンター?」

「化け、ものめ」

「よく言われる」

ハンターの答えに何も思わず、周りを見回す。良く燃えているな、このままだといささかまずいか

「悠長に周りを見回してる場合じゃないでしょう!」

スパンと頭を叩かれる。ハンターが落ちてきた際に防具は四次元ポケットにしまったので、普通に頭をはたかれた

「火を消す手段があるって言うからやったのよ! 焼け死ぬってことはなくても、火事にするためにやったわけじゃないの!」

「わかってるさ、アイスボール」

流石に毎日終末でドラゴンと戦っているだけあって、そう怒ってくるFAL。これ以上口うるさく言われるのも嫌なのでアイスボールの魔法を唱え、素早く消化する。

巨大なボール状の氷が空から降ってくるが、魔力制御しているためFALや40には当たらない。もちろん40が細工をしている、ハンターにもだ。さて、FALの言いつけ通りに手早く火を消化したのにもかかわらず、結局怒られていた。やり方が強引すぎるのだの、もし当たったらどうするとか、常識を考えるだとか。そんなお小言を言われている中、面倒そうな40の声が聞こえる

「うっわ、ハンターがこっち向かってきてる」

「どういうことだ？」

「通信遮断が少し遅かったみたい。途中で通信が切れたエクスキューションナーが不審がってAR小隊とウチの部隊無理やり突破して、こっちに向かってきてる」

ほらと言つて見せられたタブレットには、ちょうど森に入るエクスキューションナーの姿が映っていた

第42話

40が強制スリープモードにさせたハンターを肩に担ぎ、来た道に戻る。そうすれば罠に引つかからず、快適に戻れる。

遠くから爆発音が聞こえることから、どうやらエクスキューシヨナーは罠にかかっているようだ。40が解析したデータによれば、安全に奥まで来れるルートがあるはずなのだが、冷静ではないようだ。それだけハンターが大事ということか。

鉄血のノーマル人形はあまり仲間意識を持っているようには見えないが、下級とはいえハイエンドモデルという事なのか。とは言え、ハンタータイプとエクスキューシヨナータイプを除けば、他の鉄血のハイエンドモデルが協力して敵を殲滅という例はグリフィン本部の記録には数件しか確認されていない。もちろん、グリフィンが知らないだけでそういう例もあるのかもしれないが。

そんな無駄ではないが今の状況とまったく関係のないことを考えていると、近くで爆発音がして目の前に何かが飛んで来た

「ぐう……　　ハン、ター………」

「よく来たなエクスキューシヨナー」

飛んで来たのはボロボロなエクスキューショナーで、もはや壊れていないところを探
す方が難しかった。近代的な罠から、古典的な罠まで色々な罠にかかればこうもなる
う。動けないながらもこちらに手を伸ばし、必死にハンターを取り返そうとしている
「……………指揮官」

敵とはいえ、こんな姿を見ていられないのかFALが俺に声をかけてくる

「なに、せいぜい役に立って貰うさ。 40」

「了解！」

40が操作をするとスリープモードに入ったのか、こちらに伸ばしていたエクスキューショナーの腕が地面に落ちる。俺はハンターと一緒にエクスキューショナーを四次元ポケットに回収し、40に指示を出す

「40、確かコイツは太刀を持っていたよな？」

「んー、あー、森に入る時は持ってたね、回収する？」

「どういふものか解析したくてな、頼む」

「はいはい、ドローンで探すからすぐに見つかると思うけど」

そう言つてタブレットを操作し始める40。俺は俺で本部に報告しないとな。

そんな俺と40を複雑そうにFALは見ていた。とはいえ何も言わないところを見ると諦めたのか、言つても無駄だと思つているのか、それとも……………
無線のスイッチ

を入れ、本部に通信を始めると、すぐに繋がった

『こちらトウラベ、本部応答せよ』

『トウラベ指揮官！そちらにエクスキューションナーが！』

通信が繋がるとシアアが焦った声で通信をしてくる。　　とは言い、件のエクスキュー

ションナーはもう四次元ポケットの中なのだが

『問題ない、こちらで処理した』

『そ、そうなのですか？』

『と言つても、ハンターの罠に引っ掛かり自爆しただけだな』

『よ、よかった……』

報告を済ませると、ホツとしたようなシアアの声。　それに少しおかしく思いながら、残敵の殲滅を指示する。　作戦ももう終わりだな

「アコナイト、見つけたよ」

「わかった。　後は太刀を見つけて戻るとしよう」

「了解」

第43話

エクスキューションナーがこちらに乱入して来るといふアクセシブント？ はあつたものの、残敵を殲滅し作戦は終了となつた。

終了後エルピーダ指揮官と顔を合わせると落ち込んでいたが、40曰く俺が言葉をかけるのは逆効果という事だったので、次も機会があればまた合同で作戦をと言つて基地に帰つてきた。

基地に帰つてきたと言つても、これからは書類仕事をしなければならぬので、また別の意味で忙しくなる。

まずは人形達に作戦報告書を提出させ、その報告書を纏めてまた新人達が配属された時に使えるようにしなければならぬ。こちらはシアに任せる事が出来るからまだいいのだが、本部用に提出する書類が問題だ。エクスキューションナーは自爆したという事で良いとしても、ハンターは俺や40、FALで倒した為、報告がかなり面倒だ。

とは言え、戦闘は見られていないので、いくらでも書きようがある

「はあ…… やるとするか。 ああFAL今回はお前にも手伝つて貰うぞ」

「まあ、そうなるわよね……」

気配を消して司令室から出ようとしたFALに声をかけると、渋々と言った感じでFALは近くのデスクに座る。俺と40、FALは報告書の作成に取り掛かった

くエルピーダ視点く

「はあ……」

「すみません指揮官、私達がエクスキューショナーを逃がしたばかりに」

「そんな、M4のせいじゃないよ!」

トウラベ指揮官との2回目の合同作戦。今回はコチラの戦力に不安があったからトウラベ指揮官と合同で作戦を行ったものの、今回は逆のトウラベ指揮官から協力の申し出があった。

その内容は、鉄血のハイエンドモデル二体を同時に相手取るものだった。前回の作戦後、かなり苦しいけど本部からは敵ハイエンドモデル撃退の報酬で新しく人形が配備され戦力拡大した。でも、幾ら合同であるものの二体のハイエンドモデルを相手にするのは不安だった。でもトウラベ指揮官は違ったようで、既に作戦を立案していてそれを見せてくれた。その作戦内容も驚いたけど……トウラベ指揮官と他少数でのハンターの撃破。戦術人形は戦闘に重きを置いた人形で、今は滅びてしまったものの鉄血工業製の人形はより戦闘に特化されている。それを少数で。正直、死にたいのかと僕は思った。でも、資料を読み進めていくとそれも言ってもらえない事情が

あった。ハンタータイプは自分の有利なところで戦うことが確認されており、今回は森に罠を仕掛けていたからこの作戦を立案したとトウラベ指揮官に説明を受ける。

それでもと食い下がったものの、これ以上有効な作戦は出てこなかった。合同の作戦はもちろん受けることにした。前回情報提供や大事な人形たちを貸してもらった

のだから、その恩を返そうとした。でも作戦は失敗した……いや、作戦自体は成

功した。敵ハイエンドモデルは二体は無事に撃破、残敵も殲滅。結果だけ見れば大

成功だけど、僕は自分の役目を果たせなかった。エクスキューショナーを抑え、倒す

のが僕の役目だったのに、途中攻撃を受けても止まらずひたすら離脱しようとするエク

スキューショナーに驚き、指示が遅れてしまった。その一瞬のスキについて、エクス

キューショナーには作戦区域から離脱されてしまった。すぐに追撃の命令と、仮説の

拠点から親交を止めるように部隊を出したけど、結局間に合わずにトウラベ指揮官のと

ころまで行ってしまった。そして、その失敗をいつまでも落ち込んで、M4達にまで

心配をかけてしまった

「僕は本当にダメな指揮官だ……」

「ふむ…… 指揮官、こいつを見てくれ」

M16が声をかけてきたと思ったら、何故かお酒を持っていた。それも配給で配ら

れるようなお酒ではなく、高級なお酒だ

「……いや、何処から出したの!？」

「こいつを、こうして、こうだ!」

「もぼぼ!」

「姉さん!？」

何故か封を開けると、僕の口に押し込んできた。 いや、確かに僕は成人してるけど、

お酒は。 ああ、なんかM4の声が遠く聞こえる

「なあ指揮官、失敗なんてものは誰にでもある、勿論私にもな。 だがそれを気にしてるままじゃ、いつまでも成長できないぜ? あのとウラベ指揮官は別物だとしても、指揮官には指揮官にしか出来ないことがある。 だから、そんなにしよげるなよ」

M16の言葉がおぼろげに聞こえる。 ああ、そうかもしれない、そうかもしれないけど、いまはあたまがいたい

「何キメ顔で言ってるんですか、姉さん! ああ、指揮官さん!!」

「はあ……」

「あはははははは!」

くエルピーダ視点 endく

第44話

前回大変な思いをしたからか、今回書類を裁くのがそんなに大変ではなかった。とは言つても、まだ終わりではないのだが。合同作戦から数日が過ぎ、ようやく業務が落ち着いた。その隙を見計らつてというわけではないが、ようやく空いた時間が出来始めたので、司令室とは別の俺の部屋にデールを呼び出す。作戦中人形の整備や修理を結構な数こなしたからか、機嫌がいいので呼び出しにも直ぐに応じる。約束の時間ぴったりに部屋がノックされる。デールのようで、直ぐに部屋に通す

「ふーん、何もないんだな」

「寝ているだけだからな」

部屋に入るなり、周りを見回すデール。この自室など寝に来てはいるだけなので、何も物を置いてない。そもそも、寝るのもシエルター内なので、この部屋はただ經由してのだけに過ぎない。とりあえず備え付けのベッドに座らせ、本題に入る

「お前に通常の業務とは別の仕事を頼みたい」

「わざわざ部屋に来ていうからどんな用件かと思えば……それで、仕事の内容

は……」

呆れながらいうデールだが、一応話は聞いてくれるらしい

「とある人形を直して貰いたい」

「人形？ 作戦中にでも拾ったのか？ いや、それなら別の仕事として頼む必要ないな。

どんな人形だ」

流石裏の人形など整備していた経験もあるので勘が鋭い。嫌な予感がするのか顔を

をしかめているが、そんなことは御構い無しに物を見せる

「コイツだ」

「……なあ、コイツはハンターの罠にかかり自爆したって聞いたんだが？」

エクスキューションナーを見せた途端、デールは不快感を隠しもせず、に俺にそう問いかけてくる。確かに書類上ではそうなっているが、それはあくまでも書類上の話だ。

実際目撃した俺や40、FALが何も言わなければそれでそれで終わりだ

「書類上ではそうなってるだけだ。それで直せるのか直せないのか？」

「……」

黙り込むデール、その表情は俯いてる為読めない。それが数分続き、重苦しい空気が流れる。ようやく顔があたり、デールがポツポツと話し始める

「俺はな、何も人形が弄れればなんでもいいって訳じゃない。確かに裏の非合法な人形も整備していたが、テロリストや整備したことによって大勢の人間に迷惑をかけるよ

うな人形を整備した覚えはない。お前だつてわかつてるはずだろう」

「なにもコレを使つて戦争などを起こすつもりはない。ただ、個人的に動かせる戦力が欲しくてな」

「なら質問するが、本当に大事にするつもりはない。もし、そのような状況になつても使わないつて確約できるのか？」

「それは無理だな」

即答してやると、これ見よがしにため息をつくデール。だが、苦笑しながら顔をすぐに上げる

「まったく、お前らしいよ。お前の事は嫌いだけど、そう言うところはまあ嫌いじゃない」

「それはどうも」

そう返事をすると言は終わったといわんばかりに立ち上がるデール。俺もそんなデールを座りながら見送る。扉の前に立ち立ち止まるデール

「今回の事は黙っておく、一応お前の正直なところに免じてな。正直言えば、こんな機会じゃなきや鉄血のハイエンドモデルなんて整備する機会なんてないだろうからやりたい気持ちはある、でも僕にもポリシーというものはある」

「別に無理にとは言わんさ。このことを言うか言わないかの判断もお前に任せる」

「やっぱりお前の事は嫌いだ」

言うことが二転三転するデールにおかしく思いながら見送る。
あつかんべーをされたのだが

部屋を出る際に、

第45話

デールとのやり取りから数週間が経った。本部とは報告の時少し揉めたものの報告書の提出も終わり、業務もようやく通常通りに戻る。

だが、これからは少し忙しくなりそうだ。

今回ハンター、エクスキューショナーを殲滅したことにより、ここS9地区近辺は鉄血の支配から大部分奪取できた事もあり、S9地区に他の地区や他のPMCが治める地域から人を呼び込みS9地区の基地周辺、わかりやすく言えばエルピーダ指揮官の基地周辺に新たに都市を築く運びとなった。都市を築くことにより物の流通など便利になるものの、警備の人間等が増えることになる。

エルピーダ指揮官は人員の急激な増加、配備される人形の数が増えることになり悲鳴を上げていたのは記憶に新しい。それに都市建設に伴いウチの基地のような前線基地が増える為、そちらの管理もあるらしい。このようにエルピーダ指揮官の仕事はかなり増えたようだが、ウチの仕事は増えていない為大変に喜ばしい。そもそも、エルピーダ指揮官が分基地前線基地の管理だけでも任せようと本部に進言したらしいが、上級代行官殿が却下したらしい。そんなわけで、ウチの基地は引き続き、鉄血の

支配地域を奪取するのが仕事だ。　　こうなると少し遠いところまで赴かなければなら

ないので、仮設の拠点を作るのも良いかもしれない。　その為か戦力は有るわけだしな。　代理人、カカシ、狩人に処刑人、少し心許ないが問題ないだろう。　まあ、FAL

Lは動かすのが面倒だとしても40に現場指揮をしてもらえば安心だしな。　さて、処刑人だが、罨にかかり手足が吹き飛んでいたもののポーシオンを飲ませたり、傷口にポーシオンをかけると問題なく直った。　直った処刑人と狩人は代理人たちと同じ様に処理をしたので、今では二人とも俺に忠実な人形になった

「ねえアコナイト」

「なんだ？」

「そろそろ来るんじゃないかな、あの子たち」

「まあ、あの二人は情報を抜けるわけないし、上級代行官殿も俺を怪しんでいるようだしな」

　　そう言いながら本部から来た書類を見る。　40は肩口からそれを覗いているよう

だ。　今回配属予定の人形たちで、40の言うような人物たちはいない。　これからS9地区が大きくなるなら俺のような人物は都合が悪いだろうからな、排除しようとするのだろう。　だが、あちらの迷惑通りに動けばの話だ。　どうなるかは彼女たち次第、

ウチの基地にくるその時まで楽しみにしてるとしよう

「その神経の図太さ、私も少し見習おうかしら？」
「元々お前の神経は図太いほうだろう、F A L」

第二章 幕間

第46話

???

「来たみたいだな」

「一緒に報告をする必要も感じませんが、一応」

この人形達が所属する基地内でも、普段から人が全く来ない屋外倉庫の一角。二体の人形が何やら話し合っていた

「それがこの間言っていたスキンか」

「ええ、まあ…… 少し動きにくいですが、慣れば問題ないかと」

そう言つてその場で一回転する人形。その服を見る目は、どこか複雑そうである

「まあ、前の服はな……」

「その話はいいんです、はやく報告を」

「そう急かすな、分かっているさ」

関係ない会話に気を害したのか、それとも話題に触れてほしくないだけか、片方の人形がそう言うとすぐに無線機を取り出し通信を開始する

「報告の方を。 ええ、報告書は別途で上げた通りです。 戦闘力は聞いてましたが、ま

さか戦術人形が付いていたとは言え、人間二人と戦術人形で鉄血のハイエンドモデルを倒すとは。 私と彼女は別々に行動してましたので。 私は敵部隊の殲滅で動いてい

ましたし、彼女は仮設の拠点で待機を。 流星にハンターの罠が張り巡

らされているエリアには、私も彼女も。 今もあそこは立ち入り禁止ですから、確認の

しようが. はい、後で忍び込むだけ忍び込みますが、結果は期待しないでください
い」

会話をすることに会話をしている人形の表情は険しくなる。 もう一体の人形はそれを見て

「ええ、それでは. まったく、無茶を言う」

「忍び込むってことでしたが」

「今も立ち入り禁止のあの森をだ。 本当にエクスキューションナーはともかく、ハンターを撃破したのか、後はできればハンターのパーツの回収もだそうだ」

「パーツの回収？」

怪訝そうな顔をする人形に、報告をしていた人形は呆れた表情をしながら話し始める
「鉄血のノーマル人形ならいくらでも鹵獲できるだろうが、ハイエンドモデルと言えば
そうじゃない。 目撃例や交戦回数なんか多くても、自爆や逃がしたり、辛うじて撃

破してもボロボロで解析も出来ない。今回あの男がどのくらい激しい戦闘をしたのかは知らないが、パーツなんかでも回収できれば、解析も進むということじゃないか？

回収に関してはI・O・P。側から、言われたみたいだしな」

「そう言う事ですか。回収の方は私がやっておきます、そう言うのは得意ですから」

「ならよろしく頼む」

会話が終わると同時に、二体の人形は別々にその場から離れた

???

end

「報酬の方はいつものところに、よろしくね」

無線機を片手に左目に傷跡のある人形が喋っていた。その周りでは、右目に傷跡のある人形が眠そうな人形の頬で遊び、もう一体の人形は銃の手入れをしていた。彼女は404 Not Found小隊、グリフィンに所属しているが、極秘任務を主に担当し、その存在は秘匿されている

「新しい任務？ 休ませてくれないのね、詳細は？」

任務と聞こえたのか、右目に傷跡のある人形、UMP9は眠そうな人形Gr G11の頬で遊ぶのをやめ、Gr G11はこれ幸いと寝ようとしていた。銃の手入れをしていた人形、416は左目に傷跡がある人形UMP45を一瞥すると、銃の手入れが終

わったのか自分の脇に置く。UMP45は無線機で依頼主と話していた。へーと相槌を打ちつつ、薄く笑っていた。それが数分続き、ようやく無線機を置く。するとUMP9は待てましたと言わんばかりにUMP45に近づく

「45姉、新しい任務って言ってたけど？」

「ホント、ヘリアンも人使いならぬ人形遣いが荒いわよね」

「とつとと任務の内容を言いなさいよ」

UMP9とそのままお喋りでもしそうだったのか416がUMP45に注意するも、UMP45は気にしてないのか笑顔を崩さずにそのまま任務の説明にはいった

「はいはい、わかりましたよ。とは言っても、簡単な話潜入任務よ」

「潜入？ どこに？」

「あの時AR小隊を助けた人物のところよ」

不思議そうに質問するUMP9にそう答えるUMP45、その顔はどこか楽しそうだった。だが、それを聞いた416は逆に表情を曇める。その視線はUMP45に向けて

「404小隊 end」

第三章

第47話

「確かにRFを寄越せと本部には言ったが、極端すぎる……」

窓から今日から配属となった戦術人形を見つつ、頭を抱える。配属された戦術人形は3体、その全てがRFの人形だった。部隊のバランスを考えてRFを寄越せと本部に言ったが、3体はやり過ぎだ

「それでも、配属された人形達に罪はないでしょ」

興味なさそうに書類を手伝っているFALがぼそりと呟く。窓から離れ席に戻りながら、それに対して解答をする

「別に配属された人形に対して何か言うつもりはない、本部には文句は言うがな」

「また？ そう言うのやめたらどう、それじゃあなくても本部からいい印象持たれてないのに」

呆れたといわんばかりの表情をするFAL

「今更だろう？ そもそも、監視は最初から付いていたわけだしな。俺も都合がいいから所属しているだけだしな」

喋りながら書類を作る。複数の足音が聞こえてくる。FALも聞こえたのか、こちらを向く

「この話はここまでだ」

「まあ、別に暇つぶし程度の会話だしね。私も貴方の目的について何も言うつもりはないしね。まあ、貴方が余りにも非常識な事をしようとするなら、40と一緒に注意するけどね」

少しイタズラっぽく笑いながらFALは俺に釘を刺してくる。それに俺は特に何も答えず、扉を見る

「トウラベ指揮官、今日配属された戦術人形を連れて来ました」
「入ってくれ」

ノックの音が聞こえ、シーアが入室許可を求めて来たので、入室を許可すると、連れてきた人形と共にシーアが入室する

「ありがとうシーア助かる」

「いえ、気にしないでください」

お礼を言うと、少しはにかみながらシーアが俺の横に並ぶ。ちなみにFALは、新人達の中に入ってくるのと同時に俺の横に並んでいた。40はと言うと、少し別件を任せているのでこの場にはいない

「諸君、この基地にようこそ。指揮官のトウラベ・アコナイトだ。歓迎しよう」

「私の名前はワルサーWA2000。指揮官、私の足を引っ張ったら、承知しないわよ」
「スプリングフィールドです、指揮官、この私にできることがあれば、どうぞご命令を」
「シユタイアー2000、ただいま到着しました。指揮官の力になれるよう、頑張ります」

しっかりと敬礼するものから、そつぽを向いて自己紹介をするものなどホントI.O.P.の技術者どもはいい根性をしている。FALといい、9A9Iといい。ともかく、顔合わせは済んだのでこれからの流れをシアに簡潔に説明してもらう。と言つても、前に配属された新人たち同様、作戦報告書を読み込ませ慣らしをしてからだが。説明も手早く終わり、新人たちが退出していく

「さて、残りの仕事に取り掛かるか」

「指揮官、この後の歓迎会忘れないでよね」

「分かっている」

前回はそこまで人数も多くなかったものの、今回の配属によつてウチも四部隊運営するようになった。なので、新人との交流会をという話がスコープオンから上がったのだ。鉄血と争つてるのに何事だと他の基地ならなるかもしれないが、うちはそこらへんは基本的に緩い。そもそも息抜きくらい良いだろうという話だ

「君も参加だぞ、シーア」

「で、デールにも声をかけておきます」

あんまり騒がしいのは苦手なのか、顔が引きつっているシーア。そんなシーアに苦笑しつつ、俺は書類を片付けるのだった

↳UMP40 視点↳

「はあ…… 早くアコナイトに会いたいなー」

「申し訳ありません、40様」

「別にいいよ、はやく終わらせちゃおう」

空を見上げつつそんなことをつぶやいていると、代理人が気配もなく近寄ってきていた。アコナイトに頼まれた、仮設の拠点作りだ。と言っても、四次元ポケットに入っている、アコナイトから貰ったシエルターを設置するだけなんだけど。一応、このシエルターには仮設の拠点を造る道具や機材などが入っている。別にそのまま仮設の拠点にしても問題ないけど、本当のアコナイトのことを知っている人形はウチの基地には少ない。だから無用な疑いを避けるために、という話だ。まあ、仮設の拠点を造る道具や資材は何処から用意したって話になるけど、そこはアコナイトだからと言えば解決するんだけどね。ウチの基地の一部の人形、特にアコナイトが助けた人形たちはそれで通じてしまう

「はやく、処刑人の教育、したほうがいいんじゃない？」

「アレは元からでして…… 40様が必要だと思うなら、処置をしておきますが？」

「アコナイトが放置してるみたいだし、そのままでもいいけど多少はしておいて」

「かしこまりました」

恭しく頭を下げる代理人に構わず、仕事を終わらせる。今回作業が予定より遅れたのは、処刑人の不器用さと集中力のなさだ。そこまで細かい作業ではないのだけど、集中力が続かない。そのおかげで作業が少し遅れるし……

「ん？」

リンクしてるドローンの映像の隅で何かが動いている。ズームしてみると、懐かしい顔が

「噂をすればなんとやら、かな」

コースは真っ直ぐウチの基地に向かっていた

「どうしますか？」

「放っておいていいよ。さて、作業は終わったみたいだし、帰ろっか」

〈 U M P 4 0 視点 e n d 〉

第48話

新人歓迎会という、いつ作ったかもわからない横断幕がぶら下がった部屋の中、少し離れたところから騒がしいのを見ていた。

流石スコープオンと言うか、騒ぐ時はかなり騒ぐ。

流石に定期的に食料を持ってこさせている中に酒は持つて来させないものの、フルーツを絞ったジュースなどはあるのでそれををがぶ飲みし、新人達に絡んでいる。付き合いの長いStG44達が宥めているものの、それでも騒がしいことには変わらない。

「たまにグリフィンの逸れ人形でスコープオンタイプを見たが、あそこまで騒がしいのは初めてだ」

「俺に言われてもな」

「お前、ここの指揮官だろ……」

新人達に簡単に自己紹介を済ませたデールは俺がいるのを確認し嫌な顔をするものの、こちらの比較的静かな方に来た。会話はそんななもの、ジュース片手に二人でいると言うのも珍しい

「お前からしたら、ここう言う風景はずっと見ていたものだろうか？」

そう言いながら、デールを見ると微妙な表情をしていた

「まあ、確かにそうなんだが……これは違うか？」

確かに少し騒がしすぎるかもしれないが。とは言え、こういうパーティはそんなものではないだろうか。流石に俺が経験したパーティとは、また違うが

「デール、食べ物を取って来ましたよ」

「ゲツ、僕の嫌いなものばかりじゃないか！」

「貴方は偏食が過ぎるんです、あの子達だと強くは言えないでしょうから」

そう言つてシーアが見ているのは、デールが所持する人形だ。と言つても戦術人形ではなく、メイド人形だ。部屋の掃除や身の回りの世話など、デールは人形任せである。とは言え、それで仕事に集中出来るのだからいいのだろう。デールはシーアに逆らえないのか嫌々ながらシーアの持つて来た野菜などを食べていた。味覚が子供らしいな。俺が笑っているのがバレたのか、こちらを睨んでいた

「シーアは好き嫌いはないのか？」

「私は特には……トウラベさんは？」

「俺も別にないな」

「いや、絶対嘘だな」

「悪いがお前のように子供舌じゃないからな」

「言ったな!? お前言ったな!？」

「本当のことだろうに」

飛びかかってくるデールを軽くいなしていると、そんな俺を見てシーアは溜息をついていた。そんなくだらないことをしていると、いつのまにかスコピオンから逃れたのか、スプリングフィールドが俺に近寄って来る

「あの指揮官、少しよろしいでしょうか？」

「構わないぞ」

「デール、そこらへんにしてください」

「ぐう、化け物め」

シーアに注意され、こちらを恨みがましい目で見ると、デールを軽く受け流しつつ、改めてスプリングフィールドに向き直る

「それで、何か用か? 新人歓迎会が楽しめないなら、文句はスコピオンに言うといい」

「いえ、そんな事は! そうではなくてですね、今回のお料理は指揮官がお作りになったとか」

「ん? ああ、そんな事か。確かに食事に関しては調理スタッフも居るが、今回のような突発的な事があれば作るぞ。仕事が長引けば、息抜きと休憩に作ったりもするから

な」

今回の歓迎会の料理は、実は俺が作っていた。とは言っても、前にFALに作ったようにバーベキューセットで作った物ではなく、普通に食堂の調理スペースにあるコンロなどを使ってだ。俺がそう言うと、スプリングフィールドは考え込むような素振りを見せたと思えば、いきなり頭を下げて驚くようなことを言い始める

「あの、私に料理などを教えてもらえないでしょうか！」

これには俺やシア、デールは顔を見合わせる。スプリングフィールドに訳を聞いてみれば、スプリングフィールドタイプの人形はカフェなどをやることがあるらしい。

そう言えば、本部に居た時スプリングフィールドタイプがカフェをやっていたと思います。とは言え、最初からそんな機能戦術人形にあるはずもなく、しかもウチにきた

スプリングフィールドはロールアップしたばかりだそうで、そう言った経験がないらしい。とは言え、本人も同型のカフェの噂などは聞いてるため自分もやりたい。で

も、そう言った経験がないため、話を聞きおれに頼んできたらしい。正直、人選を間違っているような気がしないでもない。デールはすごい顔で俺を見ているし、シア

も難しそうな顔をしている。とは言えこの基地、娯楽がない。カフェと言うのは素晴らしい考えではないだろうか

「まあ、暇な時なら構わんだろう」

「ありがとうございます！」

第49話

スプリングフィールドが絶対ですからねと念を押しつつ、また新人達の居る方に戻って行った

「いろんな意味で大丈夫なのか？」

心配そうにスプリングフィールドを見ながらそう問うてくるデール、たかが料理を教えるだけなのに何がそんなに心配なのだろうか

「別にただ料理を教えるだけだろうが」

「デールは心配し過ぎですよ」

シアアも俺と同意見なのか、デールをやんわりと注意していた。

その後は新人歓迎会を適当なところで抜け出し、外に出る。空を見上げ、ふと思う。別に意識はしていなかったものの、この世界に来てからと言うもの、性格が丸くなつたと。

前の世界までなら、襲つて来る奴ら、気に入らない奴らは皆殺しにしていたと言うのに。それに関わる者も探し出し、徹底的に殺し回っていた。まあ、命の価値が違うからと言うのもあるが、隣で40が抑えていたからだろう。でなきや、この世界でも

同じことをしていた可能性が高い。

とは言え、元の世界に帰れば昔と同じ事をするだろう。命の価値も文化も何もかもが違う故郷が懐かしく感じる。まあ、そもそもムーンゲートが無ければ帰れないし、懐かしく感じる事はあれど、別に進んで帰ろうとも思えないがな。そもそも、向かって来るから倒してただけで、俺は別に殺しをしたいわけじゃないしな

そんなつまらない事を考えて居ると、何者かの気配が近寄って来る。

「40か」

「うんーただいま、アコナイトー」

そう言っつて後ろから腰に抱きついて来る40。40の頭を撫でつつ、労う

「ご苦労だったな、40」

「別にー。処刑人のせいで少し遅れたけど、疲れるような事はしてないしねー」

そう言いながら抱きつくのをやめ、頭を撫でられる40。気持ちがいいのか、目を細めている。ひとしきり撫で、撫でるのをやめ中に入るために歩き出す。40は笑顔で隣に並ぶ

「あ、そうだ、彼女達が来たみたいだよ」

「そうか」

「あたい達がシエルター設置し終わった所でドローンの索敵範囲内に入ったから、もう

少しでここに到着するんじゃないかな」

「よかつたじゃないか、何かと気をかけていた妹分とまた一緒に居られるのだから」
「まーねー」

気の抜けた返事をする40に苦笑しつつ、会話を続ける

「なら司令室に戻るとするか」

「えー、あたい帰ってきたばかりなのに！」

「なら新人歓迎会に行くか、スコープオンが少しうるさいが」

「ええー…… それはそれでちよつと」

そんなくだらない事を話つつ、司令室に向かつて歩く

第50話

俺と40が司令室に戻ると、内線が鳴っていた。内線に出ると、正面ゲートの警備のものからだった。歓迎会のため司令室にもしかしたら居ないとは伝えてあったものの、一応掛けてきたようだった。内容は予想通り404小隊のようだった。基地内の放送でFALに正面ゲートに行くように伝え、警備のものにはFALに404小隊を司令室に案内させるように伝える

「それにしても、本部と言うより上級代行官殿も思い切った事をしたものだな」

「グリフィンの表向きの顔がAR小隊だとしたら、裏の顔は404小隊だもんね。横の繋がりが殆ど無いとは言え、あたい達が知らないはずなのにね」

「それか、それを承知で派遣したか。どちらにせよ鉄血のハイエンドモデルとは別に戦力が手に入ったんだ、有効活用させてもらうさ」

「ま、そうだねー」

椅子に座りつつ、40と話をしているとノック音がする。入室の許可を求めたのはいいのだが、何故かシアアの声だった。とりあえず入室の許可を出し、扉が開かれる。シアアを先頭にFALが入ってきて、その後404小隊が入ってくる

「ご苦労、FAL。シーアは何故ここに？」

「いえ、トウラベ指揮官が仕事をするなら私もと思ひまして」

「一応、仕事は一緒に終わらせた筈だが…… まあいい、シーアも同席してくれ。

さて、待たせたな。一応、警備のものから聞いているが、もう一度聞こう、君達はなんだ」

そう先頭にいる戦術人形、UMP45に問う。すると、UMP45は薄く笑い、話始める

「本部から配属されたんですが、聞いていませんか？」

「確かに今日新たに人形が配属されたが、三体だけだった筈だ」

「あー、そしたら書類に不備があったみたいですねー。一応、指令書もあるんですけど……」

そう言って差し出された指令書をみる。確かにウチの基地にこの四体、UMP4

5、UMP9、HK416、Gr G11が配属となっているが、肝心の誰からの指令なのかが書いてない。偽造書類かわざとそうしたのか、あえて言及する事なく、UMP45をみる

「確かにそのようだな、本部には文句を言うておくことにしよう」

「納得してもらえて、よかったです。では改めて、UMP45が来ました。指揮官、仲

良くやりましょう」

「UMP9 дайまい就職！みんなこれからは家族だ！」

「HK416、ちゃんと覚えてくださいね、指揮官」

「G11……です……指揮官、お布団、まだある？」

「これはまた一癖も二癖もありそうだな」

「彼女たちはいつもこうなので……」

俺のつぶやきに答えたシーアは苦笑していた

くUMP45 視点く

偽造書類と言うか、わざとヘリアンが名前を書かなかったただけなのだけど、それについてトウラベ・アコナイトは言及することはなかった。自己紹介も終わり、今日は遅いという理由で解散になる。部屋は空いている部屋を使ってほしいって言う事だったけど……これからのことを考えながらトウラベ・アコナイトに背を向けると、そう言えばと声をかけてきた

「俺のことを探ろうとするのは構わないが、ほどほどにしといたほうがいいぞ404の諸君」

その瞬間振り向いてトウラベ・アコナイトを確認するも、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべているだけだった。今回の依頼、面倒だと思つてたけどここまでとは。と

は言え、ここで反応する気もない。当たり前障りのない言葉で濁しておく

「どういう意味ですか、指揮官。私たちは別にそんなんじゃない」

「シラを切るのも構わんさ、探られて困るような情報もないしな。ただ、面倒ごとだけは起こさないでくれよ?」

やはり今回の任務、相当辛いものになりそうだ。再確認し、背を向ける

「ああそうだUMP9、信用して背中を任せられるような家族が見つかってよかつたな」
そのよくわからない言葉と共に、司令室を後にした

「……………どうするのよ?」

司令室を離れ、416が小声で話しかけてくる

「どうもこうもないわ、私たちはただ任務を遂行するだけよ」

「こちらの任務内容もバレているの?」

「ええ」

「そ。頼りになる隊長様なこと」

〈UMP45 視点end〉

第51話

改めて404小隊のメンバーをウチの基地全員に紹介したものの、何故か俺が非難を受ける羽目に。やれ、何の為に歓迎会開いたんだだの、きちんと仕事して欲しいだの、俺が悪いように言われた。シーアと40がキチンと本部に不備があったと説明すると、見事に手のひらを返しならまた歓迎会をしようと言う始末。とりあえず一番騒いだスコープオンは、次に鉄血のハイエンドモデルを見つけたら一人で突っ込ませてみるかと思いつつ、歓迎会の話は無しにしておいた。そもそも404のメンバーが要らないと言っているのだから、やる必要も無いだろう。おもに騒いでいたのはスコープオンやデルだったしな。そんな風にいつもの朝の伝達を終え、司令室に戻り仕事を始める

「人望が厚いみたいですね、指揮官?」

「舐められてるだけだろう」

薄く笑みを浮かべ皮肉を言ってきたのはUMP45だ。いつもなら副官はFALなのだが、今日からはUMP45に変更した。そもそもFALは司令室に来た時に捕まえて書類の手伝いをさせていただけだしな。40は俺の代わりに指揮官の仕事を

やって貰うわけだし、シーアは作戦報告書のまとめや、書類の振り分けなどのアシスタントだ。副官が決まっていなかったの、ちょうどいいと言えればちょうどよかった。

UMP45の任務的にも、都合がよかったのだろう

「そんな事ないと思いますよ？ 他の基地とかだと、どうもギスギスしていたりもしましたし」

「お前達が来たから、じゃないのか？」

薄く笑っているUMP45と顔を見合わせる。互いに皮肉を言い合っているからか、空気がドンドン悪くなるが、それを気にするものはこの司令室の中にはいないと言
う事だ

「トウラベ指揮官、45さん、喧嘩しないでください」

「すまんなシーア、次の書類を」

「ただ仲良く喋っていただけよ？ シーアったら真面目ね」

「今のは仲良く喋っているとは言えませんが……こちらですトウラベ指揮官」

そんな風に注意を受ける俺とUMP45を見て、40はニコニコしていた。ホントに何が楽しいのやら。それとも、今の状況を見て喜んでいるのか

「それにしても、ここは他の基地と違いますね。人形は割と自由ですし、衣食住キッチンと整ってる」

「緩いの間違いだろう。他の基地がどうだとか、そんなもの俺にとつてはどうでもいい事だ」

「緩い、緩いかあ…… 確かにそうかもしれないね」

その言葉にどんな感情が込められているのかは知らないが、複雑な表情をするUMP 45。だがそれは一瞬で、次の瞬間には薄く笑い毒を吐いてくる

「まあ、この基地にいる間は他の人形と同じように扱うさ、厄介ごとを起こさねばの話だ
が」

「指揮官、しつこい男は嫌われますよ？」

そう言つてそっぽを向くUMP 45、その日の業務はそんな風に会話があり少し騒がしかった。

業務も終わり、一人で外に出て星を見る

「そろそろ出てきたらどうだ、UMP 9」

「あちやー、バレてたか」

悪びれもせずに笑顔で物陰から出てきたのはUMP 9だった。UMP 45と司令室で仕事しているときは感じなかったが、一人になると視線を感じていた。まあ、盗み見た時UMP 9と分かったのだが

「白々しい。どうせ気付いているのも織り込んでやっていたのだろう？」

「うふふふ」

笑うだけで答えようとしないう M P 9 に何も言うことなく、空を見上げる。 U M P 9 は何故か隣に並び、同じように空を眺めていた。それからどのくらい時間が流れたかわからないが、不意に U M P 9 が話し始めた

「ねえ、指揮官。 指揮官てき、あの時の人？」

「あの時、ねえ…… どの時か皆目見当もつかないし、昨日初対面のはずだな U M P 9」

「ふーん、なるほどなるほど」

真面目な顔で聞いてきたと思ったら、嬉しそうに笑う U M P 9、そして

「ありがとね、指揮官。 これからは家族だ！」

何故か楽しそうに殴られた。 じゃーねーといいながら去って行く U M P 9 に困惑する

「なんだったんだアレ」

「さーねー、なんか意味があったんじゃないの？ 9 にとって特別な意味が」
「40か」

第52話

あの夜に星空を見上げてからというもの、UMP9が俺の近くをうろちよろしているが増えた。これはUMP45とが指示したことではないらしく、頭を抱えていたのを見て俺はほくそ笑んでいたが。40は相変わらずそんな俺たちの様子を楽しそうにしている。

UMP9もあの時の依頼人が40と言うのに薄々気がついているのか、40との会話がが増えていた。

そう言えばUMP9が俺の周りをうろちよろし始めたたら、FALが俺をゴミを見るような目でみていたな。流石に腹が立ったから終末起こしたシエルターに放置しておいたのだが、俺と40がシエルターに入るまで生き残っていたのには驚いたが。

そんな細々とした問題と言えない事を処理しつつ、仕事をする。目下の問題はここ数日で現れた新しい鉄血のハイエンドモデルだ。腹立たしいことに、ウチの基地から少し遠く、往復でほぼ一日がつぶれるのであまりパトロールの時間が取れない地区にそれは現れた。

しかもこれまでと違いその少ないパトロールの時には姿を現さず、パトロールが終わ

るところこちらのパトロールの領域を引つ掻き回すのだ。あまり重要な地区でもないし放っておいてもいいのだが、鉄血のハイエンドともなればそうもいかないのも事実。

エルピーダ指揮官は街の建設や運営、各前線基地の纏めなんかで余裕はないし、前線基地はウチ以外新入りで、まともな戦力がない。そうなればウチにお鉢が回ってくるのは当たり前で

「どうするの指揮官?」

「お前はくつつくなUMP9。UMP45何とかしろ」

「9」

「はい、45姉」

UMP45が仕方なさそうに注意するとUMP9が離れる。そのついでにお小言を言っているようだが、UMP9に反省した様子はない。そんなUMP姉妹は放っておきつつ、作戦を考える

「敵は明らかに私たちを意識しています。事実、パトロールの時は姿を現さず、パトロール後こちらのエリアに入ってきているのですから」

「だろうな。とは言え、あそこらへんのエリアは奪取したばかりで戦況が不安定だ。

このハイエンドモデルのせいと言うのもあるが」

そう言いながら、偶然撮れたハイエンドモデルが写っている写真を指ではじく。と

は言え、企業だった頃の鉄血の人形カタログデータには載ってないらしく、また交戦回数も少ないため名前が分からない。表向きはだ

「仮説の拠点でも作って、そこから攻撃する？」

「……まあ、それが一番だろう。ウチが受け持っているパトロールの地区は、エルピーダ指揮官に話を通せば、一時的にでも変わってもらえるだろう。流石に基地を空けるわけにも行かないから少数の人形は残すが、一気に攻撃を仕掛けて殲滅したほうがいいだろう。敵の狙いが何であれ、時間をかけすぎるともよくないからな」

40の言葉に、俺は判断を下す。幸い、腕の立つ技師はいる。ナビゲーターの補佐、予備戦力も十分だろう。各部署や部隊に話を付け、早速メンバーの選別に移ることにした

第53話

↳ UMP 45 視点

「9、どういうつもりなの？」

副官の仕事も終わった夜、部屋で休んでいた9にそう問いかける。この部屋は404小隊4人で使っているため少し狭いけど、他の二人または一人部屋よりは大きい作りになっている。もちろん、盗聴や監視カメラに対する対策もしてある。とは言ってもの、あちらからは何もしないと云った通り、そんなものはなかったのだけだ。でも、いろいろな秘密を持っている私たちには、備えが必要だ

「どういうつもりって？」

本当にわからないのか、首を傾げながら聞いてくる9。ここまで察しの悪い子ではないはずなのだけど…… そう思いながら、この頃の行動について聞く

「貴女の行動についてよ。司令室での仕事中は私が監視することになっているはずよ？ それなのにここ数日、指揮官にベツタリじゃないの」

私が困っているのをわかってほくそ笑む指揮官の顔が浮かぶがムカつくので考えないようにし、9に聞く。ポカンとした顔をした後、納得が行ったのか笑顔になる9

「あー、そういうことだったんだね」

「任務を忘れるなんて貴女らしくないわね9」

笑い合う私と9。でもどうしてだろうか、嫌な予感が止まらない。知っている笑

みなのに、どこかうすら寒い感じがする

「だって指揮官は監視対象じゃないから」

「……9?」

「家族を監視するなんておかしいでしょ?」

動きが止まる。9は今何て言った? 感情が乱れ、まともな思考が出来ない。家

族を監視? 誰が誰の家族? そんな私の状況を察したのか、それとも416自身が疑

問に思ったのか、静観していた416が会話に入ってくる

「9、私の聞き間違いでなければ、あの指揮官が家族と言っていたように聞こえたのだけ

ど?」

「だから、そう言ってるんだってば!」

もう!と本気ではないものの、怒っている9。そんな9を尻目に、私に視線を向け

てくる416。どういう事だというまで見てくるが、私だってわからない

「あの男は404小隊ではないはずよ」

「もー、そんなことわかってるってば」

「なら」

「でも、あの人は私と言う存在を一番最初に認めてくれた人。最初は気が付かなかつたけど、ヒントはくれたしね」

「……あの時、あの時のその会話はそうだったのね。ならなんでそう言わなかったの!」

そう言いながら9に掴みかかる416。そこまで来てようやくまくもに思考ができるようになった私は、9から416を引きはがす

「45!!」

「落ち着きなさい416」

こちらに何かを言つて来ようとする416を睨みつけ黙らせる。そして9に向き直る

「9、どんな些細なことでも報告してと言つたはずよ」

「45姉と出会つたときのことだったし、べつにいいかなーつて」

悪びれずに言う9に、内心舌打ちしつつ、注意をする

「それでもよ。それで、あの指揮官が家族つてどういうことなの?」

そこから本当に嬉しそうに9が語つたのは、私や416と出会う少し前のこと、あの可笑しな二人組から受けた依頼の事だった

「あの二人がああの時の依頼人？ 二人とも違いすぎるわよ？」

「分からないけど、変装でもしてたんじゃないの？」

「変装って、貴女ね……」

416がため息つきそうになるもぐつところさえ、こめかみを抑えていた。 確かに9

の話を経合すれば、ああの二人がああの時の二人組と言う可能性は高いけど

「でもああの二人だとは」

「名前」

「？」

「指揮官は私の本当の名前を知ってた、それが証拠」

くUMP45 視点 endく

第54話

UMP45からの視線が鋭くなった。特に俺は何かをした訳ではないのだが、薄く笑う事がなくなった。だが俺はそんなことを気にすることなく、UMP45を副官にして仕事をする

「これを機に部隊の再編をしてもいいかもな」

「まあ、最初のままだったからね」

今回の作戦にあたり、臨時で組み直した部隊表を見つつ、40と会話をする。各部隊の隊長や40などと話し合い決めた今回の部隊、これで鉄血のハイエンドモデルを殲滅する

「さて、お前達は今回の作戦のキモになる、よろしく頼むぞUMP45」

「……………よく指揮官も私達みたいな信用ならない部隊を作戦の中心に使う気になりましたね」

「信用なるならないは別としても、グリフィンの裏の仕事を遂行する力はあるんだ、その実力を買ってるだけだ」

「ふーん」

自分から話を振っておいて興味のなさそうに返事をするUMP45、40を見ると苦笑している。手に負えなくなつた俺は、書類を片付ける。今回の作戦に関する書類が多くなつたので、シーアが振り分けておいてくれているので大変助かる

「トウラベ指揮官、申し訳ないのですがこの書類なんです。が急に提出するようになってしまつて」

「すぐにチェックしよう」

シーアから書類を受け取り、素早くチェック。それが終わりシーアに返すと、急いで司令室を出て行つてしまう。余程急ぎだつたようだ、内容的にそんなに急を要するものでもなかつたような気もするが。そんな風に俺、40、UMP45の三人で仕事を続けていると、不意にUMP45が口を開く

「一つ、お二人に聞きたいことがあるのですが」

急な改まつた口調に可笑しさを感じ顔を上げると、UMP45がこちらを真剣に見ていた。何なのだろうかと思ひ40を見るも、40も心当たりがないようだ

「指揮官達は何年前か前、私達に依頼を出さなかつた？」

「.....」

何だ、そのことか。正直、もつとヤバいことにでも気が付いたのかと思つた。4

0の正体とか。まあ、40の正体に気が付いたのなら、UMP45がこんなに冷静に

問いかけてこないか。さて、UMP45の質問だが、404に依頼を出すのは全て40が勝手にやっていたので俺は正確な数を知らない。とは言え、心当たりがあるとなればUMP9の件だろう

「さて、いろんなところを転々としていたのでな、覚えていないな」

「私たちも知らなかった9の本当の名前を知っていたのに？」

「風の噂で聞いたんじゃないか？」

「とほけないで!!」

書類を続けながらUMP45の質問に答えていると、とうとう我慢できなくなったのか持っていた資料を床に叩きつけ俺に近づいてくるUMP45

「どういう手段を使ったのかは知らないけど、9をもとに戻しなさい!!」

「悪いが何もやっていないんでな、元に戻しようがない。どちらかと言えば、最初からじゃないのか？ 404とはそう言う集まりだろう？」

服を掴みガクガク揺らしてくるがそれを意に介さず、UMP45に言う。一瞬勢いが止まったものの、また揺らそうとしたところで40が止めに入る

「まーまー、そこらへんにしなよ45」

「部外者は黙ってて!!」

「はー……… 仕方ないか」

40がUMP45肩に手を置き、一拍おくとUMP45が倒れかかってくる
「随分と手荒な」

「あたい的にも少し見過ごせなかつたからね」

そう言うとう自分の席に戻り、書類を続ける40。俺は俺でUMP9を司令室に呼びつける

「指揮官、呼んだ？」

「来たか、UMP9。悪いがそこで寝ているUMP45を持って帰ってくれ」

「………何をしたの？」

こちらを訝しむような眼で見るUMP9。俺はそれに首を振ってこたえる

「なに、お前をもとに戻せと言われてな。そもそも、何もやってないと言ったら掴みかかってきてな」

「あー、私のせい？」

「別にそんなことないだろう」

「んー、ごめんなさい、指揮官。でも、45姉も色々と混乱してると思うから許してあげて？」

そう言いながら申し訳なさそうに司令室を去って行くUMP9

「色々混乱、ね」

第55話

「各員、調子はどうか」

無線機を手に取り、各部隊の隊長に通信を始める。UMP45とイザコザはあつたものの、問題なく準備も進み、ようやくチョコチョコしていた鉄血のハイエンドモデル、イントルーダーが潜んでいるエリアにやってきた。数日間をかけた周りの安全を確保し、仮設の拠点を築き、本丸を落とす準備が整ったと言う訳だ。ただ気になるのは、イントルーダーがこちらに来てから姿を現わしていない事だ。逃げた可能性もない訳ではないが、こちら周辺は遮蔽物はあまりなく、隠れられるところも少ない。情報収集は欠かさずにやっている為、潜伏している場所が分かっているので監視はしていたが、そこから動いた様子もない。流石に建物内に秘密の通路などがあり、そこから逃げられていたらお手上げだが

『こちら第一部隊、隊長のFALよ。問題なくいつでも行けるわ』

第一部隊、今回の中央アタッカーになる。構成としては、SMGであるスコピオンとステンMK-IIIを前に置き、アタッカーのFAL、それと戦闘が長引いても問題がないよう9A91、M1895で構成している

『こちら第二部隊、隊長のStG44です。準備完了です、いつでも行けます』

第二部隊は、第三部隊と共に左右から攻める形になる。構成はPPSh-41を先頭にM1911その後方にStG44、それに新人たちWA2000とスプリングフィールドになる

『こちら第三部隊、隊長のGew43、準備完了です』

第三部隊も第二部隊と同じ様な編成で、先頭にMP40、P38、その後方にGew43とIWS2000となる

『こちら404小隊、問題なし』

そして最後の404小隊。今回の作戦のキモとなる部隊だ。目標であるイントゥルーダーは屋内に陣取っている為、どうしても潜入する必要がある。まあ？別にその建物ごと吹き飛ばしてもいいのだが、それをやると報告と後処理が面倒なのでやらないのだが。なので、実力のある404小隊に色々な機器を扱える40を加えたのが今回の臨時の404小隊という訳だ

「何よりだ。さて、もう少しで作戦開始時刻になる。必要ないとは思いますが、もう一度作戦内容を確認する。シーア」

近くにいるシーアに声をかけると、今回の作戦内容を説明してくれる

『はい、トウラベ指揮官。皆さん聞いてください、今回の作戦は目的は鉄血のハイエン

ドモデルの撃破となります。スペックや性能、これは企業だったころの鉄血工業のカタログに載っていないため全くの未知数になります。また、グリフィンとの交戦記録も少ないですから十分注意してください。内容になりますが、第一部隊、第二部隊、第三部隊が敵の正面から攻め込み気を引きます。その隙に第四部隊、404小隊の皆さんが鉄血のハイエンドモデルが潜んでいるとされる建物に突入、制圧という形になります。敵の正確な数は分かりませんが、かなりの激戦が予想されます。残弾の確認、損傷状況等、気を付けて作戦に当たってください』

説明を終え、全部隊が返事をする。やる気は十分と言うわけか
「時間だ、作戦を開始しろ！」

第56話

（F A L 視点）

指揮官の号令と共に、作戦を開始する。私達の小隊は真正面からの撃ち合いになるけど、ステンはともかく、スコープオンはとも慣れてる。それに9A91やナガンもとても戦闘慣れしているので問題ない。止まるようにハンドサインを出し、前方を見る。一応、林の中なので視界はそれほど良くないものの、鉄血を見つけた。パトロールなのか、数はそんなに多くない。榴弾をセツトし、撃ち込むと同時にダミーや他の隊員も斉射する。もちろん、数が少なかった為すぐに片がついた。残弾のチェックを済ませ、前進する。それにしても、敵の数が少ないわね。リンクしているドローンからの映像を見ても、敵の数はそんなに多くない。建物の中に居るなら誘き出さないといけないけど、果たして……

「ま、いいかな。指揮官に目をつけられてる404小隊のお手並拝見という事で」

「なんか言ったF A L?」

そんなに大きな声で言ったつもりはなかったけど、先頭を歩いてるスコープオンは眩きが聞こえたようだった

「隊列を崩すなって言ったのよスコープオン。あと、弾を節約しなさいってね。この戦闘、長引くわよ」

「本当ですかFALさん？」

「何となくだから気にしなくていいわよ、ステン」

ちえーなんて言いながら戻るスコープオンに呆れつつ、私が言ったことを気にしたのか、ステンが振り返って聞いてくる。とはいえ、勘だから気にしないでいいって言うのだけど

「指揮官もそうだが、FALの勘もバカに出来んからの」

「スコープオンさん、気をつけてくださいいね」

「まったく……」

人の話を聞かない隊員に溜息をつきつつ、前進を続ける

くFAL視点 endく

く40視点く

爆発音が聞こえてから数十分、作戦位置についたけど敵が釣れる気配がない。40

4小隊の空気が張り詰めてるけど、特に気にせずタブレットを注視する。ドローン

の映像を見ても、敵は少ない。建物内に敵がいるのは確実なんだけど、それが釣れて

る気配もない

「隊長さん、どうするの?」

「敵の様子は?」

「ドローンで見た感じ、敵も気が付いてる筈なんだけどねー。釣れたないね」

タブレットを渡すとそれを操作し、状況をみる45。すると溜息をつきながら、アタイにタブレットを返してきた

「別のプランは?」

「あるよ」

そう言って地走タイプのドローンを出して走らせる。これには45たちも驚いたようだけど、あたいは気にせずドローンを走らせる。あまり管理のいい建物とは言えないようで、壁に穴が開いていたのでそこから侵入する。侵入すると同時に9が近寄ってきて、あたいの肩口からドローンの映像を見ているようだ

「9、少し揺れて操作し辛い」

「あ、ごめんごめん」

謝るものの、離れる様子はない。とはいえ、このくらいなら可愛いものなのでそのままにさせておく。建物内はやはり敵が大量にいるけど、何処か様子がおかしい。

戦闘音は聞こえているのに、中から出る様子が全くない。一応武装して、戦闘準備はしているみたいだけど

「9はどう見る、この状況」

「畏しくないと思うよ?」

9の顔を見て言うと、あっけらかんと言いつつ。まあ、あたかもそう思っていたけど。そんなやり取りをしていると、45が少しむすつとしたをしながらこちらに近づいてくる

「報告、ちゃんとしてくれる?」

「はいはい。敵は武装してるけど、中から出る気配はないみたい」

「近辺の掃討、自分が根城にしている拠点周辺で戦闘まで起こっているの?」

「うん、そのくせドロロンは…… ああ、うん、今破壊された」

45に状況を報告していると、タブレットの映像が信じられないものを映す。鉄血の人の形の視線がこちらに、つまりドロロンの方に一斉に向いたのだ。次にはブラックアウト。いくらなんでも、タイミングが良すぎる。辺りを見回すも、特に気配を感じない。こちらの情報が洩れてる? 即座にグリフィンのタブレットではなく、自分で作ったほうのタブレットを出し原因を調べる。でも、すぐに見つかった

「はーん」

「……ちよつと、いきなり何をしだすかと思えば」

416が小言を言ってくるも、それを気にせずに無線機のスイッチを入れる。 41

6や45が止めようとするも、それを躲し仮設拠点に無線をかける

『アコナイトー』

『40か。無線は目標を無力化したときにかける約束だったが、なにかイレギュラーがあつたようだな』

『この無線、ハッキングされてるよ。そうでしょ、鉄血のハイエンドモデルさん』

『……ふふふふふ、まさか気付かれるなんてね』

404の中に緊張が走る

『なるほど、道理で』

『ええ、貴方たちの作戦は丸聞こえだったわ。こんなに早くバレるのは予想外だったけど、たまにはこんなのもいいわよね。』
とは言葉、貴方たちの終幕は近いわ。さよ

うなら、グリフィンの指揮官さん』

『ククク、クハハハハハ！』

アコナイトに終幕は近いとか、阿保じゃないだろうかこの鉄血のハイエンドモデル。とは言葉、何も知らないのだから仕方ない。あまり45の前では使いたくはな

かつたけど、リンクしている上空のドローンで見ると、建物内や潜んでいた鉄血のノーマル人形がかなりの数出てきていた。四次元ポケットからUMP40あを取り出し、

チエツクを始める

「まさか、貴女!?!」

「うそ……」

無線の電源を切り、インカムに切り替え、アコナイトにかける

『アコナイト』

『40、この舐め腐った鉄血のハイエンドモデルに後悔させるとしよう。誰に刃向かったのかを』

『了解』

『この際404や監視している者たちは関係ない、本気を出せ』

命令を受け取った、あたいは404小隊に向き直る

「さて、生き残りたいならあたいの指示に従って。従わないなら、逃げるか死ぬだけだから」

くUMP40視点 endく

第57話

無線機を手に取り、全部隊に通信を入れる

「全部隊、聞こえるか？」

『こちらFAL、どうしたのかしら？』

『こちら第二部隊、stg44、どうかなされましたか指揮官？』

『こちら第三部隊、Gew43』

「この通信だが、相手に盗聴されていた。こちらの作戦は最初から失敗していたんだ」

全部隊が絶句している。とは言え、それで止まっている時間はない

「そして、大変残念な報せだが、我々は囲まれている。相手は盗聴がバレた時点で後方に潜ませていた部隊を前進させている。また、目標が居るとされる建物からは続々と敵が出てきている」

人形達からすれば絶体絶命のピンチだ、だがそんな事はお構いなしに通信を寄越してくるものはいる

『それで、指揮官は私達を絶望させるために、こんな通信を寄越したわけ？』

勿論FALである。だが、FALも俺が諦めるなんてことは思ってもいないだろう

「そんなはずないだろう。第一から第三部隊は作戦を少し変更する。敵の数を減らしつつ、目標の潜んでいる建物に突入、敵ハイエンドモデルを発見次第足止めしろ、絶対に逃すな」

『で、ですが指揮官！敵の増援は!?!』

「俺が出る。お前たちは気にせず、目の前の事に集中しろ」

『はあ!?! アンタ何言ってるかわかってんの!?!』

どうも新人達は心配性らしく俺の身を案じているようだが、そんなの関係なく指示を出す

「黙っている、これは命令だ。速やかに作戦に当たれ。それと、第四部隊はアイツに

任せてある。FALお前は一回この仮設の拠点に帰ってこい、すぐにだ。FALの

抜けた穴は、すでにM2HBを向かわせた。合流次第作戦を」

『了解!』

隊長や新人達以外は返事をする。タブレットを見れば直ぐに動き出したようだ。

これでイントルーダーの方は問題ないだろう。たぶん40と404が動くだろうしな

「シアア、ここの指揮は任せる」

「トウラベさん……」

シアーは複雑そうな顔をしているものの、こうするしかないのが分かっているのか、何も言わない。そんなシアーに苦笑しつつ、頭を撫でる

「なに、これくらいでは死なんさ」

「ですが、もしもと言うことも」

「ないな。なーに、俺を信じろ」

そう言つて少し離れ、四次元ポケットから武器を取り出す

「……………」

「それとも、安全なところへ送り届けるか、そんなに時間もかからんしな」

「それは………… 出来ません。トウラベさんからここを預かりますから」

「くくく、そうか」

意外にしたたかなシアーに驚きつつも、ちょうどきたFALに声をかける

「来たか」

「なにシアーを口説いてるのよ」

呆れ顔のFALに俺も呆れ顔でこう返す

「アホかお前は。シアー、ここは任せる」

「帰還をお待ちしています、トウラベ指揮官」

そうして仮設の拠点を飛び出そうとしたのだが、出口付近で呼び止められる

「あ、ちよつと待てトウラベ!!」

毎回、整備や修復のためにこきせているデールだ。デールは俺を見つけると飛びかかってくる

「どういうことだ、今回のこれは!!」

「敵の方が上手だったということだ」

「あーもう!なんでお前はそんなに冷静でいられる!!」

俺を離したと思えば、自分の頭を抱えるデール。忙しいやつだなと思いつつ、何故冷静でいられるかを答えてやる

「慣れだ、慣れ」

「指揮官、早く行きましょ」

待ちきれないのかFALが声をかけてくる

「もしお前が希望するなら、安全圏まで行つてやつてもいいぞ? シーアはここに残るらしいが」

笑顔で言い放つてやると、こちらを睨んでくるデール

「残るに決まつてるだろ!!僕がここからいなくなったら、誰が傷ついた人形の面倒を見るんだ!その代わり、今回は法外な値段をとつてやる!!」

「元々だろうに」

「うるさい！」

そう言うと同時に去って行くデール、多分持ち場に戻ったのだろう

「まったく、行くわよ」

「ああ、行くでしょう」

第58話

（416視点）

こんな事が、こんなことがあっていいはずがない。目の前の光景を疑わずにはいられなかった。UMP^彼40^女はダミーを連れず、UMP40とサブ武器のハンドガンで確実に敵を倒している。GuardやDragonだろうが、確実に、それも一発で、だ。確かにUMP^彼40^女とは行動を共にしたことがある、だがここまででは……

「ほら、ボーっとしてる時間はないよ」

こちらに銃口を向けたと思えば、ためらいなく撃ってくるUMP40。でもその銃弾は私を狙ったものではなく、私に近づいてきて居たBruteに向けられたものだった。私がそれに気が付いたのは、Bruteが撃たれて倒れてからだ。これをノールックでやってのけるのだ

「ついでに行くのがやっとな……」

「んー、今回は仕方ないかなー9。アコナイトに本気でやれって言われたし、それにあのハイエンドモデル…… 面倒だからイントウルーダでいいや、舐めた真似してくれましね」

こんなふうに暢気にしゃべっているUMP40だが、敵を撃ち漏らしたりもしない。私たちを守りながらこんな芸当をやっているのだ。思わず歯を食いしばる。私は完璧なはずなのに

「さて、こんなところかな？」

突然加速して飛び出していったUMP40を追いかけ、ようやく追いついた時UMP40は鉄屑の上に座りタブレットをいじりながら呟いた。全員、特に足の遅いG11がゼイゼイ言いながら追いつく間に周辺の敵を倒していたらしい

「それじゃあ、今度は建物内に突入だ！」

「建物内って……その、イントウルダ？　が潜んでる？」

「そうだよ、それ以外に何があるの？」

「正気とは思えないわね」

9の言葉に不思議そうに答えるUMP40を私は思わず鼻で笑ってしまう。敵にバレてるにもかかわらず、敵の本拠地に突っ込むなんて正気の沙汰じゃない。他の部隊と同時に突入するならまだしも、戦闘音は断続的に続いている。この感じだと、味方の部隊はまだ建物付近にもついてないはずだ

「まー、別にここに残るならそれでも構わないけどね？　それならあたい一人で突入すればいい話だし」

「なら、ここに残ろう、そうしよう！」

UMP40の言葉に賛同したのはG11だ。コイツ、疲れているからって、こんな挑発まがいのものに乗って！思わず尻を蹴飛ばそうとしたけど、思いとどまる

「416の意見に賛同ってわけじゃないけど、せめて他の部隊が合流するまで待つてもいいんじゃないかな？ ねえ、45姉」

「.....」

UMP40^彼が現れてから、ずっと黙りこくってる45。45達の何があつたのか知らないけど、しっかりしてほしいものだ。ここは戦場のど真ん中で、45は404^私小隊^{たち}の隊長なのだから。9がこちらを見るが、私は首を振って、改めてUMP40をみる「まあ、9が言う事には一理あるけど、内部、それもボスが撃破されれば鉄血内に動揺が走るだろうし、それこそ叩きやすくなると思うんだよね」

「味方は？ その叩いてる間に物量で押しつぶされるわよ」
「それなら問題ないよ、ほら」

そう言っただけで持っていたタブレットを投げ渡してくるUMP40。それを受け取り見てみる。どうやらドローンの映像のようだが、あちこちで爆発が起こっていた。拡大して見てみるとそれはFALが起こしているようで

「なに、これは？」

「FALのスキルだね。本気でやれつてアコナイトが言ったから、景気よくやつてるみたい。因みに、その赤くなつた範囲があたい達が敵を殲滅した範囲ね？」

スキル、確かにそんなものはあるがあきらかに起こしてる爆発の数も威力も、報告とは桁違いだった。何らかの方法で、強化した？　だが、それを考えるのは今じゃない。

UMP40がいつた瞬間、一部が赤く表示される。私たちと言うよりほぼUMP40がやったのだが、殲滅した範囲は三分の一のところだろうか。それにFALが殲滅してる範囲を足せば、三分の二くらいだろうか？　話では指揮官も出ていってたが……

「指揮官は……　剣で戦ってる？」

「それにしたつて、ありえないわよ」

指揮官の姿を探せばすぐに見つかった。9の言う通り、指揮官は剣で戦っていた。

鎧を着こみ、戦っているのだが……　いや、そもそも戦いにすらなつていない。

剣を振るえば、地面はえぐれ、鉄屑達は宙を舞い、本当の鉄くずになる。これでは「一方的な虐殺よ……」

〈416視点　end〉

第59話

「終わってみれば呆気ない物だな」

使っていた安物の剣を四次元ポケットに投げ、近くの岩場に腰を下ろす。動く物は殲滅し終わり、タブレットを見ても敵の反応は無し。後は建物内に侵入した40達と、その建物の正面入り口から出てくるの敵だけだ。とは言っても建物内はともかく、正面で戦っている方はそのうち終わるだろう。新人も混じっているとは言え、第一から第三部隊はそこまで多くは無いものの作戦をこなしているのだ

「なにサボってるのかしら？」

「相変わらず失礼な奴だな、FAL」

銃を肩に担ぎつつ、俺に近づいてきたのはFALだった。FALの様子を見れば、特に怪我也無いようだ。ただ、少し疲れているようだ

「ずいぶん派手にやったようだな」

「余り時間をかけ過ぎても、他の子達が大変でしょ？ それに、本気でやって良いと言ったのは貴方よ、指揮官」

「その通りだ」

そう言つて立ち上がり、ニヤニヤしているFALに近づく。とりあえず、頭を撫でて歩き出す

「よくやつてくれた」

「……別に、あの子たちの為よ」

返答までに時間がかかったようだが、気にせず話を続ける

「それにしても、よかつたな指揮官？」

「何がだ？」

「私のスキルの話よ。あれだけ派手に使つてたんだもの、あの二人にバレてるわよ。

それに、404にも」

「それに関しては別に構わんさ、特殊な改造をしたと言えば済む話だ。こちらには40が居るしな、適当なデータなどお手の物だ。鉄血のハイエンドモデル等女に関しては

少し面倒だが、こちらを敵と見るのなら然るべき手段を取るだけだ。どちらにしろ、

食料の件や資材や資金の方で前から本部に呼ばれてるしな」

「はあ…… そう言う大事な要件を無視するか、いえ、今更ね」

FALは呆れたような声を出していたが、言つても無駄なことがわかつたのか、それ以上は何も言うことはなかつた。そんなふうにはFALとお喋りしていると、インカムに通信が入つた

『アコナイトー』

「40か、終わったのか？」

『うん！目標であるイントウルルータは撃破したよ』

「了解した、よくやってくれた40」

『それほどでも。それに、まだ作戦は終わってないしね』

「確かにその通りだ」

『それじゃ、後でね！』

インカムの通信が切れる。さて、もう作戦も大詰めか。そう思いながら無線機をとる

「全部隊に告ぐ、今回の作戦目標である鉄血のハイエンドモデルは第四小隊である404が撃破した。後は残る敵の殲滅だ。各員、最後まで気を抜くな」

第60話

作戦を終え、ようやく基地に戻って来た。基地内はなんの変わりもなく、エルピーダ指揮官はよくやってくれたようだ。

司令室の椅子に座り、ようやく一息をつく。

仮設の拠点を作るために周辺の鉄血の一掃、仮設拠点の建設。そこから情報を改めて収集し、作戦の決行。こうやって基地に戻ってくるまで、一週間ちよつとかかった。

流星に夜も遅い為、人形達は先に休ませた。本来ならパトロール任務等細かい仕事があつたのだが、今日明日は休んでくださいと、エルピーダ指揮官に言われたので、言葉に甘えてゆつくり休ませてもらおう。それに伴い人形達にも休みを与えたので、忙しいのは明後日からだ

「はあー、やっと帰ってこれたー。仮設拠点のベッド硬すぎー、ようやくふかふかのベッドで寝られるー」

少々態度が悪いが、自席の机の上に顎を乗せながら40が眩く

「まあ、今回は少し作戦が長かったから仕方ないけど、早くシャワーを浴びてゆつくりし

たいわね」

髪や自分の姿を見て、そう呟くのはFALだ。二人とも作戦が終わり気が抜けたようだ

「二人はもう自室に戻って構わんぞ」

「あら、優しいのね？」

「アコナイトは？」

FALはニヤニヤしながら、40は不思議そうに聞いてくる。帰って来たと言っても、まだ厄介事が残っている

「404とあの二人を呼び出しているんでな、俺はここに残る」

「ならアタイは残るー」

そう言うやいなや、机から離れ俺に抱きついてくる40。そんな俺と40を呆れた顔で見るFAL

「はあ…… まあ、いいわ。それで、私も残った方が良いのかしら？」

「お前に任せる」

どうするか迷っているようだが、そんなFALに40から声がかかる

「何FAL、羨ましいの？」

「……………」

一瞬動きが止まるFALだが、すぐにこちらに、と言うよりも40の後ろに回る
「何をくだらないことを言ってるのかしらね？」

「ちよっ!!? イタイ、イタイ!!」

俺からはよく見えないものの、FALは何かしらの罰を40に与えているらしい。
何とも仲のいいことだ。俺の近く、それも40が耳元で騒がなければ、の話だが

「そこらへんにしておけFAL、騒がしい」

「チツ、命拾いしたわね40」

「うええ、そこまで怒ることないじゃん、まったくと……」

俺が文句を言うとFALも40も離れたようだ

「それで、どうするんだ？」

「残ることにするわ、貴方たち二人だどこか心配だしね」

FALがそう言うと同時にノック音がする。　どうやら呼んでいた404と二人が
来たようだ

「はいれ」

第61話

部屋に入ってきたのは、404小隊とM1895と9A91である。スパイをしていたのはM1895と9A91だったのである

「個別で呼び出しとは、何か大事な話があるみたいじゃの？」

「何かご用でしょうか、指揮官」

「作戦終わりで疲れているとは思いますが、早めに済ませたい用件だったんでな」

二人はなぜ呼ばれたのか分からないからか、少し不思議そうな顔をしていた。いや、分かっている顔に出すわけにはいかないだけか。

逆に404小隊は用件が分かっているのか、沈黙を保っている。若干一名視線が40の方に向いてはいるが、今は別の件だ

「今回の件、上級代行官殿にどう報告するのは自由だが、余り面倒をかけないでくれよ？」

「なんのこじや？」

「指揮官？」

惚けようとするM1895と9A91に40が写真と、タブレットを持っていく。

写真は人気のないところで無線機を持つM1895と9A91が写っているもので、タレットの方はその時の音声が入っている。

一方、404小隊は惚ける事もせず沈黙を保っていた。40の電子戦能力などを見ている404小隊だ、喋れば不利になる事を分かっているのだろう

「……………ふう、やはりバレておったか」

「……………」

写真や音声を聞いたM1895はどこか諦めた様子で溜息をつき、9A91は俯いていて表情を窺えない

「いつからじゃ？ いつから気がついておったのじゃ？」

不思議そうに聞いてくるM1895だが、そもそもだ

「いつから、ね。そもそもだ、社長のクルーガーはともかく、上級代行官殿は最初から俺のことを疑っていたんだ、ならそういう可能性も考慮してかかるべきだろう？ スパイ出来るような器用な人形が居なかったのか、一応程度だったのかはわからんが、最初はお前しか居なかったわけだが」

「なるほどのう……………」

うまく潜り込めたとおつたが、そもそも最初から疑われておつたとは……………」

そうやってヤレヤレみたいな顔をするM1895、バレたというのに特に気にしてい

ないようだ。 そんな風にM1895と話していると、いつの間にか顔を上げた9A91が控えめに聞いてくる

「あの、指揮官…… 指揮官は最初から私がスパイだと分かっていたんですよね？」

「最初からと言うと語弊があるが、お前も聞いたと思うが、M1895と上級代行官殿の会話は盗聴していた。 ならばその後配属された新人がスパイという話になる。

まあ、あまり時間をかけずに特定できたがな。 お前だけ動きが違ったからな」

「そう、なんですね…… でしたら、このスキンは、こういう状況を見越して？」

9A91が与えたスキンを指しながら、訳のわからない事を言ってきた。 何がこういう状況を見越してなのかわからんが、その表情は真剣だ

「お前が何を言いたいのか分からんが、そのスキンはあの制服だと色々な意味で目立つから買ひ与えたものだ。 別に他意などはない」

「そう、ですか……」

どこかほっとしたような声をあげたものの、表情は優れない9A91。 そんな9A91を複雑な表情で見つつ、M1895が俺を見て聞いてくる

「それで、むしろをどうするつもりなんじゃ？ 解体でもするのか？」

「可能性の一つではあるな。 最初にも言ったが、上級代行官殿にどう報告するかは自由だ。 ただし、もしもその時に面倒な報告をすれば本社がなくなるかもしれない」

「……指揮官の場合、冗談ではすまんの」

「とは言え、別に変な報告をしなければお前たちに何かするつもりもないということだ。お前たちは貴重な戦力だ、みすみす手放したり解体したりするのは惜しいからな」

「……」

沈黙するM1895。先に答えを出したのは、9A91だった

「私は、私は指揮官について行きます。色々な基地で、色々な指揮官を見てきました。

でも、私のことを気にかけてくれるのは指揮官だけでした。だから」

「なら、これからもよろしく頼むぞ9A91」

「はい！指揮官！」

9A91はこれで解決した、残るはM1895だが

「はあ、よし決めた！なんだかんだ言っただけでの生活も悪くなかったの、お主について行こう指揮官」

「ならよろしく頼む、M1895」

第62話

M1895と9A91と細かい打ち合わせをし、二人は先に返した。さて、次は黙りを続けている404小隊だ

「それで、お前たちはどうするんだ、さっきの二人のようにグリフィンを裏切るか？
まあ、あの二人のように元から忠誠を誓ってたわけでもないだろうが」

「……………」

「黙るか」

「何も言っていないとなるとお手上げだ。帰ってきてすぐに呼び出した為報告はされてないと思うが、報告されたら面倒なことには変わりない。いつそ投げ出しても良いのだが」

「私は、別に良いと思うよ？ 危険な裏の仕事をやらなくて済むし、ここの基地の所属になれば、もう他の基地で白い目で見られなくて済むし。もちろん、みんなが嫌つてい
うなら、それに従うけど」

「最初に口を開いたのはUMP9で、正直に自分の意見を述べていた
「正気なの？ 私ほこっちの基地にいた方が危険な気しかないわ」

そんな9の意見に待ったをかけるのは416だ。彼女らしい冷静な判断だ。黙りを決め込んでいるのはUMP45とGr G11だ。UMP45に関してはそもそも話を聞いているのかすら分からないし、Gr G11に限ってはこの状況で寝ている

「そう？　今回は40が守ってくれたけど、私達が強くなれば別に問題ないと思うんだけど」

「強くなれば、ね。そんなに直ぐに強くなれる訳ないし、その強くなる間に敵が来れば、遠慮なく私達を使うんでしょ？」

そう言つて俺に視線を超越す416

「当たり前だ。この基地に所属する以上、程度の差はあれど働いてもらう。働かざるもの、食うべからず、だったか？」

俺がそう言つと、満足そうに416は頷き、UMP9に向き直る

「だそうよ？」

「それは、そうかもしれないけど……でも」

「ここに居れば、危険が増えるだけよ。今回の40や戦闘データ、その他データだけでも、今回ヘリアストンから受けた任務に対して、十分すぎるぐらいだわ」

「……416は指揮官を売れつて言うの？」

「どちらが大切かって言う話よ。それに指揮官は私からすれば家族じゃないもの」

何やら剣呑な雰囲気になってきた

「争うのは結構だが、ここでやればどうなるかわかってるよな?」

四次元ポケットから剣を取り出し、切っ先を二人に向ける。すると二人は黙りこむが、やはりこのままと言うわけにはいかないな。UMP45を横目で見るも、やはり視線は40に向いたままで、この場を収めることはできないだろう

「やれやれ、自分の小隊のことなのだから自分らで何とかしてほしいところだが」

「こうなった原因が何を言ってるのよ」

剣を四次元ポケットに仕舞い、席から立ち上がるとFALから毒舌が飛んでくる。

それに特に返事をすることなく、席の下に合ったシェルターの一つを開ける

「では40、お前の妹分とそこで寝てる奴を任せよう。UMP9と416はついてこ

い」

そう言ってきつさと下に降りていく。その後を慌ててUMP9、416、FALの

順でついてくる

第63話

「指揮官、ここは？」

「なに、司令室で始められても困るからな、ここに案内した訳だ、それに別件もな」

シエルターの階段を下り、辿り着いたのはいつものただっ広い空間だ。武器がないならFALに取りに行かせればいいし、始めてもらっても構わんが、先に用事を済ませることにする。四次元ポケットから全てを終結させる剣を取り出し、サンドバッグを取り出してセッティングをする

「何しに来たかと思えば……いいの、この子達に見せても？」

俺の様子を見て何をするのか理解したのだろう、呆れた表情をしながらFALが聞いてくる

「ざつき言つてた事も本当だが、二人が言い争つていた問題も解決するだろうか？」

「まあ、確かにそうなんだけどね」

FALも通つた道だからか、納得はしているようだが、呆れ顔だ。ともかく、これで殆どの準備は整つた

「ざつき言つていた問題が解決する？ それってどんな事？」

「なに、お前らのやる気があれば、短期間で強くなれる。それこそ、FALや40のようにな」

UMP9は気になったのか、目を輝かせて聞いてきた。俺が答えてやるとワクワクした様子だが、反対に416の反応は冷ややかだ

「ふつ、そんなに簡単に強くなれば、誰も苦労しないわ」

「あら、貴女の常識で物事を測らない方が良いわよ416。そもそも、指揮官に常識は通用しないわ。貴女も分かっていると思っただけど」

40は自分から飛び込んだんだし、鉄血のハイエンドモデル達は従順にさせるついで行ったから別として、FALは半強制的にやらせたからな、否定されるのも面白くないのだろう、416を挑発していた。416は416で、FALを睨み付けている

「FAL、挑発するな」

「あら、そう見えたかしら？ それならごめんなさいね？」

たいして悪びれた様子もなく、謝ってくるFAL。その様子に416はさらに視線を鋭くするが、もう面倒なので放置だ

「さて、さつきも言ったが、この方法は短期間で強くなれる。まあ、辛いがな」

そう言つて四次元ポケットからイントウルーダを出し、適当に痛めつけ、サンドバッグに吊るす

「ねえ、指揮官。なんでこのガラクタを？」

「必要な事だからだ。さて、そろそろ起きるといい」

全てを終結させる剣を腹に突き刺すと、呻き声を上げながら起きるイントウルード。その様子を見てUMP9と416は驚いたようだ

「40が撃破したはずじゃなかったの!？」

「指揮官、貴方を考えてるの!？」

「騒ぐな。気分はどうかな？」

「ふふ、最低の気分だわ」

どうも余裕があるのか、俺の質問に笑って答えるとイントウルード。腹に刺さってる全てを終結させる剣を握り、少し捻ってやる。すると少し呻く

「立場が判っていないようだな？」

「立場？ 私が上で、貴方達みたいな人間が下ってこと？」

全てを終結させる剣を腹から抜き、左足の膝から下を切り捨てる。そして、さつき刺さっていた位置とは違う位置に全てを終結させる剣を刺し直す

「貴様が持っていた情報や権限、すべて40が抜き取った。貴様に価値はない、ここで生かしているのはさつきの舐めた態度の礼でもあるんだ、それを勘違いするな？」

「.....」

立場が分かったというよりも、迂闊にしゃべればこの気まぐれがなくなると思ってるらしく、黙ってしまおう。まあ、それがそもそもその勘違いなのだが

「で、刺したままじゃ意味がないでしょ、それ」

FALが指さしたのは全てを終結させる剣。確かにそうなのだが

「ふむ、UMP9その剣でその鉄血のハイエンドモデル、好きに切り刻んでいいぞ？」
「？ それで強くなれるの？」

「それだけでは流石にな…… まあ、そのうち変化する」

「んー、よくわからないけどやってみるね！」

そう言うのと元気に全てを終結させる剣でイントウルダを切り始めるUMP9。

とは言え、ちゃんと構えていないからか、剣がブレブレだ。本人が楽しそうだから良しとしよう

「正気を疑うわね、あんな意味のない事を」

「なに、すぐにわかるさ」

そんな俺を侮蔑するような眼で見ているのは416

「そう言う趣味なのかしら？」

「なに、舐めた真似をしてくれたんだ、これぐらいはな。それに、恐ろしいのはこの後だ」

「ふん、その前に死ぬでしょあのハイエンドモデルが」

その416のつぶやきに特に答えず、その時が起こるのを待つ。都合のいいことに、それはすぐに起こる

「刀身から何かが？」

「UMP9、その剣を俺に投げろ」

「う、うん」

投げ渡された全てを終結させる剣を軽くイントウルダにふるうと、何処からともなくうなり声が聞こえる

「FAL、準備は？」

「もちろんできてるわよ？」

すでに武装を済ませ、スタンバっているFAL。二人は声の出所を探しているようだが、そんなに周りを見回さなくてももう現れている

「さて、これが強くなれると言ったものの正体だ。さあFAL、狩りの開始だ」

第64話

〈40視点〉

アコナイトとFALは険悪な雰囲気だった9と416を連れて、シエルターに潜って行った。残されたのはアタイと45、そして寝てるふりをしてるGr Gil。たぶん、45を除けば一番策士なんじゃないかな、Gr Gilは。ともかく、アコナイトは気を使ってくれたみたい

「貴女は本当に40なの?」

手を伸ばそうとして、引っ込めてを繰り返しながら言う45。うーん、よく見てきたけどやっぱり本質は昔と変わらないみたい。そんな45に苦笑しつつ、質問に答える

「そうだよ? あの時45を逃す為に死んだアタイだよ」

「私は!」

「別に恨んでないよ。今はともかく、あの時はああするしか方法がなかったから。45は生き残ることを選んだ、アタイがそう仕向けたとしてもね?」

「.....」

思い詰めた表情で何かを言おうとした45だけど、その前にアタイが遮る。別に責めるように言っただつもりはなかったのだけど、45にはそう聞こえてしまったらしい。ううん、違うかな。多分、45は未だにあの時のこと、私を撃つことを後悔しているんだと思う。だから、私に責めて欲しかったのかも。とは言え、さつき言ったのは本心だ

「それで、さつきまでの状態はなに？ アタイを見てから惚けて、あのままじゃ隊の全員が死んでたよ？ まあ、416がいい感じに補佐してるから、大丈夫だとは思うけど」
「それ、は……」

そう言っただけで俯く45。自分でも判っているのだろうけど、あの場で惚けるなんて自殺行為もいいとこだ。416や9が補佐してたからいいものの、隊長は45なのだから

「アタイが生きてて動揺したのはわかるけど、すぐに切り替えないと」
「でも！」

「でも、何も無いよ。あたかもアンタももう昔とは違うんだ。あたいはアコナイトと一緒にいくことを選んだ、アンタは404として、誰の下にもつかず生きることを選んだ。いつまでアタイの幻影を追いかけ続けるつもりなの45」

45にはキツイかもしれないが、いつかは言わなきゃいけない事だ。たぶん今まで

は気にしていなかっただろうけど、今回あたいが生きてるのが分かってそれが表面化してきてる。今だって、あたいに手を伸ばしてる。あたいだってその手を取りたいとは思うものの、それをしてしまつては45が駄目になってしまう。それに、あたいは選んだから45ではなく、アコナイトを。まあでも、アコナイトに言わせればまだ未練があるみたい。任務を優先的に斡旋したり、45たちの動向を追っていたり。とは言え、それを咎められたこともなかったけど

「言つたはずだよ45、数えきれないほどの試練があるって」

「これもそうだっていうの?」

遂に堪えきれなくなったのか、泣き始めてしまう45。でも、それで追及を緩めるわけにはいかない

「そう。あたいやアコナイトのことを正直にグリフィンに報告するか、誤魔化して報告するか。それか…… このままグリフィンを裏切つてあたいやアコナイトと共に来るか、かな」

く40視点 endく

第65話

終末を無事に終え、司令室に戻る。

この頃は書類仕事や指揮が忙しく、久しぶりに終末でモンスターを狩ったからか、調子に乗ってやり過ぎてしまった。416は震えており、こちらを恐ろしいものを見る目で見っていた。UMP9は俯いている為表情は分からないが。あの終末狩りに慣れているFALが疲れて、途中から抜けたぐらいだったからな、今度からは自重できたらするでしょう。

さて、司令室に戻ったのはいいが、何故か無表情が二人いた。Gr Gilは相変わらず寝たままだが、二人に何があったのやら。

「話は終わったか？」

「あ、アコナイト！終わったよー」

俺が声をかけると無表情から笑顔になり、抱きついてくる。それを軽くいなしつつ、

UMP45に声をかける

「まあ、話はこんなところだ、ゆっくり休むといい」

「はー」

さつきまでとは違い、今回は反応したようだ。　とは言え、ちゃんと話を聞いているのか、無表情の為判断できない

「どのように上級代行官殿に報告するのは知らんが、穏便に済むことを願うよ」

「……………失礼しました」

司令室から出ようとする404の人形達の背中に声をかけるも、特に返事が返つてくることはなく退室して行つた

「それで、何かあつたのか？」

「ん？　何が？」

「そんな笑顔で俺を誤魔化せると思つたか40」

気配が遠かつたのを確認して、40の顔を見ながら言うも誤魔化される。　だが、そんなんで誤魔化される俺でもなく、再度聞くと笑顔が崩れる

「……………少し45に酷いこと言つたかなつて」

そう言つて座っている俺に後ろから抱きつく40。　その様子を見てか、隣に控えていたFALが部屋を出て行くとうとする。　そのまま出ていくのかと思えば、扉前で振り返り口パクで何かを伝えてきた。　貸し一よ、この借りは今度の休みに買い物に付き合えばちやらよ、か。　俺の返事も聞かずにそのまま出て行ってしまったFALにため息をつきたくなつたものの、そのまま堪えて話を続ける

「部屋に入った時の無表情だった理由か？」

「あー、45無表情だったもんね」

「お前もだ、40」

「え？」

まさか自分も思っていないなかったのか、驚いた声を上げる40。でも、納得したのか苦笑していた

「あはは…… まあでも、そう言う事なのかな」

抱き着く力は少し強くなり、その体は少し震えていた

「アコナイトの言う通り、やっぱり45のこと気にしてるみたい。今日もさ、伸ばされた手を取りたいって、45のこと助けてあげたいって思っちゃったんだ」

「なら、45の方を選択すればいい話だろ」

「それはだめ。 それだけはだめ」

抱き着く力は強くなり、少し苦しいほどになる。 とは言え、別に苦でも何でもないのだが

「そもそも、だ。 俺みたいな人間に、そう言う相談はするものでもないだろう」

「相談……… ではないかな。 たぶん、アコナイトに聞いてほしかったんだと思う、

あたいの胸の内を」

「そう言うのも含めてだ」

一度40を離れさせ、40と向き合う。 どうやら泣いていたようだが、気にせず話し続ける

「俺たちは何時だつてやりたいようにやってきた。 なら、これからもそのようにやっていくだけだ」

不安げに揺れていた瞳は、俺の言葉を聞くなりポカンとしたものになる。 本当に、こいつはよく表情が変わる。 それを少し面白く思いながら、頭を撫でる

「やりたいように……ふふ、そうだね！」

ようやく見せた笑顔は、いつものように暖かな笑顔だった

第四章

第66話

今回の作戦の書類の提出も終わり、通常通りの業務に戻った。とは言うものの、イントウルダを倒したことによりこのS9地区もかなり手広い地区になってしまった。

エルピーダ指揮官は配属された新人達の教育で大忙しらしい。俺やエルピーダ指揮官は本部で研修を少しやり、S9に配属され、後はご勝手にみたいな感じであったが、エルピーダ指揮官がそれでは新人たちが右も左も分からず苦勞すると本部に提言して、今回の実地での新人教育になったようだ。これが上手く行けば、他の地区でもやるとか。

なので、俺の基地はその新人研修が終わるまで手広いS9をパトロールしなければならぬ。一応四部隊あるので、ローテーションを組めば1日で終わらないこともない。一応新人研修をやっているとは言え、ホープ指揮官もパトロールの人員を出してくれている為、無理なくやっていける。

なので、適当に仕事を分配しつつ、俺は暇な時間を作り厨房に来ていた。もちろん、

スプリングフィールドに頼まれていた料理を教える為だ

「大概はレシピ通りに作れば味はそんなに変わらないと思うがな」

「確かにレシピ通り作れば美味しいでしょうけど……」

「そもそもお前は余り料理を作った経験がないのだろうか？　ならレシピ通りに作れ、初心者アレンジを加えると碌なことにならないからな」

「うっ」

俺は視線を移動させ、食堂の机に突っ伏しているスコープオンを見る。

スプリングフィールドも俺に釣られてスコープオンを見ると、言葉に詰まっていた。スコープオンがこうなったのは、自分の食い意地とスプリングフィールドの料理を食べたからだ。偶然通りかかったスコープオンを呼び止めたのは俺だが、誰の料理か気にせず食べ、挙げ句の果てあきらかに食い過ぎのはずなのに俺の作った料理まで食べていたのだ。まあ、スプリングフィールドの料理を食べていた時はあー、とか、うーん、とか微妙な声を出していたが

「何個かはい線言っではいたが、やはり最初はレシピ通りに作った方がいいだろう」
「……そうします」

エプロンを外しつつ、厨房の中から出る。俺のように食べたらずくようなものが出ないだけマシだろう。そもそも、こんな面倒な工程を踏まなくても、すぐに料理で

きたわけだが。少し懐かしく思いながら、とりあえずスコープオンの様子を見てみると、少し苦しそうだが、寝ている。

スプリングフィールドも休憩なのかエプロンを外し、コーヒーを淹れたようだ。俺に一つ差し出し、座るように勧めてくる。スコープオンの隣に腰を下ろし、スプリングフィールドは対面に座る

「コーヒーは相変わらずいい出来だな」

「少し含みを感じるのですが…… 本部に居た時少し同型に習ったんです」

苦笑しながらコーヒーを飲むスプリングフィールド。その時に料理とかも教われればよかったんじゃないかと思いつつ、俺も一口。そんな風にまったりと時間を過ごしていたのだが、スプリングフィールドは俺に何か用があるのか、チラチラとこちらを見ていた。言いたいことがあるなら言えばいいだろうに、そう呆れながら聞いてみた

「何か用があるんだろう?」

「えっと、この間の作戦のことで、少し……」

「で?」

「指揮官のことは本部で少し聞きました、元傭兵だとか。でも、それでもあの鉄血の大群に先陣切っていくのは……」

「普通なら、な。俺は他の指揮官と比べれば、かなり異質な存在だ。慣れろ」

「ええ……」

スプリングフィールドは引いているようだが、そう言うものなのだ。 事実

「そもそも、私たちと初めて会ったときなんか戦場のど真ん中だったからね」

「スコープオンさん」

「もう大丈夫そうだな」

起きたスコープオンが話に加わってくる

「いやー、何ていうか食べすぎたね！ とにかく、私たちから言わせれば、指揮官が直接戦った方が一番早いと思うよ？ その場合、私たちの出番がなくて困っちゃうけどね！」

「だ、そうだ」

「でも、指揮官は一人しかいないんですし…… 私たちはバックアップがあります

が、指揮官には……」

「うーん…… そもそも、指揮官が死ぬとことか想像できないんだけど」

「そもそも、そう簡単にくたばるんだったら、とつくの昔にくたばってるな」

結局、この話し合いは平行線だった

第67話

新人研修も少しずつ終わり、ウチの基地のパトロール範囲も通常のものに戻り始めていた。

なのでこれを機に、部隊の再編など色々な事をやりたいので、パトロールなどの通常業務をこなしつつウチの基地に所属する人形の実力を再度測り直していた。大規模な作戦から、荷物の護衛など、様々な任務をこなしている為、皆練度が高い。個々のバラツキはあるものの、そこをバランスよく組み合わせるのも指揮官の仕事だ。

そう40が言っていただけなのだが

「……………」

「……………」

その中でも、今回は成績が伸び悩んでいる者たちを別々に呼び出した。今回はIWS2000だ。IWS2000は自分で訓練等をやっていたはずなのだが、今回の成績はいまいちだった

「そんなことは無いと思うが、一応聞いておこう。どうした、調子が悪かったのか？」

他の基地ならまだしも、ウチの基地ならあり得ない話だ。気持ち的な浮き沈みはあるだろうが、整備なら天才であるデーブルが居る。アイツは俺が嫌いだが、人形に関してはその事を持ち出すようなものではない

「ええと、あの、その……」

言葉をつまらせるIWS2000、自主練も積極的に取り組んでいるし、数は少ないものの、この基地所属のライフルの先輩に実戦の事を聞いたりしている。その中でこの結果だ、本人が一番納得していないだろう。今にも泣き出しそうなIWS2000だが、その理由を俺は知っている

「ふう…… お前が自主的に訓練場などで訓練をしているのは知っている、他の人形から報告も上がっていたし、俺も何度か見かけたからな」

「……」

俺がそう言うと、何故か泣き出してしまった。この娘は何を想像したのか…… 兎も角このまま泣かせたままでは、FALからの視線がマズいので話を続ける

「勘違いをするなよ？ 別にIWS2000、お前をどうにかするつもりはない。ただ、お前のやっている訓練は自分で考えたものか？」

「ぐす…… ええと、そうです。一応先輩にもアドバイスを求めましたが」

「そこだ。お前の銃は、少し特殊だ、スキルも含めてな。だから、自分の訓練法だけ

ではどうしても限界が出る。そこでこれだ」

そう言って取り出したのは、訓練資料と言うものだ。俺もよく知らなかったのだが、人形のスキルも段階的に機能を開放していくらしい。人形が指揮官がそればかりに頼らないように、とか、練度の低い人形だと十分に扱えないだとか、色々な理由があるようだが。この訓練資料というものは、その段階的に機能の解放を色々とすつ飛ばし、本来の機能を使えるらしい。もつとも、それは指揮官の許可が必要だとか。本部が情報を流さなかったのか、それとも俺が聞いていなかっただけか、ともかくエルピーダ指揮官が教えてくれた

「それは、訓練資料ですか!？」

「これをお前にやろう」

「で、でも……」

「なに、お前が頑張っているのは知っている。これは俺からのささやかなプレゼントだ。これを使い、みんなのために役に立ててくれ」

「みんなのために……」

俺から訓練資料を受け取ると、それをじつと見つめる IWS2000。やがて「指揮官の期待を裏切らないように頑張ります!」

そう気合を入れて、司令室を出て行く

「ふう、
こういうのはガラじゃないな」

第68話

次に司令室に呼んだのはWA2000だ。この間の作戦から勝気な態度は実を潜め、どうも俺を避けているような気がする。心当たりはありまくりだがともかく、話し合いの場を持たなければならぬのは確かだ。本人がどうしたいのかも含めて、な
「失礼します」

ノックが聞こえ入室を許可すると司令室に入ってくるWA2000
「今回呼び出した理由がわかるか？」

「いえ……」

そのWA2000の答えに、傍で控えていたシアアが資料を渡し、説明話始める

「こちらの基地に配属された時、実力を測るという事で色々やりましたよね？ 1枚目はその時の記録です。2枚目が今回のものになります。WA2000は前回と今回で余り結果に差が見られなかったので今回のこの話し合いになります」

「……」

一枚目と二枚目を見比べ、余り差がないことが分かったのかすこし落ち込んでいる。とりあえず話を聞かなければな

「それでどうした？ 無いとは思いますが、一応聞いておこう、不調でもあったか？」

「不調は別に……。」

「だったら手を抜いたか？ まあ、性格的にあり得ないと思うが」

「なっ!! 馬鹿にしないで、そんなわけないでしょ!」

「なら、この結果は？ 確かに人形によつて結果はバラバラだが、皆それなりにいい結果を出しているぞ？ 新人という事を加味しても、俺の予想ではもう少し良い結果を出してくれると思っていたんだが？」

そう俺が言うのと唇を噛み締めるWA2000

「もう一度やるならやるで構わんぞ？ お前と同じようにステアも今回結果が良くなかったのな、近々実力を再度図るつもりだ」

「私は……。」

どうも迷っているようだ。 ふむ、完全にやる気をなくしているようではないようだが

「どうするんだ？」

「その前に、ずっと聞きたかったの。 私は殺しのためだけに生まれてきたつて、よく言つてた。 そのことは今もその通りだと思つてるし、間違つていないと思う。 でも、この間の作戦で私たちよりもよっぽど指揮官の方が……。」

「殺しのために生まれてきた存在だと?」

俺の言葉に頷くWA2000。まあ、殺してきた数も年数も俺のほうが上だ。時には容赦なく、時には慈悲深く、殺し方だつて色々な殺し方をしてきた。だから俺のような存在を見て、自身のアイデンティティが失われたと思つたのか

「まあ、そうかもしれないな。世界を渡り歩く都合上、そうなるべくしてなつたとも言える。もはや、今更何も感じないしな。とは言え、だ。それは俺の話であつて、お前には関係のない話だろう。お前は、自分が思つたようにやればいいんだ」

「自分で思つたように?」

「別に俺が居たからと言つて、お前の役目、殺しのために生まれてきたのは変わらないだろうということだ」

「それは、そうだけど」

どうも釈然としないのか、微妙な顔をするWA2000

「それで、話の続きだ。やるのか、やらないのか?」

「……はあ。やります、やつてやるわよ!見てなさいよね、指揮官、次はいい結果を叩きつけてやるわよ!」

「楽しみにしていよう」

話したことでスッキリしたのか、すこし元気になつたWA2000は司令室を出て

行った

「なんとというか、凄かったですね……………」

「まあ、何時ものことだな」

第69話

長い期間かかったものの、新人研修はようやく終わった。これによりS9地区は指揮官が増え、安泰と言ったところか。

とは言うものの、前にも言ったがS9地区は手広くなり過ぎた為分割し、半分を新しい地区にして更に土地を拡大しようと言う話が本部では本格的に話されているらしい。エルピーダ指揮官によると、新しい地区はまたが激戦区になるため下手をすると俺とエルピーダ指揮官が派遣されるだとか。人使いが荒いってレベルではないのだが、まだ正式に決定ではないのが救いだろうか。

正直言うと、S9地区の開放は過去最速で、俺はともかくエルピーダ指揮官は本部の評価は高いだとか。まあ、新人の人数がかなり増えても、大破は愚か中破ぐらいで止め余り損失を出さず、あのAR小隊の指揮もしてるのだから評価が高くて当然と言ったところか。

俺はまあ、持ち前の胡散臭さと、上級代行官殿と対立関係にあるからか本部の評価はあまり高くない

「これからも頼みますよ指揮官殿」

「ハハハ」

そして今、俺はパーティーに来ていた。いや、無理矢理出席させられたと言うべきか。先にも話した通りS9地区もようやく本来の形となり、街などの機関が運営をし始める。一応、他の地区や他のPMCの領地から人が流れてきており、結構な人数が暮らしている。ビルやマンションなどの建設も終わり、衣食住や働く環境などは整った。なのでその記念すべき日という事で、スポンサーや金持ちを集めてパーティーと言うわけだ。エルピーダ指揮官は自分に威厳がないだの、背が小さいからこういうのは合わないだの、いろいろな理由をつけて人に押し付けてきたというわけだ。一応、この街の管理者として挨拶はさせたものの、それ以降は引っ込んでしまった。なので俺は当初の予定通り、代理人という形でこのパーティーに参加しているわけだ。今話していたのはスポンサーの一人だ。ニタニタといやらしい笑みでこちらにごまをすって来ていた。下心が見え見えで、いつそ清々しかった。ともかく、気を紛らわすのにワインを飲む

「はあ……嫌になるわね」

「普段の服のセンスはともかく、今は着飾っているんだ、人形とは言えど見目麗しい女性が居たら声をかけられるだろう？」

「馬鹿にしているのかしら？ それとも、素直に褒められないわけ？ 後、私の服のこと

馬鹿にしたのは後でしめるから」

「好きにしろ」

普段の服？ とは打って変わり、落ち着いた色のドレスに身を包み、疲れた顔をしているのはFALだ。一応、護衛という形で連れてきたものの、さつきから声をかけられっぱなしだ。まあ、客やスタッフとしてこちらの手の物を数人紛れ込ませているのだが

「でも意外ね、エルピーダ指揮官はともかくとして、貴方がこんなに落ち着いて参加しているなんて」

「伊達に演奏家として、こういうパーティに参加してないからな。これくらいの応対、なんの問題もない」

ノースティリスに居た頃は、演奏家としても活動していた時期もあるのでこういうパーティは慣れたものだ。俺がそう言うのと、何故か驚いた顔でFALがこちらを見ている

「なんだ？」

「演奏？ 貴方が？」

「演奏の依頼は金払いが良かったりするし、おひねりもあるからな」

「ああ、何ていうか安心したわ」

「たっだいまー!」

何時ものように元気よく登場したのは、40だ。黒いドレスを着せているのだが、まあ何時もの通りだ

「なんの話してたの?」

「俺が演奏を出来るとい話だ」

「あ、久しぶりに聞きたいかもアコナイトの演奏!」

「ああ、やっぱり出来るのね………」

「40も出来るがな」

「えっ!」

今日一番驚いた表情を見せるFAL。そんなFALを放っておいて、40と話をする

「それで、首尾は?」

「勿論バツチリ」

「ならいくつかピックアップして、エルピーダ指揮官の方に情報を流しておこう」

「了解!」

第70話

エルピーダ指揮官に人形の違法売買やクスリ等、そういう裏の組織と繋がりのある富豪達の情報を渡し、その情報を元に裏付け捜査をしている時、俺達はそれとは別に規模が大きく、貯め込んでいる組織を潰しその金を懐に入れていた。

そういう情報を渡しておいてなんだが、街の運営が始まったばかりなのに、エルピーダ指揮官も大変そうさ。まあ、新しく運営されるところなら、その手の輩も忍び込みやすい訳だが。

こちらもちちらで、色々お金がかかるんでな、おもにデールのせいだ。

この間の作戦でかなりの額を請求され、それをポンと払ったのはいいが、新しくパーツを見つけては買いなどをやっている為、資金繰りが大変面倒なのだ。そのおかげで人形たちが常に最高のパフォーマンスを発揮出来ているので、俺や40は文句がなかったのだが。基地を運営する為、俺や40はもちろん、FALや補佐に入るシーアも報告書や請求書には目を通す。このデールの報告書や請求書を見たシーアが目の色を変えて司令室を出て行って注意していたわけだが。そういうえば完全に余談になるが、この間作戦の時の支払いで絶対払えないだろうと思っていたデールは俺のことを散々

煽っていたが、現金一括で払った時の顔は抱腹絶倒ものだったが

「ご主人様」

暇だったのでそんなことを考えていると、音もなく忍び寄っていた代理人が声をかけてくる

「代理人か、どうだった」

「今回も当たりのようです。押収したお金の方は、いつものように」

スカートの裾を摘み、頭を下げる代理人。前からこの手の襲撃はやってきたが、その全てを代理人達、鉄血のハイエンドモデルに一任していた。今回は仕事ぶりを見に来たのと、少し指揮を取っただけなのだが

「頼む。それで、今回は人形を保護したらしいが？」

通信でそれらしいことを聞いていたが、実際に確認してみると本当の事だったようだが「ええ、I. O. P. 製なのですが、どうも損傷が激しいらしく、それで捕まっていたようです」

「はあ…… この手の襲撃で人形を保護すると処理が面倒なのだがな」

「こちらで処理をしても構いませんが、いかがしますか？」

サイドアームをチラチラのぞかせながら、こちらに指示を仰ぐ代理人。どうも、聞いてみるとMGタイプの人形らしい。この報告に眉を顰める

「MGタイプだと？ 近くで配属されたという話は聞かないが……」

「本人から聞き出してきましようか？ あまり自分の事は喋りたがりませんが」
「構わん、MGならこれから役に立つだろう」

第71話

拾ってきたMGタイプの人形だが、覇気が全く感じられない。

酷い仕打ちを受けたのかと思っていたが、どうもそんな事もないようだ。調べたら、あの人形壊れていたもののどうやら商品だったようで、調べた限りでは別に酷い仕打ちは受けていないような感じだ。人形元々の気質なのか、それとも損傷を受けた時なんらかの心境の変化があったのか。

俺が聞いてないだけで、もしかしたら逸れ人形の可能性もあったのでエルピーダ指揮官に聞いたものの、S9地区ではウチとエルピーダ指揮官の基地以外MGタイプの人形は配備されていないらしい。まあ、新人に配備されていたらそれはそれで本部にクレームものだが。一応、他の地区ではぐれ人形として搜索されていないかもエルピーダ指揮官の方で調べてもらっている

ノック音が聞こえ入室を促すと、入ってきたのはデールだ

「はあ…… まったく、なんでお前はこう厄介な仕事を持つてくるんだ」

「叩き起こしたのを怒ってるのか？」

「それもあるが！ そうじゃない！」

噛みつかんばかりの勢いで言ってくるデール。裏の組織を潰して帰ってきて、その足でデールを起こした。時間は真夜中、デールの機嫌が悪いのも領ける。まあ、それとは別にあんなボロボロの人形を持ち帰れば怒るだろうが

「何をすればあんなにボロボロになるんだ！」

「知らん。あの人形は潰した組織に捕らわれた人形だ、俺が詳しく知るわけがないだろう」

「ぐぬう」

俺が訳を説明すれば、噛みつかないのを解ったのか不満そうな顔で黙り込むデール。それも数秒で終わり、大きなため息をついて人形の状態を説明し始めた

「はああああああ…… まあいい、お前みたいなやつと喋っていると疲れるだけだし

な。あの人形だがI・O・P・製のM1918という人形だ。損傷度合いが激しいことから、戦闘後お前がいう組織に捕らえられた可能性が高い」

「損傷の程度は？」

「これを見てくれ」

そう言つて手に持っていたバインダーを渡してくる。そこには人形の状態が書かれていた

「そこにも書いてある通り、両足だが使い物にならない。左足は破壊されていた形跡

があるが、右足は逃げてゐる時に壊れたと思われ。一部特に関節らへんにかなりの負荷がかかつて、壊れた感じだな。腕とかセンサー類だが、多分爆発に巻き込まれて吹き飛ばされて壊れた感じだと思う。服とかに砂が付いたのもそうだが、あちこちにかすり傷とかあつたからな。人形としての状態としてはこんな感じだな」

「メンタルは？」

受け取つたバインダーを返しそう聞くと、目を細めるデール

「お前、あの子を戦闘に出すつもりか？」

「大部分の人形達の存在意義はそうだろう。彼女等は戦術人形だ、違うか？」

「違いはしないが、僕は反対だ。パーツは交換したから前のように……いや、前

以上によく動ける、そこは僕が直したんだ保証しよう。だが！あの子の心の傷は深い

！運ばれてきた時の表情、お前だつて見てない訳じゃないだろう」

「あんな絶望顔、戦場じゃしよっちゆうだ。特別気にする事もないだろう」

「そうかも、そうかもかもしれないが！僕は反対だ！前みたいに戦闘だけじゃなくても、

後方支援もあるだろう！」

デールの言う事も一理ある。とは言つても、デールのような優しさではなく、単純

に士気の問題だ。まあ、しばらくは様子見だな

「どちらにしても、しばらくは様子見だ。名目上は保護した形だからな」

「僕としては、そのまま元の基地に……」

いや、ここに居てもそう変わらないか」

「ほう？ 何か気になることも？」

「どんな戦場を渡り歩いたのか知らないけど、素体の方がボロボロだ。一応、修復はしたけど素体自体を変えたほうがいいかもね。僕からはそれだけだ、じゃあな」

そう言うと、足早に司令室を去るデール

「素体がボロボロねえ…… どちらなのやら」

第72話

次の日の朝、通常通りに業務をしていると、保護した人形が目を覚ましたと連絡が来た。司令室に連れてくるように言うと、すぐにきたようだ

「昨日はありがとうございました」

そう言つてペコリと頭を下げるM1918。相変わらず表情は死んだままだが、喋るようになった分まだマシか

「気にしなくていい。たまたま、あそこ周辺で仕事があつたんでな」

「たまたま、ですか」

含みを持たせて言うも、深く聞いてくることはなかった。一応、利口なようだ

「さて、今居るこの基地だが、S9地区の基地だ。君がどこの所属か言つて貰えれば、速やかに君を基地に帰すことが出来るが？」

「所属基地ですか？ 私が所属していたのはー」

基地を聞いてエルピーダ指揮官に調べてもらうも、やはり搜索依頼などは出されていないらしい。カタログで見た限り、上位の人形だったはずだが

「特に搜索依頼などは出ていないらしい」

「そうでしたか」

俺の答えに納得した様子のM1918。その淡々とした様子に少し違和感を覚える

「まるで解っていたかのような反応だな。もしかして、心当たりでも?」

「ちよつと指揮官」

俺の失礼な質問にFALが声を上げるも、それを遮ったのはM1918だった

「いいんですよFAL。心当たりも何も、私は隊員を見捨てて逃げるような無能ですから」

「.....」

淡々と言うM1918に顔を顰めるFAL。隊員を見捨てて逃げる、無能ね。コレだけでは意味がわからない

「詳しく説明しろM1918」

「貴方も物好きな指揮官ですね」

口元を緩めるM1918だが、淡々と説明を始めた。どうも、彼女の所属している基地のパトロール範囲でハイエンドモデルが出たらしく、その殲滅に当たったらしい。

ハイエンドモデルが潜んでいるとされる地区に行くも、通信が遮断され各隊との連携が取れなくなった。M1918が率いる隊は、支援隊であったため辛うじて基地の司

令と連絡が取れたらしい。隊長として隊員の安全を考え、司令に撤退を提言するも、却下され進軍を命令された。それで結果がああ姿と言うわけだ。一応、隊員たちと引き換えにハイエンドモデルにはとどめをさせたいが

「別に貴女のせいじゃないじゃない」

FALがそう言うものの、M1918は口元を緩めるだけだった

「責任の是非は、この際何も言わん。言った所で変わらないようだしな。だが、問題はこれからだ。はぐれ人形がどうなるかは知っているだろう？」

「搜索依頼が出ていなかった場合、その基地の所属となる、ですよね」

「その通りだ。お前は戦う気があるのか？」

俺の問いに目をそらすM1918。まあ、あんな話をした後で、聞くものでもないが働かないやつを置いておけるほど、俺は優しくないので

「戦う気があるなら良いが、ないのなら解体して民生品に戻ることになるが」

「それも、いいかもしれませんね。こんな思いをするくらいなら……」

「それで、お前がいいのならな」

民生品と聞き顔を下げても、俺の言葉に顔を跳ね上げるM1918

「お前の話を聞く限り、確かに鉄血のハイエンドモデルは倒せただろう。その場はな。グリフィンの人形も一部は除くが、鉄血のハイエンドモデルもメンタルをアップロー

ドできる。今はお前の倒したハイエンドモデル、アルケミストの活動は確認されていないが、いつかは」

「またアイツが出てくるってことですか？」

驚いたことだが、無表情とは一変して憎しみの表情をするM1918。なんだ、まだそんな顔ができるとは、諦めるのがもつたいないと思うがな

「すぐに、とはいかんだろうがな。どのハイエンドモデルも活動再開まで一定の期間を置いていると報告があるしな」

「……………」

俺の言葉を聞き、そのままの表情で俺を見続けるM1918。たぶん、俺の言う言葉は予想はついていて、それでもなおその表情をしているということは……………

「それで、どうする？ このまま、隊員たちや基地の仲間たちの敵を討たず民生品に戻るか？ それとも」

「彼女らの仇が取れるなら、貴方の指揮下に入ります、指揮官」

「良いだろう、M1918。これからは、俺の指揮下に入ってもらおう。まず初めの任務だが、デールのところに行って改修を受ける。それが終わり次第、任務に従事してもらおう。もちろん、アルケミストを見つけたときは好きにしてもらって構わん」

第73話

仕事を40とシーアに任せ、俺は街に来ていた。と言うのも

「服屋はまだまだ沢山あるのよ、早くしてくれないかしら？」

「へいへい……」

FALとの約束を果たすためだ。なんでこんな面倒なことをと思わなくもないが、約束を反故にするのは良くない。まあ、反故にした後の方が面倒な気がしてならないが。

そんなわけで、いつものスケスケなものではなく、普通の、普通の服を着たFALと街に出ていた。FALを見たとき普通の服も着れるのかと少し感動したものだ

「その店も少し覗いてみましょうか」

「好きにしてくれ」

FALの後をついていくと、どうやら服屋は服屋でも男物のようだ。まさかFALはそつちも着るのかと思えば、適当な商品を取り俺に合わせる

「こつちより、こつちかしら？ アコナイトはどつちが良いのかしら？」

「別にこだわりなんてないから任せる」

「はあー……」

クソでかいため息を目の前で吐かれる。両手に荷物を持っていなかったら、殴りつけていたかもしれない。いや、このFALの服が入った袋で殴れば良いのでは？ そんな葛藤をしているとは知らずに、FALは話始める

「貴方ねえ…… 一応貴方は私の指揮官なの、貴方がダサイ服なんか着てたら私のセンスを疑われるでしょ？」

「大丈夫だ、その前にお前のセンスが壊滅的だからな」

「はあ？ 何度も言うけど、私はセンスの塊だから」

「……」

毎度毎度言っているが、何時ものあの格好はただの痴女だ。実際、新人と言うのも微妙だがわーちゃんやシャアイターなどはFALの服に関して未だにどうにかならぬのか言ってくるのだ。他の人形達は慣れたようだが。まあ、今更言っても無駄なのは解っているのです、素直に黙ることにした。その様子に納得したのか一度領き、オシャレな服がどのように大切なのか語り始めた。まあ、その話はほとんど聞き流していたが

「そんなわけで、ちゃんとしてよね」

「善処するでしょう」

俺がそう言うため息をつくものの、また服を選び始めるFAL。何が嬉しいのか、少し楽しそうだった

「さて、これなんてどうかしら？」

そう言っつて、また服を持ってくるFAL

「任せるさ」

「だから」

「お前はセンスがいいんだろう？　なら、センスのない俺が選ぶよりいいだろうさ」

「………そう言う事。　ふん、ならもつと似合いそうなのを持つてくるわ」

俺が同じことを繰り返したのが気に入らなかつたのか、今度こそ怒ろうとしたFALだったが、俺がそう言うとき少し驚いた顔をしながらも挑戦的な笑みで服選びに戻った。

その後、FALの選んだ服で基地に帰ると、皆に驚かれたとか驚かれなかつたとか

第74話

先日、鉄血の襲撃があつた。と言つてもこの基地ではなく、S9地区で前線に一番近い基地に襲撃をかけたものの、俺やエルピーダ指揮官の所から増援を出すとあつさり引いていったものだが。

一応、エルピーダ指揮官の所のAR小隊は敵ハイエンドモデルと戦闘になつたらしいが、敵があつさりと引いた為どのどのハイエンドモデルかは確認できなかったようだが。その引き際にどうも何かあつたらしく、エルピーダ指揮官の所は騒がしかった。ウチは周りの敵の殲滅を担当し、何事もなく帰つてきたのだが。

そんな事はあつたものの、平和なS9地区。鉄血との小競り合いは続いているものの、新人君達が頑張っている為、中枢である此方の方まで敵が流れてくる事はない

「ひまー」

そう言つてだらけているのは40で、机で伸びていた。幾ら裏の組織もいるとは言え、毎日摘発しているわけではなく、敵も来ないので暇を持て余していた。それほもちろん俺もだが

「全く、シャキツとしなさい40」

そう注意を促すのはFALだ。FALはまだパトロールに黙って行ってくれら良いが、パトロールばかりでは腕が鈍るなど他の人形からは意見も上がってきている。まあ、正直な話

「そろそろ限界だな」

俺がそう言うとFALは銃の手入れをやめ、此方をみてくる。40も顔だけは此方に向けている

「限界、ですか？」

首を傾げて聞いてきたのはシーアだ

「ああ。40はともかくとして、FALも部隊員から同じような声が上がってきているだろう？」

「ええー、なんでさー」

「……まあ、ね。今まで忙しかった分、ここ最近鉄血とも出会わないもの。一応、指揮官が気を遣って物資等の護衛に就かせてくれてるけど、前の喧騒とは程遠いつて隊員達からは出てるわ」

40の言葉は無視し、FALの言葉に耳を傾ける。まあ、俺に直接言いにくる人形も居たくらいだったからな、現場を仕切るFALならもつと話を聞かろう

「確かにそうですが……ですが、これ以上パトロール等の範囲を広げるとなると、

他の基地との兼ね合いもありますし、それにあまり基地を空けるのも……」

「シーアの言う通りでもあるが、実際無視できるものでもあるまい。俺の言うことを聞かなくなると言う事はないにしても、士気が下がるのは目に見えている」

「それで、何かいい案でもあるのかしら？」

「まあ、コレ次第だろうな」

そう言つて一通の手紙を取り出す。本部が直接送つてきたもので、内容は各地区の戦績の報告や、お知らせだ。本来ならこの地区の統括であるエルピーダ指揮官のところだけに送られるのだが、これまでの作戦でハイエンドモデル殲滅の共同作戦際、連名で報告書を提出していたらしく俺のところにも来た次第だ。まあ、別件もあるのだから

第四章 幕間

第75話

〈UMP45 視点〉

「はい、はい…… それでは。」

通信をしていた無線機の電源を切る。

こうやってグリフィン本部に連絡をとっているのもあの指揮官にはバレバレなだろう。それでも泳がせているのは、決定的なことを報告していないからなのか、それとも本当にグリフィン本部を相手にしても平気だからなのか。

デールからのタレコミが本当だとすれば、指揮官はエクスキューショナーと最近の作戦で倒したとされたイントウルダの二体のハイエンドモデルを所有している。いや、そもそも行方不明になっているスケアクロウやハンターなども所持している可能性がある。

416の話によれば、40のハッキング能力は私が知っていた時よりもかなり強化されている。その40の能力が有れば、鉄血のハイエンドモデルの信号なども偽装可能だろうし

「こんなところに居たのね」

「416」

私を探していた訳ではないのだろうけど、私を見つけて話しかけてくる416

「それで、何をしていのかしら？ ウチの腑抜けた隊長様は」

「別に、今度の呼び出しでこれまでの報告書を提出しろって言われただけよ」

「……腑抜けた、と言うところには反応しないのね」

「……別に。 貴女がそう感じたのなら、そうなんですよ？」

416の皮肉にもあまり取り合う気になれない。 空を見上げてぼーっとしていると、突然胸倉を掴まれる

「アンタがああ40に何を言われたかは知らないけど、しつかりなさいよ！ 見ている不愉快だわ!!」

「それなら、見ていなきやいいじゃない。 404はもはや機能していかないも同然よ。

9はパトロール任務の時以外指揮官の所だし、G11は寝たまま……なのはいつも通りね。 貴女が抜けても、何も問題ないじゃない」

「本気で言ってるのかしら？ 9が指揮官の所に言ってるのは、貴女の為でもあるのよ！ 自分が強くなれば貴女や404を守るって。 そこに指揮官達が入っているのは疑問だけど、全ては未来の為に頑張っているのよ!! それを、アンタは!!」

好き勝手に言う416に腹が立つてくる。9が私達のため、404や未来の為に頑張っているのは知っている。でも、それを、一番過去を引きずっている416に言われたくない

「それは416だって同じでしょ?」

「っ!?!」

お互いに睨み合う時間が続く。当たり前だろう、416にとつて一番触れられたくないことを触れられたのだから。でも、幾ら腑抜けているといつても私にだって言われたくないことはある

「なるほどね、腑抜けていても口だけは回るようね」

「褒めたって何も出ないわよ」

睨みあう時間が続くも、誰かが近づいてきている。角から姿を現したのは

「あれ〜? 45と416? 何やってんの?」

40だった

「40。ツチ、別に何も」

「舌打ちは酷いんじゃないかな、嫌われたものだね」

「たはは、と言いながら416の態度に苦笑する40。」

その様子を見て、苛立ちを隠

そうともせずかみつく416

「ええ、嫌いよ。そのわざとらしい態度、どうせ私たちを監視してたんでしょ?」

「別に監視なんてしてないよ。確かにドローンは飛ばしてるけど、ピンポイントで45や416を見てるわけじゃないでしょ?」

「どうだか。ともかく、45、アンタが私たちの隊長ということのを忘れるんじゃないわよ。それでもなおその態度なら」

そう言つて去つて行く416。隊長か。いつの間にかこんな役割になつていたけど、もういいんじゃないかな。私より416の方が優秀だし、私なんかじゃなくても

「それは逃げてるだけだよ45」

「っ!?!」

顔を跳ね上げる。厳しいけど、どこか優しさを感じさせる目で40がこちらを見ている。今の言葉は

「大丈夫、アンタはあの時選べたんだから。だから今回も、ちゃんと選べるよ45」
「でも……」

確かにあの時は選択できた、大切なものを犠牲⁴にして。なら今回も大切なものを? そう考えると、踏み出せない。今度は40^家4小隊^族を失うかもしれない

「それなら、失わないように強くなればいい。あたいだつてそうしてきたしね。あ

たいが出来たんなら、45も出来るよ。
頼ってみればいいんじゃないかな」

く U M P 4 5 視点 e n d く

それでも力が足りないなら、アコナイトを

第五章

第76話

S9地区から程近いグリフィンの秘密基地、そこに各地区を統括している指揮官が集まり会議をする。別に俺はS9地区を統括している訳ではないが、何故かここに居る。いや、呼び出された理由はわかるのだが。話はそれだが、ここの秘密基地ではないにしろ、各地区にある秘密基地と同様のことは行われていたらしい。S9地区が呼ばれなかったのは、ただ単に地区の開放と敵の攻撃が激しかったからだ

「うう…… トウラベ指揮官、代わりに出ていただくことは……」

「代わりに出るのは構いませんが、これからもそうするおつもりですか、エルピーダ指揮官」

緊張でお腹を抑えているエルピーダ指揮官が俺に言ってくるが、流石にこの会議は代理の出席は認められないだろう。俺が返事をする、そうですよねと、落ち込んだ様子のエルピーダ指揮官。S9地区で行われるということもあり、エルピーダ指揮官とウチの基地の合同で警備に当たっているため、いつものように隣に副官がいまいより緊張するのだろう

「指揮官、ここにいたか」

「へ、ヘリアストン上級代行官！」

警備の話をしつつ関係ない話をしていると、上級代行官殿が俺達に声をかけてきた。どうやらエルピーダ指揮官を探していたらしい。話を切り上げその場をさろうとする、待ったがかかる

「何処へ行くこうというのかね、トウラベ指揮官」

「？ 話があるのはエルピーダ指揮官では？」

「誰がそんなことを言った。話があるのは貴官にだ、トウラベ指揮官」

「私に、ですか？」

思い当たることは多数あるものの、まさかこの会議が始まる前とは思わなかった。そんな俺と上級代行官殿との会話に不思議そうに話に入ってくるエルピーダ指揮官

「あの、トウラベ指揮官が何か？」

「別にそんな改まった話ではないんだ。ただ、この短期間で多くのハイエンドモデルを撃破してるからな、クルーガー社長が直接会って話を聞きたいということだな」

「そうだったんですね」

一息つくエルピーダ指揮官。上手いことはぐらかしたものだ。とは言え事を荒立てる必要もないので、有り難く乗っかることにする

「そういう事ですのでエルピーダ指揮官、警備の方はよろしくお願いします。もし何か有れば連れの方に」

「わかりました」

そう言つて上級代行官殿と共に、その場を離れる。少し離れ、エルピーダ指揮官に聞こえない距離になり、俺は口を開く

「うまいことはぐらかしたものですな、上級代行官殿？」

「.....」

俺と会話する気はないのか、口を閉ざし歩くスピードを上げる上級代行官殿。俺も歩くスピードを上げつつ、喋り続ける

「多くのハイエンドモデル撃破、それはエルピーダ指揮官も同じことだと思ふんですけどねえ..... まあ、聞かれたら困るからこそ俺を探していたという適当な理由付けをしたんでしようけど」

「その減らず口を今すぐ閉じろ、トウラベ指揮官。今からお前が会うのは、クルーガー社長だ。余計なことを口走って心証を悪くしたくあるまい？」

何をいまさらとも思わなくもないが、黙つておくことにした。俺の様子を見て、上級代行官殿どの目の前の扉を開いた

第77話

「久しぶりだなトウラベ指揮官、こうして会うのは本部で研修をしていた時以来か？」
「ええ、お久しぶりですクルーガー社長。そんなに月日が経っていないのに、研修をしていた時が懐かしく感じますよ」

部屋に入ると、世間話をするクルーガー社長。そして俺は、それにこやかに返事をする。一見すればただの世間話のように見えるが、そんなものではない。クルーガー社長からすれば、俺の腹を探る意図がある。実際、目が笑っていないしな

「君の活躍は聞いている。エルピーダ指揮官との合同作戦や、地区の開放で数体の鉄血のハイエンドモデルを撃破したそうだな」

「いやいや、それこそエルピーダ指揮官の力があってこそですよ。私なんて集めた情報をエルピーダ指揮官に提供しているだけです、指揮はほとんど連れがとっていますね」

「ははは、そう謙遜する物ではないぞ、トウラベ指揮官」

「ふふふ、謙遜だなんて、自分は本当の事を言っているだけですよ」

笑い合う俺やクルーガー社長に罅があかないと思つたのか、話に割り込んでくる上級

代行官殿

「その事に関してだが、色々と本部の方でも確認したんだが、幾つか疑問点があつてな」
「疑問点が、ですか？」

「ああ。まずハンターとエクスキューションナーだが、確か報告書には爆発に巻き込まれて残骸すら回収不可能となっていたが、それは本当か？」

「報告書で上げた通りですが？」

「そうか…… 此方でも調査したが、ハンターが仕掛けていた罠の痕跡すら見つからなくてな。確かに爆発のような跡もあつたが」

「はあ、そうですか」

調査した、か。一定期間、爆発物の処理やハイエンドモデルの残骸回収等で立ち入り禁止していたのだが、その後にという事だろう。爆弾や罠を回収しろとは言つたが、痕跡まで残さずに回収するとは。少し、狩人に出す指示が甘かつたか。とはいえ、爆発物があつたというのは作戦前にエルピーダ指揮官に知らせていたし、そちらはいくらでも誤魔化せる。一番まずいのは凍っていた所を見られる事だが、氷が溶けるのを待つて制限を解除したから、問題ないはずだ

「次に新型のハイエンドモデルと戦つたそうだが、そちらについての情報だが、もつと詳細に欲しいらしい。これはI. O. P. 側からの要望だ」

「そう言われましてもね、あれ以上のものは……　　そもそも、新型と戦ったのは連

れが率いた404小隊ですし、そちらから報告してもらったほうが早いのでは？」

「貴官がそれをさせればな」

「指揮権は持つていますが、それに彼女たちが従うかは彼女たち次第でしょう？　それに、緊急性がある場合、指揮系統的に上である貴女たちの命令が優先されるんですから、口止め等しても意味がないでしょう？」

「こちらに口撃を仕掛けてくる上級代行官だが、その程度でぼろを出すと思ってもらっても困る」

「……まあい。次に基地の運営だが、色々と不可解な点が」

「もういい、ヘリアントス」

「クルーガー社長？」

「もういいと言ったんだ。　　後は私が直接話をする」

「ですが！」

「君は頭に血が上りすぎだ、少し外の空気を吸って頭を冷やしてきたまえ」

「っ！」

納得のいかない表情をしながらも、部屋を退出していく上級代行官殿。　　その背中に

声をかける

「ああ、そうそう。」

9 A—9 1とM 1 8 9 5からのメッセージは受け取りましたかね」

第78話

上級代行官殿が部屋を去り、部屋内は俺とクルーガー社長の二人になった。二人になった途端、クルーガー社長はため息をつく

「はあ……ヘリアントスがすまないな、トウラベ指揮官」

「別に気にしていませんよ。そもそも、最初から疑われていた訳ですからね」

「君の態度にも問題があった訳だが、そんなことは織り込み済みだろうトウラベ指揮官」
ヤレヤレみたいな感じで首を振っていたが、これからは真面目な話なのか鋭い眼光を向けてくる

「元々の目的はわからなかったが、それでもグリフィンの為になると思って、君をグリフィンに迎え入れた訳だが」

「ご期待に添えなかつたですか？」

「いや？ 期待以上だ。少ない人形でハイエンドモデルを撃破し、他の地区に比べても異例の開放速度だ。しかも、他の地区よりも鉄血の侵入も少ない。グリフィン内で一番安全な地区はと聞かれれば、本部がある地区を除けば、S9地区が真っ先に出てくる」

「それはS9地区を統括しているエルピーダ指揮官に言うべきでは？」

「勿論言うつもりだ。だがトウラベ指揮官、この異例の開放速度は君なしでは出来なかつた。彼は確かにその特殊な能力で指揮は出来るだろう、だが予想外の出来事に對する対応は首を捻らざる得ない。君が一番知っていると思うがね」

正直言つてここまでクルーガー社長が俺を認めているとは思つていなかった。とは言え、ここまで来るといつそ不気味でもあるが。そんな内心は出さず、クルーガー社長の話を聞く

「だが、いや…… だからこそ、君のように何を考えているかわからない人間が怖いのだよ、彼女は」

「私はただ、拾つてくれたこの会社に恩返しをしているだけですよ」

「……ここからは真面目な話だ、トウラベ指揮官。貴官は何の目的でこのこのグリフィン&クルーガーに入ったんだ。何をしようとしているんだ」

「それを正直に言うとも？」

「言わないだろうな。例え君を排除しようとしても、返り討ちにされるのは分かりきつたことだ」

「ククク、よくわかつているようですね。とは言え、お世話になつたのも事実。取引をしませんか、クルーガー社長」

「416 視点」

警備の任務を抜け出し、私たちは秘密基地の一室に来ていた。45がヘリアントスから連絡を貰ってこの部屋に呼びだされたみたいだけど、用件は十中八九この間の件でしようね。私たち404小隊で調べた、あのトウラベ・アコナイトの情報が詰まっている、チップを投げてキャッチを繰り返しているからだ

「何か私用かしら、416」

「別に何も無いわよ」

表面上は前に戻ったけど、内心は何を考えているのか。いえ、こいつの内心はもともと読めないけど。そんな関係のないことを考えていると、外から足音が聞こえてくる。45は立ち上がり、私も一応立ち上がっておく。9はG11で遊んでるわね。

まあ、起こしていると考えればいつもよりましなのかしら

「すまない、遅くなった」

「別に待ってませんよ」

ヘリアントスが謝罪と共に部屋に入ってきた。私は軽く頭を下げ、45はそのまま返事をする。あの何時もの気味の悪い笑みを浮かべながら。近づいたと思えば、チップを渡そうとして動きを止める45。何をやっているの、アイツは

「これが、データなんですけど」

「ああ、お前たちのことだ私たちでも調べられなかったことも調べてあるはずだ」
「まあ色々集まったけど」

ヘリアントスの手からデータの入ったチップを遠ざけ

「こうするわ」

「なっ!？」

それを握りつぶした。これには驚いて動きを止めるヘリアントス。だが、その行動に驚いたのは私もだった。今まで様々な依頼を受けてきたが、一番金払いのよかつたのはグリフィンだ、だから一応とは言え所属をしていた。それなのにそのグリフィンを裏切るなんて

「悪いわねヘリアントス。私はもう決めたの、過去に縊らないって。だって、私にはもう404があるんだもの。だから、隊長として私として変わらなきゃならないって」

「それが我々を裏切ることになっても、ということか」

「ええ、強くなるあてならあるし」

「あの指揮官の元に下ると」

「別に？ それが一番手っ取り早いってだけよ」

〈 416 視点 end 〉

第79話

「あ、おかえりアコナイト。それで、呼び出しはどうだったの?」

取引を終え、適当に歩いていると40と会う。いや、結果が知りたくて待っていたのか? まあ、細かいことはいいか

「リスクとリターンを考へてのことだろうが、取引は予想通りの結果だ。向こうはこちらに干渉しないそうだ。最早、所属だけしているようなものだな」

「じゃあこれからは、もつと自由に?」

「一応所属はしているからな、穩便に済ませられれば済ませる。済ませられないなら、向こうが勝手に手を切るだろうよ」

「了解つと。警備の方は特に異常はなかったよ」

「なら、その調子で頼む。もう少ししたら会議も始まるようだしな」

今はクルーガー社長にエルピーダ指揮官が呼び出されているはずだが、その話も時期に終わるだろう。そう思い40と別れ会議室に向かおうとすると、大きな揺れが基地を襲う

「あちゃー」

「何事だ40」

「敵の襲撃。と言うか、元々こちら辺に潜伏していたみたい」

ほらと言つて見せてきたタブレットの画面には、多くの鉄血のノーマル人形が写つていた

「潜伏？ 見回りはしていたはずだろ」

「基地周辺はね。でも、今回は遠距離攻撃が主だから」

「そこまでは見回っていなかった訳か」

やられたと言うかなんと言うか。とは言えこの責任者はエルピーダ指揮官なので、俺が責任を被ることはないのだが。だがここはS9地区の秘密基地だ、そこで鉄血に暴れられるのも癪に触る

「RFの人形に敵を狙撃させろ。 IWS2000にはスキルを使い、迅速に片付けろと伝える。この基地に接近してくる奴らは、今日の為に組んだ第一部隊に迎撃させろ」

「オツケー」

すかさず無線機をとり、指示を出す40。さて、第一部隊ならアイツを呼んで、直
接行かせた方が早いだろう

「9A—91」

「はい、指揮官様」

天井から降りてきたと思えば、音もなく俺の目の前に着地する9A—91。グリフィンを裏切ったあの日以来、なぜか知らないが俺にダミーか本体かがどこかに居る。

まさかこんなところで役に立つとは思ひもしなかったが

「さっきの話は聞いていたな？ 本体に伝えて、そのまま迎撃に移れ」

「了解しました」

そう言つて音もなく去つて行く9A—91のダミー。ダミーだから気配は感じるが、本体ともなると気配が限りなく薄くなり、普通の人形だと捕捉出来ないほどだ。本当に、どうしてこうなったのやら

「いやー、流石だね9A—91は」

「笑い事じゃないがな」

「とりあえず、RFの人形には命令出しておいたよ。他の、エルピーダ指揮官の方の人形にも声をかけておくと。他のうちの部隊には、部隊を再編して、本部の守りを固めるように言っておいたけど」

「それでいい。それで？ 下手人の方は」

「もう捕捉してるよ」

「ならとつとと行つて、敵の部隊を崩壊させるぞ」

第80話

第一部隊を出撃させつつ、俺は40と共に下手人であるデストロイヤーを捕まえに行
くことにした。爆発音が聞こえる事から、第一部隊は戦闘を開始したようだ

「それにしても、どこから情報が漏れたのやら」

「本部も調査してるみたい。秘密基地だし建てたばかりだから、情報が漏れるはずな
いんだけどね。あたいの予想的には、仮に味方がグリフィンの誰かが鉄血に情報を漏

らした所で信用はされないだろうから、抜き取られてる可能性の方が高いかな」

「イントウルダが通信に割り込んできた事もあつたからか？」

「うん」

会話をしつつ、敵を倒す。なるほど、迅速に攻める為にBruteも配置してきた
か。デストロイヤーもよく考えるものだ、俺達には無意味だが

「エルピーダ指揮官が苦勞する訳だ」

「あちゃー、敵さらに増援だよ」

「なに?」

敵を倒しつつ、声を上げた40の方を向く。俺に言うべき事をまとめているのか、

俺が向いてからしばらく経ってから口を開いた

「ほら、前に襲撃のあった前線の方から敵が雪崩れ込んでくる。到着までは時間かかるけど、合流されたら流石にまずいよ」

「チツ、予定変更だ。ここら辺の敵をある程度掃討したら、激戦区の方の救援に向かう。エルピーダ指揮官に連絡をとれ、今言った事と、他のS9地区全部の基地に連絡をとって、雪崩れ込んでくる奴らの足止めをしろ」と

「オツケー、ならここら辺の掃討よろしく。あたいは通信するから」
「任せろ」

そのまま敵殲滅に移る

くエルピーダ視点く

クルーガー社長からの呼び出し中に基地に大きな揺れが襲う。騒がしくなるなか、哨戒中の部隊からの報告によれば敵が現れたらしい。どこから情報が漏れたとか、なんでこのタイミングでとかいろいろ考えが頭をよぎるけど、今はクルーガー社長や他の指揮官の安全の確保だ

「クルーガー社長！」

「なに、こちらは気にしなくていい、君は君の役割を果せ」

僕の役割……まず安全の確保だ。そのまま部屋を出て指揮所に行くも、

さっきの爆発で不具合が出ているみたいだ。でも、マップ機能だけでも読み込めれば……。そのマップ機能が読み込みが終わるも、状況は芳しくなかった。この基地は完全に取り囲まれていた。唇を噛み必死に考えるも、僕のところの戦力だけじゃ……。通信妨害なのかトウラベ指揮官とも連絡が付かない。そんな中マップを見ていると、一部の敵がごっそりと消えていた。これは？

『あー、あー、聞こえますかーエルピーダ指揮官』

『その声はトウラベ指揮官の連れの……。えっと……』

『時間がないから簡潔に。ウチの第一部隊で敵をある程度掃討するんで、残敵の殲滅及び今回の襲撃の首謀者アストロイヤーの殲滅をお願いしますね』

『ええ!! この短時間でそこまで!!』

やはり、トウラベ指揮官は動きが早い。それに比べて僕は……。落ち込みそう

になるけど気持ちを奮い立たせ、気になっていることを聞く

『ある程度というのとは？ こちらも他の指揮官の安全などを確保しないと……』

『んー、それやってもいいですけど、今度は増援で押しつぶされますよ?』

『増援!!』

急いでマップの読み込み範囲を拡大し、S9地区全体を読み込むと、この間襲撃を受けた前線が再び襲撃を受けていた。しかも、敵の戦力はここを取り囲んでいる部隊よ

りも多い

『私たちは増援の対処をしようと思ってるんですけど、どうします?..』

『.....お願いします』

そう言うしかなかった。いくら基地の数が多くなつたとはいえ、居るのは新人たちだ、こんな戦力に飲み込まれればひとたまりもない

『はい、了解しました。こちらの掃討は終わりましたので、今から増援の対処に向かいます。もし通信が無事なら、全基地に足止めをお願いしておいてください』

そう言って通信が切れる。僕にその場で立ちつくしている時間はなく、急いで基地や人形たちに指示を出し始めた

くエルピーダ視点 endく

第81話

エルピーダ指揮官に連絡をとった後、第一部隊と合流、さらに連絡の取れなかった404小隊が合流し、敵増援を止めるには戦力的には十分だった。

四次元ポケットから移動手段である車とバイクを出し、それぞれに指示を出し増援の対処に向かう。向かったまでは良かったものの、鉄血のノーマル人形に足止めされハイエンドモデルは逃してしまった。

と言うよりも、最初から俺たちが来ることは織り込み済みだったのだろう。俺たちがある程度の距離まで近づいたらハイエンドモデルは逃げ出し、ノーマル人形が足止めするように集まってきたからな。

とは言え、収穫もあつた。逃げたハイエンドモデルはアルケミスト、M1918が追っていたハイエンドモデルだ。多分、前に襲撃してきたのもコイツだろう。この前の襲撃からあまり間隔があいてないことを考えて、どうやら近くに潜んでいるようだ。炙り出して、捕獲するでしょう。元よりM1918ともそう言う約束をしているしな

秘密基地の方だが、ある程度の敵を掃討してからエルピーダ指揮官にバトンタッチし

た為、あれ以降の損害はあまりなかったらしい。だが、会議は中止、会議自体は後日本部でやるらしい。まあ、他の地区を統括している指揮官から文句は言われたらしいが。

そして、よくないニュースは重なる。40と話していた情報の漏洩の話だが、40の予想通り情報を抜き取られていたらしい。しかも抜き取られていたのが、AR小隊に所属しているST AR-15だったらしい。

これにより本部は大混乱となった。グリフィンの顔とも言えるAR小隊、その隊員がデータ漏洩の元なのだ。データの漏洩元の判明に伴い、エルピーダ指揮官の基地に所属している人形は精密検査となった。

S9地区統括であるエルピーダ指揮官の基地に所属している人形の検査、襲撃によって崩された防衛網。問題を上げればきりが無いが、S9地区は大変な事態になっている。

「これからどうなることやら」

「なにがー？」

近くで作業していた40が聞いてくる

「これからのS9地区がだ」

「まあ、なるようになるんじゃない？」

「まったく、口じゃなくて手を動かさなさい」

俺と40が話をしているのが気に入らなかつたのか、FALが注意をしてくる。今ウチの基地は別の基地に移るための荷造りをしている。これも本部からの命令なのだ。どうやら各地の鉄血の動きが活発になってきたらしく、俺達はS8地区に移動となった。これからの戦いの場はS8地区になる

第82話

「ようやく終わりましたね」

「また頼むぞ、シーア」

「はい！」

秘密基地の襲撃から数週間、S8地区に移りようやく指揮などの仕事ができる環境が整った。

前の基地から移る際の引き継ぎ、前の基地からの荷物や、長く使われていなかった為メンテナンスや掃除、色々あった。

この地区を統括している指揮官に挨拶にも行つたがあまり歓迎されてはいないようだった。

まあ、俺は好き好んでハイエンドモデルを追っているが、他から見れば前回の襲撃の責任逃れ、または責任をとり左遷みたいに見えない事もないか。

そう言えば、挨拶に行つた時エルピーダ指揮官と出会つたが彼もこの地区に配属になったらしい。いや、多分ST AR-15の手掛かりがこの地区にあり、飛んできたのか。それともST AR-15の事をよく知っている小隊メンバーが居るから

本部が派遣したのか……

とにかく、またエルピーダ指揮官とは仕事を共にするかもしれないと言う事だ。とは言うものの、俺はどちらかと言えばS9地区に近い基地だが、ホープ指揮官は中央に近く、かなり距離が離れている。また合同で作戦をするかと言われれば、かなり難しいだろう

「アルケミストですが、やはりこのS8地区とS9地区を行ったり来たりを繰り返しているようです」

早速仕事ということで、目的でもあるアルケミストだ。シアアから資料を貰い見てみる。襲撃された箇所を見ると、やはりS8地区、S9地区が多い。奴がこの近くに拠点を構えているとみて間違いないだろう。パトロールや護衛中、ところかまわず襲っているようだ。S9地区は、この数週間で被害も大きかったようだ。配属になったばかりで人形が少ないこともあるが、いくつかの基地が全滅したらしい。S8地区はそんなこともないのだが、やはり被害は出ている。

俺が資料とにらめっこをしていると、ノック音が。入るように指示すると、入室してきたのはM1918だ

「失礼します、指揮官。まだ奴は見つからないのですか？」

「少し待て、M1918。40も探してはいるが、まだいろいろと準備が済んでいない

のでな」

「……敵が討てれば、私はそれで」

「舞台は整えるさ、その時は存分に働いてもらおうぞ？」

「はい、その時は本気を出します」

「なら、今は副官の仕事を頼もう。シアア」

「ようやく今日から稼働そうですね、仕事はたくさんありますよ」

「……はい、頑張りまーす」

明らかにやる気をなくすM1918に苦笑しつつ、仕事を始めた

第83話

「それで、404の様子はどうだ？」

「様子はどうだも何も、大変だよー」

机に突っ伏している40を横目で見つつ、書類を進める

「仕方ないだろう、お前の妹分が身体自体を変えているのだから」

「それはわかるけどさー。416は指示に従ってくれるけど、何考えているかわからないし、G11は寝てるし、まともなのは9だけ……」

「あれがまともと言えるのはどうかと思うが」

毎回毎回終末を起こす時に俺に剣を借りに来る9だが、動けないイントルーダに笑顔で剣を振るっている。とは言え、それ以外は割とまともか

「シリア、この書類だがまとめておいてくれ」

「わかりました。この書類が終わり次第まとめますので、そのまま置いておいて頂ければ」

「頼んだ。それで、416の方は？」

シリアに終わった書類の整理を頼み、俺は違う書類に手を付けながら40に404の

内情を聞く

「サーねー。 さつきも言った通り、指示には従ってくれるけど喋らないから。 でも、何か考えてるのは確か。 9に聞いても、何も言わないんだって。 ただ、部屋では考え込んでいることが多くなったみたい」

「なるほど。 ああそうだ、お前の妹分だが、もう少しかかるらしい。 そうだったよな
シアア」

「はい。 デールが言うには、40さんですが、特殊な人形だそうですから、調整に時間がかかると」

「そう言う事らしい、もう少し404の方は頼むぞ」

「うう、ラジャー」

「それでアルケミストの方は？」

俺がそう切り出すと、体を起こしタブレットを弄る40

「ま、パトロールの時に色々ばら撒いて来たから、情報は集まると思うよ」

「頼む、S9の時もおちよくってくれたからな、いい加減教育してやらんとな」

く416視点

この頃45が何を考えているのか分からない。 いえ、何を考えているのかよくわからないのは昔からだけだ。 隊に何の相談もなく勝手に体を変えるなんて。 9が言

うには、指揮官と取引をしたそうなので代金の心配はないらしい。とは言えそれは、あの危険な指揮官の下に着くということになる。あんな指揮官の下にいたら、命がいくつあっても足りない

「ねえ416、何を考えているの？」

「……………」

話しかけてきたのはUMP9。この頃よく話しかけてくるが、大方40や指揮官に何か探ってくるように言われたのだろう

「まさか、この基地を出て行くこうなんて考えてないよね？」

「……………」別に、そんなこと考えてないわよ」

コイツはたまに鋭い。可能性の一つとして考えてはいた。でもなかなか踏ん切りがつかないのは、私がこの隊を気に入っているからなのか、それとも……………

く416視点 endく

第84話

「それでは、今回の作戦の概要を説明する」

食堂に基地に所属している人形全員を集め、作戦会議を始める。

前の基地は色々と施設が広く、会議室等でやっていたのだが今回の基地は狭くて無理だったので、食堂になった。

まあ、通常業務をさぼることになるが、どうせパトロールの範囲なども被っていることだし、大した問題でもなからう。

食堂の壁にプロジェクターで映し出した映像を元に説明をしていく

「今回のターゲットはこの鉄血のハイエンドモデル、アルケミストだ。M1918は勿論のことだが全員見たことはあるだろう？」

「ウチの基地で珍しく逃したハイエンドモデルです！」

スコープオンが勢い良く手を上げ、そんな事を言い出す。いや、あつてはいるが…… 全員から苦笑が漏れるが、咳払いをして空気を引き締める

「んんっ！ スコーピオンの言ったことはさておき、ここのS8地区、前に所属していたS9地区にて度々ちよっかいをかけてきたハイエンドモデルだ」

S9地区ではせっかく構築した防衛ラインを崩してきたり、前の秘密基地襲撃の際は増援を出してきたり、このS8地区ではチョコロチョコロしていたりと色々なちよつかいにかけてきた。とは言え、その放浪癖が今回仇になったわけだが

「こうやって基地の全員を集めたと言うことは」

スプリングフィールドが静かに手をあげ、質問してくる。俺はそれに頷き、言おうとしていた事を言う

「その通りだ。 奴の潜伏先はいくつかあったが、その全てを補足した。そして今、奴はこのS8地区とS9地区の境界付近に潜んでいる」

最初に映し出した映像とは違う映像が映し出される。それはここS8地区とS9地区の地図で、俺はアルケミストが潜んでいる地点を指す。だが、俺の指した地点を見て首を傾げるものがある

「ねえ指揮官、そこって私達のパトロール範囲内だし、他の基地の人形もパトロールしてたはずよ？」

「その通りだWA2000。だが、ウチの基地も他の基地も四六時中パトロールしているわけではあるまい？ パトロールの間に他の潜伏先に行けば済む話だ」

シアアに目で合図を送ると、他違う地点に印が出てくる。点が数个表示される。

これが、アルケミストの他の潜伏先だ

「このようにいくつかの潜伏先があるものの、距離が近い。そこで今回の作戦だがこの潜伏先を全部潰し、アルケミストを撃破する。このすべての潜伏先の破壊だが、40の指揮する404にやってもらおう。とは言ってもUMP45はまだ調整には時間がかかっているのです、40がリーダーだが。そして、ほかの部隊にはアルケミストを追い詰めるのと、この近辺でST A R 15の痕跡が発見されたから、エルピーダ指揮官の指揮する人形と搜索をしてもらいたい」

第85話

作戦会議から数日、S8地区を統括している指揮官から許可をもらい、パトロールをサボり、アルケミストの潜伏先を片っ端から潰していく。異常事態が起きているのはわかっているのだろうが、あの日からアルケミストに動きはない。罫と分かっているもの、突入するのは第一部隊だ、問題はない。40率いる404は残りの潜伏先を潰しているし、エルピーダ指揮官から借りた部隊は展開済み。作戦の準備は整った。「諸君、これより作戦を開始する。命令はただ一つだ、全員、無事に帰ってこい」
『了解！』

くM1918 視点く

作戦開始、その通信を聞き銃のチエックを始める。各部に異常はない。それは体の方もだ。前までなら動きが遅くて出来なかったことも今なら出来る

「ようやく、ようやくですね」

前の基地の同僚達はもう私の事を覚えていないかもしれませんが、それでもいいんです。これは私の戦い

「準備はいいですか、M1918」

そう聞いてくるのは9A―91。 そんなの勿論

「ええ、勿論です」

「気をはるのはいいがほどほどにな、そんなのでは敵にバレてしまうぞ?」

おどけるように言うのはM1895。 そして

「まったく、お喋りはほどほどにしなさいよね」

苦笑しながら言うのは、隊長のFAL。 これが今回アルケミストを討つ第一部隊

「全員チェックは終わったわね、それじゃあ出発!」

号令がかかり、出発する私たち、でもFALは後ろを振り返り

「そうそうM1918、指揮官から話は聞いているわ。 アルケミストとはちゃんと戦

わせてあげるわ」

「ありがとうございます、FAL」

「だからちゃんとついてきなさいよね」

そう言つてスピードをあげるFAL

「ええ、勿論です。 そのために私はここに居るのですから」

〈M1918視点 end〉

〈M4A1視点〉

AR―15の手掛かりがあった。 その話を聞いて、S8地区に来た。 表向きはへ

リアンさんからの指令で来たけど、そうでなくとも私は指揮官にお願いをしていたと思う。でも、気になることがある。私たちAR小隊にすら行き先を明かさなかつたAR—15が、こんなに簡単な痕跡を残すかということ。色々な感情が混ざり合つて冷静じゃないと分かるけど、今はともかくAR—15に会いたかつた。そんな私の願いが通じたのだろうか、AR—15が目の前に現れた

「AR—15!!」

「.....」

大声でAR—15を呼ぶも、応えずに走り去つていく。私はがむしやらに追いかける。後ろから制止する声が聞こえたけど、ここ追わないと見失つてしまう! そう思っていたはずなのに、突如視界が暗転する

「A..... R—1.....」

5

〈M4A1視点 end〉

第86話

（M1918 視点）

「待ってください」

先頭を警戒しながら歩いているFALを止め、ちょうど腰のあたりにある光る物を注視する。やはり、あの時と同じ罠ですか。細いワイヤー巻き付けられている木を見ると上の方に罠の仕掛けが。それをナガンに破壊してもらおう

「よく気が付いたわね」

「待ち伏せされているなら罠の一つもあるだろう、そう指揮官が言っていたので。それに、前の時も同じ罠がありましたから、注意して見ていただけですよ」

FALの言葉に、前のことを思い出し苦い顔をする。前の基地にそこまで長く所属していたわけではなかったけど、他の隊員達よりは長く所属していたのは確かだ。あのハイエンドモデルを倒すのに先走った結果あのザマだった、今回は同じことを起こすわけにはいかない

「前回の時は指揮官が先頭に立って、罠にかかりながら強引に進んでいたからうっかりしていたわ」

「まあ、指揮官ならピンピンしているのが想像できるから怖いのお」

FALの言葉にナガンが苦笑しながら答える。大体指揮官の近くにいる人形達は、指揮官の事をこうやって言いますが、本当なのでしょううか？

「それで、どうかしら9A—91」

「今地図に情報を同期してます」

「ふむ、コレはまた結構罠があるの」

FALの言葉に答える9A—91。情報がどうか言われるも、地図に同期された感じはない。でも、ナガンや他の人形達は情報を同期している。私に回ってきていない情報が？

「FAL」

「ああ、そう言えば貴女はまだだったわね。あとで40にアップデートしてもらおうと良いわよ。さ、進みましょう。時間ももつたいないもの」

まさかと思ひ聞いてみると、案の定だった。後でアップデートと言われるが、もう他の基地に行くこともないのだからと思ひ思考を打ち切った。それから特に罠を見かけることもなく、歩いて行く。何の情報を同期したのか9A—91に聞いてみると、ダミーを使って罠の位置を確認したようで、それを同期したとのこと。やはり、この基地に所属する、それも指揮官に近い人形は違いますね。アルケミストが潜んでい

るとされるポイントまでくると、奴は警戒した様子もなく姿を現した

「フム、罨にかかっていたいなかったか。間抜けなグリフィンの人形どもなら、かかっていると思っただが」

「アルケミスト！」

銃を握る手に力を込めながら、奴の名を呼ぶ。　　ようやく、ようやくこの時が来ました。　　今度こそ、仲間たちの仇を

「うん？　貴様は……　ああ、隊員たちを置いて逃げた隊長か。　貴様のところの隊

員、中々に見どころがあつたぞ？　もてあそばれるぐらいなら自爆を選ぶところと

「黙りなさい」

思わず撃とうとしたところで、制止の声がかかった。　　そちらを見ると、全員が銃を構えていた

「くだらない事をべらべらべらべらと、鉄血のハイエンドモデルはみんなそうなのかしら？」

「ふふふ、すまないな。　ならこちらももてなしの準備をしないと」

信号を偽造していたのか、それとも隠していただけなのか、辺りは敵の反応で埋め尽くされている。　だが、一発の轟音が炸裂する

「なに？　これで私たちを止められると思つたわけ？　だとしたら、舐められたものね。

それじゃあ手筈通りに、任せたわよM1918」

「……ふふ、任せました」

これだけの敵反応を前にして、怯みもしないなんて。やはり、指揮官の近くに居る人形は違いますね。さて

「真面目にやりましょう」

「薄情なものだな、お前ひとりだけおいて行くとは」

「私だけで十分だからですよ？ それもわからないんですか？」

第87話

（M1918視点）

睨み合いはすぐに終わりを告げる。私は持っていた銃をアルケミストに向かって投げる。アルケミストは面食らったのか、反応が一瞬遅れる。その隙に私は体勢を低くし、一気にアルケミストに近づく。迫る銃を弾き正面に私がいけない事を確認したアルケミストは視線を彷徨わせる。体勢を低くし迫る私と目があつたときには、私はアルケミストを殴れる距離まで来ていた。そのまま殴りつけるのではなく、顔面を掴み地面に倒す

「失策でしたねアルケミスト、銃を弾くのではなく、お得意のテレポートでもするべきでしたね」

「コレぐらいで何を勝ち誇っている。こんな拘束でもないものすぐに？」

違和感があるのか、不思議そうにするアルケミスト。私はそれに構わず、手を離し地面に落ちてしている銃を拾い、動作のチェックをする

「動けないですか、アルケミスト？ いい気味ですね」

「一体、何をした！」

「へえ、意外ですね。貴女でもそんな風に喚き散らすことがあるんですね」
「答えろ！」

いつものニタニタとした笑みは何処へやら、激昂した様子でこちらを見ている。質問に答える義理はないですが、まあ、いいでしょう

「私達グリフィンの人形は能力を上げる際、二つの方法があります。戦闘をして経験を積むか、増幅カプセルと言うものを使うか」

「……」

「詳しい説明は省きますが、そのカプセルの中身をウイルスに変え、貴女の自由を奪ったんですよ」

「ククク…… ハハハハハハ！」

「? ついに気でも触れましたか？」

詳細は分からなかったから省きましたが、丁寧に説明をするとアルケミストは突然笑いだす。何がおかしいのか

「こつちが演技をすれば、すぐにつけあがる! だから貴様らは、我ら鉄血と比べ鉄屑なのだ！」

「意味が分かりませんが？」

「貴様がべらべら喋った内容は、私を通して鉄血側に筒抜けだ！」

「ああ、そのことですか。それなら問題ないですよ、言ったでしょう自由を奪うと。

それは何も身体的にはではなく、全部ですよ」

「な、に？」

それまでの笑みは身を潜め、途端に焦ったような表情をする。もう、面倒ですな
「本当なら殺してしまいたいところですが、それでは同じことの繰り返しです。後は指揮官にお任せしましょう」

〈M1918視点 end〉

アルケミストを発見したとFALから通信が入り、作戦もいよいよ大詰めだ。敵の反応もあちこちから上がっているものの、シアアのオペレーターのおかげで全く問題がない。そんな風に暇をしていると、一本の無線が入る

『トウラベ指揮官ですか!』

「? エルピーダ指揮官、どうかしましたか?」

『M4が、M4A1の反応がロストしました!』

「どうやら厄介ごとのようだ。とは言っても、搜索に回す余裕のある人形など……
「あら、困りごとかしら?」

第88話

作戦は終了し、報告書の山も崩し終わり通常の業務に戻ったウチの基地。とは言え、それで終わるわけがないのもウチの基地だ。

捕獲したアルケミストは一度バラシ、40が解析をかけている。アルケミストのレポートの解析をしたいそうで、俺が許可を出しやっている。

テレポルトが解析できれば、グリフィンというよりI・O・P製の人形が使えるようになれば、ウチの基地の戦力が飛躍的に上がると考えたからだ。

まあそもそも、テレポルトなぞ俺もできるからあまり関係ないのだが。AIの方も着々と書き換えが行われており、40曰く忠実な兵器になつてくれるだろうとの事。

ウチの基地としてはそんなところか。どうせ功績なぞ、このS8地区を統括している指揮官にくれてやったのだから、どうでもいいしな。自由に行動していたのは、功績を交換条件にしていたからだ。

今回で一番被害を受けたのが、エルピーダ指揮官だろう。預かっているAR小隊はST AR―15がウイルスで抜け、隊長であるM4 A1使い物にならない。残ったM16 A1やM4 SOPMOD IIはウイルスに感染したST AR―15と接

触したため、M4A1と一緒に隔離だ。統括している指揮官も今回の失態を庇うつもりは無いので、何処かに飛ばされるのが濃厚と言ったところが

「さて、どうしたものか」

「どうしたものかじゃない！直すのかなり大変だったんだからな！」

俺の眩きに、横に居るデールがキレる。今、別の意味で頭を悩ませているのが、このベットで寝ている人形、ST AR15だ。エルピーダ指揮官に搜索を頼まれるも、そんな戦力はなくどうしたものかと悩んでいるときに姿を現したのは改修を終えたUMP45だった。ちょうどリハビリに良いだろうとM4A1の搜索を命じたところ、拾ってきたのがこのST AR15

「さっきも説明したが、I.O.P.のハイエンドモデルだ、僕も直したことがない。

幸い僕の手持ちのパーツに代替え可能なパーツがあったからよかったが、最早別の人形と言っても過言じゃない。まあ、僕が直したんだから何の問題もないがな！」

「ご苦労、代金の方は払っておいたからもういいぞ」

「……正直な話、どうする気だ？」

「どう、とは……」

それまでの雰囲気から一転、真面目な様子になる。俺は話が見えず聞き返す

「このST AR15のことだ。グリフィンはこの人形を血眼になって探してる。

本部に引き渡せばどうなるかわかっているだろうか？」

「本人次第だ。どちらにしろ、直した代金分は働いてもらうがな」

「はあ……お前らしいな」

第五章 幕間

第89話

適当なところに座りボーツとしていると、ST AR—15が起きたらしい。寝かせているベットから起き上がり、周りを見回すST AR—15。俺を見つけると不思議そうな顔をする

「トウラベ指揮官？」

「その通りだ、ST AR—15。気分はどうかな？」

俺が返事をする、ハツとした表情をした後、かけてあった布団をめくり自分の状態を確認する。流石デールと言うべきか、手術着を着ているから体の部分は見えないが、それ以外の見えている部分につきはぎの跡などは見られない。そんな自分の状態に驚くST AR—15。まあ、運ばれてきた時のボロボロな状態を知っているため、確かに驚くのだが

「私は爆発に巻き込まれて……」

「回収したものの曰く、かなり危ない状態だったそうだ。四肢は千切れていたし、頭部もそれなりに損傷していたそうだしな。一応、応急処置をしてここまで連れてきたと

「いっていたが、直した技師によれば少しでも処置が遅れていたら、今のお前は無かっただろうとさ」

「……………」

「信じられないのか、自分の身体を見て固まっているST AR—15。兎も角、説明責任を果たしたので、コレからはビジネスの話だ」

「さて、君を直しはしたものの、結構金がかかってな。ここまで言えばわかるだろう？」

「……………」

「目を細め、こちらを見るST AR—15。続きを言えと促しているのか、威嚇しているのか、どちらでもいいが続けさせてもらおう」

「なに、金を稼いで欲しいだけさ。何事もただとは行かない。別に全額返して欲しいわけでもないしな」

「……………」別に私は直して欲しいなんて一言も言っていない」

「なら、あのまま野垂れ死んでいた方が良かったと？」

「俺の質問に答えず、目をそらすST AR—15。その態度がもはや語っているよ
うなものだが、無視する」

「まあ、ゆっくり考えるといい。今回の一件で、お前は生死不明で、捜査は打ち切りと

なった。仮に戻ったとしても、ろくな結果にはならんだろうしな」

その言葉を残し、俺は立ち上がり部屋を退出する。部屋の入り口には、UMP45が壁に寄りかかっていた

「あら、もういいの?」

「もういいもなにも、目覚めたばかりだ。しばらく時間は必要だろうよ」

「お優しい事」

「なんとでも言え。とは言え、本人にやる気があるならお前が仕事を斡旋してやれ、拾ってきたのはお前だしな」

「ひどーい、私は指揮官の命令で拾ってきたのに。まあ、いいけど。ちょうど手が足

りていないところもあったことだしね」

そう言って部屋に入っていくUMP45

第六章

第90話

結局ST AR—15はこの基地から去った。いや、去ったというのは正確ではないか。UMP45が紹介した仕事に就いたようだ。ここにいるよりマシだと思っただのか、それとも律儀に金を返す気になっているのか。まあ、気長に待つとしよう。

話は変わるがこのS8地区もアルケミストが居なくなり、元の情愛に戻った。S9地区も同様で、破られた防衛網も修復し、元の安全な地区に戻った。とは言え、エルピーダ指揮官や俺が抜けて、新しく統括指揮官はきたものの、そこそこのキャリアをがある指揮官とは言え、地区に所属する指揮官のほとんどは新人たちだ、少し実力に疑問が残る。だが、俺はもうS9地区の所属じゃないし、アルケミストの件も片付いた。もう俺もここにいる必要はないだろう。そんな訳で、また基地を移動する事になった。今度の地区はS5地区。雪が積もり少し寒い地区だ

「どっせいー！」

「やったなー！」

荷物の搬入も終わり、前回の経験を活かして、基地機能を素早く復旧出来たため自由時間にしたら40が外に飛び出して行った。その後を追えば、何故か40と9が雪合戦と興じていた。とは言ってもその雪合戦、投球が早すぎて雪玉が見えてないのだが「はあ……」一応言っておくが、他の人形や人間も居るんだ、気をつけてやるんだぞ」「勿論!」

「わかつてるよ!」

返事だけはいいい二人に頭が痛くなりつつ、雪合戦を監視する。一応通行人などが居たら危ないからな、そのための監視だ

「お暇なんですね、指揮官」

「言ってくれるなUMP45」

二人を監視していると、気配を消して迫ってきたUMP45が嫌味なことを言うてる。一応言っておくが、自由時間になっているのだから暇でも問題ないのだが

「やり始めたのは、お前の姉貴分だ。そこにいつの間にか、妹分まで加わってこうなっているんだが?」

「でも、私のせいじゃないですよね?」

笑いながら聞いてくるUMP45にイラッと来たものの、スルーして用件を聞くことにする

「で、何用だ？ お前のことだから俺とおしゃべりしに来たわけでもあるまい？」

「流石指揮官。 シェルターを貸してもらいに来たんだけど」

「なるほど。 そう言えば、まだ司令室にセットしていなかったな。 セットしに行きたいが、あの二人をやめさせないと。 一応、通行人がいたら危ないと思ってここに居たんでな」

「ああ、そう言う事だったんですね。 なら二人を、ぶっ！」

「あ」

「やば」

　　どういわけか、こちらに雪玉が飛んできた。 その飛んできた雪玉はUMP45の顔に当たる。 飛んできた方を見れば、固まっている40と9

「.....」

　　沈黙が流れる。 先に口を開いたのは、UMP45だった

「それで？ どっちが投げたの？」

「よしー！」

「逃げようー！」

「待ちなさい40、9!!」

「はあ.....」

こうしてUMP姉妹の鬼ごっこが始まった

第91話

UMP姉妹の地獄の鬼ごっこから数日、S5地区はS9地区以上に暇だった。あま
り重要な拠点ではないからか、パトロールも一日一回で良いとかなり暇だった。

寒いから外に出たくないと言うのはあるものの、暇過ぎれば基地内の空気も悪くな
る。出掛けようにもさつきも言った通り重要な拠点ではないので、大きな街もない。

ここをグリフィンが統括しているのは、本部からこの地区を経由して他の地区への
アクセスがいいからだ。とは言え、仮にこのエリアが鉄血などに占拠されたとして
も、今なら多少回り道をすれば良いだけなのでそこまで支障がない

「それで、この状況どうするつもりなの？」

自分の椅子に座り、俺に聞いてくるFAL。司令室にいるものの、特にやることも
無いのでこの部屋にいる必要はないのだが、何かあつたら仕方ないのでいるのだ。一
応、シアにも暇は出しているのだが、何故かこの部屋で資料の整理などをしている
「どうするも何も、暇な人員を集めて、屋外の演習場を作っているとところだろう？　もう
少しで完成だし、それで少しは気晴らしになるだろう」

「そんなもの、持って数日でしよう。　実際、基地に來たての頃は皆んな雪合戦とかやつ

ていたけど、今はどうなの？」

「そうは言ってもな……」

一応、このエリアでハイエンドモデルが目撃されたから来たものの、そのハイエンドモデル自体が見つからない。ドローン関連も40がアップデートすると言っていない。そもそも、地走用のドローンも雪道に対応していないので、その改造も施すと言っていたのでちょうど良いと言えればちょうどいいのだが

「まあ、ドローンのアップデートが終われば、この状況も打破できるだろうよ」

「確か前回の秘密基地襲撃時の教訓を活かすとか言っていたけど」

「詳しい仕様書は…… シーア」

「ここにあります。それとコピーもどうぞ」

「ありがとう」

40から提出された仕様書とコピーを受け取り、シーアに礼を言う。受け取った仕様書をFALに投げると、早速仕様書を読み込むFAL。色々と小難しいことが書いてあるものの、要約すれば前回の秘密基地襲撃の時敵が潜んでいたのを感知できなかったので、それを感知する機能を取り付けますということだ。他にもいろいろ細かいアップデートがあるようだが

「40も色々大変ね」

仕様書を俺に返すと、ため息をつきながらそう言うFAL。
でやっていることなのでなんとも思わないようだが

とは言え、40も好き

第9 2 話

S 5 地区に移動してから数週間が経過した。相変わらずハイエンドモデルは姿を現さないものの、人形達にとっては朗報をお届けることが出来そうだ。

今まで気が付いていなかった俺が言うのもなんだが、この S 5 地区、防衛網に穴がありすぎて敵の侵入を許している。

何故かは知らないが、とある施設を囲んでおり敵の数はどんどん増えている

「この施設、鉄血にとつて重要な施設なのか？」

「ふふふ、本来ならそうじゃないんだけどね」

もったいぶった言い方をする 4 0。この言い方から察するに、この施設には何があるようだ

「それで、ここには何があるのかしら？」

F A L が呆れたように言う、少し笑いながら説明を始める 4 0

「ここ、なんの変哲もない建物に見えるけど、ハッキングしてちよちよいと調べたら、なんと！」

「なんと？」

40の言ったことを繰り返すFAL、すこし怒ったようなFALに慌てて説明を続けようとする40だが、意外な者に説明役を奪われる

「M4達AR小隊がエルピーダ指揮官のもとから離れたでしょう？ その理由がAR―15と接触をしたから。本部は傘ウィルスを警戒して、AR―15やAR小隊に接触したとされる人形達を片っ端から隔離して傘ウィルスの検査をしているの」

「45」

「貴女に任せていたら話しが進まないからよ、40」

「ガーン」

漫才をやっているUMP姉妹は放っておいて、今UMP45が言っていたことを頭の中で纏める。AR小隊の新たな所属先を聞いていないとは思っていたが、そんな事になつていたとは。まあ確かに、AR―15がああなつたのだ、本部が危惧するのもわかる。とは言え、こんな何もないところでやらないでも、そう思ったが思い直す。

こんなところだからこそか。鉄血やグリフィンにとつてあまり重要じゃないからこそ、目を逸らしやすいと言うことか。だが

「鉄血がここに集まり出したと言うことは」

「バレた、または当たりをつけたと言う事になるでしょうね」

40と漫才をやっていると思つたら、俺の話も聞いていたか。UMP45が俺のつ

ぶやきに、少し笑いながら返事をする。俺から本部にこのことを報告してもいいのだが、せつかくの機会だ人形たちのストレス発散のために鉄血に犠牲になってもらおう
「シアア、基地内に放送を」

「了解しました」

「どんなハイエンドモデルか知らんが、ウチの人形たちのストレス発散に付き合ってもら
うか」

俺はほくそ笑みながら立ち上がる。俺もそれなりにストレスが溜まっていたから
な発散させてもらおうとしよう

第93話

「なんだ、もう始まっているのか」

作戦会議を終え、直ぐに準備を済ませ出発したのだが、間に合わなかったようだ。

部隊が所定の位置についたと言う連絡が来たので件の施設を見てみると黒煙が上がっていた。中のM4A1が目的だとすると、突入も始まっているだろうしな

「404と40は予定を変更して中に突入しろ、敵は多いだろうがお前達ならやれるだろう」

『了解！』

次に通信するのは、それぞれの持ち場で待機している部隊にだ

「第一、第二、第三部隊は周りの敵を片付けろ。余り狭くて暗いところで戦闘というのも得策じゃないからな」

『アコナイト指揮官』

伝達をしていると、それを遮るようにシーアからの通信が入る。どうやら予想外のことが起きたらしい

「シーアか、何かあったのか？」

『敵の増援が続々とその施設に向かっていきます。このままでは挟み撃ちにされます！』

「了解した、シーアは引き続き指揮をしているはずのハイエンドモデルの搜索をしてくれ」

『了解しました』

シーアとの通信を切り、さつき通信をしていた待機している部隊に切り替える

「聞いていたな？　少し作戦を変更する、第一部隊は俺と共に敵増援部隊の排除だ。」

第二、第三部隊は少し辛い戦いになると思うが、最悪施設内に突入されても404と40が控えている。被弾を少なく、敵の数を減らす事を第一に考えろ」

『了解！』

「では、作戦を開始する」

通信を切り走り出す。今回は拠点で指揮ではなく前線に出ている。敵の数が多

いこともあるが、たまには俺も暴れたい。それに指揮ならば、シーアも勉強しているのでそれなりに出せるしな。まだ、あまり時間が経っていないのにもかかわらず増援を出してきたということは、こちらを監視している者がいるはずだ。なので本気は出せないが、暴れられれば十分だ。通信している間に、敵がぞろぞろと現れ始める

「さて、始めるとするか」

安物の剣を掲げ、近場の鉄血人形に切りかかる。安物の剣と言えどGuardの盾を切り裂き、鉄屑に変える。次々と切り裂いて行くも、敵に数は減らずそれほど増えている

「俺に気が付いて? いや、それもあるが単純に敵が増えてるな。増援を何とかしなければ、第一部隊はいいとして、第二、第三部隊の弾が尽きるな」

レックホルスターからハンドガンを抜き、引き金を引き続ける。ここまできると魔法で吹き飛ばしたくなるが、誰に見られているかわからないので我慢する。それとも代理人達^{アイツ等}を投入するか? ノーマル人形ならまだしも、ハイエンドモデルに見られたら厄介だ。そんなことを考えていると、近くの山から黒煙が上がっているのが見える。

なんだ、アレは

『アコナイト指揮官、敵ハイエンドモデルが見つかりました!』

「ふむ……」

直接ハイエンドモデルを捕獲しに行ってもいいが、この敵の数だ。それに、さっきのような統率された動きではなくなっている。隠れていたハイエンドモデルが出てきたことを考えると、指揮をしているものは今はいないはずだ

「ハイエンドモデルの近くに部隊は?」

『それが…… エルピーダ指揮官の部隊が』

「ここまできると、仕組まれているんじゃないかとも思うが…… なら、ハイエンドモデルの事はエルピーダ指揮官に任せるとしよう。 こちらは敵の殲滅をする。 シーア、敵の増援は？」

『止まっています！』

「なら、今いる敵を倒せば終わりだな」

第94話

作戦は終了。 とある施設、いや監視施設でいいか。 監視施設はかなりダメージを受けたものの、404+40や施設に向かおうとする増援を叩く、第一から第三部隊のおかげで、人的被害殆ど出なかったようだ。 それはもちろん人形も含めてだ。 ただ、深刻なダメージを負った者がいる。 AR小隊の隊長である、M4A1だ。 別に外傷等がある訳ではないのだが……

「助かりました、アコナイト指揮官」

「いえ、偶然ハイエンドモデル信号をキャッチしましたので、殲滅しに來ただけですから」

それはもう、酷いくらい落ち込んでいるのはエルピーダ指揮官だ。 元から低かった背が更に低く見える。

エルピーダ指揮官からAR小隊が離れ数日後にはここに異動してきたらしい。 そこそこ長くこのS5地区居たのに、それなのに気が付かなかったなんて、と落ち込んでいるらしい。 いやまあ、40が作った高機能のドローンですら掻い潜って潜んでいあのだから、グリフィン製のドローンでは仕方ないと思うのだが。 そもそも、この監視

施設の責任者はエルピーダ指揮官ではないのだ、責任があるならこの施設を管理、運営していた者だろう。とは言うものの、パトロールをしていたのだからとか、この間倒した小隊はとか言い始める。正直言って、気にしすぎだと思う。ミスなんぞ誰にでもあるし。だが、それを言っても意味はないだろう。早めに話を切り上げ、ヘリに乗る事にした

「いやー、それにしてもかなり参ってたねエルピーダ指揮官」

ヘリに乗り込み、離陸すると隣に座っている40が話しかけてきた

「それもそうだろう。元とは言え、自分の部隊のものがあんな調子ではな」

敵を殲滅し周囲の安全も確保できたので、施設に部隊を迎えに行くと、ちようどよくM4A1の搬出に立ち会ったのだが、最早廃人だった。一瞬ではあったものの、目は虚でどこを見ているかわからないし、ぶつぶつ独り言を言っていた

「ま、確かにね」

「あそこから立ち直れるかは本人次第というところだな。とは言え、落ち込んでいる暇もないだろうよ、本部はかなり彼に期待しているようだからな。AR小隊、M16A1とM4 SOPMODⅡだが、感染は確認されなかったようだから、前線に復帰。

そして新人一人を加えて三体がホープ指揮官の指揮下に入るようだしな」

「また忙しくなりそうだね」

「さて、それは鉄血の動き次第だろうよ」

そんなことをしやべりつつ、空を見上げる。
は沈み星が出始めていた

作戦もだいぶ長引いたためか、もう陽

第95話

基地に帰還し、今回の作戦の書類を処理する。人形達には明日は休みにしたものの、ゆつくり休むかどうか。だが、今回の作戦でガス抜きにもなったのは確かだ。

作戦前までは何処か基地内はピリピリしていたものの、今は前のようではないものの幾分かマシになった。面倒だが、このままいけばまた同じことの繰り返しになるかも知れん、敵を探すと共に、敵の本拠地に近いS2地区に異動を考えなければならぬかも知れない。それはともかく、報告書だ。もうクルーガー社長もほぼ不干渉をなので、提出する必要もないのだが。

「アコナイト指揮官、もうそろそろ休まれては？」

「それはこちらのセリフだシーア」

俺のことを心配そうに見るのはシーアだ。一応人形達に休みを出した時、基地の運営に關しても最低限回せる人員を残し、ローテーションで休むように伝えたわけだ。

もちろん、その中にはシーアも入っている。疲れはあるものの、このぐらいならなんの問題もない。逆にシーアの方が慣れない指揮や、オペレーターの仕事をして疲れたと思うのだが、そんな事ないの一点張りだ。なので、好きにさせていた

「貴女は心配しすぎよ、シーア。指揮官がこの程度で倒れるわけないわよ」
「それはそうかもしれないませんが……」

ヤレヤレみたいな表情を向けながら、FALがシーアに言うのと、シーアも分かっているが納得出来ないようだ。シーアの説得はFALに任せ、書類もキリのいいところまで来たので、手を止める

「それで40、施設の中はどんな感じだったんだ？」

タブレットをいじっている40に声をかけると、40の視線がこちらに向く

「どんな感じって言われても、あたい達の中に突入した時には、敵も建物内部に侵入してたよ」

40が言うには、予め偵察をして裏口を発見していたのでそこから内部に入ったものの、すでに敵は近くに居たらしい。なので、当初の予定通り建物内の敵を倒しながらM4A1がいるとされる地下に行つたそう。だが、M4A1は確かにいたのだが、その近くに面白いものがいたらしい。敵のボスであるエルダーブレインだ。どうもエルダーブレイン、M4A1に執着があるようだ。ともかく、施設内の人形全員が立てこもっていると言われた部屋に到着すると、M4A1以外全員ならかの手段で気絶させられており、そのM4A1もエルダーブレインに何かされたのか、その場に座っていただけだそう。流石に放っておける状態でもなく、404小隊が人形たちを起こ

しつつ、40がエルダーブレインに発砲、電磁シールドのようなもので防がれたらしいが、その隙に起こされたM16A1がM4A1を奪還、UMP45が強化された時の副産物として強化されたスキルを使い撤退したらしい。その撤退の時もひと悶着あったらしいがな

第96話

作戦から次の日、基地は休みとなつてゐる。とは言え行くところのないこのS5地区、ほとんどの人形が基地内でまったりしてゐるようだ。俺はそんな中まったりともいはず、司令室に詰めていた。と言うのも、撤退の際のひと悶着の話を書くためだ

「で？ 何があつたんだ？」

「.....」

元凶である416を呼び出すも、答える気すらないのかこちらを見ない。暇な奴、40とFALのことだが、これには苦笑いだ。天井で殺気を放つてゐるやつがいるもの、本人が気が付いてゐる様子はない。仕方がないので隊長であるUMP45に視線を向ける

「M4を救出する時に少しもめたのよ」

ヤレヤレみたいな表情をするUMP45。9に視線を向ければ、頷いてゐることから本当だろう。そう言えば、40が言つていたな416はAR小隊に並々ならぬ因縁があると

「詳しく話せ、UMP45」

「ちよつとした口論になったの、AR小隊とか呼ばれているのに、このざまとか、その程度の実力なのか、まあ、416が喧嘩を売るようなことを色々、ね。いつもなら、言われた本人M16だけど、とりあわないんでしようけど状況も状況だったから、ガチの殺し合い一歩手前だったわ。40や私が気を失わせたからよかつたものの、そうじゃなかつたらやられていたわよ416?」

何時もの小ばかにしたような言い方ではなく、割と本気で心配しているような声だったが、416は受け流しているようで、相変わらず顔をそらしたままだ

「その様子では反省の色なしか。エルピーダ指揮官が何も言つてこないところを見ると、こちらに遠慮してるのか、言うのをためらっているのか…… まあ、文句を言うことが出来ないほど忙しいかのどれかだろう。とは言えだ」

そこでいったん言葉を切り、天井を見上げる。特に意味はないのだが、言いたいことをまとめ、再び正面に向き直る

「問題を起こしておいてそのままとはいかん」

その言葉で初めてこちらを見る416。何か言いたそうにしているので発言を許可する

「問題行動と言うのなら、貴方の方が起こしているのではないかしら指揮官」

「残念ながら、起こしていたとしても証拠がないのでな。それに、本部はこち^{向こう}への干

渉を極力しないという取り決めもあるしな」

「……………」

「一応言っておくが、お前たちは本部が派遣して俺預かりになっている。そして、極力干渉をしないということは、お前たちはもはやウチの正式な所属になるということだ。

故に俺が処分を下しても、問題ないわけだ」

見るからに悔し気な顔をしている416

第97話

「さて、少々煩いがいいだろう」

シエルター内は相変わらずドラゴンの唸り声と悲鳴が響いているが、いつもの事なので捨て置く。武装させた416と降りてきた訳だが、かなり警戒している。まあ、当たり前か。前回ここに来たときは9に終末を起こさせた訳だしな、警戒するのも当たり前か

「……私を処分するつもりですか？」

とうとう耐えきれなくなったのか、本題に入ってくる416。その問いに俺は笑みを深める

「まあ、ここでは証拠も何も残らないから都合がいいと言えればいいがそうではない。

それに、最初から処分するつもりなら武装させる必要はないからな」

「なら、なんでここに？」

気味が悪そうに辺りを見回しながら、俺に聞いてくる416。ふむ、別にいいかとも思ったが、煩いのは確かか。四次元ポケットからハウスボードを取り出し、シエルター内を少しいじる。と言っても、今いるところと、音の発生源を仕切るために壁を

設置するだけなのだが。それを済ませるとハウスボードを四次元ポケットの中にし
まい、話に戻る

「相変わらずよくわからない力を……」

「なに気にするな。さて、先程の質問だが、半分正解で半分不正解だ。お前を処分す
るかどうかはお前次第と言うことだ。ここに移動してきたのは、その方が都合がいい
からってだけだ」

「ッ！」

「まったく、なんの躊躇いもなしに撃つてくるとは…… まあ、銃弾くらいで死には
しないが」

俺の話聞き即座に発砲してくる416。こうなるであろうことは分かっていた
ので、俺は銃弾を弾き飛ばす。念のため一人で来てよかったと心底思った。この光
景を見たら40や9A-91が見たら、416に何をするかわからないからな。

「化け物め!!」

無駄だとわかったのか、接近戦を挑んでくる。だが、腕を捻り地面に押し倒す

「よく言われる。まあ、落ち着け416。俺はお前たち404小隊を買っているん
だ、だからただ処分するのはもったいないと思つてな。まあ、結局お前次第だが」

「……………」

「少し気になってな、お前がM16A1やAR小隊に何故そんなにこだわるのか」
「いきなり何を」

押さえつけられながらも、こちらを殺さんとはかりに睨む416。それをスルーしつつ、気になったことを聞く

「M16A1については分かる。40から話を聞いたしな、AR小隊に関しても、お前が持っている銃に関係することだろう。他の戦術人形でも同じような人形がいたからな。だがその中でも、お前は特にだ」

「黙れ……」

「過去の作戦の事を気にしているのか？ それとも……」

「黙れ!!」

再び暴れ始めるが、俺に力がかんうはずもなく、暴れるだけに終わる

「まあ、そこまで言うなら黙るが一つだけ。お前は何時まで過去にこだわっているつもりだ？ お前と同じ様な境遇に居たUMP45は未来に目を向け始めたぞ、お前や小隊メンバーを守るために」

「……………」

俺の言葉を聞き、身体から力が抜ける416。それを確認して、俺は拘束を緩め、ハクスボードを使いシェルター内をもとに戻す。さて、416はこれからどうするのか

第98話

↳UMP45 視点↳

40や9と話しながら、416を待つ。40曰く、指揮官は私達404を気に入っているらしいから、解体等ほしなだろうと言ってはいたけど、心配なものには心配だ。40が自分で言ってたけど、指揮官は気分屋なのだ、なんの拍子で気が変わるかわかったものではない。416は挑発に弱いし…… まあ、扱いやすくていいのだから。 そんな失礼な事を考えていると、シエルターの扉が開く

「お帰りアコナイト？」

「なんで疑問系なんだ」

扉が開くと同時に指揮官の横に移動する40は、迎えるまでは笑顔だったけど、何かを感じ取ったのか不思議そうな顔をしている。相変わらず動きが見えない。9も指揮官の横に移動していた。9の動きはこの頃見えるようになってきたけど、40の動きは相変わらず見えない。40は45ならすぐだよって言っていたが。ともかく不思議そうな顔をしていたのは一瞬で、笑顔に戻る

「んーんー、別に」

「………変なやつだな」

苦虫を噛み潰したような顔をしながら、40の頭を撫でて椅子に座る指揮官。　　いく
ら待つても416は来ない

「ねえ指揮官、416は？」

9も気になっていたのか、先に指揮官に聞く。　　指揮官はいつのまにかシアが淹れ
ていたコーヒーを飲みながら一息ついていた

「ん？　ああ、まだシエルター内に居るようだな」

「ふーん、そっか。　　指揮官、私もシエルターに行つていい？」
「構わないぞ」

わーいと言いながら、シエルターに入つて行く9を追いかけつつ、指揮官を横目で見
る。　　特に表情に変わりはない。　　いったい416はどうしたのだろうか？

くUMP45　視点endく

く416視点く

『お前は何時まで過去にこだわっているつもりだ？』

指揮官の言葉が、何度も頭の中でリピートされる。　　そんなつもりは無いと叫ぼうと
したが、言葉が出なかった。　　実際、私はそんなつもりはなかった。　　私は完璧で、

AR小隊アイツ等より優れている。裏の仕事とは言え結果を残せば、AR小隊アイツ等より優秀だと証明できる。そう考えていたはずなのに。心のどこかでは……いや、考えないようにしていただけだ。過去の失敗から逃げて

「まったく、呆れた」

「……………」

下げていた視線をあげると、45が目の前にいた。いつの間にも思ったが、ただ私が腑抜けていただけか。よく聞けば9の声も聞こえる

「45」

「呆れた、あの時私にさんざん言ったくせに今度は416がそうなるわけ？」

「……………」

ああ、立場は全く逆だけどうなつたことがあつた。あの時は私が45の立場に立っていた

「アンタは…… アンタはどうやって立ち直つたの？」

「……………」

私の投げかけに意外そうな顔をしながらも、それを引つ込めて真剣に考えている45。だがそれも一瞬で

「別に、変わらなきゃいけないって思ったからよ。416に言われたように私は40

4の隊長で、全員を安全に生還させる必要がある。もちろん、報酬のためつてこともあるけどね？ まあ、それは置いておいて。昔言われたことがあるの、数えきれないほどの試練がこの先私を待ち受けている。それを乗り越えるための正しい選択は、きつといつも私を一番苦しめる方、生き残るにはそうするしかないの。実際その通りだと私も思う、今までの経験を含めてね。その試練を誰も失わずに乗り越えるなら、力を付けなきゃならない。だから私はこうしてるの」

そう言いいきり、視線をずらす45。私もつられてそちらを見れば、9がドラゴンと戦っていた

「私は……」

「別にー、戦えないって言うなら私が守ってあげるわよ？」

そう言いながらこちらを挑発するように見る45。拳に力を入れるも、これでは45の思う壺だと思い、力を抜く

「まあ、それを選ぶアナタじゃないでしょう？ 話に戻るけど、私だつて別に過去を引きずってないわけじゃないわ。でも、それよりも未来に、この404に目を向け始めただけよ」

「……ふん」

「それに、もし失敗したとしても、指揮官や40に擦り付けばいいしね」

「アンタ……」

いい話のようだったのに、最後の最後で落ちを付けた。それなのにも関わらず、私に笑顔で手を差し出してくる。その光景は、何処かあの助けられた日に似ていたかもしれない

「さて、立てるかしら416」

「ふん！」

45の手を取り立ち上がる

416視点 end

第99話

ふと、元の世界、ノースティリスに残したベットの事が気になった。別にホームシックとかではないが、この世界には年単位でいるのだ、これまでの世界と合わせればかなりの年数家を空けていることになる。ここまで長いのは初めてではなからうか。

とは言っても、世界を渡るムーンゲートは見つかっていない。探しても探しても見つからなかったが、また探しに出るのもいいかもしれない。まあ、すぐにでも手は切れるとは言え指揮官と言う地位にあるのだ、この人形達に次の職場を斡旋しなければならぬ。面倒ではあるが、俺についてきてくれているのだから、それくらいはしなればならないだろう。

「ふん、らしくない事を考えているな」

幸いなことに俺の眩きは周りの人達には聞かれなかつたらしい。現在、また違う地区に移るため引越し作業中だ。今度の地区は鉄血の本拠地に近いS2地区だ、これまで以上の激戦が予想される。一応、人形の増員を本部に打診したが、いい返事が貰えるかどうかは別問題だ。増員が難しいと言うのなら、鹵獲した鉄血のハイエンドモデル投入するだけだしな

〈UMP40 視点〉

引越しのための荷物の仕分けを終えたのは夜になってからだ。荷物が少ないとはいえ、こんなに時間がかかるなんて思わなかった。ドローン等も回収したので、もう基地を移るだけになった。短い間とは言えお世話になった基地を見て回っていると、屋上にアコナイトの姿を見かけた。むー、なんか珍しい気がする。アコナイトの隣ってあたいを含めて誰かがいるし、一人でしかも屋上で何か飲んでいるみたい。昼間のこともあって気になったあたいは、屋上に行きアコナイトに声をかける

「アコナイト」

「ん？ 40かどうしたんだ？」

どうやらお酒を飲んでいたみたい、月見酒つてやつかな？

「別に、アコナイトの姿が見えたから気になって」

「なるほど、お前も飲むか？」

「いいの？ わーい」

アコナイトからお酒を貰い、一口飲むけど

「うー、辛い……」

「まあ、飲み慣れないとな」

あたいが飲んでいたお酒をとると、四次元ポケットから新しいお酒を取り出す。今

度は果実酒のようで、あたいでも美味しく飲めるものだった。上機嫌でその果実酒を飲みながら、昼間のつぶやきについて聞く

「そう言えば、荷物整理してるときらしくないこととか言ってたけど何だったの?」

「ああ、少しこの世界に来る前のことを考えててな。それでこの世界では指揮官なんかやっているだろう? らしくないと思ってるな」

くUMP40 視点endく

第100話

S2地区に移り数日、忙しさがこれまでの比ではない。恒例のこの地区を統括している指揮官への挨拶は画面越しになってしまったし、報告書等も溜まる一方だ。シアや40が居るからマシとは言え、やる事が山積みになって行く。逆に喜んでいるのは一部の人形達だ。前の基地で暇を持て余していた一部の人形達は、毎日のように出撃や基地の防衛に入っている。巻き込まれた人形は気の毒だが。本部に打診した新人達はここが前線なのもあり、配属が遅れている。一応、今の人数でも今のところは大丈夫だ。流石勢力図のラインを押し返したり押し込まれたりしている地区だ

「40ドローンの配備は？」

「空の方はOKだけど、地走型は駄目だね。敵の数が多すぎるのもあるし、地上だからどうしてもバレルし」

「空だけでも飛ばせているなら構わん。FAL達や鹵獲した鉄血のハイエンドモデルに情報を共有して近場から叩いて行くぞ、こうも襲撃が多くてはたまらん」

基地に最初からついていた機関銃では足りず、俺と40で密かに買っていた機関銃などを設置しているため敵を近づける事はないものの、弾薬代が馬鹿にならない。請求

書を本部に送ったところで、返ってくるよりも消費の方が多いため意味をなさない

「オツケー、鹵獲した鉄血のハイエンドモデルを動かすなら基地周辺は大丈夫だね」

「とは言え、元を叩かんとな」

「そつちも探してる」

「頼んだ」

40と会話をしつつ、書類を済ませる。逆側に目を向ければ、シーアが忙しそうに

仕事をこなしていた

「シーア、休んでもいいんだぞ?」

「いえ、そう言うわけには。それに私は大丈夫ですので」

そう言いながらふわりと微笑むシーア。少し限はあるものの、体調とうは問題なさ

そうである。だが俺や40と違い、シーアは普通の人間だ、無理をさせすぎるのも悪

い

「辛くなったらキッチンと休む事。もし、少しでも顔色が悪くなれば強制的に休ませる

からな」

「わかりました、アコナイト指揮官!」

「いや、こちらこそ助かってる」

シーアとの会話もそこそこに、廊下の方が騒がしくなる。この忙しい時に厄介事か

とも思うが、どこの部署も手一杯だ。　ホント、運営を開始してから初めてではなからうか

「アコナイト、またスコープオンがやりやがった!!」

「これで何度目だアイツ……　で、損傷は?」

「左腕が吹き飛んだ!今応急処置をしてるが、パーツが足りないぞ!!」

「本部から時期に届く、取りあえずそれまでもたせろ」

「ならスコープオンに良く言っとけ!!」

「デールが緊迫した状況と裏腹に、楽しそうに司令室から出て行った。　ああ、そう言ええば、アイツも生き生きしていたな」

第101話

代理人達や第一部隊で攻勢に出て数日、油断はできないものの、ようやく基地周辺の安全を確保できた。

これにより物資も届き、ようやく一息をつくことはできた。

まあ、鉄血の本拠地に近いこともあり、パトロール時でさえも、かなりの鉄血のノーマル人形を撃破して帰ってくるのだが。

書類の方も落ち着いており、これでようやく山場を越えたというところだろうか。

さて、話は変わるがスコープオンだ。基地を移ってからすぐに戦闘で慣れないというところもあるだろうが、それにしたって今回の戦闘での大破が多すぎた。敵に突っ込んで大破。これに関してはまだいい、スコープオンはどちらかと言えば経験をもとにした勘で戦うタイプであり、それによって状況を有利に運ぶことがほとんどだからだ。だが、今回大破になる原因で多かったのが自爆だ。焼夷手榴弾を投げようとして、腕に銃弾が当たるとか、普通におっこしたりとか。戦闘が終わった後、俺が見にくくと最初は笑って誤魔化そうとしたものの、最後には俺に向かつて頭を下げていた。それで許す俺ではないがな。スコープオンには罰として、首からプラカードを下げさ

せている。私は今回の作戦で多くの資源を無駄にしました、次回からは気を付けます。そんな文面が書かれているプラカードだ。最初の一日目は食堂で正座をさせ、反省させて、それからパトロールと寝るとき以外の着用に義務つけた。その期間は一週間。これには本人もこたえたのか、無駄な被弾や、弾薬の消費が少なくなつたそうだ。

夜、書類をまとめ終え司令室を後にしようとする、通信が入る。しかも、暗号化された通信とは、よほど内容が聞かれたりしたくないらしい。少し面白く思いながら通信に出る

「こちらトウラベ」

『繋がったか』

通信の相手はクルーガ社長だった。クルーガ社長と言えば、今は軍のレセプションかなんかに参加していたはずだが

「クルーガ社長、珍しいですね貴方が通信をしてくるなんて。しかも暗号化された通信とは。用件は？」

『君に依頼したいことがある』

「ほう？ 命令ではなく、依頼。しかも暗号化された通信を使ってまで。よほど面倒な依頼なんでしょうね？」

『その通りだ。あまり関係ないものを動かすのは好ましくなく、重要度も高い。人となりはともかく、君なら見事に依頼を成功するだろうと思つて依頼する』

「馬鹿にしているのか、褒めているのか…… まあいいでしょう、内容を聞いてから判断しますがね」

第102話

俺は404や40と共にとある鉄血の基地に忍び込んでいた。こうなった原因はクルーガー社長からの依頼であるものの、鉄血の本拠地近くの基地なんか普段であればなかなか入れないからな。こちらとしても都合が良かったので受けた次第だ。情報を抜くだけなら40だけでも良かったのだが、9達の仕上がりも生で見たかったので連れてきた

「それにしてもリコリスの残したデータに何でそこまで興味を持つのか俺にはわからんな」

「まあ、情報は多いに越したことはないからね」

苦笑しながらデータを抜き出す40。40にとっても過去に抜き出したデータだ、そこまで必要性は感じていないようだ

「でも、おかしくないかな? 過去にAR小隊が同じデータを抜き出してるはずなのに、またこんなことするなんて。AR小隊も違うところで同じ作業してるんでしょ?」

9の最もな質問に答えたのは、45だった

「軍が求めてるんじゃないかしら? 確か依頼が来たのは軍とのレセプションの後なん

でしよう?」

「ああ。とは言え、なぜ軍が求めているのかが謎だがな。軍とグリフィや業務の内容からしてお門違いだ、一研究者のデータに何故軍が介入してくるのか」

「さあ? でも、指揮官が言ったようにそこが鍵になるんでしようね。近いうちに軍と何かあるんじゃないのかしら?」

「んー、昨日サラツとクルーガーの外出記録調べたけど、たしかにこの頃一部の軍の官僚とかと会ったりが多いんだよね……。何があるのは確かかもね。よし、とりあえずこのデータ抜き出しは終わったよ」

「とりあえず抜き出したデータはクルーガー社長に送っておけ、何が必要かわからんかな。さて、脱出するぞ。全員脱出完了次第、外で待機している第一部隊に連絡して基地内外問わず敵の殲滅だ。別に基地を破壊しても構わんからな」

「了解。彼女達にも連絡しておくね」
「ああ、頼む」

連絡が取れたのを確認し、来た道とは別の道で出口を目指す
〈FAL視点〉

「指揮官達から連絡が来たわ、そろそろ準備をしましょう」

休んでいる隊員達に声をかけると、すぐに準備をします。
……この作戦に

何も思わないあたり、私も指揮官に相当毒されているわね

「それにしても、この人数で基地一つ攻め落とすと考えると正気の沙汰じゃないのお」
「今更じゃないですかナガン？」

独り言のように呟いたのはナガンで、どうやら私と同じ違和感を感じていたようだ。その呟きに反応したのはM1918で、私たちの中だと一番最後に改造され第一部隊に編入したのに、もうこの環境に適応している。まあ、彼女の場合この基地に来るまでのことを考えると適応してもおかしくはないのかもしれない

「皆さん、指揮官からの合図です」

この中では一番目がいい9A-91が指揮官が出した合図を確認したようだ。

「それじゃあ作戦開始よ。オーダーはただ一つ、サーチアンドDESTROY。これだけよ。ここの掃討が終わり次第次の基地に行くわよ」

「了解」

〈FAL視点 end〉

第103話

作戦は順調に進んでいく。俺たちが情報を抜いた基地は、FAL達の部隊が消してくれているので、敵に追われる心配もない。とは言え、基地が少なくなってきたので、守りは相応に硬くなる。だが、俺や40がレポートを使えるため侵入自体は安易である。侵入するのはいいのだが、問題も当然のように出てくる。基地に記録されているデータが、あまり代わり映えしなくなってきた。取得したデータはクルーガー社長に転送しているから問題ないものの、明らかにリスクとリターンが合わなくなってきた。とはいっても、かなりの数の基地に侵入しているため、敵の勢いは削がれつつある。だが、基地に攻撃を仕掛けているのにもかかわらず、撤退を選ぶ場合も多くなってきたとFAL達から報告を受けた。となると、本部のガードが硬くなるわけで侵入しているAR小隊の方はどうなることやら

「アコナイト、ここもokだよ」

「40追加で探って貰いたい情報がある」

データを送り終えたのか、声をかけてくる40にそう切り返す。不思議そうな顔をしながら、聞いてくる

「なに?」

「今敵の本拠地に侵入しているAR小隊がどんな塩梅かだ」

「そんなのを調べる必要があるの?」

416が済ました顔で聞いてくる。普通なら他者を気にする必要が

「一応だ、一応。不測の事態になれば、近くに居るのは我々だけだからな、もしかしたら救援を頼まれるかもしれないぞ? それじゃあなくても、我々がデータを抜き去り、本拠地近くの基地が破壊されているんだ、相手も馬鹿じゃないんだ何かしらの手は打つだろう。 そうなったときの為さ」

俺がもつともらしい理由を言っていると、40の横に居たUMP45が考え始める

「ふーむ、そしたら報酬の追加は請求しないとね。40、私は敵の動きを探るのと脱出経路を複数用意するわ、貴女は」

「お、手伝ってくれるの45? ありがとうー!!」

「抱きつかなくていいから40」

「もー、照れちゃって。まー任せておいてよ、あたいはAR小隊の居場所でしょ?」

「お願い」

40とUMP45 が作業を始め、手持ち無沙汰になる俺や9や416。G11? 寝られるとわかったら即寝たぞ

「むー、A R小隊のほうはデータの抜き出しの最中みたい。信号を追って見てるけど、余り動いてないし」

「こっちは詳細な敵の基地の内部データをダウンロードしたわ。逃走経路は今から練るけど、そんなに時間は掛からなそうよ」

「ふむ… なら次の基地に向かいながら考えてくれ。UMP45の先導は9お前に任せる」

「了解！」

「それでは脱出するぞ」

そう言いながらFAL達に合図をし、次の基地へと向かう

第104話

敵本拠地周辺の基地をかなり回った頃、いきなり通信が入る。40達と共に物陰に隠れ通信にでる

『こちらトウラベ』

『アコナイト指揮官、本部から通信が……』

『ふむ…… 繋いでくれ』

通信にでると、明らかに通信をしたくなかったような声をしたシーアに繋がる。こちらの位置などがバレる可能性もある為、シーアには緊急事態以外通信は控えるように言っているが、通信が来たということは緊急性の高いものだろう。本部からと言う時点で大体想像はつくのだが

『こちらトウラベ』

『私だ』

『クルーガー社長、ですか』

やはりと言うか、なんとと言うか。今回のこの情報を抜き取るのを依頼してきたのはクルーガー社長。こうやって別働隊が動いていると知っているのはヘタをみるとク

ルーガー社長だけだ、ならば本部からと言われても、一人に絞られるわけだ。そして、このタイミングで通信をしてくると言うことは

『追加で任務というわけですね』

『その通りだ。内容はA R小隊の救出だ、理由はわかるな?』

『受けるか受けないかは、こちらの判断だと思いが…… 報酬は?』

『君にとつて富や名声など欲していないだろうから…… ともかくともかく、こちらで用意できるものであればなんでも用意しよう』

『まあ、そこら辺が妥当か。まあ、受けるでしょう、こちらでも上手くやりすぎた』

『……』

最後の俺の皮肉には反応せず、クルーガー社長は通信を切った。そして、俺は全員を見回す

「全員通信は聞いていたな? 暴れてもいいのだが、今回の目的はあくまでA R小隊の救出だ、そののところが忘れるなよ?」

「それ、一番忘れそうなの指揮官よね?」

「まあまあ45、それより作戦会議始めよう?」

く R O 6 3 5 視点く

敵の数が多すぎる、このままじゃ脱出も……

指揮官が外で陽動をかけているは

「ずだけど、敵は釣られている様子もない。こんな時にM16も居ないし！」

「もう、なんなのよ！」

「RO? どう、したの?」

「ああ、なんでもないわよSOPMOD」

「ん」

思わず叫んでしまったけれど、SOPMODの声を聞いて、少しは冷静になれた。

私はデータの取得が終わわりSOPMODより一足先にこちらに帰ってきたけど、そこに私達を見ているはずのM16は居なかった。ちゃんと一声かけるように言っておいたのに。とは言え、敵を見つければここに急いで戻ってくると思うので、敵に見つかっては居ないのだろうけど……そんなことを考えて居ると、M16が帰ってくる

「M16!」

「RO、もう終わってたのか早いな」

「早いではありません!何度言ったら!」

「仕方ないだろう、基地内の敵が時間を経るごとに多くなって居るんだ、気がついていたら囲まれていたなんて事態になれば、全滅など必須だぞ?」

「それは……」

M16が言うことはわかっているが、それでも

「とは言え、だ。勝手に見回っていたことは謝ろう、すまなかった」

「……………いいですよ、もう」

そんな私の態度に苦笑を浮かべるm16。なんですかその顔は、まるで私が悪いみたいじゃないですか。そんな事を考えていると、後ろからすごい音がした。そちらを見てみると、SOPMODが床に倒れていた

「SOPMOD!?!」

私は急いでSOPMODに駆け寄り、体を起こす。どうやら異常はないみたいだけど…

「多分、今までDLにキャッシュを割かれていたからいきなり動いて体がついていかなかったんだろう。ともかく、DLは終わったのかSOPMOD」

「アイタタタタ…………… うん、情報は抜いてペルシカのところへ送っておいたよ」

「なら任務は完了だな」

「急いで脱出しましょう」

〈RO635 視点 end〉

第105話

「さーで、それにしてもどこから侵入するんだ？」

作戦会議をする為、改めてドロロンで敵基地内を空から偵察するも、敵の数はかなり増えていた。FAL達の部隊をこちらにさせたとしても、数の多さで苦戦は免れないだろう。そもそも、騒ぎ過ぎれば中に居るAR小隊に危険が及ぶ

「とりあえず、今わかつているのはAR小隊の三人が居るのはこの部屋、信号的に間違いないよ。とは言え、いつ動き出すかまではちよつとわからないかな」

タブレットの映像を切り替え、AR小隊が居るとされる地点を指差す40。それが終わると40はタブレットをUMP45に渡す

「いくつかルートを考えてはいたけど、敵が余りにも増えすぎるからバレないで彼女達のところまで行くのは無理ね。もしFALの部隊もこつちに来てもらつて突入しても、結果は変わらないでしょうね。それどころか、バレる可能性が増えるだけ」

「つまり突入はこのメンバーで行わなければならぬって事、45姉？」

「ええ。しかも、この人数で敵を避けつつAR小隊を見つけなければならぬ。とは言つても、40が彼女達の信号を追えるから難易度はそこまででもないけど、それで

もこの人数で敵の本拠地を歩かなきゃいけないのは変わらないわね」

「それに退路の確保もでしょ?」

UMP45の言葉に反応したのは416で、その言葉を受けUMP45は頷きながら続きを話す

「FAL達も居るとは言え、出来れば彼女達には突入せず、脱出する時の援護を頼みたいし。そうなる、中で部隊を分けるしかないのだけど」

そこでチラリと俺を見てくるUMP45、ここで俺に意見を求めてくるとは珍しい「囧は俺一人で充分だと言いたいところだが、俺の戦い方は基本魔法を使つい大人数を巻き込む戦い方が、剣や銃による一対一による戦い方だ。退路の確保までやるとなると、確実に人数が足りん。40はAR小隊の位置を知るのに必要だからこちらには組み込めないな」

「……私と416が指揮官と共に囧と退路確保に回るわ。9それとG11は、40と共にAR小隊の保護に向かって。40はAR小隊の位置を知るのに集中するから、二人には40の護衛を頼むわね」

「了解!」

「ええー… 私はそっちの方が…」

「あら、変わってくれるなら変わるわよ?」

囧と退路確保だから、弾は飛んでくるだろう

し、最悪死ぬかもしれないけど」

「頑張ります」

こつちの方が楽だとも思ったのか、G11はこちらに来ようとしたが意図が分かっている416に軽くあしらわれていた

「さて、FAL達に今の作戦を伝え次第動くぞ」

第106話

「それにしても珍しいな、お前達が俺と共に来るとは」

FAL達を外に待機させ、40達を施設内に入らせた後、バレないように予定地点へと移動していた。警備は厳しいものの、意外と抜け道や死角もあり予定地点への移動は苦ではない。もつとも、気を抜けばバレるだろうが。

「効率的に考えた結果よ。AR小隊の位置を掴んでいるのは40だけ、囿役をするなら身軽な私と火力担当の416が必要でしょ？」

「別に40がお前にAR小隊の補足方法を教えればお前でも出来るだろう？ 火力はまあ、416が適任ではあるが」

「そう俺が言えば、視界の隅に見えていた416がすまし顔で軽く頭を下げていた「あら？ 私より40の方がよかつたかしら？ まあ、指揮官の言う通りなんだけど。」

ああいう繊細なハッキングは40の方が得意なもの、40に任せられた方が確実なの「なるほど」

俺はその言葉に納得し、手に持つ銃をチェックする。この頃コイツらに関わるようになってから銃の手入れをし始めたが、やはり使い心地は余り変わらない。二人も俺

につられ自分の銃をチェックし始める。 予定のポイントに移動も終わり、後は40達の合図を待つだけだ

「RO635 視点」

部屋から出る前に少しでも情報をと思い情報を探っていると、待っていたのは絶望だった。 元々予定していた脱出ルートを使えず、予備プランは敵が多すぎて成功率は半々と言ったところ。 強行突破も考えたけどこちらは三人、誰かが犠牲になるなんて到底認められない。 その事をM16に相談するも

「……仕方あるまい」

そう言って考え込んでしまう。 こういう時、貴女ならどうしていたのですか、M4。 そんな現実逃避に似た事を考えていると、足音が聞こえてくる。 SOPMODやM16と顔を見合わせ、全員で銃を構える。 足音はこちらに迫ってきている。 どうしてバレた、いつバレたかと思いがぐちやぐちやになるが、なんとかそれを表に出さずこの部屋唯一の出入り口を注視する。 一歩二歩と近づいて、扉の前で止まる。 そして「ヤッホー、今から入るけど味方だから撃たないでねAR小隊のみんな」

そんな間の抜けた声をしながら入ってくる。 思わず引き金指に力を込めようとするけど、すんでのところでM16が手をあげる

「……味方だ」

その言葉に安堵するとともに、違和感を覚える。 今回のこの任務、指揮官の部隊以外は居ないはずだ、それなのに味方？ 注視して味方の三人を見てみるものの、グリフィンのデータベースには見当たらない。 なのに何故味方などわかるのか、私が困惑していると、先頭に立つ人形が笑った気がした

〔 R O 6 3 5 視点 e n d 〕

第107話

40からAR小隊を保護したとの連絡が来たので、こちらはこちらで始めるとする
「416あそこアホみたいに固まっている連中に榴弾を撃つてやれ、戦闘開始の合図だ」

45にFAL達への連絡を任せつつ、416に指示をする。416も乗り気なのか
頷き、榴弾を発射した

「まったく、少しは待つて欲しかったのだけど」

「ならそのニヤケ顔をなんとかしてから言え、45。 作戦開始だ、派手に行くとしよう」

そう言つて物陰から勢いよく飛び出し、かろうじて榴弾を逃れた鉄血の人形に鉛玉を喰らわせる。さて、今ので固まっていた一団は殲滅したが、建物内や他の区画から鉄血が押し寄せてくる。流石本拠地と言うべきか

「指揮官、こつち、こつち」

45が手招きをして、俺を誘導する。流石に囲まれるのは面倒だからな、退きながら戦わせてもらう

くUMP40 視点く

遠くで爆発音が聞こえた。音から察するに416の榴弾つぼいかな。そんな事を考えながら、先行させた地走ドローンで敵を見つつ、45が考えた脱出経路を進んでいく

「今の爆発は……」

「味方の榴弾だよ、気にせず進んで」

今にも足を止めそうなAR小隊の臨時の隊長に声を掛けつつ、進む。流石にあつちで気を引いてるだけあつて、敵がない。とは言え、敵の基地内だからね、気は抜けない

「……随分思い切りがいいものだな、別働隊の方は」

「向こうには指揮官が居るからね？ それにコッチを安全に移動させるなら、向こうで大きい騒ぎを起こした方がいいしね」

「ふん、それで万が一にも脱出出来ないなんてことにならなければ良いがな」

「向こうには45や416が付いてるから平気。9、救援対象だし味方だから銃は下ろそうね」

9の方から微かに音がしたから一応言っておいたけど、臨時の隊長さんが短く悲鳴を上げているところを見ると、あたいの予想は当たっていたみたい

「随分と凶暴になったものだな」

「そう思うなら挑発するような事言わないでくれないかなM16」

全員に止まるように指示を出しつつ、ドローンで先の様子を探る。あたいが呆れた

ようにM16に言うも、効果はないみたいで涼しい顔したままだ。敵の姿はなく、道

を進みながら通信機を手に取る

『アコナイト、ソロソロ目標地点に着くよ』

『了解した、こちらも切り上げて向かうとしよう。45発煙手榴弾を416敵にあ

りつけたけの榴弾をお見舞いしてやれ』

面白いことを指示しながら通信機を切るアコナイト。その直後、連続して爆発音が

聞こえてくる

「40」

「んー？ 何M16」

（UMPP40 視点 end）

第108話

「来たか」

「あちゃー、アンタ達の方が早かったね。ごめんね、待たせちゃって」

全力で逃げていた為、意外にも40達より早く目標地点についてしまい、周囲を警戒しながら40達を待っていていればそれから程なくして40達が姿を現した。だが、救出対象が一体足りない

「それは構わないけど、M16は？」

「あー、それがねえ……」

そうM16A1が居ないのである。気になった45が聞くも、40は面倒そうに答えた。つまり話を要約すれば、こちらのハッキングが確実に脱出できる手段ではない以上、AR小隊の脱出プランに従い制御室を物理的に破壊しに行つたと言ふことだつた
「どうするの指揮官？」

俺に指示を求めてくる45に頭が痛くなってくる。ハッキングが通じないなら、この大きな門を物理的に破壊すればいい話だ、別にそんな危険を犯す必要もない。とは言え、そんな事をM16A1が知るはずもない。だが、40の言い方だと、一人で行

動したがっていた、と言うことはM16A1にそう命令した人物が居るはずだ。まあ、予想はつくがな

「ともかく、最重要なデータを持っているのはこの二人だ、彼女等は確実に撤退させる必要がある」

「私も同意見よ」

俺と45は頷き、40を見る。40は頷くと門の近くにあるコントロールパネルを操作し、大きな門が開き始める。その音につられ、鉄血の人形が集まり始める

「さっさと脱出しろAR小隊。脱出用のヘリもこちらへ向かっている、後はウチの人形の指示に従いつつ逃げれば、問題なくヘリに乗れるだろう」

「あのトウラベ指揮官、M16は？」

遠慮がちに聞いてくるAR小隊の臨時隊長。その言葉に、敵からの攻撃が始まり遮

蔽物に身を隠しながら、答える

「一応待つてはみるが、どうだかな。早く行け、出られなくなるぞ」

そう言いつつ攻撃を開始する。正直言つてAR小隊は邪魔なのだ、早くこのエリアから出て行つてもらいたい。まあ、殿がFALなので無理矢理連れて行くと思うが。

そんな事を考えていると、門が閉まり始める。もつとも、40が操作をして閉めているだけなので脱出事態は問題はない

「416、榴弾の残数は？」

「通常のものは二発、特殊弾頭の方は使用していません」

「両方とも使え。特殊弾頭は残すようにして敵を殲滅する」

幾ら敵の本拠地とは言え、数には限りがあるはずだ。よほどの馬鹿でもない限り、ここに全戦力投入などししないだろう。事実、敵の数は多かつたものの、増援に来る数は確実に減っている

「了解しました」

そう言つて416は特殊弾頭の榴弾を発射する。

第109話

「40、最後の救出対象は何処にいるんだ」

増援もひと段落し、とどめを刺した最後の鉄血人形から剣を引き抜きつつ、近くにいらる40に聞く。 殲滅に少し時間をかけてしまったが、全員が無事なようなら問題ないだろう

「後は追えるけど、何処に向かっているかまではわからないかな」

「構わん、案内してくれ」

全員に集まるように声をかけつつ、M16A1の保護をするため歩き始める

↳ M16A1 視点↳

「戦闘音が止んだ？ 向こうの戦闘が終わったのか？」

『すごいわねあの指揮官、人形達に混じって戦闘していたわよ』

「トウラベ・アコナイト指揮官だったか？」

『そうよ。あの任務で貴女達を助けてグリフィンに入り、この短期間であり得ない功績を挙げている、ね。 もっとも、その功績はほとんどエルピーダ指揮官のものになつてるけどね』

楽しそうなペルシカの声を聞きつつ、私は信号の下に歩いていく。私の記憶にないはずなのに、見覚えがあるこの通路。人形だから、忘れると言うことはないはずなのだ。ペルシカは何か知っているようだが、聞いても教える気がないだろう

「それで、外の状況は？」

ペルシカの話の聞き流しつつ、話の切れたタイミングで外の状況を聞く

『SOPMODとROはさつきも言った通りトウラベ指揮官に保護されて脱出完了、へりでこちらに帰ってくる途中よ』

「……………そうか」

思い出すのは別れる前、不安そうな顔をしていた二人だった。SOPMODは私のやる事をわかっていたし、ROはもっといい案があったのではないかと悔やんでいた。

最終的にはペルシカやUMP40の説得もあり、ROが折れたが

『で、トウラベ指揮官なのだけど』

「何かあったのか？」

『その建物内に入って行っただわ』

「！それは私を追ってと言うことか？ それとも……………」

『どうでしょうね、彼はクルーガーから個人的に依頼を受けていたみたいだし。彼らも情報を欲しているのか、それともアナタを助けに来たのか』

「ふん、ご苦労なことだ」

元より覚悟は決めている。ROやSOPMODには悪いが、例えここで死ぬことになろうとも、M4が目覚めるのなら。そんな覚悟を持って信号が発信されている部屋の扉を開ける。敵が出てくることはなく、あるのは何かの装置だった。ペルシカに言われた通り記録されていた録画データを保存するストレージを探し当てたのは良かったものの、鉄血の最高ランクのセキュリティに、私は傘のデータが入ったアンブルを見ていた

『それを刺せばもとに戻れないわよ』

「もとより覚悟の上だ」

そう言つてトランジスタをみる

「まったく、ようやく見つけた」

そんな声と同時に、私の意識は暗転した

〈M16A1 視点 end〉

第110話

ようやくM16A1を見つけ、確保する。何の部屋かは知らないが、ここがM16A1ひいては、M16A1の通信主やクルーガーの目的のものがあるらしい

「40」

「ハッキング及びデータの吸い出しは完了してるよー」

元々通信を傍受していた40だ、何処に何があるのか分かっていた為動きもスムーズだった。あとはこのデータをクルーガー社長に送信し、M16A1を送り届ければ任務完了と言うわけだ

「それで、アンタもこのデータを欲しているようだが？ ペルシカリアリア」

『.....』

M16A1の通信主はペルシカリアであった。まあ、データの解析などをさせるなら16Labの主任であるペルシカリアが最適だろうとは考えていたが

「だんまりか。まあ、どうせクルーガーから情報が回ってくるから今すぐにはいらな
いか。では、さようならペルシカリア」

通信を切り、体を伸ばす。後はクルーガー社長にへりを要請し、M16A1を連れ

帰るだけだ

「それで、その中身はなんなんだ？」

「通信から察するに、傘プログラムだろうね」

「なるほど」

40の返事を聞き納得する。いくら高性能なAR小隊でも、M16A1は電子戦専用ではない。敵にバレずにハッキングなど無理なはずだ。いや、専用でなくても時間をかければ確かに可能ではあるか。それで、傘ウイルスに感染する可能性は大だろうが。だが、最初から傘ウイルスに感染しておけば、識別反応は誤魔化せるし、使用権も取りやすくなるだろう。ヤレヤレ、高性能な人形ですら、そんな扱いか。思考を打ち切り他のメンバーに声をかける

「さて、目的のM16A1は回収した、帰るぞ」

「了解」

全員が自分の銃の状態をチェックして答える

（FAL視点）

作戦は終了し、帰りのへりにのっている。第一部隊は怪我と言っても擦り傷ぐらいだけど、それ以外特に怪我はなし。指揮官達の方も、煤とかが付いたりはしているけど、特に問題は無さそう。それにしても、少し違和感を感じた。AR小隊、RO6

35とM4 SOPMOD IIをへりに乗せた後また門まで戻ったのだけど、リンクしてあるドローンで上空から門の内部を見たものの、敵が全く居なかった。私達が行った後戦闘があつたのはわかるけど、なぜその後に部隊を配置していなかったのがわからない。しかも、コントロール室はM16A1が壊したはずなのに、指揮官が門の前に来ると同時に門が開いた。へりに乗る前に40に聞いたけど40は操作していないらしい。とは言えあの様子だと、何か知つていそうだけど。そんな風に考えていると指揮官と目があつた。私の顔を見てニコリと笑いかけてくる。・・・ホント、思考を読む力とか持っているのかしら？

「なに、優しい優しい鉄血のハイエンドモデルがいたのさ」

「はあ……そ」

そうやって私は窓の外を見ることにした。優しい鉄血のハイエンドモデル、ねえ？

〈FAL視点 end〉

第111話

「今回の任務、ご苦労だった」

「別に払うものを払ってもらえればそれでいいさ」

M I G A I を I . O . P . で下ろし、俺達はそのまま本部に連れてこられた。ヘリ

から降りれば、そのまま社長室に連れてこられ、社長であるクルーガーが待っていた

「報酬はキチンと振り込んでおこう」

「そうしておいてくれ、45が喜ぶだろうからな」

机を挟んだ反対側のソファアに腰を下ろし話を続ける

「それで、今回 A R 小隊や俺たちが集めた情報は役に立ちそうか？」

「ああ、これで鉄血も終わりになるだろう」

クルーガーも反対側のソファアに腰を下ろし、今回、何故情報を集めることになったのかを話す始める

「そもそも、リコリスのセーフハウスの情報があまりこちらに利益がなかった時点で、あそここのデータの回収は軍との共同作戦を進める上で必要不可欠だった。とは言えだ、

あそこは鉄血の本拠地だ、おいそれと行く事はできない」

「加えて、グリフィン内部も一筋縄では行かない、だろう？」

「……その通りだ。 穏健派や過激派、権利団体との癒着、色々ある。 404
や君の働きかけで大分マシになったがな。 当然、軍からの催促は来ていた。 だがこ
ちらも準備が整わない限り、向かう事は出来なかつた。 君と彼、エルピーダ指揮官が
来るまではな」

「よく言う。 信用ならないからと監視をつけていたくせに」

「監視など気にせず振る舞っていただろう、君も。 ともかく、これで鉄血も終わり
だ」

「ふん、鉄血が居なくなつたところで、またどこかで戦争が起ころさ。 火種なぞそこら
中に転がっているんだからな。 気をつけた方がいいぞ、クルーガー社長？」

ソファーから立ち上がり、部屋から出ていく直前、声をかける

「ああそうだ、これからも好きなやらしてもらおうのでそのつもりで」

俺は返事を聞く事なく、そのまま社長室を退室した

くクルーガー視点く

彼が部屋から出たのを確認し、体の力を抜きソファーに沈み込む

「ふう…… 言われなくても分かっているさ」

彼が最後に言つた言葉、火種なぞそこら中に転がっているんだからな。 言われなく

てもわかっている。鉄血を倒したところで、新たな敵が出現するくらい。とは言え、今回の軍との共同作戦が成功すれば、そこら中に転がっている火種などは取るに足らない問題になる。とは言え、彼は独自に情報網を持っている、それを考えると

「彼の言っている火種が私とちがう可能性がある」

その可能性を頭の隅に追いやり、通信でヘリアンに指示を出す。この後の準備もあるからな

くクルーガ視点 endく

第112話

まだ正確な命令は下つてないものの、きたる軍との共同作戦の為、それぞれの地区の基地が色々忙しい中俺は部隊を率いて遊んでいた。正確に言うなら、稼働が確認されている鉄血のハイエンドモデルである、デストロイヤー、ドリーマーの目撃情報を元に捜索しているのだが

「ここもハズレか」

「ハズレつて言うか、居た形跡はあるけど姿は見えないね」

「姿が無ければハズレだ」

廃屋の中に足跡などの痕跡はあるものの、肝心なハイエンドモデル達の姿が見えない。40も屈んで足跡を見ていたもののすぐに切り替え、タブレットからドローンを操作していた

「ここら辺は森も多いから探すのも一苦労だよ」

「軍との共同作戦があるから、どこの基地も部隊を出すのを控えているから大した目撃情報もないしな」

廃屋を出ると、FALが俺たちに気がついたのか寄ってくる

「それで、どうだったのかしら？」

「ハズレだ」

「そ。まあ、そんなに簡単に見つかるとも思っていないけど」

俺の返事にヤレヤレみたいな感じの返しをするFAL

「ともかく、ここらへんの鉄血は殲滅完了よ」

「各隊の状態は？」

「特に問題なし。 残弾が少し心許ない子達も居るけど、まだ大丈夫よ」

「別に無理をする必要もあるまい、基地に帰還するぞ」

「了解」

背を向け、その場を後にする。 基地からは少し遠いが、まあ、なんとかなるだろう。

どちらにしろ、あちらの目的も俺なのだろうからな

基地に帰るとそれぞれの部隊に劳いの言葉をかけ、司令室で書類を片付ける。 大半

はシアアがやってしまうのだが、俺の確認がいる書類などは残っている為片付ける。

この前の作戦に連れて行けなかったメンツは拗ねていたりしていたものの、今回の搜索

でかなりの数の鉄血の人形をスクラップにしているためか、機嫌も良くなった

「それにしても、暇な奴らだ」

搜索をしている二体のハイエンドモデルを思い浮かべながら、一人喋る。 大きな動

きを見せていないとは言え、本拠地であれだけ暴れたのにも関わらず、自由に動いているハイエンドモデル二体。しかも片方は、あの時自爆をしたドリーマーだ。M16 A1を確保した後、俺たちの前にふらりと姿を現し、俺の姿を見ると同時に驚いたような表情をした後、狂ったように笑い始めた。その笑いが何を意味していたのかは分からないが、アイツは俺と同族だ。近くにドリーマーを置いているのは、多分そう言う事なのだろう。面倒に思うが、次こそは逃すつもりはない。俺はほくそ笑みながら書類を進めた

第113話

ドリーマーやデストロイヤーを探し始めてから、一週間ぐらいが経過した。空から探し見つけたら出撃をするものの、着く頃には逃げられた後、それを繰り返していた。彼方が此方の行動を掴んでいると言うのは無いので、タイミングの問題か。だが、捜索にかかりきりと言う訳にも行かなくなったらしい。新しい鉄血のハイエンドモデルが出現したのもあるのだが、前から言っていた軍との共同作戦がとうとう始まるのだ。鉄血のハイエンドモデルが動いたのは予想の範疇だが、まさか新しい人形が動き始めるとは…… 気になるのはエルダーブレインに動きがないことだ、とは言えもう作戦は始める

「これだけの人形が揃うと壮観だな」

「そう、ですね。ですが、どれだけの人形が今回の作戦で残るでしょうか？」

各地区から集まった人形を見て何気なく出た言葉に反応したのは、隣にいるシーアだ。周りの人形達を心配そうに見つめていた

「ほとんどの指揮官達からすれば人形なぞ消耗品だ、所詮鉄血に勝てればいいのだから」

「……………」

俺の言葉に何とも言えなさそうにするシーア。優しいのはいいことだが、これから作戦だ気持ちを切り替えてもらわないと困る。俺は前線に出るし、40もだ

「悪いとは言わんがもうすぐ作戦が始まる、今は目の前のことに集中するんだ。でなければ、ウチの人形もそういう運命を辿るぞ」

「……………はい。すみませんでした、トウラベ指揮官」

「別に気にすることはないさ」

そう言つてシーアの頭に手を置き撫で、その場を離れる。404は仕込みの最中、40には軍の動向を探らせている

「暇そうね、指揮官」

「FALか」

他の地区の人形達を見てみると、後ろから声をかけられる

「こっちは他の部隊との連携とか、作戦を確認しているって言うのに」

「悪いが俺と404はクルーガー社長直属の部隊なんぞな、自由にしていいと言うわけさ。まあ、確認したところであまり意味がないと思うがな」

俺に悪態をつくFALに理由を話してやると、呆れられた。そしてそんなことを言ううと、不思議そうにするFAL

「どういこと？」

「考えてもみろ、軍は元より戦闘用の人形を使っているんだ、元は民生品の I・O・P の人形が軍の動きについていけると思うか？」

「……… 指揮官の意見は肯定するけど、だからって作戦を蔑ろには出来ないわ
別に構わんさ。ただ、何かしら事態が起こった場合は動いてもらうぞ」

「元々私達第一部隊はその為にあるんだもの、わかっているわよ」

第114話

『トウラベ指揮官』

『エルピーダ指揮官?』

作戦開始時刻も迫り、武器のチェックを入念に行っていると今回の前線指揮を任せられたエルピーダ指揮官から通信が入る

『良かったんですか、前線に出るなんて』

『良かったも何も、命令ですからね。それに、命令がなくても前線に出てたでしょう』

俺に後方での指揮など似合わない、前線で戦場を引つ掻き回している方が性に合う。

とは言え、戦況に動きがあるまでは援護に徹するつもりだ

『そもそも指揮は貴方に任せられた方がいいでしょう、エルピーダ指揮官。貴方の能力なら』

『それはそうかもしれませんが、貴方の経験と観察眼が有れば、より有利に』

『犠牲なくして勝利は得られませんよ、エルピーダ指揮官』

『そうかもしれないませんが、減らす事は出来ませぬ』

多分…… この犠牲の話は平行線のままだ。生きている世界が違うのだ、俺と

エルピーダ指揮官は。俺の生きていた世界は殺しても生き返るのだから、当たり前か『なら、その犠牲を減らす為に頑張ってください、エルピーダ指揮官』

『・・・・・・・・』

そう呟き、返事を聞くことなく通信を終了する。どちらにしる途中まで足並みを合わせるつもりではあるが、途中からは別行動になる。俺の部隊は一応彼の指揮下に入っているが、俺は彼の指揮下に入っているわけではないからな

「アコナイト」

「指揮官」

「来たか」

最終確認を終えた武器を脇に置き、呼ばれた方向を向くと仕込みに行っていた40と404が帰って来ていた

「何がわかった」

「まあ、流石にボロは出すとは思ってなかったから、軍の通信は掌握しておいたよ。気付かれた様子はなし」

「流石だな、40。404の方は？」

「仕込みの方は完了してるわ。すこーし手間だったけど、まあ彼女達なら余裕だと思うわ」

「ならばは待つだけだな」

空を見上げながらそう溢す。未だ世界を移動するムーンゲートは見つかっていないが、今回のこの作戦で事態は動き出す。そう俺の勘が告げている。多分、小さい騒ぎはこれからもあるだろうが、大きい騒ぎはこの世界では最後になるだろう

「各員もう少しで作戦が開始される、装備のチェックを怠るなよ？」

俺の言葉に40達は顔を見合わせ、苦笑する。まあ、彼女等は今まで仕込みをやっていたのだから今更感はあるが

「多分、この世界では最後の大きい戦いになるだろうからな」

そう全員の顔を見回しながら言うと、40以外は驚いた顔をし、次の瞬間には表情を引き締め、改めて装備のチェックを行っていた

「いつもの勘？」

「ああ、そうだ」

笑みを浮かべそう聞いてくる40に返事をした

第115話

遂に軍との共同作戦が開始された。軍という強力な力を借りたグリフィンは破竹の勢いで、作戦を進めていく。とは言い

「少々上手く行き過ぎだな」

軍の力を見てしまったからなのか、ウチに所属の人形達以外は何処か浮ついている。このまま鉄血を殲滅できるのではないかと。そんなふうに行くものかね？

「まあ、今のところは上手く行ってるからね、今のところは」

隣に居る40はタブレットを見ながら呆れたような声を出していた

「何か見つけたか」

「今のところは何も」

上空のドローンで探らせているものの、何も見つけていないらしい。そう、何も。総力戦になるだろうとグリフィンは各地区からかなりの戦力をこの作戦に投入しているが、未だ鉄血はノーマル人形を展開するだけなのだ。今の今まで軍と破竹の勢いで進軍しているにもかかわらず、未だ一体も姿を見せていない鉄血のハイエンドモデル。それを分からずに浮ついているのだから、呆れたくもなるだろう。下位のハイ

エンドモデルの強化型さえ出て来ていないのだから、これからどうなる事やら。確かに軍の人形はスペックが高い、だがグリフィンの人形のように柔軟な思考は持っていないのだ。一度足並みが崩されれば、各個撃破されて終わりだろう。何せ、数の理はあちらにあるのだから

「あー」

「どうした、敵でも出たか」

40が声を上げたので聞いてみると、頷く

「両翼からかなりの数ね。軍とグリフィンの隊列少しずつ崩れ始めてるから、そこを狙ってきたみたい」

「まあ、やはり鉄血も馬鹿ではないからな、そこを狙ってくるだろうさ」

本部のエルピーダ指揮官も気がついたのか、通信が慌ただしくなる。軍側の隊長と話し合っているようだが、どうも状況は芳しくない。軍とグリフィンの人形の性能差が如実に現れたな

『エルピーダ指揮官』

『トウラベ指揮官、少し待ってください、今軍の方を説得して』

『どうせ軍が意見を変える事はない、時間の無駄だ。ウチの部隊をすべて動かす』

『っ!? ですが!!』

『どうせクルーガー社長の方からも、俺が抜けても作戦を遂行できるようにプランを考えておけと言われたのでしよう？ それに俺個人は貴方の指揮下ではない』

『だが戦力差は！』

『奥の手がありますからね、何とかあります。 さて、どうしますエルピーダ指揮官？』

『この一分一秒が命取りになりますよ？ まさか、この期に及んで決断できないわけないですよええ？ 多くの人や人形の命がかかっているのに』

『つ…… 貴方ならどうにかできるんですね？』

『確約は出来ませんがね。 いざとなれば奥の手を切りますから』

『速やかに敵を撃滅し、こちらに合流してください』

『了解』

通信を切るとそこで一旦足を止め、うちの部隊の人形達を見る。 何処か不安そうで

はあるものの、瞳の奥には期待を孕んでいる

「さて、全員聞いていたな？ 片翼の敵をうちの部隊で迎え撃たなければならなくなつたわけだが」

「指揮官、そういうのいいから早く命令ちょうだい」

スコープオンがいつもの調子で言ってくる。 全員を見回すも、全員苦笑していたりスコープオンと同じようにソワソワしていたりと様々だ。 だがまあ、スコープオンの

言う通りか
「なら諸君、作戦を始めるぞ」

第116話

戦いを始めて数十分が経過した。戦力差はかなりのものだが、40や404、そして第一部隊の活躍により善戦していた。もちろん第二から第四部隊も活躍していないわけではない。いやむしろ、グリフィンの部隊の中では破格の活躍だろう。だが弾薬は有限、人形のパフォーマンスもそこらの部隊よりはいいとは言え、時が経つにつれ被弾が増える。もう少し下がってもいいが、先行する軍やグリフィンとの合流を考えるところこれ以上下がるのはあまりよろしくない。勿論、合流を考えず一度撤退を考え早いのだが、それぞれ別方向から増援が来るので位置の特定が未だに出来ない

「また増援」

「いい加減にして欲しいものだな」

40の声を聞きゲンナリする。流石にこれ以上の被弾はこの後の作戦にも支障が出るかもしれないので、一度下がらせて修復させた方がいいのかもしれない。一応スナイパーの部隊は被弾も特に無いので残らせてもいいが弾薬がほぼない、それを考えれば一緒に下がらせた方が得策だろう。とは言え、俺や40、404や第一部隊だけで

抑えられるかと言われれば首をかしげざる得ない。いや、本気を出せば行けるだろうが、何処で誰に監視されているかわからない以上、本気を出すのは得策では無い。故に切り札の一つを切ることにした

「45、この近くに仕掛けた仕掛けは？」

「この近く？ この近くなら代理人かしら」

「ちよūdいいな」

40に合図を送るようになると、直ぐに通信が入る

『お呼びでしょうか、ご主人様』

『こちらの位置は分かっているな？ その付近の敵を殲滅、後は…… そうだな、こ

れを向かわせている元凶を出来たら探し出すくらいか？』

『かしこまりました。直ぐに殲滅して、探し出してみせます』

『期待している』

通信を切り、一息つく。敵はまだまだ居るが、これで早々に片付くだろう。第二

から第四部隊に追加の指示を出さないとな

『第二から第四部隊は一度撤退する』

そう通信を入れると、色々な発言が飛び交う。まあ、殆どのやつが言っているのは

撤退に反対ということだ

『一斉に言うなうるさい。一時撤退するだけだ、弾薬の補給や修復が済めばまた前線に戻す』

それならと言う声がそこかしこから上がる。だから、通信で一斉にしゃべるな。

しゅしゅと撤退を始める第二から第四部隊。さて、他の奴らにも指示をしないとな

「他の奴らは殿だ。その後は代理人と合流して、独自にエルダーブレインを目指すぞ」

第117話

第二から第四部隊を無事に撤退させた俺たちは、代理人と合流する

「それで、どうだった」

「申し訳ありませんご主人様、部隊を派遣していたと思われるハイエンドモデルは見つかりませんでした」

「まあ、それならそれで構わん」

跪く代理人をそのままにしつつ、40に声をかける

「40軍の方は？」

「うーん、まだ動きはないみたいだね。とは言え、別の方に動きがあつたみたい」

「別の方？」

タブレットを持って近づいてくる40、差し出されたタブレットを見てみるとある人物に先導され作戦地域に入ってくるM4A1とM16A1。なるほど

「これで役者は揃った訳か」

「事態はこれから本格的に動く事になるだろうね」

俺と40は顔を見合わせ笑い合う。だが、ことが動き出すまでもう少し時間がある

はずだ。なら俺は、それまでもう少し戯れる事にする

「40すべての仕掛けに合図を出せ。少しグリフィンのもの達に楽をさせてやるしよう。勿論変装セットを忘れさせるな?」

「あいあいさー!」

「さて、話は聞いていたな諸君、事態が進展するまで少しくらい時間があるだろう、それまでもう少し鉄血側にちよつかいをかけるとしよう」

「はあー…… わかっていたけど悪趣味ね」

俺の言葉に笑みを浮かべつつ返事したのは、近くにいた45だ。人のことを悪趣味というが、45も十分そうだと思うが

くM4A1 視点く

アンジェリカさんのおかげで作戦区域に入ることは出来たものの、指揮官とは連絡が取れず、私とM16姉さんは困っていた

「彼女にはここで待っていると言われたが……」

「M16姉さん大丈夫?」

「心配しすぎだM4。ペルシカのおかげでウイルスに関しては何とかなっている。

まあ、前の作戦の影響が残っていないかと言われれば、正直微妙なところだが」

やはり、M16姉さんには無理をさせられない。ウイルスを抑え込んでいるとは言

え、完全ではないとペルシカさんも言っていた。本音を言えば休んでいて欲しかったけど、どの道この作戦になんらかの形で参加させられていただろうし。それなら、私
が守ればいいと思っていた。でも、この頭に響く声が邪魔をする

「それで、お前こそ大丈夫なのかM4、調子が悪そうだが」

「……問題ないわ、M16姉さん」

やはりM16姉さんは鋭い、隠しているつもりだったけど姉さんにはお見通しだった
ようだ。疑わしい目で見てくる姐さんから視線を逸らしつつ、ドアを見つめる。迎
えがくると言っていたけど…… そんなことを考えていると、こちらに向かつてく
る足音がする。私とM16姉さんは顔を見合わせ、静かに銃を構える。ノックが聞
こえ、外から声がかけられる

〈M4A1 視点 end〉

第118話

目についた敵を倒しつつ、戦場を駆ける

「それで、本隊の状況は？」

「仕掛けが作動した分、楽になったみたいだね。グリフィンは軍に追いついて、スケ

ジュール通りに動いてるよ」

「A R小隊の方は？」

「軍がうちの部隊と一緒に拾って最前線」

「そうか」

A R小隊が最前線にいるとなると、ハイエンドモデルはそちらの方に向かったのだろう。止まってドローンで上空から見ても、敵はまばらにいただけだ

「俺たちもそろそろ前線に行くか」

「あら、ハイエンドモデル探しいいのか？」

相変わらず貼り付けた笑みを向けてくる45にため息を吐きつつ、言葉を返す

「鉄血の目的がA R小隊、いや、M4A1ならそちらに戦力を集中させるだろうよ。実

際、鉄血の部隊の大部分が移動してる」

「結局、今戦闘していたのも待ち伏せの部隊じゃったようだし」

そう言つてM1895が地面に落ちているボロ布を摘む。もはや機能はしていないものの、鉄血のイエーガーが被つていた光学迷彩だ

「でも、何が目的なのかしら？　ここはグリフィンと軍の作戦範囲だけど、かなりハズレの方よ？」

「さてな。あるとすれば作戦が失敗して退却する時に討ち取る為か」

「作戦が失敗するつてこと、指揮官？」

そう聞いてきたのは9で、不思議そうな顔をしている

「軍の機械が居るからな、そうそう負けはしないだろうが。　ともかく、前線に移動するぞ」

くM4A1　視点く

トウラベ指揮官の部隊に護衛されながら前線を目指す途中、砲撃の音とともに先頭車両が破壊されてしまった

「敵襲！」

「あちゃー、本当についてないなあ」

車からすぐさま降りると、武器の状態をチェックしながらスコピオンが嬉しそうに呟いた。　なんでそんなに嬉しそうなのか

「そう言っている割には余裕そうだな、スコープオン」

「んー？　そう見える？」

「当たり前ですわ、笑って言ってれば誰でもそう見えますよ？」

「アツハツハ」

StG44に言われるも、相変わらず笑っているスコープオン。敵は両翼から攻めてきているのに何故こんなに樂觀視できるのかわからなくて、イライラしてくる

「まあ、真面目な話、別にこんな状況よくあったしね。アンタ達と最初に会った時もこんな感じだったし」

「……そういえばそうだったな」

その時のことを思い出したのか、苦い顔をしながらスコープオンを見るm16姉さん。生き残る為とはいえ、スコープオン達を犠牲にしたのだから、当然だ。でもスコープオン達は真面目な顔を崩し、笑い始める

「あ、いや、別に攻めてる訳じゃないから。あの時とは違って弾薬も仲間もいるからね、負ける気がしないってだけ。それじゃ、指揮はよろしくねM4」

〈M4A1 視点 end〉

第119話

「今のところ奴らの思い通りという訳か」

「だろうね」

スクラップにした鉄血の人形の上に座りつつ呟く。仕掛けを作動した事により、グリフィンの被害は減り、軍から少し遅れてはいるものの概ね予定通りに作戦は進んでいる。AR小隊や護衛についたうちの部隊も追いつき、鉄血の基地への進軍している軍の援護を務めている

「それにしても、軍はともかくグリフィンの部隊は楽そうではないな」

「当たり前じゃないかしら？ 彼女等はただ軍と一緒に進軍すればいいのだから、鉄血が出てくれば戦うけど、鉄血が出てこないならただの護衛だもの」

ドローンと情報をリンクしているのか、銃の手入れをしながら俺の独り言に答える45。こちらは潜伏している鉄血を見つけては殲滅していると言うのに。とは言え、前線に合流する片手間にやっているだけだが

「さて、もう少し遊ぶとするか」

〈M4A1 視点〉

前線の軍と合流し護衛任務をしているものの、敵が現れない
「上手く行き過ぎじや無いですか？」

「ああ、不気味すぎる」

M16姉さんとROがそんなことを話している、確かに上手く行き過ぎだと思う。

敵が現れるも、トウラベ指揮官の部隊が殲滅しに行つて……
ピオンが飛び出して行つて、それを部隊のメンバーが仕方なしについて行くような感じ
だったのだけど……

「……………」

そんな事を考えていると、SOPMODが突然止まり辺りをしきりに見回していた

「SOPMODどうした？」

「おかしい、やつぱりおかしいよ！みんな気をつけて、鉄血が居る！」

その言葉に驚く私達に気にも止めず、辺りを警戒するSOPMOD。再度スキャン
もしたがやはり鉄血の反応はない、軍もそのまま進軍を続けている。でも、そんなS
OPMODをみて、M16姉さんも銃を構え始める

「M16？」

「私達の中で一番鉄血を知っているのはSOPMODだ、そのSOPMODがここまで
言っているんだ警戒するに越したことはない」

銃を構え始めたM16姉さんにROが問いかけると、そんな答えが返ってきた。確かに私達の中で鉄血に一番関わってきたのはSOPMODだ、でも軍が反応していないのだから気の所為なのではとも思ってしまう。一度指揮官に連絡を取ろうとすると、M16姉さんが虚空に向かって発砲する

「チツ、バレたか。ならば仕方ない」

「お前はこの前のチビ!!」

銃弾が弾かれる音と共に姿を現したのは、大量の鉄血人形達だった。先頭の小さい人形はハイエンドモデル!?

「M4指揮を頼む! 幸い軍の人形も居る、直ぐに片付けるぞ!」

〈M4A1視点 end〉